装着変身プラッディクロス!

内海むま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト http://pdfnovels.net/

注意事項

は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ 囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、 テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。 この小説の著作権は小説の作者にあります。 このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ 小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。 そのため、作者また 引用の範

【小説タイトル】

装着変身ブラッディ クロスー

[ソコード]

【作者名】

内海むま

【あらすじ】

魔と呼ぶ。 妖怪、魔物、 悪 鬼。 その中でも理性と知性を備えた怪物たちを妖

そしてこの魑魅魍魎はびこる世界に、 だがこの街に今、大きな危機が迫っていた。 作られた街がある。 人工的に作られた島、天壌島第五スフィア市。 人と妖魔との調和を図るべく

今日も変身する。 の他もろもろ守るため。 気に入らない悪党をぶっ飛ばし、 特撮好きの兄を持った吸血鬼の女子高生は、 ついでに街やら人やら妖魔やらそ

プロローグ

ぐるぐるぐる。

白い糸が何重にも絡まってゆく。

ぐるぐるぐるぐるぐるぐる。

る。 匹の蜘蛛が、 網にかかった獲物に糸をぐるぐると巻きつけてい

どされるはずもない。 った体で、逃げられないようにする為のこの糸を前にして、 獲物は体を必死によじらせ逃れようと抵抗するが、 毒にやられ弱 解放な

ただ空しく絡めとられてゆく。

通のことだ。 小さな女の子が夜に一人で出歩くのは危ない、 というのは万国共

ない。 たとえ治安がいいことに定評があるようなこの国でも変わりはし

ある雨の日の夜。

6歳になったばかりのその少女は、 両親も寝静まった頃に家を出

た。

お気に入りの傘を持って、 大好きな黄色の長靴を履いて。

ちょっとした好奇心の芽生えか。

魔が差したのだと言ってもい

彼女は両親から、夜は危ないと教えられてきた。

きっと大丈夫、 それにもかかわらず、 کے すぐそこの自動販売機に行くだけだから、

ある。 何の根拠もない自信と共に、幼い冒険心を発揮してしまったので

雨は小降りで、 今にも止みそうだった。

れた日本。 どれだけその端にあろうと、ここは、 かつては治安大国とも呼ば

ろう。 彼女はちょっとスリルを感じるだけで、 よほど治安の悪い地域でもない限り、 無事に帰ることができただ ほんの少しの外出程度なら、

出に気づいた両親にこっぴどく叱られ、 るはずだった。 そして、 そんな幼き日の、 冒険心が満たされたことへの幸福感と達成感を得て、 青春の一ページとして刻まれるべき出来事にな ちょっぴり後悔する。 外

だが、そうはならなかった。

るのだから。 非常に残念なことに、 偶然の神様は最悪なタイミングを心得てい

考えた。 自販機で無事にジュー スを買っ た少女は高揚感を覚えながらふと

考えてしまっ

しよう、 このまままっすぐ帰ってもつまらないから、 ほんの少し遠回りを

ある。 一つの欲が簡単に満たされたことで、 さらなる欲が生まれたので

タカをくくって、 危ない目になんか合うはずないと、 遠回りと言っても、本当に、 少女は歩きだした。 ほんの少しだけのつもりだった。 軽い気持ちで、 幼い考えで、

まれる。 新たな欲を満たしながら、 彼女はさらなる、 不思議な高揚感に包

その匂いがする方へ、彼女は歩きだした。良い匂いがした。雨のにおいとは別の。

今の自分なら何でもできそうだ。

そんな錯覚さえ覚えて。

知らずに。 自信が甘い匂いに誘われてふらふらと飛んできた蝶であることも

雨はやんでいた。

長靴がぴちゃぴちゃと水たまりを撥ねる音が心地いい。 彼女は傘を閉じ、 狭い裏路地へと入った。

あちこちに蜘蛛の巣が張ってあったが、 今の彼女には気にならな

かった。

振り回し、 蜘蛛なんかこわくない、 通るのに邪魔なクモの巣を次々壊す。 そう思いながら、閉じた傘を剣のように

それがどんな悲劇につながるとも知らずに。

違ったものになっていただろう。 ともいえるような思いが抱けていたら、 もしここで、お気に入りの傘が汚れるのが嫌だという、 彼女が迎える運命は、 また

しかし、そうはならなかった。

ならなかったからこそ、 蜘蛛はその腕に獲物を抱いているのだ。

「くふ、ふふふふ」

顔が目の前にあった。 糸に巻かれ、毒に回られ、うすれゆく意識の中、 気づけば蜘蛛の

そして漆黒の闇を思わせる黒い髪。恐ろしい八つの目と、おぞましい牙。

裏路地の中。

ひときわ大きな巣を壊そうとした瞬間、 その巣を構成していた糸

が、お気に入りの傘に絡み付いた。

本来、この街に住んでいる人間ならば、 その瞬間に気づくべきだ

態に置かれていた少女にはその危機感が足りていなかったのだ。 しかし、 蜘蛛の発した甘い匂いがそうさせたのか、一種の陶酔状

も、糸はどんどん巻きついてくるばかり。 お気に入りの傘を取り返そうと両手で持って振りほどこうとする

セーラー服を着た長髪の少女が、彼女のすぐ後ろにいた。 傘から腕に糸が達したところで、誰かの気配を感じ、振り返った。

助けを求めようと口を開くと、 相手の少女は目を全て開き、

リと笑みを浮かべた。

八つの目。口元からのぞく二本の牙。

小さな少女は相手が人間ではないことを悟っ た。

恐怖で動けない少女が、 悲鳴を上げる前に、 セーラー服の少女は

その牙で小さな少女の首筋に噛みついた。

噛んで少し間を置き、 牙を離し、 彼女は獲物を巻き続けた。

久しぶりの獲物だ。

しかも肉のやわらかそうな少女であった。

に帰ってゆっくり、 逃げられないよう慎重に、毒と糸で確実に動きを止めた後で、 生きたまま味わおうと心に決めた。 家

ないのだ。 こんな御馳走、 この街では今度いつありつけるか解ったものでは

だ意識があるようだ。 ふと、 毒で殺してしまわないように、と少なめに打ちこんだせいか、 獲物が蚊の鳴くような声を出していることに気づいた。 ま

ことにした。 蜘蛛は笑みを浮かべつつ、顔を近づけ、 獲物の最後の声を楽しむ

· たす.....けて.....」

虫の息で必死に絞り出したような言葉。

それを聞いて、蜘蛛の大きな口がいびつに、 かつ楽しそうに歪む。

彼女の体に云いようもない快感が駆け抜けた。

圧倒的弱者が、 必死の思いで繰り出した最後の抵抗

嗜虐心が、たまらなくそそられる。

とその体を啜りたい。 んでゆくのを感じさせて、 嗚呼、 今ここで食べてしまいたい!意識があるまま、 狂うことも許さず、 ゆっくり、 自分が死 ゆっくり

がするんだろう! いったいどんな顔をして食べられてくれるんだろう!どんな味

わかった、今助ける」

衝撃で、 自らの欲望を遮る声が、 光悦に浸っていた彼女の時間が一瞬だけ止まる。 確かに、 はっきりと聞こえた。

雲に隠れていた月が顔を出し、 裏路地を照らす。

蜘蛛の少女は八つの目を凝らした。

前方、 声の主。 路地の出口から紅いシルエットが歩いてくる。

ては最高の機会となりうる。 最悪と最高は紙一重。 偶然の神様は、 最高のタイミングをも心得ているのだ。 誰かにとっては最悪でも、 他の誰かにとっ

名往中学二年、 鬼雲絵里華だな。 現行犯だ、 あんたを封印する」

そう言って、声の主は一気に駆けだした。

なんで、名前を!?

に抱える。 化け蜘蛛の少女、 鬼雲は突然のことに戸惑いながらも獲物を左腕

゙......封印?なんなのよ、お前は!」

本も飛ばす。 そう言って、 右手を前に突き出し粘性の糸を向かってくる影に何

を飛ばす。 を抜けた先、 左腕には獲物を抱えたまま、手の人差し指を立て、 道路を挟んだ向かいにあるマンションに向けて別の糸 背後、

名前が知られている。顔も見られた。ただ逃げるため、ではない。

このまま逃走を図っても無駄なことはわかっている。

れば挟撃にあうかもしれない。 問題なのは場所だ、 この場で迎え撃ったとして、 相手に仲間がい

誘い込む必要がある。 もっと広い場所、 自分の領域へ

「何って?」

めている。 飛んでくる糸をものともぜず、 影は走りながら右こぶしに力をこ

速い。

鬼雲は焦る。

糸で絡め取って動きを鈍らせる筈が、 まるで通用していない。

この街の」

よく戻し、飛ぶ。 鬼雲は左手から伸ばしマンションの壁面にくっつけた糸を、 勢い

とにかく相手に距離を詰められる訳にはいかない。

接近戦は、獲物を抱えている身ではどう考えても不利だからだ。

だが影はさらに加速し、 跳躍し、 瞬時に追いすがる。

込まれていた。 その次の瞬間には、 鬼雲絵里華の顔面には強烈な右フックが叩き

正義のヒーローよ」

巻かれた少女を両の手に、 そう言ってのけた、 その紅いヒーロー 着地した。 Ιţ 空中で抱きとめた糸に

第一話人と妖魔の学び舎は今日も平和。

「ねえ、聞いた?昨日も出たんだって」

馴染の佐野美穂子は、 朝登校してくるなり、 少々興奮気味気味にそう告げた。 自分の席へ鞄を置きもせずに駆けてきた幼

- 何カ?」

少年、黒田修二は目を瞬かせながら答える。

だから、 ローよ!悪の妖怪と戦うヒーロー

バシンバシンと、美穂子は修二の机に両手を何度も振り下した。

たんだよね?」 「あ!聞いた、 聞いたよ。 なんか人を食おうとしてた馬鹿を捕まえ

聞こえてくる。 うな、ブクブクとした音響の入り混じった、 修二ではなくその隣の席から、顔を水につけながら喋っているよ 若干聞き取り辛い 声が

こいいよね!!」 「そう!そうなのよバブルズ君!人知れず戦う謎のヒーロー、 かっ

叩 にた 美穂子は満面の笑みを浮かべ、今度はバブルズの机をバシバシと

その度に、 彼の表皮がゆらゆら揺れた。

状 その体は人間の姿を模ってはいるものの、 水色の物体で、 顔にはコミカルな丸っこい目と口しかない。 構成しているのはゲ

る人を和ませる力があるのか、修二も美穂子も、 たときは驚いたが、今ではもう慣れっこだった。 誰がどう見たって化け物だが、 その漫画的、 記号的な表情は、 入学式で最初に会 見

種族はスライム。

の知能と自我を持っている。 本来は低級の魔物のはずだが、 一体何がどうなったのか、

理由は本人にもわからないらしい。

ある意味、奇跡のような存在であった。

いる。 のが好きならしく、 元がスライムであるため、 制服として紺のブレザーとスラックスを纏って 性別は存在しないが、 男の恰好をする

には笑いをよく誘った。 ゲル状の体の上に服というのが、 何ともシュールで、 初対面相手

かなんかじゃないの?」 でも警察と協力してるんだろ?やっぱり警察官のパワー ッ

美穂子の興奮に、冷静に水を差す修二。

ŧ !またそうやって夢のないこと言う!

ぶしを作ってガシガシと叩いた。 美穂子は不満げに頬を膨らませ、 修二の机を今度は片手で握りこ

に人間が妖魔を圧倒できる力を手に入れられるようになったんなら、 「だって謎のヒーロー よりそう考えた方が現実的じゃないか。

その方が夢があると思わないか?」

思わないもん!修二ったら夢のわからない男!! でも、 本当に警官だったら公表するんじゃないかなぁ?

と美穂子だけでなくバブルズまでもが修二に反論する。

あると思うよ」 てませんよ安心してください』的な、 思うに、今は実験段階なんじゃないかな?そのうち警察から発表 『超優秀な装甲服があるから警官の数は少なくなっても質は落ち アピールをすると思うんだ」

現れたのって、結構前だよね」 「ただの実験でそう何度も妖魔と戦闘させるのかなぁ?ヒー ローが

「たった二、三週間前だぜ?十分あり得る期間だと思うけど... うしん、 そうかなぁ」

んだ。 バブルズは困ったような表情を記号的に浮かべて、 その両腕を組

た時ヒーローが助けに来なくても知らないからね!」 「もーいいよバブルズ君。 こんな夢のない男!いつかピンチになっ

声をかけた。 言いながら、 美穂子は首を伸ばしてバブルズの後ろの席へ向けて

ねー、霧江ちゃんもそう思うわよねー!」

えば、 なぜ美穂子が、 たまたま席が近かったというだけの理由だろうか。 普段会話もしないその少女に声をかけたのかと言

始めた少女がいた。 誰よりも早く学校に登校し、 かと思えば机に突っ伏して寝

名前は、 鬼灯霧江。

あげる。 バブルズのすぐ後ろの席で眠っていた彼女は、 ムクリとその顔を

..... ん**ー** ?

長い黒髪が特徴的な彼女は、クラスの中でも特に謎の多い少女だ その少女、席は近いが、 修二とも普段滅多に会話をしない。

ずの彼女がいなくなっている、かと思えば、いつの間にか戻ってき ていて席についているということがよくある。 授業中、ふと斜め後ろを見ると、いつの間にか席についていたは というのも、 よく消えるからだ。

ことがあるのだが、そういう時でもよく消えるらしい。 それは授業中に限らず、たまにクラスメイトが彼女を遊びに誘う

返すだけで一切答えてはくれなかった。 一度だけ理由を聞いてみたことがあったが、 彼女は曖昧な笑顔を

ってうわっ!大丈夫!?」

慌てて、美穂子は霧江の側に駆け寄った。

なっている。 修二とバブルズが振り返ると、 彼女の机と顔はなぜか血まみれに

ああ、 大変ね吸血鬼って.....」 ごめん。 棺桶以外で寝ると時々こうなるのよ....

来ている。 血の原因は血涙らしく、 彼女の両目から両頬にかけて血の筋が出

霧江はハンカチを探しているのか、 眠たそうな目をしながら、 ブ

レザ のポケットに手を突っ込んでまさぐっている。

「......あれ、忘れたかな」

と困ったような声をあげた。 Ļ 彼女は首をかしげながら、 それでも眠たそうな目で、 ちょっ

'鬼灯さん、俺の使いなよ」

した。 修二はポケットからハンカチを出し、 手を伸ばして霧江に差し出

......いいの?相当汚れると思うけど.....」

取らせた。 をひっこめるわけにはいかない、 二だったが、 そう言えば血って取れにくいよな、 受け取らず、首をかしげる霧江。 たいして大事なものでもないし、 Ļ 席を立って強引に霧江に受け という考えが頭をよぎった修 男が一度出したもの

あ、ありがとう.....」

を拭き始めた。 霧江は目をぱちくりとさせながら、 そのハンカチでゆっくりと顔

......悪かったな」 夢のない男がなんかいいことしてるわー」

呆れ顔で言う美穂子に、 修二はむっとして自分の席に戻る。

「あー、もう冗談だって。怒んないでよ」

「どうせ俺は夢のない男だよ.....」

慌てて修二のもとに駆け寄る美穂子と、 そうこうしているうちに、 担任の教諭が教室の扉を開けた。 むくれる修一。

「おーし、席につけー、HR始めるぞー」

席に戻る。 担任の声に、クラス内、 思い思いの場所にいた生徒たちが自分の

ない生き物だった。 このクラスの生徒たちは、 半分は人間だが、もう半分はそうでは

つしかなかったり、明らかに人間ではない生徒が大勢いた。 それぞれ猫のような耳がついていたり、角が生えていたり、 バブルズのような見た目からしてあからさまな者は少ないにせよ、 目 が 一

白黒はっきりさせるな!両方持て!』

に妖魔の多い学校だった。 ここはこの第五スフィア内に存在する、 それが、この太極館学院のスローガンである。 人妖共学校の中でも、 得

第二話 街の守人は夜を駆ける。

えっなにこれ」

目を覚ました修二が開口一番口にしたのはそんな言葉だった。

.....うごけないし」

慌てて、修二はキョロキョロ首を動かし、 見下ろすと、 つま先の五メートルほど下に地面がある。 自分の状況を確認した。

彼は真夜中の公園で、背の高い金属の柱に縛り付けられていた。

おいおいおい、なんだよ!どうなってやがる!」

寝ぼけていた頭が冴え、 自分の置かれた状況の異常さを理解し、

修二は必死に身をよじる。

しかし、

駄目だった。

もならない。 きつく縛られているため、 ちょっと体を動かしただけではどうに

憶を必死に呼び覚ます。 いったい何でこうなっ たんだっけ、 と修二は眠ってしまう前の記

つ (ええと確か今日は部活で遅くなって、 近道に路地を通って行

たら、 変なおっさんに....)

君、いい体しとるのぉ~

そうそう、そう言われて呼び止められて...

って、 ええつ!?」

目を見開く修二。

その視線の先には、奇妙な老人がいた。

な白髪が固まっている。 白衣を着たその老人、 頭は禿げ、 両側面にわさわさした玉のよう

笑い。 鼻は赤く、 顔の輪郭はナスのようで、 浮かべるその表情は下卑た

ַ צו צועטי

に その老人は、 何か模様のようなものを書きはじめた。 杖のようなものを持ち、 修二を縛っている柱の周囲

「おい爺さん!何する気だ!俺を離せ!」

ヒヒ、 駄目じゃよ。 お前さんはこれからイケニエになるんじゃか

5

「生け贄だって……!?」

修二は眉を顰め、 修二はそれの意味するところに、 出来あがってゆく図形を見る。 すぐさま気がついた。

...... ! 召喚陣か」

お前さんにはちょっとわしの実験の手伝いをしてもらおうと思って おおー、優秀な学生じゃのー。 その通り、 これは魔法陣じゃよ。

の生け贄にされなきゃならねぇンだ!!」 「ふざけんな離せ!条例違反じゃねぇかそれ!何が悲しくて化け物

この 召喚術とは精霊や幻獣を呼び出し、 修二は描かれた魔法陣からそう判断した。 イカレた老人がやろうとしているのは召喚術だ。 使役する術のことで、 その代

償として召喚対象の好物を生け贄に捧げなければならない。

の街ではその召喚は禁止されているはずだった。 人間を生贄にしなければならない召喚獣は『禁種』と呼ばれ、 こ

暴れるように、 しかし、やはり、 激しく身をよじる修一。 全く身動きが取れない。

「無駄じゃよ。 それに召喚されてすぐ食われる訳じゃない『禁種』

でもないしの」

「なんだって?」

「言ったじゃろう、 実験じゃと」

そのうち、老人はすっかり陣を書き終えてしまっていた。

「さーて、それじゃ、実験を開始しようかの」

老人が杖を振りあげる。

修二は目をつむった。

今朝美穂子に言われた『 いつかピンチになった時ヒーローが助け

に来なくても知らないからね!』

という言葉が、 頭の中で反響する。

(く.....頼む!誰か.

必死に目を閉じ、 修二は心の中で叫ぶように祈った。

(誰か : 助けてくれ!

わかった。 今助ける」

突然の声に、 修二は薄目を開ける。

「...... 来よったか」

老人は静かな、 それでいて嬉しそうな声をあげた。

窺わせる。 手足、胸部以外のラインを際立たせ、その影が少女だということを 全身にぴったり張り付いたようなそのスーツは、装甲のついた頭、 それは、真っ赤なボディスー ツに身を包んだ人間のようだっ 暗がりから、真っ赤な影がひとつ、 歩いてくる。

メット。 したような飾りが耳か角のように生えている、 フルフェイスタイプの下半分を切り取り、 蝙蝠の羽をデフォルメ 妙なデザインのヘル

テクターのような、 二つのふくらみを覆うのは、 乳房の形に合わせて打ち出された金属製の胸当 フェンシングの女性用チェストプロ

両腕には左右対称の、真黒な籠手。

じ位置に同じ形の窪みがある。 ンで、右籠手の甲には白い十字がが嵌め込まれ、 東洋的でも西洋的でもないそれは丸みを帯びたシャープなデザイ 左籠手の甲には同

しきものが見えず、 脚甲も籠手と同じような材質で作られていて、 一見すると革のロングブー ツのようだ。 不思議と継ぎ目ら

(まさか.....あれが?)

修二は目を見開いた。

警察の特殊装甲には、どう見たって見えない。

選ばれないだろう。 仮に警察の人間だっ 何より、 見ただけで少女であると判断できるその華奢な体躯は、 たとして、 特殊装甲の装着者なんかには、

「来たなブラッドガール!」

老人が、 酷く嬉しそうな調子で、声を張り上げた。

せにもう犯罪に走るなんて、随分ふざけた真似してくれるじゃない」 ドクター エッグプラント!司法取引して保釈されたばっかのく

声だけではない。堂々としたその足取り、 怒気をはらんだその声は、 少女だとは思えないほどに力強い。 風格。

警察がもつ厳格さとは、違う。

そう、それはまさに、正義のヒーローのような

れていることを証明する、 ワシはのう..... 小娘。 ただそのためだけ!」 このワシが鬼灯のクソガキよりも優

エッグプラントは、 杖を振り下し、 術を起動させる。

! !

゙それだけが今の望みなんじゃよ.....!」

を手放した。 その光が自分を飲み込んでゆくのを感じながら、 術式が、召喚陣が、 真っ赤な光に輝く。 修二はその意識

[「]装甲幻獣!『ミノタウルス』!

と交じり合う。 老人が叫ぶと、 少年が磔にされていた金属の柱が融解し、 赤い光

それは修二の体を覆うと、 やがて形を為した。

5メートルはあろうかという体躯。

赤い金属でできた、 筋肉質なボディ。

猛々しき鋼の角に、 牛の頭部。

半人半獣の幻獣、ミノタウルス。

しかし中に修二少年を取りこんだそれは、 本来のミノタウルスの

姿ではない。

エッグプラント博士の『実験』

修二を縛っていたあの柱は、単に彼を拘束するためのものではな

その実験道具の一つだった。

『装甲幻獣』

それは召喚した幻獣と、博士の創り出した『銀の柱』を融合させ、

強化装甲を作り出す、ドクター・エッグプラントの開発した技術。

さぁ始めようかブラッドガール.....

貴様の兄が作り出したそのブラッディクロスと、 ワシのアー

Ķ どちらが優れているか!今、 証明の時

ブラッドガー ルは唇を噛む。

博士から視線をそらし、 ミノタウルスの体躯を見据えた。

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

咆哮。

修二が叫ぶ。

『装甲幻獣』 |

融合した幻獣に意識を乗っ取られ、暴走する危険を秘めている代物。 ることになり、また強い意識を常に保っておかない限り、 装着者は非常に強力な力を得ることができる半面、 自らの命を削 銀の柱に

出来るはずもなく、 つ ていた。 ただの学生であった黒田修二に、 彼は既にミノタウルスに体を乗っ取られてしま 強い意識を常に保っておくなど

ての?」 「さあやれ!ミノタウルス! 世話の焼ける爺さんね.....正面からカチ会わないとわからないっ 奴を叩きつぶすのじゃ

ブラッドガールはその口元に笑みを浮かべた。

いいわ。叩きつぶしてあげる」

滑るように、ブラッドガー 姿勢を低く、 一瞬だけ溜めて、 ルは駆ける。 引き絞られた弓のように、 地面を

その速度は、 という間もなく無になる。 凄まじく、 0メートルはあったはずの距離が、 あ

込んだ。 その右手を引き、 一方で、 ミノタウルスは大地に根を張るようにどっ 向かってくるブラッドガー ルに向け 正面から打ち しりと構え、

激突する、両者の拳。

衝撃が周囲に走る。

・ つ!

ブラッドガールが歯を食いしばる。

ならば威力が相殺され、鍔迫り合いになったこの状況。 自身のスピードを乗せたその一撃で、 なお互角。

押し負けるのはどちらか、明白。

「おおおっ!!」

彼女は叫ぶ。

そうすることで隙を作り、鍔迫り合いになったこの状況を打破し 叫んで、左拳を、 そのミノタウルスの巨大な右拳に打ち込む。

ようとしたのだ。

タウルスの、その攻撃に対処が間に合わなかった。 しかし、そうしてしまったことで、 同じように左拳を振るったミ

「ぐあぁぁっ!!」

ブラッドガー ルの、 その小さな体躯が、 赤いその拳に打ちすえら

れ、宙を舞う。

た。 彼女は投げられたおもちゃのように、 公園の地面を跳ね、

プハハハハ!他愛もない!」

歯をむき出しにして笑うエッグプラント。

る ブラッ ドガー ルは血の混じった唾液を吐き捨て、 す と立ちあが

` なるほど、パワーは上等なようね..... 」

いた。 その ヘルメット、 目を覆い隠すバイザーに、大きなヒビが入って

その体に、 大きく深呼吸し、 打撃によるダメージは感じられなかった。 再びミノタウルスを見据える。

゙ なら.....スピードで撹乱するまで!」

再び駆けだすブラッドガール。

今度は正面から打ち合わず、左側面に回り込む。

振り向くミノタウルス。しかし、彼女は既にその背後に回り込ん

でいる。

振り返りながら、ミノタウルスは腕を振りあげる。

しかし、その軌道には既に彼女の姿はない。

その後もブラッドガー ルはミノタウルスの上下左右前後あらゆる

方面へ回り込み、撹乱する。

スを崩す。 やがて、 追い切れなくなったミノタウルスの足がもつれ、 バラン

「貰った!」

その顔面に、 ブラッドガールは正拳突きを叩きこんだ。

しかし。

ギョロリと、その目が彼女を見据えた。

! ! _

その金属質の体に、生半可な威力の拳は通用しない。 ミノタウルスは踏みとどまったのだ。

右手に掴まれる。 その虚を突かれ、 ブラッ ドガー ルの体は、 ミノタウルスの巨大な

つ!ぐ......!!.

苦痛に、声を漏らすブラッドガール。 彼女の体を握りつぶさんと、ミノタウルスは力を込めた。

続けられて苦痛を味わいたいか?ん?」 ッドガール、貴様が死ねないのは知っとる。それともこのまま締め フハハハハ!!どうやらワシの勝ちのようじゃの!降参せいブラ

しかし、 再び歯をむき出しにして、 一方のブラッドガールは歯を食いしばって、 狂ったように笑うエッグプラント。 一言

《Burning form》「 次は、汎用性よ」

音声。 ミノタウルスの握った手の内側より響く、 曇ったような電子合成

異変は、そのすぐ後に起きた。

な、なんじゃと!?」

博士の笑みが、焦りに変わる。

ごうごうと音を立て、ミノタウルスの手が燃え上がったのだ。

· グアアアァアアアッ!!!!

叫びと同時、 ブラッドガールの戒めが解かれる。

ミノタウルスに向けて、 呻きながら必死に右手を地面にすりつけ、 火を消そうとしている

巨体を炙った。 ブラッドガールはその両腕から巨大な炎を発生させ、 放ち、 その

いくら頑丈でも、 これには耐えられないわよね?」

を外し、 いつの間にか、 ブラッドガールはまた別の十字架をセットする。 左籠手の窪みに嵌め込まれていたその赤い十字架

≪Snow Lady form»

電子音の発声と共に、 そのスーツのカラーが、 赤から白へと変化

右拳を握りしめる。 彼女はその業火に身を焼かれ続けているミノタウルスに向かって、

拳の周囲に、強力な冷気が纏わりついた。

「馬鹿な!そんな機能が!!」

顎を落として驚愕するエッグプラント。

や、やめろ!取り込んだ少年まで死ぬぞ!?」

エッグプラントは声を張り上げるが、 彼女は無視して、 駆 け る。

ちょっと痛いけど、我慢してね、 黒田修二君!」

極限まで熱されたその巨体に、絶対零度の一撃を叩きこんだ。

グ.....オ.....グオオオオオオオオオオオオオオオオオ

粉々に砕ける巨体。

へ落ちた。 やがて、 それは、 彼女の右籠手に嵌め込まれた白い十字架へ吸い込まれる。 白い十字架が赤く染まると、それは籠手から外れ、 地面

優しく抱きとめた。 そして彼女は、 吸いこまれなかった最後の一片、その少年の体を、

?

妙な夢を見ていたような気がした。なんだか、全身が痛い。

起きた?」

やさしい声がかかる。

声がした方へ、顔を向ける。どこかで聞いたような声だった。

そして、一瞬だけ、その顔を見て、

驚愕の表情を浮かべると、 彼は再び意識を手放した。

翌朝、修二は病院のベッドで目を覚ました。

を負ったらしかった。 警察病院のようで、 話を聞くと、何らかの事件に巻き込まれ怪我

はいなかった。 警察の人が話を聞きに来たが、 彼は昨夜のことはほとんど覚えて

取って今日一日は入院することになった。 回復魔法がかけられ、 怪我は一つも残っていなかったが、 大事を

· ふう.....」

めると、 警察や看護婦が出てゆき、 ふと枕に何か違和感があった。 ようやく落ち着いて彼がベッドに身沈

チが挟まっていた。 めくってみると、 そこには綺麗に折りたたまれた、 新品のハンカ

これって.....」

修二は息を漏らす。

手紙が挟まっているのに気づいた。 まるで新品のようにキレイになっているそれを手に取ると、 それは昨日、 彼が鬼灯霧江に貸したものと同じデザインだった。 中に

そこには、こう書かれていた。

『修二君へ。 ハンカチの借り、返したわよ。 P.S.昨日のことはこの新しいハンカチが口止め料ってことで

鬼灯霧江』

あ.....!」

思わず声を上げてしまう修二。

昨日の夜。

あの時、彼が見たもの。

この街のヒーローの、素顔。

たのだ。 それは、 やさしくて強く、そして謎の多いあのクラスメイトだっ

数日前。

遅いなぁ、 あいつ」

三月三十一日。

天壌島空港。

ターミナル1F、 国内線到着ロビー。

黒いコートを着込み、ちょっとくたびれたような顔をした白髪の

青年が、壁に背を預け、携帯で時間を確認している。

その青年、鬼灯零次は妹を待っていた。

予定ならばもう二本も前の便で到着しているはずが、 待ち惚けを

食っている。

ルにもずっと反応がないのだ。 連絡を取ろうにも携帯の電源を切っているようで、電話にもメー

まさか墜落した、なんてこたぁないよな」

彼は周囲を見回す。

だ。 っと忙しそうな添乗員や空港の職員etc・・ る初老の男、談笑している女子学生、忙しそうなビジネスマン、 のんびりと飛行機を待っている親子連れ、ベンチで眠りこけてい いつも通りの空港 も

何か大事あれば、 もっと慌ただしいだろう。

たく、 何やってんだか...

妹と言っても、 初日からこれでは先が思いやられるな、 年が十年も離れている。 彼にとっては娘同然だっ と彼は思った。

それも、とびっきり手のかかる娘だ。

た。

(今日は妹を連れて人と会う約束もあるってのに.....)

零次は再び携帯を確認する。

時間は十二時半。

約束の時間までにはあまり時間がない。

久しぶりに会うのだから飯でもおごってやろうという彼の計画は、

既に消滅していた。

生憎そこまで暇ではないのだ。 荷ほどきの手伝いもしてやろうと思っていたが、春休みとはいえ、

突然、ぶるる、と、 メールの着信に携帯が震える。

送信者は鬼灯霧江。

彼の妹だった。

ようやく連絡が入ったことに安堵し、 彼は届いたメールを開く。

..... あのドアホ.....」

そして深くため息をつくのであった。

白髪の青年、零次はタクシーの運転手に金を払い、 降りた。

第三区、10番地、太極館学園女子寮。

ビ 太極館学園は島にある中ではレベルが高めの人妖共学校だ。 彼の妹が入学する予定になっている。 そこ

彼は寮監に事情を話し、 合鍵を貸してもらった。

そして今年度の新入生用のフロアとなる三階へ足を運んだ。

301号室。

二人部屋が基本のこの寮では数少ない個室である。

個室は成績優秀者か、特別な事情を持った物が入寮を許可される。

当然、他の部屋よりも料金が高い。

鍵を開け、中に入ると大量の段ボール箱が並べられていた。

妹が第三スフィアから送ってきた荷物だ。

零次は、目的の物を部屋の中央に見つけた。

人ひとりがすっぽり入ってしまいそうな細長い大きな木の箱だ。

緩衝材やガムテープやらで厳重に梱包されている。

零次が素手でテープをびりびりと乱暴に破いてゆくと、 箱の全貌

があらわになった。

それは棺桶だった。

大きな十字架の描かれた、西洋風の棺桶。

零次が包装をぐしゃぐしゃ と丸めてゴミ箱に捨てると、 その棺桶

の蓋がひとりでに開いた。

ああー、 よかった。 一時はどうなるかと思った」

゙お前なぁ、ふつうに密航だぞ、これ」

中から出てきたのは、 白髪の零次とは対照的な、 長い黒髪の少女

だった。

顔立ちは端正だが目が少しツリ眼気味。

女子高校生の平均的な身長、スタイル。

ちょっとさびしめな胸。

仕方ないじゃ ない。 寝てたら勝手に業者が運んじゃったんだから

したりして体中の関節を鳴らし始めた。 少女、 じっとしていた苦痛からか、うーんと伸びをしたり、 鬼灯霧江は欠伸をしながら癖のついた髪をぽりぽりと掻く。 腕を軽く回

れりゃいいのに」 「伯父さんも伯父さんだ。こんなことがあったら連絡の一つでもく

のほうが面白そうだからって」 伯父さんには私が黙っててって電話で言ったのよ。

「てめえ確信犯(誤用)じゃねぇか」

「まぁまぁ」

概要はこうである。

され、そのまま荷物として運ばれてしまったのだった。 のだが、 た荷造りをようやく終えて、棺桶の中でぐっすりと眠りこけていた 叔父の家に住んでいた霧江は、引っ越しの前日、 翌日来た業者に中に入ってることを気づかれないまま梱包 夜中までかかっ

江は状況を面白がって叔父を口止めした。 集荷が終わった後でそれに気づいた叔父は霧江に連絡したが、 霧

霧江も霧江だが素直に従う叔父も叔父である。

からね」 力任せにぶち破ってもよかったんだけど、 いざ到着したら思ったより梱包が厳重で出られなかった、 棺桶壊したくなかった

「アホ」

かなくていいの?」 まぁまぁ。 ほら、 誰かに会いに行く約束してるんでしょ?早く行

優先だ。 何言ってんだ、 とっとと空港行くぞ」 ここでは入島審査があるの忘れたのかよ。 そっち

かもな」 そうだっけ。 ごめん忘れてた。 やつべ、 強制送還ある?

零次はは一っと大きくため息をつき、部屋の外へ向かった。

産業革命期。

度その頃だった。 『魔法』が『技術』として、表舞台に顔を出しはじめたのは、 丁

たことを皮切りに、魔法技術は世界に浸透。 ある国である魔術師が、魔法を使用した技術を産業に使用し始め

全世界における魔法使い人口は急速に増加していった。 その存在は当然の物とみなされるようになり、 時代が進むにつれ、

にが、それに伴いある問題が発生した。

近年、魔法使いの増加に比例するように、 妖怪や魔物といった、

魔法生物も増加を始めたのである。

魔法生物、 特に捕食種は、魔法使いの肉をよく好んだ。

するという事件が世界中で起るようになったのである。 そのため、 魔法使いの住む街が魔法生物による襲撃を受け、 壊滅

された各国政府は一計を案じた。 魔法生物増加の直接的な原因は不明で、 暫定的な解決を余儀なく

かったのだ。 産業の要となっている魔法使いたちを切り捨てるわけにはい

われている、 そして生まれたのが、この『スフィア』という計画都市である。 『スフィア』 魔法使いのための都市である。 は魔法生物の侵入を防ぐ強力な球状の結界で常に覆

ここ、天壌島もその一つ。

正式名称『東京都天壌島第五スフィア市』

東京湾沖、 この街は、 伊豆諸島と小笠原諸島の間に作られた、 名の通り日本で五番目に作られたスフィアである。 佐渡島ほどの

面積を持つ巨大な人工島の上に建設されている。

都市でもある。 そしてここは、 他のスフィアとはまた別の目的をもって作られた

すね?」 「ええと、 鬼灯霧江さん... ... 種族は吸血鬼、 妖力ランクはB..... で

ふたたび天壌島空港。

ターミナル1F、国内線到着ロビー。

ろにあるベンチに座って眺めていた。 中年の男性職員相手に手続きを行っている霧江を、零次はその後 ブースのように仕切られたカウンターで、 頭髪のちょっとさびし

変わってねえな.....」

ジーンズという実にやる気のないファ どこにでもありそうな無地のTシャ ツとその辺に転がってそうな ッション。

ションなんていう単語とはおおよそ縁遠そうな所がある。 妹に会ったのは実に二年ぶりだが、 この辺は全く変わっていない。 色気がない所というか、 ファ

まぁ、仕方ねぇよな.....

吸血鬼。

職員 もう10年も前、 の男が言ったように、 あの忌まわしい事件から、 妹は人間ではない。 ずっと。

そしてその間、 彼女は人間社会の中で不当な扱いを受け続けてき

た。

これもまた、 天壌島、 第五スフィア市が作られたもう一つの目的。 魔法使いの増加、 そして魔法生物の増加と深く関わ

つ

ている。

人間と同等かそれ以上の知能を有し、 いる存在もいる。 魔法生物の中でも、 特に妖怪や魔族などと呼称される種の中には、 確固たる意志と自我を持って

人間はそれらを総称して『妖魔』と呼んでいる。

ためだ。 この島が作られたもう一つの目的は、 その妖魔との共存をはかる

人間ではない妖魔には人権がない。

いない限り共存することなど不可能だ。 たとえ人間と同じような能力を持っていても、それが認められて

になるということでもない。 しかし、 妖魔に人間と全く同じ権利を認めたところで共存が可能

妖魔は人間より、 物理的にも魔力的にも強い力を持っ

そして、 中には人間を捕食するような種も存在する。

その中で権利と制約のバランスを取る必要があるのだ。 よって、 共存のためにはお互いが違う存在であることを前提とし、

つまりこの島は、 そのための実験都市なのである。

はい結構です。 ではこの書類を持って市役所に行ってください」

中年職員はそう言って、 判子を押した書類を霧江に手渡した。

とには始まらない。 特に、妖魔が市民権を得たいのならばここをパスして通らないこ 島の事情もあって、 ここでは入国審査ならぬ入島審査がある。

どうやら審査は無事パスしたらしい。 霧江が今受け取ったのは、 住民票発行に必要な入島証明書である。

偽証魔術、催眠術等のプロフェッショナルである。 彼女が気付いたかは定かではないが、 入島審査官は誰もが幻術、

のだ。 少しでも何かを誤魔化すそぶりを見せれば即強制送還もありうる

なことでもない。 もっとも、やましいことはほとんどないのであまり気にするよう

その様子を見て、零次は席を立つ。

ここまでだいぶ時間を食ってしまった。

約束の時間まではもう僅かだ。

よし、次だ。さっさと行くぞ霧江」

う零次。 はやくこい、 と手を軽く振って妹を呼び寄せ、 空港の出口へ向か

あれ?タクシー乗り場はこっちのが近いんじゃない?」

と、タクシー乗り場を示す看板を指差す霧江。

て行ってしまっ だが零次は「 た。 いいから来い」とだけ言って、さっさと出口へ歩い

とにして、 霧江は首をかしげるが、 考えても仕方がないのでその後へ続くこ

え?ちょ……なに?」

れてしまった。 そして出口を出たとたん、荷物でも担ぐかのように兄の肩に担が

遅くなったからな。 時間には間に合わせにや.....」

ないのにはためき出した。 彼がそう言うと、着こんでいた長いコートが、 はたはたと、 風も

詠唱省略 飛行術式起動」

風はあった。

そのコートの内部、 強い風が渦を巻くようにして。

最高速度で行く。書類を落とすな」

ちょ、 待つ待つ待つ待つ

あわてた霧江の抗議と抵抗は完全に無視され、 彼らは跳んだ。 ١J

な 飛んだ。

周りの客を吹き飛ばしてしまいかねない強風とともに。

向かった先は島の中心部にある市役所。

島の中心。

そこには島のどこにいても見えるような果てしなく高い巨大な塔

が建てられている。

頂上に結界の維持、 『スフィアタワー』 管理施設があり、 と呼ばれるそこは、 他にも市役所などの主要施 計画都市スフィアの要。

設が集中している。

その塔の周囲に広がっているのは自然公園だ。

周りに誰もいないのを確認し、 零次は降り立った。

衝撃、轟音、爆風。

それは着地と言うより着弾に近い。

ともすればテロとも取られかねない行為だが、 今回に限ってそれ

はなかった。

事前に通知しておいたのだ。

の広い場所が確保されていたのもそのためである。 休日にはたくさんの人や妖魔が集まるこの公園で、 都合よく無人

鬼灯様ですね、お待ちしておりました」

零次の着弾地点に、スーツ姿の女性が近づいてくる。

゙すみません。 遅くなっちゃったみたいで」

に軽く頭を下げる。 零次は荷物を、 というか霧江を肩から降ろしつつ、 目の前の女性

いえ、 時間ぴったりですが.....その、 大丈夫ですか?」

て動かない霧江を心配そうに覗き込んだ。 そう言って、スーツ姿の女性は頭から降ろされたままぐったりし

対して零次は心配ないですよ、というような軽い笑みを浮かべた。

どうせすぐ起きますから.....あ、 はあ.....」 少し下がった方がいいかも」

言われて彼女が一歩下がると、

「フライアァァァァップ!」

を放った。 霧江は飛び上るように起き上がり、 同時に強烈なアッパー ・カット

をかわす。 零次は予測していたように、 軽いステップを踏んででひらりと身

霧江は半分涙目になりながら、拳を握り兄をキッと睨みつけた。

「このバカ兄!何すんのよいきなり!」

お前がアホなことして遅くなったからだろうが」

きに走るジェットコースター以上の何かは!このロリコン!」 だからってこんな目に合わせるんじゃないわよ!よ何あの後ろ向

「おいロリコンは関係ねぇだろ!」

はそれを二本の腕だけで手際良く捌いて見せる。 蹴り繰り出したり、 言い合いながら、 飛び蹴りしたりしてして兄を攻撃。 霧江は何度もその拳を突き出したり、 対する零次 後ろ回し

あの、お二方.....もうお時間が」

「「あ、すいません」」

恐る恐るスーツの女性が声をかけると、二人はピタリと静止し、

同時に同じセリフを言い放った。

女についてくる。 そして一時休戦だ、と拳をコツンと軽く打ち合わせ、 先導する彼

だった。 もしかしたらこの兄妹不仲なのか、 そんな彼らを見て軽く胸をなでおろし、 と一瞬疑ったスーツ姿の女性 二人を塔の中へ導くの

関係者以外利用禁止』と書かれたエレベーターに乗り込んだ。 塔の内部、 三人は市民窓口課や衛生課や福祉医療課を横目に、 一階から六階までは市役所になっている。 一番奥にある

先に入島証明書をお預かりしておきますね」

言った。 エレベー の扉が閉まると、スーツの女性は霧江に向き直って

「あ、はい.....って、ここで?」

ええ。 必要な手続きはこちらで済ませておきますので」

ああ、そっか。おねーさん市役所の人か」

そう言って、霧江はスーツの女性に書類を手渡した。

はい、確かに.....って」

「あー」

はいた。 兄に言われた通り、 霧江は書類を飛ばさないように必死に掴んで

ある。 しかし、 若干必死すぎたらしく、 大切な書類がぐっちゃぐちゃで

`......申し訳ない。急ぎすぎたようで」

零次がやっちまった、と右手で顔を覆う。

| 再発行した方がいいですかね?|

いえ..... 大丈夫です。 こちらでなんとかしておきますので」

「いいの?よかったぁ.....」

そうこうしているうちに、 ふーっと、 スフィアタワー6階、市役所部分の最上階である。 一息つく霧江。 エレベーターは目的の階に到着した。

お前、ここまで来たら大体予想つくだろうよ」ねぇ兄貴。こんなところで誰に会うのよ」

妹の質問に嘆息する零次。

かが、島に来てそうそうそんな人に会うの?」 いやいやいや、そりゃだいたいは予想できるけど、 なんで私なん

「 言ったろう。 お前には仕事を頼みたいって」

「仕事って.....まさかこの先にいる人から?」

三人の目前。長い廊下と、幾つもの部屋。

目指すのは一番奥の一室だ。

声をかける。 スーツの女性がドアをノックし、 「お客様をお連れしました」 ع

「通してくれたまえっ!!」

中から威勢のい い野太い男性の声が大きく聞こえてきた。

お入りください」

それはこの街、 女性がドアを開く。 第五スフィア市の市長室の扉だ。

第四話 市長はテンションが高い。

零次教授!そして鬼灯霧江クゥン!」 ウゥゥゥェェルカアァアアム ようこそ鬼灯

そして口髭が素敵なナイスミドルだった。 包んだ、やたらテンションが高く、野太い声、 市長室に入った二人を出迎えたのは、 赤いド派手なスーツに身を オールバックの髪、

慣れているのか冷静に言葉を返す零次。 面喰らっている霧江の真横で、「遅くなって申し訳ないです」と、

無月クン、彼らにお茶を用意するのだッ!」 いやぁ、 かしこまりました」 構いませんとも!さぁさぁ、 そこに掛けてください。 神

彼らを引率してきたスーツの女性が答える。

どうやらこの市長の秘書らしい。

先に座らせ、 市長はデスクの前にある応接用の豪奢な椅子とテーブルに二人を 自分はその対面に座った。

かなっ 「さて教授。 !? 確認ですが、 妹さんにはまだ何も話してはいないです

市長はキリリとした笑みを浮かべながら零次に問う。

ら言いたかったですからな!」 ええ。 うむっ!ありがとうございます!これだけはどうしても私の口か とりあえず仕事をしてもらうことだけは話しましたが

とにかく声がでかかった。 うんうんと頷く市長。

さて.....鬼灯霧江クン はいイ!?」

っと突き出す市長。 急に席から立ち上がり、 霧江に向かって右手の人差し指をビシィ

れ体がビクゥ!と反応する。 色々と面食らって呆然としていた霧江は、 急に名前を大声で呼ば

になってほしいのだよ!!!」 君を呼んだのは他でもない!君にはこの街の正義を守るヒー

は?

てしまう霧江。 突拍子もない言葉に、 思わず鳩が豆鉄砲を食ったような顔になっ

(今なんて言った?正義のヒーロー?私が?ってかヒロインじゃな の?っていやいや.....)

った霧江。 たが、まさかそんな言葉が飛び出してくるなどとは夢にも思わなか 市長から仕事の話をされると聞いた時は何を頼まれるのかと思っ

く撫でた。 彼女が目をぱちくりさせていると、 市長は「フムン」 と顎鬚を軽

とか、 つまり、 んん?わかりにくかったかな? 風都のダ 君にはこの街にとっての、 ルのような、 そんな存在になってほしいのだ!」 たとえばゴッサムのバ

トだ

うこと?ナニ?なんで私?」 いきなりすぎて話が見えてこないっていうか、

よろしい、 説明が必要だろう!神無月クン

な指示を飛ばす。 今しがたテーブルにお茶を並べ終えた神無月秘書に、 市長は新た

してあったファイルを霧江の前に置いた。 「こちらをご覧ください」と、 神無月は市長のデスクの上に用意

上がりの棒グラフだった。 『第五スフィア市の過去五年間における犯罪件数』と書かれた右肩 開かれたファイル、その中で彼女の眼にまず飛び込んできたのは

年数は2006年から去年、 2010年までの5年。

央、2008年は前年の倍の高さがあり、 れなりの件数しかないが、その次の年、グラフで言うとちょうど中 0年と急激に増加しているのがわかる。 これによるとこの街の犯罪件数は、 2006年、2007年は 以降2009年、 201

この街は未曽有の危機に瀕している!

市長は立ったまま話を続ける。

うか。 声のトーンが先ほどよりも下がったのは、 深刻な話故だからだろ

あくまで若干、 だが。

にあるのだ!理由は様々ある。 グラフを見れば一目瞭然だが、 街の犯罪件数は爆発的な増加傾向

につれ変わった! この街が出来て20余年!町の環境も、 街の外の環境も年を経る

だが三年前のあの変化は致命的だっ た

う。 彼が話しているのは、 市長はデスクの周りをぐるぐると回りながら語る。 2008年に起こった政権交代のことだろ

配してきたのだが、ここにきて保守党が逆転し、 く転換したのである。 日本では、 長きに渡りリベラルで革新的だった民権党が政権を支 政治の方針が大き

てかわかるかな!?」 民権党が政権を握っていた時代は犯罪件数は少なかった。

霧江の正面で止まり、 再びビシィ!と人差し指を突き付ける市長。

今の政治が悪くなったとは言えないのだ」 え、えーと.....その時は政治がよかったから..... うっむ、 惜しい。 政治の方向性が今と違うのは確かだが、 ですか?」

市長は再びぐるぐると、 今度はテーブルの周りを回り始める。

獲得してしまった。 61 故に、 た彼らだが、4年前党首が変わってから急激な変化を求め始めた。 この保守的な国で民権党が権力を保てていたのは奇跡に近かった。 それまではじっくりと慎重に、保守派を懐柔しつつ政策を進めて 国民の支持を失い、あっという間に保守党が逆転、 彼らが悪いという訳ではない。 政権を

つだけある!」 だが、 保守党が行った転換の中でこの街にとって最悪なものが一

る 市長のセリフに合わせるように、 神無月が霧江の前の資料をめく

見出しは『妖魔公務員締め出し』 そこには新聞記事の切り抜きがコピーされていた。 と書かれていた。 小さな記事だ。

登用はこの島では例外的に認められてきたものだったのだが!政府 が!人間以外の公務員を認めなくなってしまったのだ!」 彼らは妖魔が公職に就くことを禁じてしまった!!妖魔の公務員

市長は一息つき、椅子に座って茶を一杯飲んだ。

?..... 警察官を含めて」 つまり、 この街の妖魔がたくさん失業した.....ってことですよね

「その通り!!!」

またビクっと背筋を震わせる霧江。 市長は満足したように頷きつつ、霧江をビッシィと指差す。

だが、 私は政府に、 認められなかった! 『せめて警察官だけでも認めて欲しい』と訴えた。

さがうかがえるだろうッ! その記事の小ささを見たまえ!そこからも島外の国民の関心の低

妖魔に任せることができた! そしてその結果が犯罪件数の増加だ!今まで妖魔の取り締まりは

役目となってしまった!! しかし、今!妖魔を取り締まるのも人間を取り締まるのも人間の

それでは力が足りないというのに!!」

今度はすぐに座りなおし、 市長は再びガバッと立ち上がるが、 お茶をもう一杯啜る。 かぶりを振っ たかと思うと、

見であるこの島を取り潰す気なのかもしれない... このまま犯罪件数が増加を続ければどうなるか これは私個人の考えなのだが、 保守党の連中は、 民権党の忘れ形

引いた。 今の今まで光り輝いてさえ見えたナイスミドルの顔に影がさす。 市長の声のトーンがかつてないほどに下がった。 しかしそれが爆発の前の溜めであると感じ、 霧江は少しだけ身を

だァがしかァし! !!絶対にさせん!!!! !この私 の眼の黒いうちは

かつてないほどにテンションをあげて。 椅子を後ろに吹き飛ばすほどの勢いで、 市長は三度立ち上がる。

びりびり、 と霧江の鼓膜や部屋の窓ガラスが振動する。

たいツ 「霧江クン! !私はこの街の未来を!

がっちりと、 正面から両手で霧江の肩を捕まえる。

強い笑みをたたえたその顔。

霧江はただ、圧倒されるばかりだ。

持をする、 まぁさぁにその通オオオオオオリ! ってことですか?」 つまり..... 正義のヒー ローっていうのは..... 私が治安維

至近距離での大声に、 霧江は思わず目をつぶる。

飛んでこなかっ これだけ近いと唾がかかりそうなものだが、 た。 彼女の顔には一滴も

どうも大声を出すのが得意らしいが、 流石に鼓膜がしびれそうだ

すし 日の光も平気なデイ・ウォーカーですけど.....そこまで強くないで 待ってください..... できませんよそんな..... 確かに吸血鬼で、

「ふむ」

市長はそっと彼女の肩から手を離す。首を振って反論する霧江。

君は、 SSSランクの最強クラスの妖魔だと聞いているが?

7....?

兄は彼女の視線から逃れるため思いっきり顔を逸らした。 霧江は面食らって、 パチパチと眼を瞬かせながら兄の方を見る。

ちょと、 なんでバレてんの!?兄貴!ちょっと、 おい

零次のコートを掴み、ゆさゆさと揺さぶる。

「……すまん」

顔をそらしたまま小さく謝る零次。

霧江が慌てているのは、 この島の既定のためだ。

ンクに階級づけされ、 妖魔はその妖力によって最下位のFランクから最上位のSSSラ 現状、 治安維持の観点からSランク以上の妖

魔の入島を禁止している。

1 きものである。 などに入りたがることはまずないのだが、 最も、そういった上位ランクの妖魔がわざわざ人間のコミュニテ しかし何事にも例外は

てしまった場合や、 たとえば、 妖魔として大成する才能を秘めた人間が妖魔に転化 ただの人間だったにもかかわらず強力な妖魔の

力を受け継いでしまった場合など。

だが彼女はある秘密の方法で、 これをクリアしたのである。 こっそり自身のランクをBにまで

一君には選択の自由がある」

市長は両腕を組み、 霧江を真っ直ぐ見据えつつ、言う。

よう。 この話を受けてくれれば、 君をこの街のいち市民として受け入れ

もちろん危険な仕事だ。 それなりの手当は出す!

ſΊ しかし断った場合、残念ながら、 君を受け入れるわけにはいかな

規定に従い、島外退去を命じることになるだろう!」

「そんな!そんなの、選択の余地ないじゃないですか!」

か、革命を起こしこの島の主にでもなるか.....。 「ならば他の選択肢を選ぶかね?運動を起こし、法律を変えさせる

はいい生き方だと思うがね?」 何を選んでも君の自由だ!どれも嘘をついてこそこそ隠れるより

霧江の抗議、 反論に、 市長は毅然とした態度を崩さなかった。

力を戻してやることもできる」 霧江、 俺も強制はしないが、 悪い話じゃない。 そうだろ?お前に

零次は霧江に向き直って言った。

霧江には彼の眼がどこかしら、期待で輝いているように見えた。

ああ、そういうことかと霧江は嘆息した。

全く困った兄だ。 しかし、 確かに悪い話ではない。

市長の言う通り、 こんなところまで来て隠れてこそこそすること

もない。 手に暴れることもできて、それでお金ももらえる。 島に入るために無理やり削った力を取り戻せて、 犯罪者相

考えれば悪い話ではない。

見当たらない。 もともと仕事は引き受けるつもりだったのだし、 断る理由も特に

「..... ふう」

霧江は大きく深呼吸をして、一言

·わかりました。やります」

り、ぶんぶんと上下に振った。 その言葉に、市長は満面の笑みを浮かべ、両手で霧江の右手を取

の瞬間だ!!」 「ブラアアアアアボオオオオオオオウ!!この街の新しい秩序!誕生

国立天壌島魔導大学。

は、第五スフィア市内にある三つの大学のうち、 して最も高ランクな大学である。 スフィアタワーのすぐ北の地域に広大なキャンパスを構えたここ 唯一の国公立、そ

キャンパス内、 最も南側にある建物が魔法工学部棟。

兄妹の姿があった。 春休み中のため、 人の出入りがほとんどないそこに零次と霧江の

「ここが兄貴の働いてる大学かー」

おうよ。前のとこよりいいだろー」

教授、と市長がそう呼んでいたように、 零次はこの大学で魔法工

学の講師として教鞭をとっている。

正確には教授ではなく准教授でなのだが。

ともかく二年前から兄は本土の第三スフィアにある別の魔法大学

からここに転職し、働いてきた。

いかどうかどうかを見極めるためだ。 その目的の一つは、 妹である霧江をこの街に住まわせても問題な

さて、こっちだ」

綺麗なガラスの自動ドアをくぐり、二人は棟内へ。

入ってすぐのエレベーターに乗り込み、 零次は『B2』 のボタン

を押す。

ドアが閉まると、霧江はふうとため息をついた。

(駄目だ、どうも緊張するなぁ)

たような錯覚に陥るのだ。 大学内で兄の隣に並ぶと、 兄弟ではなくただの教師と生徒になっ

覚だろう。 10年以上も年が離れているのだから、 周りから見れば当然の感

でも自分はあくまで妹のはずだ。

霧江は思った。

職場での兄は普段と比べて纏う空気が様変わりするのだ。

昔、零次が他の大学で働いていた時、 その公開講義を見に行った

ことがあった。

その時の彼は、まるで普段とは別人のように、他人を教え導く人

間独特の厳格な雰囲気を纏っていた。

彼の前で私語をしてはならない。話を聞き漏らしてはならない。

身内にもこんな感覚を抱かせるのは、兄が有能な人間であること

の証明なのかもしれない。

誇りに思う反面、どこか寂しさも覚えた。

それ以来、 彼女は兄と一緒にその仕事場へ行くことはなくなって

た。

では、今日はなぜ来たのか。

ついたぞ、ここだ」

地下二階

廊下の一番奥の部屋、第二実験室。

にある棚にはいろいろな工具や器具 何に使うのかまるで想像もつかないものまで そこには地下であることを感じさせない明るさがあり、 きわめて一般的なものから、 が綺麗に整頓され 部屋の中

部屋の中央には円形のテーブルがあり、 そこには白衣を着た学生

らしき5、 6人の集団が座って話をしていたいた。

たぞ」と声を挙げた。 霧江たちがが入ってくるのを見ると、学生の一人が「お、 先生き

氏家」 「俺の研究室の学生たちだ。右から瀬川、 林家、 東、 戸塚、 桜庭、

彼らは席を立ち、霧江たちのもとへ駆け寄ってきた。

「先生!この子が妹さんですか?」

゙ああ、そうだ桜庭」

「かわいいっ!持って帰っていい!?」

てそう言い放つ。 白衣を着たポニーテールの女子高生、 桜庭は突然霧江に抱きつい

`.....え?ちょっ痛い痛い痛い!」

霧江は引きはがそうとするも、 桜庭はさらにきつく抱きしめてき

た。

その様子に、零次はニヤリと笑う。

桜庭は鬼の血を引いてるからな。 多分腕力は今のお前より強いぞ」

「ちょ、解説はいいから離させろー!!」

あ、ごめんごめん」

ぱ、っと手を離す桜庭。

解放された霧江はへなっと力なく座り込んでしまった。

さて

と、零次は改めて、生徒たちに向き直る。

ト役に立ったよ。 みんな、 今日は春休みなのにわざわざありがとう。 ありがとう」 瀬川、 このコ

てみた感想」 の研究が日の目を見る第一歩ですからねそれで、どうでした?使っ 「いえいえ。 みんな今日を楽しみにしてたんですよ。 ようやく僕ら

危なっかしいかな。 なるよ」 「うーん、 飛んでる間は気持ちよくていいんだが、 そこをもうちょっとどうにかするともっと良く やっぱり着地が

そう言って、 零次はコートを脱いでいちばん右の男子学生に手渡

す。

力を思い出し、微妙な表情で彼を見た。 あれは彼が造ったものだったのか、 ۷ 霧江は顔をあげ、 その威

ひ見せてやりたい。 あらゆる景色が後ろ向きに超高速で流れてゆく光景を、 彼にもぜ

被害が出すぎるのはまずいからな。 具体的には、もっと衝撃波の範囲を絞る感じで。 やっぱり周りに

威力の調整ですか..... 威力を調整できるように出来るなら一番いいんだろうが ウウム、 今後の課題ですね」

前言撤回。

諸悪の根源は兄貴でした。

っさて、じゃ、改めて紹介しよう。妹の霧江だ」

零次は霧江を立ち上がらせると、 その背中をぽんぽんと叩く。

そしてかつてないほどの明るい笑みを浮かべた。

今日は本当にありがとうみんな。 さぁ、 実験を始めようか」

測定するためのものらしい機材をいそいそとセットしている。 か運び込んできたカメラやサーモ等色々なセンサーが付いた何かを 中央にあったテーブルは奥へと押しやられ、学生たちはどこから 5分後、 先程まで綺麗に片付いていた部屋は雑然としていた。

「さて、まずはこれをお前に返そう」

渡した。 零次は真赤なクリスタルで造った様な、 綺麗な十字架を霧江に手

技術。 これこそが、霧江が自身の妖力ランクを偽装するために使用した

封印十字『ブラッディクロス』

ることができるという代物なのだ。 印術式が刻まれたもので、妖魔が己の血液をこの十字に捧げ、 れた封印魔術を起動することで、妖力の大半をこの十字架に封印す これは十字架状に加工した『魔血石』と呼ばれる特殊な鉱石に封 刻ま

究を進めることにあった。 零次がこの大学にきた目的のもう一つが、 この封印十字の技術研

「ん。でもこれ、どうやって力を戻すの?」

霧江は十字架を光にかざす。

以前。 彼女が自身の力を封印したのは零次がこの大学に来るよりもっと

確立した直後のことだ。 **4年前、** 別の大学で助教授としてこの魔法技術を研究し、 理論を

自ら実験台になると志願したのを覚えている。

刻まれていた封印術式が消えている。 だが、今見るとその時との違いが一つ。 これを使用したときには

来ないように加工している」 なな ありのままの力を戻すのは市長に止められててな。 今は出

霧江は首をかしげる。

「え?じゃあどうすんのよ」

ら力を戻さないことには始まらないだろう。 街の治安維持に協力しろと言われても、 私ひとりで、 と言うのな

だから、 言われたろ?ヒー ローになるんだ、 って」

「先生えー」

を持ってやってきた。 紹介された学生の一人、 林家と呼ばれた少女が、 銀色のトランク

だ 「おお、 ありがとう林家。 さて霧江、 力の解放には、 これを使うん

零次はトランクを床に置き、開く。

そこに入っていたのは銃身が異様に太い奇妙な形をした銃と、 朩

ルスターのついたベルトだった。

彼はそこから銃を手に取り、霧江に手渡した。

見た目に反してかなり軽い。

るが、 最も吸血鬼 それを抜きにしても、 の霧江はどれほど重くとも大抵のものは持ち上げられ とても銃とは思えない軽さがあっ た。

よく見ると、銃身が太いわけではない。

銃身の周りにカバーのようなものがついているのだ。

トしてカバー をスライドするんだ」 それは『クロス・ガン』そいつの銃口にブラッディクロスをセッ

「ん.....こう?」

方にスライドさせた。 霧江は十字架をクロスガンの銃口に差し込み、 銃身のカバー を前

セットした十字架はカバーの下に隠れるような形になる。

«Standby»

⁻うわ、なんか喋った」

その電子音声が出ればセット完了だ。よし、 林家、 下がるぞ」

そして零次ははほかの五人の学生の方へ顔を向けた。 そう言って、零次と林家は三歩ほど霧江から離れる。

「機材の準備は?」

「完了してます」

O K 霧江。そいつを真上に向けて撃ってみる」

「..... こう?」

霧江は競争のスタートの合図のように、 クロス・ガンの銃口を真

上へ向けた。

そして上を見つつ、引き金を引く。

パン、と乾いた音。

の真上で一瞬のうちに丸い膜のようなものを形成した。 銃口から何かが打ち出される。 赤い水の塊のようなそれは、 霧江

かと思うと、 それは霧江めがけて落下してくる。

「こら、動くんじゃない。モニター、どうだ?」「わ、何これ、ちょっと!」

ていた氏家が答える。 零次の後ろで、 観測機材のモニターと霧江の様子を交互に見比べ

. 異状なし。順調です」

き、最後にはその体、首から下を真っ赤なボディスーツとなって包 み込んだ。 そうこうし ているうちに、 赤い膜は霧江の体にどんどん纏わりつ

おお、なんだコレ、すっごいピチピチね.....」

霧江は自らの体を見下ろす。

ている。 全身に薄くまとわりついたスーツは、 その体のラインを際立たせ

のの 局部のラインこそ前張りでもしてあるかのように隠れては 浮き出たヘソや尻のラインがなんとも扇情的だった。 いるも

、よし、成功だ!」

「「「「「やったぁあ!!!!」」」」」

げる。 戸惑う彼女を尻目に、 零次の声に学生たちは諸手を挙げ歓声を上

彼らを見て、 一人恥ずかしい格好をしている横で抱き合ったり握手したりする 霧江はなんとも複雑な表情を浮かべた。

おーい、ちゃんと説明してよ」

「おお、すまんすまん」

零次が再び霧江のそばへ寄る。

「そいつはブラッデイクロスだ」

...... ん?さっきの十字架がこれに変わったってこと?」

霧江はもう一度視線を落とし、スーツを眺める。 この赤色は、 先ほどの十字架とまったく同じ色をしていた。

をブラッディクロス(C1oth)へ変化させるアイテムだ。 レが効いてるだろう」 さっきのクロス・ガンはブラッディクロス $\widehat{\mathsf{c}}$ r o s s) シャ

「.....え、なにって」

程度の妖力や身体能力を取り戻せる。 コホン、ともかく、 それを身に纏うことで、以前の大体六割 ちょっと動いてみろ」

h

ヒュッヒュッヒュッと、風を切る音が三度。

は彼女が何をしたのかわからなかった。 霧江が虚空に向けて軽くジャブを三発撃った音だが、 学生たちに

やがてモニターを見ていた一人が声を上げた。 鬼の血を引いているはずの桜庭でさえ目を点にしている。

「パンチだ、パンチ撃ったんだよ今」

すげえ、マジかよ。 モーション全然見えなかったぞ」

学生たちはモニター の前にわらわらと集まってゆく。

ふふん」

た。 出したり、 その様子に気を良くしたのか、 四回転宙返りをしたりと軽業師のように動き回って見せ 霧江は二連発後ろ回し蹴りを繰り

そのたびに学生たちから歓声が上がる。

おーいいわこれ、 体超軽い。 今なら何でもできそう」

「そうだろうそうだろう」

き込んだ。 腕を組んで満足げにうんうん頷く零次に、 霧江は顔面パンチを叩

げふっ」

鼻血を吹きつつ、 背中から大の字に倒れる零次。

おおぉ、 本物だ。 兄貴に体技が捌かれないなんて」

霧江は目を輝かせ、自分の手を見つめる。

「 キャー 教授が— !!」

「すげぇ!あの教授に一発入れたぞ!」

·ヤダ私鼻字吹いて倒れる教授見るの初めて」

「成功だ!大成功だ!!」

げを始めた。 そして戸惑う彼女を持ち上げ、 学生たちは霧江のもとに集まり、 気絶したまま起き上がらない胴上 彼女を取り囲んだ。

わし つ しょい!わーっ しょい!」

「ははは、なんだこれ」

学生たちが集まったことに感心していた。 類は友を呼ぶというが、生徒も呼ぶらしい。 宙を舞いながら、 霧江は兄のもとへこれだけエキセントリッ クな

いや、いい一発だった」

かった。 学生たちは霧江を胴上げから解放した後、 すぐに零次の介抱に向

1 ッシュを詰めている。 今彼は学生の一人が持ってきた椅子に座って、両方の鼻の穴にテ

来は要所に戦闘用の装甲がつく。 「そのスーツは、あくまでも基礎だ。 顔も隠れるようになってる」 今はオミットしてあるが、 本

「顔隠して戦うの?」

·ヒーローってのは、そういうもんだよ」

う青年だ。 零次のかわりに答えたのは、あの空飛ぶコートを作った瀬川とい

とを感じ取らずにはいられなかった。 その返答に、霧江は趣味まで兄と共通した連中が集まっているこ

そうだ。 そもそもこのヒーロー 計画を市長に提案したのは兄貴自身なのだ 兄は昔から特撮物が、特にヒーローものが大好きだった。

まったく、 (私が嫌がらないのを解って、 なんて奴よ) そういう風に仕向けたんでしょうね。

でもスーツの出がここなんだし、 なんかすぐバレそうじゃない」

そう言ったのは林家だった。

(おお、ちょっとはまともそうな人がいた!)

と霧江が思ったのもつかの間。

その時はその時だ」

はい

「ええ」

ですね」

うーん、それもそうですね」

その時、 彼らに一抹の不安を覚えずにはいられない霧江だった。 と、頷く学生たちにつられてか、林家まで納得してしまった。 モニターを担当していた氏家が疑問の声を上げた。

「そう言えば、 名前はどうするんです?ヒーローの名前」

「名前か....」

零次が顎に手を当てる。

「そう言えば、考えてなかったな」

「はいはいはいはい!」

六人中二人しかいない女子の一人。 桜庭が勢いよく手を挙げた。

霧江ちゃんだからキリエーイドで」

お前それ怪獣の名前じゃねぇか!却下却下!もっとこう、 かっこ

よく、レッド・サンとかどうだろう」

「赤いけど吸血鬼に太陽関係ダメだろ」

「じゃあブラッデイローズは?」

「安直すぎない?」

じゃあお前何か案出せよー」

お前もなー」

塚、それに異議を出す林家、その次が氏家で、 言である。 桜庭の次に発言したの瀬川、それを否定する東、 最後がまた瀬川の発 次の案を出す戸

こうして学生達によるヒーローの名前についての議論が始まった。

...... この島の住人は基本当事者の意志を無視するスタンスなの?」 自分から発言しないと流されてくってことさ。 レアがいい!」 はい、 俺はレッド

憮然とする霧江に、笑いながら答える零次。

そして彼も議論に飛び込んでいった。

その様子を見て、霧江はふぅ、とため息をつく。

どうやら、兄はだいぶ変わっていたようだ。

今の彼からは、昔ような厳格な教師独特の雰囲気をあまり感じな

い。講義と実習との差異のせいだろうか。

それともあの時の感じは単に自分の錯覚だったのか。

うな気がした。 それ定かではないが、 こんな雰囲気なら兄の職場も好きになれそ

なるほどね... .. ちょっと、 それくらい私に決めさせなさいよ!」

の深夜まで続いた。 こうして、兄妹と学生たちの議論に火が付き、 それは結局その日

第六話 変身するのは初めて。

翌 日。

零次と霧江の兄妹は再びスフィアタワー 内の市役所を訪れていた。

そういやお前、 結局あれから名前考えたのか?」

零次が思い出したように口を開く。 神無月に連れられ、 職員用エレベー ター に乗り込んだところで、

全然。 昨日は帰ってすぐ寝ちゃったもの

早目に考えろよ。 名無しのヒーローじゃ格好つかないからな」

えるということで落ち着いたのだ。 昨日は結局夜遅くまで議論に決着はつかず、 結局霧江が自分で考

わけ?」 うし hį そういやさ、どうしてもヒーローじゃないとだめだった

「ん?」

たんじゃないのかな?って」 いやほら、 警察やめた妖魔集めて自警団みたいなの作ったらよか

警察に協力するような組織でもいいのではないか、 静に考えてみたところ、ようは公務員でなければいいだけの話で、 まれたのだった。 昨日の話を聞いた時は納得してしまったが、 時間がたってから冷 という疑問が生

とはまた別問題だ」 「元警察の妖魔が立ち上げた警備会社とかはあるけどな。 街の治安

「そうなの?」

しない。 警備会社は依頼がないと動かないだろ。 無償で市民を守ったりは

官だけだ。 そういうことが出来るのは税金から安定した収入を貰ってる警察

んだ?」 考えても見ろ、そういう自警団があったところで誰が給料を払う

かそういう形でもなんとかなりそうなもんだけど」 「市長.....とか?給料じゃなくて治安維持に協力してくれた報酬と

「そういう報酬だけでそれほど稼げると思うか?

すーなんて奇特な奴居やしない」 妖魔は気まぐれな連中だが、少ない報酬で市民のために奉仕しま

「ああ、そっか。

んで暮らすには全然足りないわけだ。 私みたいな女子高生一人にとっては大金でも、 世知辛いなぁ」 何人もの大人が遊

'世の中そういうもんだよ」

だった。 エレベーターは六階に到着し、 向かう先は市長室ではなく、 プレートに小会議室と書かれた部屋 神無月が2人を先導して歩く。

ウェルカム!零次教授!霧江クン!!」

ていた。 その近く、 市長は会議室の奥、 窓側の長机に今日はもう一人。 窓際で、両手を大仰に広げて二人を出迎えた。 小太りの中年男が座っ

彼は二人が入ってくるのを見ると立ち上がり、 一礼した。

紹介しよう。 彼は天壌警察署、 刑事課の松井刑事だ!」

「松井です。どうも」

「鬼灯零次です」

「妹の霧江です」

刑事と兄妹は互いに歩み寄り、 固く握手を交わす。

「さて、 適性を見るテストの説明をさせてもらおう」 今日呼び出したのは他でもない!霧江クン!君のヒー

市長のその言葉に、霧江は眉をひそめる。

はそっちでしょう?それなのに試験なんか受けさせる気ですか?」 「ちょっと、待ってくださいよ。 ヒーローになれって言ってきたの

ウム!当然の反論だと思う!その反応は正しい!」

市長は堂々と言ってのける。

視する声がある。 とは理解しておいてほしいのだ!実は警察内部で、 しかし、街の治安はヒーローだけで守るものではない、 君の実力を疑問

に形式的に行うものだと考えてもらってい 試験 というのは、 君の実力を見せつけ、 彼らを黙らせるため

市長は声のトーンを落として続ける。

逆境を跳ね返してこそのヒーローだからね。 回復すればいい。 「ここだけの話だが、 別に失敗しても君を追い出すつもりはない。 落ちた評価はあとから

最も、 ここでビシっと合格しておいたほうが後々楽になるがね!」

......まぁ、そういうことなら」

再び声のトーンを上げた。 しぶしぶながら納得する霧江を見て、 「よろしい!!」 と市長は

「では、松居刑事!早速二人に説明を!!」

はい。 じゃあ、 ちょっとこれを見てくれますかね」

ブルの上に置いた。 そう言って、松居刑事はカバンの中から紙の束を取り出し、

「SL・7号事件.....?」

資料の表紙、そのタイトルを、霧江が不思議そうに読み上げる。

ゃあ『吸血鬼事件』と呼ばれとります」 警察では、 事件を記号化して分類してるんで。 メディアじ

のことですよね」 吸血鬼事件か。それって、ここ二週間で起こってるおかしな事件

零次は資料の表紙をパラりと捲って言う。

た文章が載っていた。 一枚目には最初の被害者や現場の写真、現場の状況を細かく書い

者は一人も出とらんのですが、 「ええ、それですA型の女性ばかりを狙った犯行で、 というのも.....」 署ではかなり、 重要視しとります。 今のところ死

松居刑事は零次達に見せるように資料をペラペラと次々めくる。

これまで6件の事件が同様の手口で行われとるんで、 同一犯だと

思われるんですが、 のです」 犯人は自分につながる証拠を一つも残しとらん

被害にあったことを知るのだという。 いる間に襲われ、 これまで被害にあったのは、いずれも一人暮らしの女性。 朝起きた時首筋に残っている傷に気づき、 自分が 眠って

の傷だけ。 窓を割っ た形跡どころか、 侵入した形跡もない。 残ってるのは首

本当に吸血鬼以外にないと思うんですが、 という、 極めて鮮やかといいますか、ここまで華麗にできるのは

がどの吸血鬼の歯型とも一致せんのです」 島に住民に登録している吸血鬼、全員にアリバイがある上、 傷口

「じゃあまあさか、 島の外部からの侵入者..

「どうかなぁ.....」

零次の考えをを、霧江は疑問視する。

彼女は資料を手にとってペラペラとめくりはじめた。

るか、 りはしない。単独では海を渡れないんだし、 そもそも普通の吸血鬼はわざわざこんな海のど真ん中の島に来た 誰かに運んでもらうかしかない。 蝙蝠かなんかに変身す

姿見のまま紛れるのならどうしても棺桶でないとだめ。 例えば荷物にまぎれて密航、 なんて手があるかもしれ ない けど、

身して飛んできたんだとしたら、 そんなの吸血鬼の来航予定がないと確実に怪しまれるし、

要があるもの。 こんな程度の被害で済むわけがないわ。 大量に魔力を回復する必

h の血を飲んでないとおかしい」 変身した上で密航って線もない。 どっちにしたってもっとたくさ

ならない。 この海のど真ん中の島に入るにはそれなりの代償を支払わなければ 例えば吸血鬼の中でも強力な魔力を持つ高位の存在であろうと、 吸血鬼が流れる水を渡れない、というのは有名な話だろう。

あるいは、と霧江は心の中で呟く。

(私くらい特別な存在ならできるかもしれないけどね なるほど」

松居刑事が感心したように頷いた。

らの侵入のセンが濃厚と思って捜査しとったんですが.....。 流石はご自身が吸血鬼なだけのことはありますな。 我々は外部か

しかし、だとしたら誰が?」

させて、 考えられるとすれば、 島にいる誰かが、こっそり島の人間を転化

っくりこないなぁ」 そいつが事件を起こしてるって場合だけど.....これもちょっとし

霧江は腕を組んで唸る。

というと?」

素人にしちゃ、 最も、その親元がしっかり育てて教え込んでるっていうのなら別 ちょっと手口が鮮やかすぎるじゃ ないですか。

なんですけど.....」

フム、とりあえずその線で洗いなおしてみるのも面白そうですな。 試験の話でしたな。

考えとるんです」 我々はこの事件をあと一週間以内に解決しなければならない、 لح

「一週間.....?ああ、満月ですね」

会議室の壁にかかっているカレンダーに目を向けて、 霧江は納得

その大きなカレンダー には月齢と月の満ち欠けも描かれてい その日の夜はちょうど満月だ。 一週間後、ちょうど、 霧江の入学式の前日にあたる日。

のだとしたら.....。 もし、 この犯人が次の満月に向けて少しずつ力をため込んでいる

踏んどります」 その日、何かドえらいことをしでかす可能性がある。 我々はそう

満月の夜。

高に高まる時だ。 それは吸血鬼をはじめとする闇夜に生きる妖魔の、 その魔力が最

自身の魔力も最高に高まった時、いったい何をするのか。 この事件の犯人が吸血鬼だとしたら、少しずつ力を蓄え、

かだということは、 少なくとも、まったくロクなことにならないということだけは 霧江にもはっきり感じられた。

松居刑事は、真っ直ぐに霧江を見据える。

疑問視している連中も認めざるを得んでしょう。 ともかく、あなたの協力を得てこの事件が解決できれば、 実力を

いえるあなたに協力していただきたいのですが.....」 警察の人たちもなかなか難儀ですね」 私個人としては、 試験うんぬんは関係なく、 吸血鬼の専門家とも

そう言って、霧江はふ、と笑う。

そんな厄介そうな事件、 試験なんて言わずに、 そうやって素直に

頼んでくれれば喜んで協力するのに。

つ ておけないですし」 強力しますよ松居刑事。 同じ吸血鬼としてもそんなやつ放

そう言って、霧江は自身の右手を松井刑事に差し出した。

いやア、 ありがとうございます」

霧江と松居刑事は再び固い握手を交わす。

ここに、一つの契約が成立した。

あった。 無月秘書も、 来事に繋がるなどということは、霧江も零次も松居刑事も市長も神 この契約が彼らの、いや、鬼灯霧江の運命をおおきく揺さぶる出 この部屋にいる誰もが、 今は全く知る由もないことで

せんか」という誘いに乗ったのである。 昼も近かったので、松井刑事の「せっかくだし飯でも食いに行きま 南にある繁華街にやってきていた。 市役所を出た零次、霧江、松井刑事の三人は、スフィアタワーの

らん組み合わせな気がするなア」 しかし、 女子高生一人に二人のおっさん..... なんだかシャ レにな

教授、 ぼそり、 小声だったが、 まだ二十代でしょう?」 とつぶやく零次。 松井刑事はしっかり聞こえていたようで、 とつっこまれてしまった。 鬼灯

四捨五入したら三十ですよ..... あア俺ももう三十路なんだなぁ

...いい加減落ち着かんと。

松井刑事、奥さんは?」

まり構ってやれないんですわ。 女房と、娘が一人、息子が二人おりますが、 仕事が忙しくっ

いつ見捨てられるかヒヤヒヤしとりますよ」

「メールでもしたら?」

と、中年二人の会話に割り込む霧江。

いつの間にか、 彼女は松居刑事に対して敬語を使わなくなってい

た。

「メール、 ですか?そういうのはどーも苦手で」

でいけばいいじゃない。 「最近のはどれも簡単よ。 会って話せなくてもそれで会話をつない

うわよ」 とにかくどっかで繋がってたら簡単に切れちゃうことはないと思

「成程。そういうもんですか」

「そういうもんよ、あ、それから女の子ってどうしてもお父さんが

嫌いになっちゃう時期があるから、

娘さんがそうなっても、そんなに気にやんじゃだめよ。 時的な

病気みたいなもんだから」

「フム、 最近の女子高生はイロイロ知っとるんですなぁ

子供だから子供の気持ちがわかるだけよ。 ね 兄貴」

゚な、なんだよ.....」

じとーっとした目で、霧江は零次を見つめる。

逸らしながら答えた。 何かやましいところがあるのか、 零次は霧江から思いっきり目を

なかなかしてくれなかったのとか、 いやあ - 別にいー。 私は兄貴がこの二年間ずっとメールの返信を

なんかただの一回もなかったとか。 そっちからメールをよこしたことがほとんどないこととか、 電話

本当にぜんっつぜん気にしてないからね」

っきり飲み下しつつ。 どう考えても気にしまくってるじゃ ねえかというツッコミを思い

で答えた。 零次は顔を逸らしたまま「ソウデスカ」と片言気味に低いトーン

いや、 だって.....忙しかったんだよ。 許してくれよ.....」

零次の言葉に、霧江はふいっ、とそっぽを向いた。

はならないように気をつけてね。 わかりました。 松居刑事。 いったんメールを始めたらこういうことにだけ 肝に銘じときます」 大事よー 家族の絆は」

屋がすぐそこにまで見えてきた。 そうこうしているうちに、 他愛もない(?)会話をしながら繁華街を歩く三人。 松居刑事のいきつけだというラー

ねえねえ、あそこ?」

霧江が『名菜軒』と書かれた看板を指差した。

えるんでしたっけ?」 「ええ。 そういえば今更な質問なんですが、 吸血鬼ってラー

「大丈夫よ、 栄養にはならないけど味はわかるから」

'おい、二人とも」

向けていた。 ふと、 零次が立ち止まり、ラーメン屋とは全く別の方向に視線を

ん?どったの兄貴」

霧江が引き返し、兄の横に並ぶ。

あの店、なんかおかしくねぇか」

零次が指差した先、道路を挟んで向こう側。

そこには中華料理屋があった。しかし、 確かに何か。

店の中の様子が、どうもおかしい。

松居刑事もそちらに視線を向ける。

その直後、パリン、と店のガラスが割れ、 大きな袋を抱えた男が

窓から飛び出し、そして

ドォン!

という爆音。

そして衝撃。

松居はとっさに両腕で自らの顔をかばう。その店が内部から爆破されたのだ。

事件だ.....白昼堂々なんてヤツ」

零次は呟き、逃げた犯人の背中を目で追っていた。 一人とは対照的に、 霧江は全く怯まずにすぐさまその店に向かっ

て走り出す。

た。 客が大勢いたのだろう。 道路をひとっ飛びで越え、 何人もの人々が、その呻き、苦しんでい ドアを強引に開き店の中をうかがう。

服も焼け焦げたりはせず、 店の中、犯人が割った窓以外に壊れた場所はない。 ほとんど綺麗な状態。 被害者たちの

焼けているのは、被害者たちの体だけだ。

対生体爆破!

霧江はここで何が使われたのかを瞬間的に察した。

破壊対象を有機物に限定することによって、破片などによる二次

被害を抑えることができる魔法だ。

逆に言えば、肉体だけを徹底的に破壊する残酷な魔術でもある。

ふと、奥から声が聞こえてきた。

..... あさん!おかあさん!」

さぶっている。 子供だ。小さな少年が一人、 店の奥で、 服を着た真っ黒な塊を揺

出来る。 対生体爆破は魔力による防壁さえ展開出来れば簡単に防ぐことが

5 つまり、 しかし、 せいせい一人ぶんくらいしか守れる範囲は稼げないだろう。 少年の母親は、 咄嗟に起動しなければならないとなると、 とっさにわが子ををかばったのだ。 並の魔術師な

ギリ、と霧江は歯を食いしばる。

自分を、

顧みずに。

(こんな光景、 二度と見たくないと思っていたのに

店の前で立ち尽くす霧江のもとへ、 零次が駆けてくる。

......犯人は?」

振り返らないまま、霧江が問う。

゙ 蟲をつけた。これを使え」

そう言って、 零次は霧江に小さな補聴器のようなものを手渡した。

わかった」

からクロス・ガンを引き出す。 霧江は補聴器を右の耳にはめた後、 それ以上、兄妹に言葉はいらなかった。 右手で腰のベルト、ホルスタ

カバーをスライドした。 とだけ言って、霧江はクロス・ガンにブラッディクロスを差し込み、 その後でようやく来た松居刑事に「この人たちをお願いします」 左手をポケットに突っ込み、その中のブラッディクロスを握った。

Standby

そして、彼女は銃口を真上に向ける。

変.....身ツ.....!」

第七話 戦う理由は軽くていい。

体が軽い」

ありきたりな形容だ。

しかしこれが一番的を得ている表現だろう。

鎧を着た筈なのに、鎧を脱いだような軽さ、 奇妙な感覚にとらわ

れつつ鬼灯霧江はそう思った。

彼女は疾走していた。

道路のど真ん中を、バイクに乗るでもなく、 自分の足で、 車より

も速く、ただ走っていた。

そうして感じる、 自らの肉体で風を切り裂いてゆく爽快感

 \neg は ははっ!」

力を封印して数年、久しぶりに得る感覚。

こうして走っていると、力を取り戻したという実感が、 より湧い

てくる。

それはかつて彼女が持っていた力に比べればまだ弱いものだった

これで十分だと思えた。

そうとも、このくらいの速さが、 自分には合っている。

9 俺は ᆸ

霧江が先程右耳に取り付けた、 補聴器のような小型の装置

から声が聞こえてくる。

どういう理屈が働いているのか、 それは零次が『蟲』と呼ぶ、追跡用のマジックアイテム。 霧江はよく知らないのだが、 تع

うも相手の『 霧江が足を速めるにつれ、 心の声』 を聞いて追跡する代物だという。 声はだんだんと大きくなっていっ た。

整理されている。 計画都市であるスフィアは、 どの国のものであろうと綺麗に区画

るため、世界で最も美しく整理された街であると言われている。 特にこの第五スフィアは、 基礎である土地自体が人工的な島で

m以内を第零区として定め、その周囲を均等に12の区に分割。 真円形のこの島は、その中心にあるスフィアタワーから半径2 k

になるように配置されている。 最も北にある区を第十二区とし、 第一区から第十二区が時計周り

っても、方角さえわかればスフィアタワーの位置関係から自分がど の区にいるのかだいたい把握することができるのである。 ゆえに、たとえば道に迷って自分がどこの区にいるか解らなくな

だけを指標にして方角を知ることができる、 逆に言えば、自分がどの区にいるかを把握しておくことで、 ということでもある。 Ď

男は走っていた。

つ ていた。 タワーを背に、 車に乗って。 兎に角南へ南へと、 必死になって走

もしれない。 ああ、 させ、 あの忌々しい客と店長をこなみじんにふっとばしてやった。 冷静になって考えると客までやっ やった。 ついにやってしまった。 たのはやりすぎだっ

いや、違う違う。これは天誅なのだ。

あいつらはいつも自分のことを神か何かだと勘違いして、 ずっと

俺を奴隷扱いしてきたんだ。

そうだ、悪くない。俺は悪くない。

それに、悪いのは店長だ。

そうだ、あのガンコおやじが一番悪い。

あの頭の固 いオヤジが金さえ貸してくれていたら俺は客までふっ

飛ばさずに済んだんだ。

全部あいつのせいだ。

妖怪だか何だか知れないがいつも威張り腐りやがって!てめぇの

傲慢さを思い知らせてやったんだ!ザマァミロ!

それに、俺は大切な家族を守るために金がどうしても必要だった

だから俺は悪くない。悪くないんだ!

これは悪いことに使うんじゃない。

いいことに使うんだ。

「いいや、悪いね」

女の声。

(なんだ?幻聴か?)

男が思った瞬間、ぐるん、 と彼の視界が回った。

ズガン!と、爆音が響く。

に 男の車はまるで大きな手ににつかまれて投げ飛ばされたかのよう 空中で何度も回転し、 屋根から地面に落ちた。

(クソッ、なんだ!何が起きた!?)

エアバックの圧力を体前面に感じる。 んなクラッ シュで生きていたのは奇跡に近いのだろうか。

らないというのに!) (いや、 そんなことはどうでもいい!金!金を早く届けなければな

幸いにして、ドアは壊れてどこかに吹き飛んでいる。 男は店の売り上げが詰まった袋を抱えた。

その右手を、紅い脚甲が踏み砕いた。這いずりながら車から脱出する男。

出るのには好都合だ。

゙ ぐぁ あぁぁ ああああああああッ!!!?」

たまらず、悲鳴を上げる男。

彼は反射的に首を振り上げる。

その足の主を、 自分に苦痛を与える敵を確かめるため。

しかし、 カラー付きのアイシールドに隠れたその表情はわからない。 妙なヘルメットをかぶって、 その女は全身を真っ赤なスーツに身を包み。 そこには、冗談のような格好をした女が立っていた。 背筋も凍りつくような敵意を感じた。 男を見下ろしていた。

い籠手で掴む。 女は足を男の右手から離すと、 身をかがめ、 男の顔面を、 その紅

はずみで袋は破れ、札があたりに散らばる。そのまま男の体を引き摺り出し、投げ捨てた。

あ、金....かね.....

男はうつ伏せに倒れたまま、 左手と、 指のひしゃげた右手で、 散

た札をかき集める。

呆れた。 そんなにそれが大事.....

嘲りを孕んだ声。 男は動きを止めて、 改めて女を見た。

真っ赤なボディスーツに身を包んだ女。

ヘルメットはフルフェイスタイプの下半分を切り取ったようなデ

ザインで、隠した顔の中で口元だけが見えている。

をデフォルメしたようなデザインの飾りが、角か、あるいはケモノ 目は色つきのシールドで覆われ、 ヘルメットの上部には蝙蝠の羽

耳娘の耳のように生えている。

一目見たたでけで女だとわかったのはその胸部から。

身真赤な中でそことヘルメットのシールドだけが真っ黒だった。 二つのふくらみを覆う胸当ては弓道部のそれとよく似ていて、 全

両腕には左右対称の籠手。

ンで、どこか未来的なものを感じさせる。 東洋的でも西洋的でもないそれは丸みを帯びたシャープなデザイ

しきものが見えず、 脚甲も籠手と同じような材質で作られていて、 一見すると革のロングブーツのようだ。 不思議と継ぎ目ら

何者.....ねぇ なんなんだ..... おまえは!一体ッ 何者なんだ!?」

女は答えに窮した。

そういえば名前はまだ決めていなかっ

れているのだし、 鬼灯霧江、と答えてもよかったが、 何と答えようか。 応本名は伏せるように言わ

あえず、 正義の味方?」

ふざけるな!!」

血で小さな魔法陣が描かれていることに気付いた。 何の抵抗だと、 男はくしゃくしゃに丸めた札を霧江に向けて投げる。 さらに呆れそうになった霧江は、 その表面に男の

轟く爆音。

げて爆発する。 その一万円札の玉が霧江の体に当たった瞬間、 それは炎を吹き上

金をかき集めたのは、 男が金の亡者だからではな

術式を起動するための道具が必要だったからだ。

対生体爆破。

肉体だけを徹底的に破壊する恐るべき魔法

これをあの至近距離で食らえばひとたまりもない。

なるほど。 確かに恐るべき魔法ね。 でも」

爆煙が晴れ、 男は己が目を疑う。

妙な格好の女は、 あの一撃を受けて全くの無傷だったからだ。

それでは私は倒せない」

うおおおおおおお!!」

次々と丸めた札束を投げる男。

炸裂する轟音と炎。

しかし、 霧江はそよ風の中を歩くように一歩ずつゆっくりと男に

歩み寄る。

魔法陣高速描画、 が そんなスキルを持っていながら...

に男の顔面を殴った。 霧江は再び男の前で屈みこむと、 右手を振るい、 払いのけるよう

再び、地面の上をごろごろと転がる男。

言い分があるなら聞くわよ」

霧江は立って男に向き直り、 両手の指をパキパキと鳴らした。

「お、おれは.....俺はッ!」

ボロ雑巾のような体のどこにそんな気力が残っているのか。 男はなおも立ち上がろうとする。

金が必要なんだ!……娘の、 治療費の..... ためにッ!」

間的に描く技術。 魔法陣高速描画、 まだ手に握っていた金に、 魔法陣のイメージを指先の動きに同調させ、 再び自らの血液で魔法陣を描く。 瞬

希少なスキルだった。 呪文を唱えるよりも圧倒的に早く、 かつ正確に魔術を起動できる

それは弾丸のような勢いを持って、 足もとに転がる小さなアスファルトの破片を蹴りとばす。 しかし霧江は、 今度はそれを許さなかった。 男の左手を打ち抜いた。

ガァアアアアアアっ!!!」

霧江はふう、とため息を一つついた。両の手を潰され、苦痛に悶える男。

誰かを守るためなら、 そんなザマでよく自分が悪党じゃないなんて言えたものね」 邪魔なものはなんでも壊してい いっ て

正確には、男はそんなことを口にはしていない。

逃げている間、 頭の中で必死に繰り返していたことだ。

己の行動を正当化するために。

自分自身に納得させるために。

それを何故目の前の女が知っているのか。

零次が放った『蟲』と呼ばれる追跡用のマジックアイテムの賜物

だが、彼はそんなことなど知る由もない。

しかし、男は言葉を返さずにはいられなかった。

様こそ.....!どこが、 正義の味方だ.....

悪をぶっ飛ばすのは正義の仕事でしょうが。

私はお前みたいなムカツクくそ野郎をとにかくぶん殴りたい。 そ

んだけよ。

ヒーローを引き受けた理由も、 私が戦う理由も」

そう言って、霧江はまた男のそばに歩み寄る。

入ってくるのが許せない。 「悪事の理由なんてどうでもいい。 その影で泣いてる人が私の目に

ょうだい」 もし次があるなら、 今度は私の見えないところでうまくやってち

カー 男が何か反論しようと口をあけたところで、 ルのようにぽー んと蹴り飛ばした。 霧江はその頭をサッ

警察と、零次が到着したのは、 それからすぐのことだ。

男は拘束され、回復魔法をかけられ、連行されていった。

れば、死にさえしなければ大抵は回復出来る。 魔法による医療技術が発展しているため、それがただの怪我であ

るのだ。 もはやどうでもいいことだった。それよりもずっと大事なことがあ 男はすぐに事情聴取やらなんやらで絞られるだろうが、霧江には

ンの銃口を自分に向ける。 霧江は零次と松居刑事の姿を見つけると、歩きながらクロス・ガ

解され、その銃口に吸い込まれていった。 引き金を引くと、武装やスーツが赤い光の粒子のようなものに分

粒子は銃口にブラッデイクロスを形成し、 スライドされていたカバーが自動的に元の位置に戻った。 霧江がそれを抜き取る

兄貴、店の人たちは?」

幸いなことに、死者ゼロだそうだ」

ゼロ?あの子のお母さんも?」

それだけが、霧江にとってなによりも気がかりなことだった。 自分の息子をかばった彼女、 あの人はどうなったのか。

か ああ、 な。 松居刑事のおかげだ」 なんとか、 大丈夫だった。 治療が早かったおかげでどうに

、松居刑事の?」

霧江は驚いて、刑事の方を向いた。

ええ、こう見えて医療魔術は得意なんで」

後頭部に手をやり、 松居刑事は照れ臭そうに笑う。

· そっか、よかった」

は 霧江は胸に手をあて、 安堵のため息をつく。

・ 俺もよかったよ」

と、零次が腕を組んで頷く。

「あのドシリアスな状況で、 お前が自分から『変身!』っていいな

がら変身してくれて....。

俺ちょっと.....っていうかすごい、こう.....なんというか感動し

たわ」

「それ、この状況で言うこと?まったく、馬鹿兄貴は.

そう言って、霧江はがっくりと項垂れた。

そんな彼女を見てニヤケ笑いを浮かべながら、零次は彼女に問う。

それで、どうだった?ヒーロー初出動の感想は?」

...... 感想ねぇ、 感想ったって、 相手は人間だったし、 楽勝以外の

何物でもないわよ。

もうちょっと苦戦したかったくらいだわ」

霧江は肩をすくめて先ほどの戦いを思い出す。

手など抜かず、 だが一つだけ、 引き伸ばしてよかったと思えることがあった。 最初の一撃で瞬殺してしまってもよかった。

そうだ、 兄 貴。 個だけお願いがあるんだけど」

「お願い?ご褒美でも欲しいのか?」

と真面目なトーンで答える。 零次は冗談っぽく聞き返すが、 霧江は「ああ、 そんなところよ」

「ちょっと一人、助けたい女の子がいるのよ」

ろにある。 天壌島署は、 スフィアタワー から東に百メートルほど歩いたとこ

っ た。 事情聴取は、 男が冷静になるのを待って、 その次の日からはじま

担当したのは偶然現場に居合わせた刑事、 松居孝太郎

男は、 松居刑事にその胸の内を明かした。 それまでずっと、 店の

オーナーに不当な扱いを受け続けてきたこと。

クレームを言ってくる客が多く、そのクレーム処理すべてを彼が

受け持たされたこと。

そうしてずっとストレスをため込み続けてきたこと。

そして娘が魔術だけではどうにもならないような重病にかかり、

その手術には大金が必要であるということ。

その金をオーナーに給料から前借を頼んだが、 断られてしまった

ے

まで使ってしまったこと。 そのことでカッとなり、 金庫から店の売り上げ強引に奪って魔法

男はすべてを白状し、言った。

けは、 お願いです刑事さん!俺はどんな罰でもうけますから娘は!娘だ どうかッ

男は神に祈るように、 松居刑事に懇願する。 松居刑事は少し困っ

たような顔を浮かべて答える。

「そんな.....」「そいつは、俺の仕事じゃないからねぇ」

男は肩を落とし、がっくり項垂れる。

:...え しかし、実は一人ものすごいお人よしがいてねぇ」

顔を上げ、男は松居刑事の顔を見据える。

あんたの娘さん、 手術は明後日だそうだ。 成功するといいな」

涙が浮かんだ。 松居刑事の言葉に、男の顔はくしゃくしゃに歪み、 その眼尻には

さぁねぇ」だ、誰なんです?その、そのお人よし.....というのは」

男の方へは振り向かず、 そうして、 窓から外を眺めて、 松居刑事は取り調べ室の窓際に立った。 ぽつりと一言。

この街の、正義の味方さん、だそうだよ」

第七話 戦う理由は軽くていい。 (後書き)

ッサンだ。 いかん、メインキャラが今のところ主人公(霧江)以外ほとんどオ

圧倒的な華不足ッ!

てくる予定です!) でも安心してください!女の子は後からいっぱい出てきます!(出

えまくってるってとういうことやねん ややこしくて申し訳ありませんでした.....

っていうか読み返したら誤字脱字の多いこと。登場人物の名前間違

第八話 始まりの鐘は鳴る。

爆破事件の夜、 霧江は夜の街を一人歩いていた。

ヒーローとしての活動は、 報告書という形で警察と市長に届け出

ることになっている。

当然、今日の分も報告書を作る必要があったが、 それはすべて兄

に丸投げしてきたところである。

女の子が夜出歩くのは危ない、というのは万国共通の常識だが、

それはあくまで人間に限ってのこと。

人と妖の暮らすこの街では、その常識も外とは違う。

勿論人間の女の子が出歩けば危ないことに変わりはないが、

でなければ安全なのだ。

妖魔はその多くが日の光を嫌う。

吸血鬼のように、そもそも日の下に出ること自体が直接命にかか

わる種こそ少ないまでも、やはり彼らが活動する時間帯と言えば夜

が主だ。

そのため、この街では昼と夜とで全く違う表情を見ることができ

る

霧江が今歩いているのは寮の近くにある商店街だ。

薄暗い闇に覆われ、それでいて活気に満ち溢れている。

勿論、 歓楽街でもないただの商店街である。

人間だけの世界ならとても考えられない光景だ。

霧江は昼間に行った第零区の繁華街を思い出す。

そことの違いは、 規模と、 明るさと、 すれ違う住民の種族だけだ

つ

が存在するのは、 霧江の女子寮と、 スフィアタワーのある第零区の真東、 彼女が通うことになる高校、 そしてこの商店街 第三区にあ

たる。

実験都市らしく、 この島ではそれぞれの区でその住民の種類に違

いを持たせている。

第五区、 第一区、第四区、 第八区、第十一区は妖魔だけが住む。 第七区、第十区には人間だけが住み、 第二区、

第九区、第十二区には人間と妖魔が混住しているのだ。 そして第零区と、そこに東西南北に接する区、 第三区、 第六区、

るだろう。 今第零区のあの繁華街に行けば、ここ以上に活気に満ち溢れてい

方が難しそうなぐらいたくさんの妖魔が歩いている。 昼間はほとんど人間しか見かけなかったが、 そしてその中心となっているのはここと同じく妖魔だ。 今は人間を見つける

そもそも妖魔が人間と共に暮らしたがるはずなどない、 この街は、成立した当初から失敗すると言われ続けてきた。 共存など

できるはずがない、税金の無駄遣いだ、と。 しかし、そんなものは人間の勝手な思い込みだっ

確かに当初は妖魔の入居などほとんどなかった。

失った哀れな元人間ばかりだった。 あっても、それは転化してしまったことで人間社会での居場所を

っていた。 言い方は適切ではないのかもしれないが)の半数を占めるようにな しかし、成立から五年もすると、妖魔達はこの島の人口 (という

た。 妖魔である霧江から見て、 その理由について、人間の学者たちは様々な考えを述べているが、 それらはどれも的外れなものばかりだっ

理由などたった一つしかない。 彼らはこの街を楽しんでいるのだ。

れ が全く別の種族。 人間は『妖魔』 という言葉で一括りにしているが、 本来はそれぞ

自分と同じ種族でコミュニティを作ることがあっても、 別種と関

わり合うことはほとんどない。

あっても獲物や領地の奪い合いで戦う程度。

事の出来るこの街は、 それ故に、 人間だけではなく他の様々な種族と平和的に交流する 妖魔にとっては刺激的で、 魅力的な街なのだ。

さて、 ڮ こんなもんかな」

入りのアイスキャンデーを咥えながら、上機嫌で帰路についていた。 商店街に出た目的は三つ。 霧江は大きなビニー ル袋を左手から下げ、 露店で買った人工血液

るキーホルダーや新しいストラップを買うため。 学校に必要な物資、例えばペンやノート、それからカバンにつけ

策のため。 そして引っ越し早々ばたばたして、なかなか出来なかった街の散

最後に、 例の吸血鬼事件のパトロールのため。

最後の一つは完全なるおまけである。

なな それどころか事件は、 資料によれば人間だけが住む区でし

か 今のところは、 だが 起っていないので、 ほとんどパトロ

ルの意味をなしていない。

最も、それは彼女が事件に対して不真面目に取り組んでいること

を意味するわけではない。

は最後まで貫き通す意地は持っている。 彼女は色々と不真面目な女であるが、 一度やると引き受けたこと

アイスを食べ終わる頃には、霧江は寮にたどりつい てい

天壌学院の女子寮は7階建て。

一階には玄関ホールの他、 食堂と、 大浴場、 寮監室、 談話室等が

あり、 学生の住居は二階から。

今年は二階と三階が新入生用のフロアである。

同様に四階と五階が二年用、 人間と妖魔が混住する第三学区の性質上、 六階七階が三年用となっている。 この寮にも人間と妖魔

の生徒がおおよそ半数ずつ。

ァ Į 七階が妖魔向けフロアで、二、四、 六階が人間向けフロ

出て夜学部に通っている人間が妖魔用フロアに住んでいたりと、 段明確に分けられているわけでもない。 間に活動する妖魔が人間向けフロアに住んでいたり、昼間は働きに 階層が分けられ ているのはその活動時間の違いによるもので、

昼間に下の階がこーだとかいう苦情はほとんどないらしい。 上下の防音は完璧なようで、たとえば夜中に上の階があー だとか、

っ、と屋上に着地する。 明かりの点いている階と点いていない階を交互に眺めて、 霧江は玄関ゲートをくぐらずに、上を向いてひょい、 と跳躍。 しゅた

中から紅 るが、幸いなことに今は誰もいない。 屋上は常に解放されていて、 い液体の詰まったビニールパックを取り出した。 ベンチやら観葉植物やらが置い 霧江はベンチに座って、 袋の 7 あ

ならない種族用に支給されている血液パックである。 吸血鬼をはじめとする、 人間の血液をどうしても摂取しなければ

ぶ月を見上げた。 それにストローを差し込んで中身を吸いながら、 霧江は空に浮か

上弦の月。

警察はその前に吸血鬼事件を解決したがっているが、 来週の今頃には、 天気が良ければ綺麗な満月が見られるだろう。 霧江にとっ

てはその日こそが正念場のような予感がした。

た方が、 吸血鬼にとってはこんな輸血パックなんかよりも直接人間から吸 よほど効率よく魔力を回復、 補充できる。

しかし、この街でそれは違法行為だ。

法を犯して魔力をため込み、 それを何に使うのか。 大いに興味が

とだ。 彼女が『同じ吸血鬼として放っておけない』 と言ったのはそのこ

なのだが、その前にその行為について直接聞きたいと霧江は思って 害が出られると後味が悪いので見つけ次第ぶっ飛ばす気はマンマン もちろんロクでもないことをしでかすに決まっているのだし、

だろう。 それには警察が捕まえるより早く犯人と接触しなくてはならない

り方でやる他はない。 その為にどうすべきか。 人間の魔術師には真似できないようなや

ふと、霧江の前に一匹の黒い蝶がひらひらと舞い飛んできた。

「...... かかったか」

を掛けた。 霧江はパックに残った血液を一気に飲み干し、 クロス・ガンに手

もちろん、 それは、 犯人を見つけるために霧江がまずやったこと。 町中に『眼』をばら撒くことだった。 彼女自身の目ではないことは言うまでもな

彼女はその中に、 人工島と言えど、 この島には多くの虫が住みついている。 自身の使い魔を何匹も紛れ込ませたのだ。

証拠を一切残さないような犯人だ。

直接出向いては、 相手の警戒を誘ってしまうかもしれ ない。

そこで、彼女は網を張ることにした。 相手が次の事件を起こすの

を待ってそこを押さえる。

その分被害は増えるだろうが、悪いのは犯人だ。

気にする必要など全くない、 というのが彼女の考え方だった。

とらえた。 そうして、 彼女は彼女自身が思っていたよりも早く犯人の動きを

場所は第四区、すぐ隣の区だ。

そうして建物の屋上から屋上へ次々跳躍し、 すぐに変身し、 彼女は他のマンションの屋上へ跳んだ。 現場へと向かう。

現場には、すぐにたどり着いた。

霧江の前方、500メートル先。

彼女は使い魔の目を通して、あるマンションの一室、その窓から

黒い影が忍び込むのを見た。

屋上にいる。こちらにはまだ気づいていないらしい。 頭からフードをすっぽり被ったその影が今、 現場のマンションの

霧江は二つ手前の建物の屋上に身を隠した。

さて、どうするか。

このまま一気に攻めてもいいが、何か様子がおかしい。

相手は屋上の上でじっとしたまま、 案山子のように動かない。

まるで相手の時間だけがぴったりと止まっているかのような奇妙

な雰囲気。

とにかく、生気らしきものが全く感じられなかった。

のが転がってゆくのが見える。 そのまま観察を続けると、 相手の足もとにめがけて何か小さなも

っていたかのように急に身をかがめ、 それが何なのかはここからははっきりしないが、相手はそれを待 そしてその直後、 影は夜の闇の中に急速に飛び立っていった。 その何かを拾い上げた。

「あ.....ッ!」

逃がすものか、霧江は慌てて駆け出す。

一気に跳躍し、 影の背に追いすがる。

その背に、 至近距離まで近づいても、 霧江は自身の左拳を叩き込む。 相手は前を向いたまま飛び続けた。

..... え?」

じ取れなかった。 だが、 相手の背を撃ちぬいたはずのその拳は、 目いっぱい力を込めたその一撃が決まることはなかっ しかし布の感触以外を感

相手には体がないのだ。

そしてその一瞬、影は首だけを動かし、 振り向いた。

霧江はその顔をはっきりと見る。

それは男か女かもわからない、中世的な顔立ち。

だが生気はなく、作り物のような質感。

その眼はまるでガラス細工のようで、こちらを振り向きはしたも

のの、 まるで視線が合っているように感じない。

相手はまるで虚空を見ているようだ。

犯人は人形使い、本は霧江はそう直感した。

本体は別にいる。

その顔面を掴もうとして、 彼女は手を伸ばす。 その刹那。

ツ

閃

背後から、 光の槍が霧江の腹を貫いた。

!!!!

勢いを失い、落下する霧江。

だがその途中で体勢を立て直し、 着地し、首を振り上げるが、 人形はもう影も形もなかった。 その回復能力で傷を瞬時に治す。

いや、もはや人形などどうでもいい。

い魔を総動員するが、 霧江はすぐさま背後を振り向き、 駄目だ。 見つからない。 探る。 この周囲に潜伏させた使

なんてこと.....!」

なかった。 たことももちろんそうだが、自身を撃った術式の起動にすら気付け 霧江は自分に起きたことが信じられなかった。 敵に背後を取られ

のこの状態で。 て力を取り戻し、 変身前の力が落ちている状態ならいざ知らず、 感覚も普段の数倍にまで研ぎ澄まされているはず このスー ツによっ

|私を不意打ちできるやつがいるなんてね.....」

に砕け散った。 ゴン、 殴った部分からひびが入り、 と霧江は真横にあったコンクリ そこを中心に2メー トの塀を殴りつける。 トル四方が粉々

面白くなってきたじゃない」

その口元に、 霧江と、 凶暴な笑みが宿る。 謎の人形遣いとの長い一週間は幕を開けた。

第八話 始まりの鐘は鳴る。 (後書き)

ろ修正してます。 プロローグとか最初の方の酷過ぎる登場人物の名前ミスとかいろい

ひどいよね。ごめんなさい。 しょっぱなから漢字間違えてたり初期設定のをそのまま使ってたり、

第九話 一人では寂しくても。

「なるほど、人形使いですか.....」

そう。 島の吸血鬼で該当するやつがいれば教えて欲しいんだけど

...

るんですが、 「そっかぁ」 残念ながら。 人形を使うようなのは一人も.....」 私は全員に会って得意魔術まではだいたい把握しと

ふう、と霧江は残念そうに息を吐く。

翌日の朝。

第零区、天壌島魔導学院大学付属病院。

その待合室に霧江と松居刑事の姿があった。

る必要がありそうですな」 人形使いから吸血鬼に転化したものがいないかどうか、 洗ってみ

「そうね。 で、さ、 刑事さんにお願いがあるんだけど.....

「何です?」

怪しそうなやつがいたら一番に私に教えて欲しい わかるからさ」 昨日実際に戦ったわけだし、 会えば本当にそいつかどうかだいた のよ。

実際は、 昨夜は直接戦ったわけではないのだし、 会っても本当にそいつかどうかは分からないだろう。 顔はもちろん姿はおろか、

その魔力さえ掴めなかったのだから。

より先に自分が接触する必要があるのだ。 昨日の借りを返すためにも、どうしても警察が捕まえる

ほら、アレよ。『面取り』ってやつ」

「もしかして『面通し』ですか?」

人かどうかを確かめることである。 面通しとは、 面割りとも言い、事件の関係者に容疑者を見せて犯

「そう、それそれ!」

れられちゃ敵いませんや」 まァ、それならこっちからお願いしたいところですよ。 あなたを病院送りにするほどの奴ですからね。下手に接触して暴

言って松居刑事は冗談ぽく笑う。

組んだ。 対して霧江は頬に空気をため、 むっとした表情を浮かべて両腕を

行け行けうっさいから.....」 「別に病院なんて来る必要全然なかったのよ。 でも兄貴が行け行け

査してもらえ、と言ってきた。 もし毒素を体内に残留させるタイプだと厄介だから病院に行って検 昨夜の戦闘のことを兄に知らせると、腹に刺さった槍の魔術が、

えたが、 霧江自身は自分の体に何も異常を感じなかったので大丈夫だと答 いいから行けと同じことを何度も繰り返してきた。

ばかりである。 ついさっきも、 『ちゃんと病院に行ったか?』とメールが入った

うざいので携帯の電源は切っておいた。

どうだか。 良いお兄さんじゃないですか。 こんな時だけよ」 ちゃんと妹のことを心配できて」

霧江はふん、と鼻息を鳴らす。

は自分の大学の研究室に籠り切りだ。 その零次といえば、 どうしても外せない用事があるからと、 今 日

「 男はそういうもんです。 不器用なんですよ」

不器用ねえ.....まぁ、 心配してくれんのはいいんだけどさ」

彼女は思う。

だいたい勝手なのだ兄貴は。

なんてやらせなければいいのに。 こんなちょっとした怪我で心配するくらいなら最初からヒー

にフラれたり、 くれなかったり。 これまでだってそうだった、私のことを優先しすぎて何度も彼女 かと思えばこの島での研究に没頭してロクに連絡も

を取っているのかもしれない、とも思わなくはない。 もしかしたら私が兄に感謝しすぎないようにそうやってバランス

かったかもしれないのだし。 あれは良い兄だ。 彼がいなければ今の私は生きてすらいな

しかし、だとしたら、本当に不器用な男だ。

霧江はもう一度、ふう、とため息をつく。

その時、 思考を切り替えよう、いつまでもこんなこと考えても仕方がない。 看護婦が霧江の名前を呼んだ。

件の奴の取り調べもしなきゃならないんですよ」 おっと、 ああ、 行かなきゃ。 ではそろそろ署の方へ戻りますわ。 それじゃ松居刑事、 また連絡ください 今日は昨日の爆破事

ああ、あいつね」

しかし、よく助ける気になりましたな

そりや、 娘さんの方は悪党じゃないもの。 助けるわよ」

霧江はそれがさも当然のことのように言ってのける。

流石、街のヒーローですな。ではまた」

それで話を切り上げると、二人は立ち上がり、 別々の方へ歩きだ

あーあ、お昼どうしようかな」

時間がかかって結局もう昼すぎである。 結局彼女の体には何の異常もなかったようだが、 検査を終え、 病院の周りをブラブラとうろつく霧江。 検査にやたらと

ま、別に食べなくてもいいんだけどさ」

ない。 吸血鬼にとって、 血を飲む以外の食事行為はほとんど意味をなさ

いし腹が満ちるわけでもない。 せいぜい味を楽しむ程度であり、食べたところで栄養にもならな

かった。 習慣化されており、 しかし人間から転化した霧江にとって、 吸血鬼になってからも一度も欠かしたことはな 人間らしい食事は完全に

う彼女の中に残った人間らしい部分の最後の抵抗なのかもしれない。 少なくともこの街にいる間は必要なことかもしれない。 だとしたら、それはまだ残しておくべきだろうと思う。 無駄だと思いつつもやめられないのは元人間の悲し ひょっとしたら人間のように振る舞うことで人間性を保つ、 人と妖の街に人間性を持った妖魔とは、 なんともぴったりじゃな い性か。 とりし

いか。

そうなると、 何としても昼飯にありつく必要があった。

「兄貴にでもタカるか.....いや、でもなぁ.....」

うな気がする。 そういえば今日は一日中研究室に籠るようなことを言っていたよ

邪魔してやるのも悪くはないが、今日は何となく気が引けた。

゙かと言って一人で食べるのも味気ない.....」

そこで、はっと気づく。

あれ私..... 人か兄貴とか.....二択しかないじゃ

が一人もいなかった。 タバタしていたので当然のことかもしれないが、 島に越してからまだ三日しかたっていない上、 霧江には今、 そのほとんどでバ

(ど、どうしよう.....)

今、霧江は女子寮に戻ってきていた。

そして一階にある食堂.....の自動ドアの前の柱に、こっそり身を

隠し、中の様子をうかがっていた。

が、それでも人は多い。

流石に、昼過ぎだけあっ

てそれほど込んではいない。

(とりあえず中に入って.....注文して、 それで.....)

それでどうするというのか。

霧江は逡巡する。

へ だ、

誰かが話しかけてくるのを、待つ?)

ごくり、と息をのんだ。

というのも、実は彼女は 彼女にしてはひどく受け身な構え方である。

(っていうか友達って、どうやって作るんだっけ!?)

そう。

人もいなかったのである。 実は霧江には、彼女にとって友達と呼べるような存在が、 今まで

彼女がまだ人間だったころなら。しかしもはや彼らは.... いや、少なくとも10年前まではいたはずだった。

うするの.....! この街のヒーローになろうって者が、友達の一人も作れないでどこの私が怖気づくなんて......!だめよ霧江。

自分から!こう、自分からガーっと!) 行け!行くのよ!そして話しかけられるのを待つんじゃなくて、

陰から最初の一歩を踏み出そうとして、 かつてない戦いに身を投じる決意を固めた霧江は、 と両の拳を握り、大きく深呼吸一回。 いざ、 と柱の

入らないの?」

砕かれてしまった。 背後から聞こえてきた、 そのたった一言に、 自らの意思を粉々に

えと」

恐る恐る振

り返る霧江。

そこに立っていたのは、 彼女より少し背の高 い少女。

いつも通りのやる気のないシャツとジーンズの霧江と違い、 学校

の制服である紺のブレザーを見事に着こなしている。

が『私より数段上の美人だぁあッ!』と心の中で思わず白旗を降っ ウエーブかかった髪は濃い茶色で、 顔立ちは大人びていて、

てしまうほどの美人さん。

やらしくない完璧なボディ。 出るところは出て、締まるところは締まっていて、それでいてい

やさしい声と、聖母のような微笑み。

てて心の中で土下座してしまった。 完全敗北。無条件降伏。霧江は女としてのプライドをかなぐり捨

なんですかこれ。

どうしてこんな完璧超人的な人がいきなり話しかけてくるんです

か何の試練ですか神様。

いやいや何言ってんだ私は妖魔、 吸血鬼。 神の敵たる悪魔

そうだ、こいつは悪魔の私に友など作らせまいと神が嫌がらせに

送ってきたその手先に違いない。

きっと正体はミカエルか何かだ!おのれ神め

完敗だよド畜生!ファッ ことについては認めざるを得ないぜ!よくわかってんじゃ だがしかし!この私に対して四大天使の中からミカエルを選んだ キンジー ザスクライストォ ねえ

ねぇ、あなたもしかして.....」

少女は霧江の顔をまじまじと見る。

視線だけで浄化されちゃうだろ! やめろ!そんな綺麗な瞳で私のことを見るんじゃないミカエル!

いやすんません本当にやめてもらえますかって..... らめぇぇ

え浄化されちゃうぅぅぅ!

. しつれェしますゥ!」

の真ん中に置いてあった棺桶にガンガンと何度も頭を打ち付けた。 まま加速して階段を上り、一気に三階の自室へと転がり込み、 と声を上ずらせつつ霧江はその少女の横を急いで通り過ぎ、 その

(うおおおおおおお何やってんだ私ィイ!!)

26回ほど頭を打ったところで気が少し静まる霧江。

その顔はもはや耳まで真っ赤である。

ら棒に振ってしまった。 せっかく友達を作るチャンスだったかもしれないのに、 こちらか

そうじゃないだろ私!) (いや、 いいのよあれは.....そう、 ミカエルなんだから.....っ

て話したことがあっただろうか。 思えば、 まさか自分があそこまで脆いとは思わなかったからだ。 彼女はさっきの出来事が自分で信じられなかった。 霧江は数回深呼吸し、 吸血鬼になってからの1 なんとか落着きを取り戻す。 0年間、 まともに人と向き合っ

や あっ たのは間違いないことだ。

しかし.....

0年前、 両親も家も失った霧江達兄妹は叔父夫婦の家に転がり

来年から学校に通うことを楽しみにしていた彼女を待っていたの そこで彼女は、自身が人間でなくなったことを自覚する。

は『教育を受ける権利』の剥奪という現実。 叔父夫婦の家の近所の子供達からも白い目で見られ、 友達もでき

ず、 フィアから発行されている妖魔向けの通信講座を受け続けた日々。 暮らしている間色々な人と会ったが、その時は常に叔父や叔母、 もちろん、叔父や叔母や兄としか関わってこなかった訳ではない。 家の中に引き籠ったまま兄や叔父夫婦とだけ話し、 この第五ス

そして兄が一緒だった。 ここにきてようやく、 自分が兄達にどれだけ助けられてきたのか

を自覚する。

もう兄貴のことおちょくれない.....!)

ヒーローと悪人という立場であったり。 あるいは、一人の時でもそれは客と店の人という立場であったり、 この街に来た後だって、人と会うのはいつも兄と一緒だった。

に仲良くなっていた間柄だったから。 今朝、松居刑事と二人でも平気だったのは、 彼とは兄を通じて既

さらに思う。

はなかったか。 この学校を受験したのは、 唯一通信での受験が可能だったからで

で誰かに話しかけられるのが怖かったからじゃあ.....? 棺桶で密航してきたのは本当に偶然か?深層心理では飛行機の

でもなく、 友達を作るということは、 鬼灯霧江という一つの存在として、 誰かのおまけではなく、 別のもう一つ存在 客でもヒーロ

と関係を結ぶこと。

それは、 彼女にとっては全く初めてのことだった。

(やばい.....)

霧江は左手で口元を覆う。

(私、学校とかやっていけんの.....?)

その時、 ドアをコンコンとノックする音が部屋に響いた。

は、はい!?」

しまった。ガンガンやりすぎて苦情でも入ったのかもしれない。

寮監か?それとも隣の部屋の誰かか?

とにかく返事をした以上、出ないわけにはいかない。

しかし出ても大丈夫なのか?ちゃんと対応できるのか?いや、 大

丈夫。

苦情なら霧江としてではなくこの部屋の住人として対応できるは

ず。

大丈夫、いける。私を信じろ!

おそるおそる、霧江はドアを開ける。

私はこの部屋の住人私はこの部屋の住人。

さあ何でも来いと、 ドアを開けきった、 その先には 0

こんにちは、鬼灯さん」

さっきの完璧超人的な美少女が立っていた。

「で、で……出たなミカエル!!」

うに構えを取った。 がばっ、 と霧江は咄嗟に両手に握りこぶしを作り、 ボクサーのよ

「え?カエル.....?」

しまった。と霧江はさらに焦る。

(うおおホント何やってんだ私ッ!)

さっきまで食堂の前にいたはずのこの少女が騒音のクレー ムをつ

けに来るはずもない。

つまり追いかけられていたのだ。

なんという不覚。

(どうしよう、どうれば.....)

「あの、 たと同じ新入生の」 鬼灯霧江さんですよね?私、 松居頼子って言います。 あな

ミカエル.....いや、

かべた。 (......マツイ?マツイってどっかで聞いたような。そうかアレだ、 松居頼子と名乗った少女はにこりと笑みを浮

霧江は混乱している。

聖なる呪文的な.....)

「ええと実は父からあなたのことを聞いて.....」

(チチ?おっぱい?たしかに私よりあんたのほうがおっぱいおっき

いけど!)

「あ、私の父、松居孝太郎って言って、 (ケイジ?そうかニコラス的な!かっこいいよね!) 刑事なんですけど.....」

「ってあれ.....?」

霧江は目をぱちくりさせて少女を見る。

刑事。父。松居。

(そういえば娘さんが一人いるって.....)

「えええええええ!松居刑事の娘ェえええええ!?」

再びにっこりとほほ笑みを浮かべて、 いきなりの大声に驚いたのか、少女は一瞬眼をぱちくりさせるが、

「はい

とにこやかに答えた。

第十話 ヒ P には相棒がいる。

わぁ~っ !霧江さんの部屋って個室なんですね!」

なり恥ずかしいのだが、頼子は気にしていないようだ。 まだ荷ほどきもろくに終わっていないので、 松居刑事の娘、 頼子は霧江の部屋の中をきょろきょろと見回す。 霧江にしてみればか

はしゃぐ頼子。

対して霧江は内心落ち着かない。

ぁ 棺桶。 これでいつも寝てるんですね?」

なった。 た。 頼子は部屋の真ん中にある棺桶を見つけると、その前で膝立ちに

あの、 触ってもいいですか」

霧江に視線を向け、 ニコッと笑って首をかしげる。

え?あ、

蓋を開いたりした。 霧江が答えると、 頼子は眼を輝かせて棺桶の感触を確かめたり、

すごい. ほんとうにただの棺桶だわ。 寝苦しかったりしないん

ですか?」

いや別に.....」

本来なら、 棺桶は吸血鬼にとっての最後の領地となる場所、 絶対

不可侵の領域。

えないことだった。 心を許した相手ならともかく、 初対面の人間に触らせるなどあり

(あ、 あの笑顔でお願いされたら断れない.....!)

魅了魔術でもかけられたのかとも思ったが違う。

応すればいいか困っているというのもあるが、 しい笑顔を前に心の袋を結んでおく紐が緩まない者はそうそういな だろう。 これは天性のものだ。 友達がいない霧江が、 その邪気のない愛ら 彼女に対してどう対

ようはそのくらいかわ いい娘なのだ。

る これがあの松居刑事の娘だというのが霧江の混乱を加速させてい

(遺伝子って不思議!)

と霧江は思う。

だったのかも) (いや、もしかしたらあの刑事、 若いころはものすっごいイケメン

私 校に入学してくるコがいるって、 父からあなたのことを聞いていたんです。 メールで」 外からこの島の高

ぐに向き直っていた。 いつの間にか棺桶の蓋はきれいに閉められ、 頼子は霧江に真っ直

うである。 松居刑事、 どうやら昨日の霧江のアドバイスをすぐに実践したよ

メールで確認したら間違いないって言われて。 てもらったんですが、そこにそのコの名前があって、 それで、 もしかしたらと思って、この学園の新入生の名簿を見せ さっきに父に

ったみたいで。 フフ、父ったらあなたと私が同じ高校に通うってこと、 知らなか

それなら仲良くしてやってくれって」

霧江それを聞いて、思う。

そうか、この娘は神ではなく松居刑事が送り込んできたのか。 いや待て、実は松居刑事の正体は神だったのか!

ではなく仏である。 霧江の脳内に仏の格好をした松居刑事の図が浮かんだ。 何故か神

る! あかかってこいサタン!貴様の魂を完全にこの世から消し去ってや 私はあなたのためなら喜んでサタンの敵となろうじゃないか!さ そうか、そうだったのか。 ふふべ いいだろう松居神。

に立つ。 色々とアレな考えを浮かべる霧江をよそに、 頼子は彼女の目の前

かげなんですよね?」 それと、どうしてもお礼がしたかったんです。 あの父がメールなんてしてくれたの初めてだから... あなたのお

子。 言って、 霧江の右手をそのすべすべした感触のする両手で取る頼

なんて.....」 いせ 私はただアドバイスをしただけだし.....そんなお礼

うつむくように視線を逸らす。 輝くような視線を送ってくる彼女に、 霧江は少しだけ頬を染め、

私はそのアドバイスのお礼がしたいんです。 だから.....」

そう言って、 霧江の手を握ったまま自分の胸元へ引き寄せる。

'私を、あなたの相棒にしてください!」

「......はぁ?」

瞬間、 あらゆる感情が渦巻いていた霧江の思考は完全に停止した。

え、あの.....相棒って?」

眼を点にし、霧江は問い返す。

あなたのことは、父から全部聞いています」

全部ということは、勿論.....。

「バットにはロビン、 シャッハにはオウル、 天の道を往く人には戦

いの神!

必要ですよね!」 ヒーローには、 やっぱりパー ・トナが、 その孤独を和らげる相棒が

え、待ってヒーローって.....」

は ! はい !あなたですよね?昨日の中華料理店爆破事件を解決したの

解決というよりは、 犯人をボコボコにしただけなのだが。

これからこの街のヒーローとして活躍するんですよね!」 あのオッサン.....!)

えてあるはずなのだが、 る必要がありそうだ。 刑事にはヒー ローの正体については伏せるという方針を伝 どうやら今度会った時はしっかり問い詰め

という立場に!」 ずっと憧れていたんです!ヒーローを助け、 緒に戦う相棒

(こ、こいつまさか兄貴たちと同じ人種ッ

だ。 しかし余計な一物を与えることで帳消しにすることはある。 天は二物を与えず、 なんてものは嘘っぱちだ。 よう

それってお礼って言うかあなたの願望よね.....?」

__

霧江が絞り出した反論に、 彼女は「えへっ」と舌を出して笑った。

(こ、こいつ.....最初からそれが目的で.....

でもでも、きっとお役に立ちますよ!損はさせません!

戦闘はそれほどですけど補助や回復魔術は得意なんです!あと、

父が刑事だから警察の情報なんかも入ってきますよ!」

いや回復は自力で出来るし、 警察の情報は刑事に直接聞くしり

ていうか危ないわよ!犯罪者に狙われたりするかもしれないし

んです!それに.....」 「勿論覚悟の上です!もともと刑事の娘ですし、 私自身警察志望な

頼子は未だ霧江の手を握ったまま。

వ్య 膝立ちになり、 上目遣いで彼女の手をさらに引き、 視線を合わせ

たいんです!」 「それに……私、 霧江さんみたいなカッコイイ女の子と友達になり

彼女の言葉は霧江の全身に電流を走らせた。懇願するような眼で霧江を見つめる頼子。

(友達 ッ!)

吸血鬼に転化して10年、 それは彼女が今欲しがっているもの。 その単語が、全身を駆け巡った。 一度も出来なかったもの。

カカカカ、 かっこよくなんかないわよ私は!ちんちくりんだし

今まで以上に狼狽する霧江。

酬を前借りして助けたんですよね? そんなことないですよ!霧江さんはすっごくカッコいいです! 父から聞きました、 あの爆破事件の犯人の娘さんを、 市長から報

わたし、 そういうこと出来る人こそ本物のヒーローだと思うんで

す!

だからお願いします!私と友達になってください!」

霧江にはもはや、抵抗する余地が残されていなかった。 この様子を誰かが見れば間違いなくこう言うだろう。

『まるで悪い女に騙される男のようだ』

کے

ン一つ。 り、左側には厨房。 二人はカウンター席に隣同士で座っていた。 昼過ぎだが、お茶を飲みつつ雑談にふけっている女生徒は多い。 食堂内には最大5人がけの丸いテーブルがたくさん並べられてお 再び食堂。霧江と頼子の二人は遅めの昼食をとっていた。 トレー に乗っているのはどちらもクリームシチュー とクロワッサ 右側の壁際にはカウンター席が並べられている。

だドギマギしていた。 友達と一緒に食事をするなんていうのも初めてで、 この10年間で初めての友達。 霧江の心はま

これは霧江が頼子と同じものを注文したことによる。

おいしいですね、霧江さん」

「そ、そうね」

霧江の心を知ってか知らずか、 にこりと笑いかけてくる頼子。

くっ……かわいい!こんなかわいい子が私の友達なんて!)

まるで初めて彼女が出来た中学生のようである。

のこと教えてください」 ねえ霧江さん。 私霧江さんのこともっと知りたいです。 霧江さん

「え?私のことって言われても.....」

こう言う時は何を話せばいいんだろう。霧江は言葉に詰まる。

けど、 思ったっていうか、成り行きっていうか.....特に理由はないんだ なんでもいいんですよ?たとえば.....そうですね、 霧江さんはどうしてヒーローになろうと思ったんですか?」

ない』と考えているタイプのヒーローなんですね」 「成程、霧江さんは『誰かを助けたい』ではなく『悪いやつが許せ まぁでも悪いやつは嫌いだったし、別にいいかなって

頼子は感心したように頷く。

そんな飾る必要なんてないんですよ。それにそっちのほうがカッ あー、誰かを助けたいから、って答えた方が良かったかしら」 いえいえ。私は生身の霧江さんのことが知りたいんです。

コいいと思います。ダークヒーローっぽくて」

「ダ、ダークなんだ私....」

いいじゃないですか。 私もどちらかと言えばそっちの方が好きで

「...... いいのかな?」

んですよ。 それで、 ヒーローになったのは市長さんからのご

「そういうことになってるけど」依頼があったんですよね」

霧江はカチャ、と音を立ててスプーンを置く。

「たぶん、提案したのは兄貴ね」

「お兄さん、ですか?」

゙そう、諸々の事情があってね.....」

霧江のいう事情。

それを見逃す代わりに、兄とその生徒たちが開発した技術とともに まったのだ。 霧江は街の秩序を守るための新たなシステムとして組み込まれてし ったのかは定かではないが(おそらく前者だろうと霧江は思うが)、 兄が自らバラしたのか、誰かがかぎつけてきたのが市長の耳に入 主に、彼女の妖魔ランク偽装の発覚によるものだ。

お兄さんと二人でこの島に来たんですよね?他のご家族は?」

は聞いているのだろうか。 『ご両親は』と聞かないあたり、 松居刑事から親のことについて

てもらった。 叔父と叔母が、 兄は忙しかったから、 関西の第3スフィアにいるわ。 魔法も、実技はほとんど叔父と叔母に教え

二人には子供がいなかったから、 実の子みたいに可愛がってくれ

思えば、 今夜電話でもしてみよう、 兄だけではなく彼らにもよく助けられた。 と霧江は二人の顔を思い浮かべながら

るごとに比べたがるので困ってしまいます」 ら、やれうちの子はどうだのと、私の弟たちと自分の子供をことあ 「そうですか。 いい叔父様と叔母様なのですね。 私の叔母様ときた

そう言った頼子は、少しむっとしたような表情を浮かべている。

誰だって自分のトコの子はかわいいものよ」

こともないと思うんですよ.....」 「それはわかります。
でも、 だからってああも必死に比較したがる

頼子はふう、と一息つく。

..... すいません。 あの叔母のことになるとつい熱くなってしまっ

それくらい弟さんが大事なのよ、 あなたも」

霧江さんの話です。 「それは、だって家族ですもの。 こほん、 私のことより、 今は

か?日光は平気みたいですけど.....」 吸血鬼なんですよね?やっぱり十字架やニンニクは苦手なんです

デイ・ウォーカーだからね。十字架も別に平気。

ただ、ニンニクは前間違えて食ったら死ぬほど吐きそうになった」

そうなんですか。じゃあニンニク入りの料理は厳禁ですね」

てもらってる」 そうね。 だから外食する時はなるべくニンニク入れないようにし

なるほど.....他に大変なこととかって何かありますか?」

そうねぇ.....特に不便はないかなぁ。 ああ、 そうそう。

るのか、 のスフィアだと鏡に映らなかったんだけど、 普通に映ってびっくりしたわ」 ここのは何かして

とか。 「ええと、 確かこの島の鏡は特殊な魔術でコーティングされている

いるようですよ」 鏡に映ることが弱点になっている妖魔でも平気なまでにはなって

へぇ、と霧江は感心したように頷く。

までも不便はなかったんだけど、新鮮でよかったわ」 「そうなんだ。 自分の姿は使い魔の目を通して見えたりするから今

「やっぱり女の子たるもの、 ああ、うん。そうね.....」 朝は鏡の前で準備したいですものね」

と、霧江は頼子から少し眼を逸らす。

と理解できなかったりする。 実は今まで自分の容姿に気を使ったことなどなかったので、 ちょ

色々あるわよ。人間より強かったり速かったり。

では逆に吸血鬼で便利だと思ったことは?」

一番便利って思ったのは夜真っ暗でも電気なしで本読めることか

な

「ああ、 いいですねそれ。 夜目がきくってすごく便利そうです」

「でしょう?」

笑みを浮かべる霧江。

流石に会話を続けているうち心の緊張も解けてきたようである。

の話もしてよ」 ねえ、 なんだか私の話ばっかり聞かせて申し訳ないわ。

あっ、だめですよ霧江さん」

そう言って頼子は霧江の頬を人差し指でぷに、 と突っつく。

「私のことは『頼子』ってよんでください」

その言葉に目を丸くする霧江。

「勿論ですよー、友達じゃないですか」「.....え?呼び捨てで、いいの?」

頼子はにっこりと笑ったまま答える。

ほらほら、呼んでみてくださいよ」

笑顔のまま霧江に促す頼子。

霧江はたじろぎ、思わず左右を確認してしまう。

当然左右に誰かがいるはずもなく、 観念して頼子に向き直り、 こ

ほん、と咳をひとつついて、

「.....よ」

「『よ?』」

「.....より、こ

Ļ 顔を真っ赤にし、 視線をそらしながら、 彼女の名前を口にし

た。

「ふふ、ふふふふふる」

とても嬉しそうに、 笑いながら霧江の頬を突っつきまくる頼子。

霧江さんかわいー」

んづけなの!?」 かわ......可愛くないわよ私は!っていうか頼子は私のことさ

真っ赤なまま抗議する霧江。

てにしないとだめなんです」 「それはそれ、これはこれ。 とにかく霧江さんは私のことを呼び捨

「さ~何ででしょう?」「な、なんで!?」

ふふふ、と、 今度はいたずらっぽい笑みを浮かべる頼子。

「.....だって、霧江さんは私の 」

そこまで行ったところで、頼子は口元をパッと覆った。

なんでもないです!」

誤魔化すように両手をぱたぱたと振る頼子。

ねえ、それよりも

にされることも出来ないまま終わるのであった。 か問いただすどころか彼女自身の話を聞くことも、 その後も霧江は散々質問責めにあい、頼子が何を言おうとしたの 彼女に呼び捨て

た。 の日、 私は友達と一緒に、 私のお家でかくれんぼをしていまし

その中で、 お母さんの部屋のクローゼットに隠れていた私は、 ついつい眠ってしまいました。 いつの間にか

私はたくさん汗をかいていました。 私が眼をさますと、 クロー ゼッ トの中はすごく熱くなっていて、

てきます。 おまけに、 外からびちゃり、 ぐちゃりとなんだか嫌な音が聞こえ

ちに火がいっぱいついていて、それから友達と、 いました。 恐る恐るクローゼットの扉を開けると、 お母さんの部屋のあちこ 知らない女の人が

覆いかぶさっていました。 ともだちは床にうつ伏せに倒れていて、 知らない女の人はそれに

ちゃ舐めていました。 の場所からは血がだらだらと流れていて、 ともだちの左手はちぎれて転がっていました。 女の人はそれをぴちゃぴ それがあったはず

顔をあげました。 私がびっくりしていると、 女の人は友達の血を舐めるのをやめて、

それから私を見て、 口の周りが真っ赤になっているその顔で、 に

!!!.

霧江は、がばっと身を起こした。

部屋の時計を確認する。時間は午前二時半。

「......ゆめ、か」

ふう、とため息をつく。

ああ、ふた閉め忘れちゃったから.....

棺桶の蓋は開けっぱなしだった。

吸血鬼にとって、 故郷の土で育った木で作られたこの棺桶はとて

も重要なものだ。

最後の領地。絶対不可侵の領域。

それは故郷の香りに包まれて、安らかな眠りにつくためのもの。

右手で顔を拭うと、血の混じった涙で真っ赤に染まった。

洗面所に行き、水で顔と手を洗う。

鏡で、 顔に汚れが残っていないかどうかを確認する。

こうしてみると、鏡も悪くない。

が細かい部分まで見ることができるので効率がいいのだが、 その明確な理由なんて浮かばなかったし、 実際は使い魔で見た方 とにか

くそう感じた。

何年振りだろう。あの時の夢なんて見たのは。

10年前の、悪夢のような現実。

らしているわけではなかった。 当時は.....いや、 今でもだが.....全ての魔法使いがスフィアで暮

だ。 ひっそり暮らしていた魔法使いのコミュニティというのもあったの 人里離れた山奥で、自らの力で魔物を撃退しながら自然とともに

霧江たち兄妹が住んでいた、 星影村もその一つ。

しかしその村は、もう地図にはない。

10年前、吸血鬼の群れがその村を襲った。

どが死に絶え、 なかった。 襲撃と、その鎮圧作戦によって、200人ほどいた村人はほとん その村で生き残ったのは兄妹を含めて5人にも満た

移住をさらに加速させた。 『星影村事件』と呼ばれたこの事件は、 魔法使いのスフィアへ ഗ

とんどない。 今では結界に守られていない魔法使いのコミュニティは、 もうほ

よりこ.....

ふと、口にするのは今日出来たばかりの友達の名前

友達が出来たせいだろうか。

んな夢が、 よりによってあんな場面が再生されてしまったのは。

.....でも、きっとそれだけじゃない」

頼子。

感が生まれた。 実は最初にその名前を口に出したとき、 心にほんの少しだけ違和

その正体が何なのか考えてみたが、 まるで靴の中に小石が入り込んだかのような、 答えは出ない。 小さな違和感

「.....気にしすぎ、よね。きっと」

なかった。 彼女はそれを忘れようとして、それでも、 違和感は消えてはくれ

しかし、その時。

その違和感を心の片隅に追いやってしまう出来事が彼女に訪れる。

黒いローブ、表情のない顔、ガラスの瞳。

「まさか、昨日の今日で!?」

現れた。 それは、 彼女が街に放っていた使い魔のうち一匹の、 その眼前に

7

うせる。 直後、 目に小さな痛みが走るとともに、 その使い魔の視界が消え

(潰されたか)

入れておいたブラッディクロスを手に、 テーブルの上に置いておいたクロス・ガンと、 こちらの手の内はもうバレているようだ。 霧江は部屋の窓を開ける。 急ぐ必要がある。 棺桶の中に一緒に

、standby 変身!」

いた!

第四区。

昨日と全く同じ場所にそいつはいた。

昨日と同じフードをかぶったまま、 人形はマンションの屋上に立

っている。

あからさまね.....」

昨日と同じように、何かを待っているのか静かにじっとしている 霧江もまた、昨日と同じ場所から様子をうかがっていた。

人形。

罠だ、

と霧江は直感した。

しかし周囲には今のところ、その人形を操っていそうな人形師の

気配はない。

このままじっとしていても逃げられるだけだろう。 ならば.....。

「行くしかない!」

人形めがけて跳躍する霧江。

しかし、彼女は人形など見ていなかった。

自身の感覚器官すべてを動員し、 周囲の警戒に全力を注ぐ。

昨日は不意を打たれたが、 今日はそうはいかない。

なんとしても反撃の糸口をつかむ。

そのためには、 あの光の槍を、 させ、 あれでなくともいい。

に見極める必要がある。 とにかく人形師本体からの攻撃がどこから飛んでくるのかを確実

しかし、 彼女のその思惑を、 一筋の閃光がかき消した。

(ッ、正面!?)

が放たれる。 直立していた人形、 そのフー ドの隙間から、 昨日とおなじ光の槍

ぶす。 霧江は即座に反応し、 光の槍を寸前で受け止め、 そのまま握りつ

だが、

!!しまっ」

 \neg

槍は一本だけではなかった。

っ た。 上や壁面から、 正面から放たれたものから0 計八本の槍が同時に放たれ、 ・5秒ほど遅れて、 彼女の全身に突き刺さ 周囲の建物の屋

(.....っ.....くそ、設置型か)

ているのが見える。 正面、 人形のロー ブの隙間から、 記号の集まりようなものが光っ

魔法陣だ。 光の槍は誰かが放ったものではない。

あらかじめ術式を起動させた魔法陣を配置しておく設置型のトラ

ップ魔術。

あれば即座に攻撃が放たれる。 誰かが近づく、 仕掛けた術者が合図する等、 何らかのトリガーが

これでは相手の気配も読めない 発動の瞬間を感知することも

霧江は左胸に突き刺さった光の槍を血まみれの手で掴む。

左胸。

彼女の心臓をその一本が胸当てごと貫通していた。

光の槍がかき消え、 霧江はその場に崩れ落ちる。

変身が解除され、 スーツは十字架に形を変えてクロス・ガンの銃

口に収まる。

訪れる静寂。

正面の人形はまだ立ったままだ。

動きがあったのは、それから三分後。

黒いフード付きのローブに身を包んだ一つの影が、 その屋上にふ

わりと降り立った。

その影は一歩一歩、 ゆっくりと歩いて、 倒れている霧江に近づく。

そして、体を曲げ、霧江の顔を覗き込む。

てして、その体に触れようとしたその瞬間。

「.....チェック」

その胸に、 クロス・ガンの銃口がつき立てられた。

一瞬のためらいもなく引き金を引く霧江。

赤い膜が、影の動きを封じる。

霧江は立ち上がるその勢いのまま、 膜の中心めがけて右の拳を突

き立てた。

赤い膜はそこから霧江の全身を覆い、 再びスーツと装甲を形成す

るූ

殴られたその影は、 とっさに構えたのか腕を体の前で交差

し、防御の体制を取っていた。

それでも元の位置からは十数メートル後退してい

甘かったわね、私は不死身なのよ」

ていなかった。 確かに心臓を打ち抜かれたはずのその体には、 そう言って、 右手を軽く振ってみせる霧江。 傷など一つも残っ

しかし何事にも、例外は存在するものである。 いかに不死者であろうと、頭や心臓を破壊され れば死ぬ。

それを見て、影は踵を返し、跳躍する。

ハッ、逃がさないわよ!!」

霧江は駆け出し、その背を追った。

夜の闇の空を跳ぶ黒と赤の影。

あの人形のように飛行は出来な いのか、 影は霧江と同じように屋

上から屋上への跳躍を繰り返す。

(っし、私の方が速い!)

しかし、 その背中まで、あともう少し。霧江は手を伸ばす。 もう相手との距離はほとんどゼロに近づいてきた。 彼女はその背を掴むことが出来ない。

なつ.....!」

霧江の手がそのローブを掴む寸前、 影は跳躍した。

次のビルではなく、下へ。

落下する影。 影がふわりと着地し、その衝撃を一切感じさせないまま駆け出す。 霧江も飛ぶが、距離が少し離れてしまった。

瞬遅れて霧江も着地。

「くっそ、待て!」

逃げる影と、追う霧江。

影は路地を出て、大通りへ。

流石に車も人の気配もそこにはない。

大通りに面している店も、今はシャッ しかし、前方に夜の闇の中で異彩を放つ光が見えた。 ター が降りている。

(あれは.....コンビニ?)

霧江がそれの認識した瞬間のこと。

ようにその周囲に展開する。 影は速度を落とさないまま、 あの光の槍を10本、 ファンネルの

(ッ!?まさか)

ジなど気にせず加速しておけば、 来たはずなのだ。 反射的にその全てをたたき落とすが、しかしそれが悪かった。 そのうち5本が、背後の霧江めがけて飛んでくる。 しまった、と彼女自身も思う。 ここで攻撃を食らっても、ダメー 次の攻撃にもなんらかの対処が出

やめろ!!」

叫んでも、もう遅い。

残りの五本の槍は、 既に、 前方のコンビニに向けて打ち出されて

い た。

響くのはガラスの割れる音と、誰かの悲鳴。

影はそのまま上空へ。

の闇に向かって大きく跳躍した。

「く、そ.....畜生!」

霧江にはその後を追うことも出来た。

元々悪が許せなくて戦っている彼女である。

人助けより悪党退治が彼女にとっては優先されるべきことだった。

現に、昨日は一人被害にあうのを見過ごして罠を張った。

ここでも目の前の出来事を放っておいて、追跡を優先したって彼

女の主義には反しない筈だった。

頼子だって、彼女のことをダークヒーローと評した。

そのスタイルを貫くならそうしたって許されるはずだ。

だが、彼女が悪を許せないのは、悪によって罪もない人が犠牲と

なるのが許せないからだ。

昨日は、犯人が今まで一人も殺害していないから、今回もないだ

ろう、という打算があった。

それに犯人とどうしても接触したいと考えていたこともある。

から犯人を警戒させて犯行を行わせないという手段は取らなかった。

だが今は違う。

放っておけば誰かが死ぬかもしれない。そういう状況だった。

一瞬のためらいの後、霧江は変身を解く。

令 実際に目の前で起こっていることを見過ごすことは出来なか

った。彼女には。

自分は本物のダークヒーローにはなれないな、 そう思いながら、

コンビニの中へ入る。

入口付近のガラスは粉々に砕け、 店内の棚も衝撃で倒れ、 商品が

散乱している。

幸いなことに、客は一人もいなかったようだ。

しかし、たった一人だけ。

仰向けになって倒れていた。 レジのカウンターの前に、 このコンビニの制服を着た少年が一人、

「おいっ」

まらせる。 霧江は彼に駆け寄り、 声をかけようとするが、 その姿に言葉を詰

彼の右胸。 肺の部分に、 大きな穴があいていた。

(だめだ。これでは助からない!)

霧江は自分を回復することができても、 他人を回復させる魔術は

習得していなかった。

歯噛みする。 この傷では、 人を呼ぶ時間もないだろう。 もう駄目だ、 と霧江は

その時、血まみれの手が霧江の手を掴んだ。

「.....!」

耳障りな呼吸音。 こひゅー、 こひゅ という、 空気の漏れる音がハッキリ聞こえる

訴えかけてきた。 霧江は少年の顔を見る。 血まみれの顔。 その眼は、 霧江に必死に

ける。 たすけて、 たすけてくれと、 彼の眼が、 懇願するような視線を向

「ツ」

かんだ。 その時、 霧江の脳裏に、 この少年を助けるたった一つの方法が浮

ない行為だった。 この場で出来る唯一の手段にして、それは決して許されることの

ಠ್ಠ だが、 しかしそれだけは絶対にやってはだめだと、 このまま見殺しにするのかと、 霧江の中の別の霧江が叫ぶ。 別の霧江が声を荒げ

葛藤のうちにも、時間は過ぎる。

少年の手から力が抜け、落ちる。

呼吸音も小さくなってゆき、もはや一刻の猶予もない。

クソっ、もうどうにでもなれ、よ!」

言って、霧江は少年の喉元に噛みついた。

瞬間、

夢の中に出てきたあの女の気味の悪い笑みが浮かぶ。

そのイメージを気力で振り払い、霧江は少年を飲みつくした。

夢を見た。

とてもいやな夢だった。

夢の中で、僕は殺された。

わけも分からず、突然、何の前触れもなく。

僕の胸に大きな穴があいて、そこからどんどん血があふれてゆく。

痛かった。苦しかった。怖かった。

そんな僕を、誰かが抱きしめてくれた。

その人は「もう大丈夫」と僕に言ってくれた。

その人は温かくて、とてもやさしい声だった。

た。 痛いのはなくなった。苦しいのもなくなった。 怖いのもなくなっ

そして

朝 目を覚ますと視線の先には知らない天井があった。

あ....れ?」

少年は眼をこすってみる。

その天井は、 いつものワンルームアパートの汚い天井ではなかっ

た。

清潔な白と、明るい電灯。

その明るさには温かい生活感があり、 ここが病院のような施設で

天井から視線を落とす。 部屋には段ボールがたくさん置いてあっ

た。

そして自分が寝ているのはベッドでも布団でもないことに気づく。

それは座布団だった。

背中の違和感からすぐに把握する。

る 床に座布団が三つほど並べられていて、その上に寝かせられてい

お腹の上に掛けられているのは、毛布ではなくただのタオルだ。

「.....起きた?」

少年は寝転がったまま、 声がした方に視線を向けた。

天井を見て、そこからさらに首を上へ。

枕元。

頭の先に椅子が置いてあって、そこにジーンズとシャ ツを着た、

長い黒髪の女の子が座って、 少年を見下ろしていた。

それが、 鬼灯霧江と志木恭也との、 最初の出会いだった。

名前は?」

「志木恭也です」

年齢は?」

.....えーと、15歳.....です」

したんです」 ん?そんな年齢でコンビニの深夜バイトに入ってたのか」 一人暮らしで仕送りもないので家計が厳しくて.....店長にお願い

午前八時。

太極館学園女子寮、301号室。

本来は男子禁制のはずのこの女子寮。

しかし今は三人もの男がこの部屋に集まっていた。

当然人数分のイスはなく、この部屋にはベッドもないので三人は

床に座布団を敷いて座っている。

なるほどね。 まぁ、 それはいいとして.....出身地は?」

「一応、この島です」

尺 先ほどから質問をしているのは、 鬼灯零時。 この部屋の主である鬼灯霧江の

「 ふ む… とかなるかな..... じゃ、 0 棺桶は街路樹かなんか切り倒してつくらせりゃ何

松居刑事、こう言う理由でそういう許可って取れるモンですかね

事情が事情ですし、取れんこともないと思いますが」

天壌署の刑事、松居孝太郎。今の零次の質問に答えたのは、もう一人の男。

君。 寝床として、 ご両親は?」 と棺桶、 だよ。 ですか?何のために? 吸血鬼は棺桶で寝るものだからな。 それで、

「いえ.....僕は孤児で、天涯孤独です」

員であった。 よって致命傷を負い、霧江によって血を吸われたあのコンビニの店 そして、 志木恭也と名乗ったこの少年こそ、 先ほどから零次の質問に答え続けている少年。 つい数時間前、 謎の人形師に

彼が眼を覚ましたのは今から三十分前。

に説明し、そのあと彼が眼を覚ましたことを携帯で兄に連絡した。 零次達がやってきたのはつい十分前だ。 霧江は彼に、 彼が殺されかけたことと吸血鬼になったことを簡単

あの、僕は一体どうなるんでしょうか.....?」

少年は不安げな顔で零次に問う。

ようにはなってる。 君は純然たる被害者だ。 君自身の生活はとりあえずは保障される

もちろん、 今まで通りとはいかないが、 ね。 それより.....

腕を組んでいる霧江の方を向き、 零次は宥めるように恭也にそう言うと、 深刻そうな表情を浮かべた。 その後ろでイスに座って

だって、 問題はお前だ、 仕方ないでしょう?見殺しにすりゃよかったっての?」 このバカ。 よりによってなんてことしやがるんだ」

は答える。 零次とは視線を合わせず、 むすっとした表情を浮かべたまま霧江

とえこの街でだって犯罪なんだよ。 だからってお前なぁ。 吸血鬼がみだりに人間を転化させんのはた

するたびに吸血鬼増やすつもりか?」 つか回復魔術くらいなんで習得しておかなかったんだよ。 人助け

けるわよ!」 覚えてなかったものは仕方ないでしょう!?これからは、 気をつ

「.....ったく」

零次は大きくため息をつき、目頭を押さえた。

が、それにも条件はある」 「まぁ、 繁殖行為として、 ってことなら認められてないことはない

吸血鬼には、一般的な生殖機能はない。

再びその肉体に還すことによって対象を同族に転化させる。 彼らは人間に対して吸血を行い、吸った血に自身の血を少量混ぜ、

あっという間にその数を増やし、最終的にはすべての人間を吸血鬼 にしてしまえる可能性すら秘めている。 この転化繁殖は非常に強力な繁殖方法で、彼らがその気になれ

だ。 は このため、この第五スフィア市でもこの転化繁殖をおこなう種に 条例によって繁殖行為に関して大きな制限が設けられているの

原則禁止。 まずは『子』 から見て二世代前の吸血鬼がまだ生きている場合は

合意であることを証明し、 ... まぁ、 これはクリアできてるからいいとして、 次に相手との

そそそ、それじゃもう遅いんじゃ 転化させる前に役所にあらかじめ届け出をしておく必要がある。

口調もかなり慌てている様子だった。恭也は顔を真っ青にしている。

落ち着け市長が知り合いだからな、 何とかしてもらう」

をすくめて苦笑する。 堂々と不正を行うというセリフを言い放つ零時に、 松居刑事は肩

話を続けさせた。 しかし何も聞かなかったかのように、 一言も口出しすることなく

務を負う」 れが自己管理できるレベルに達するまで指導と保護、 それから『親元』 は『子』 が吸血鬼としての能力を覚醒させ、 観察を行う義 そ

`わかってるわよ。そのくらいやるって」

霧江が憮然として答える。

退去の危機に瀕しているというこの状況に、 いものがあったからだ。 彼女の態度は、 あくまでも善意のはずの行動が条例違反で、 なんとなく納得できな 島外

な いのだが.....。 勿論彼女はこうなることは予想していたし、 後悔もないわけでは

お前ね。 他の吸血鬼も『人助けだから』とか言いだしてどんどん人間を転 人助けで吸血鬼化を認める前例を作って、

だーからわかってるっての。 いいから、 続けて」

化させてったらどうなると思う」

視線を合わせないまま兄に続きを促す。 霧江は心を見抜かれたかのような零次の言葉にさらにムッとし、

零次はもう一度ため息をついて話を続けた。

それから、 この島にいる限り、 子 を作れるのは一人までだ」

.....<u>!</u>

正確には、志木恭也という少年の背中へ、 その言葉に、 霧江はようやく零次達の方へ視線を向けた。 その視線を突き刺した。

どこにでも転がっていそうな普通の少年だ。

身長も普通、体系も普通で顔も普通。

なってしまったわけだ。 こんな少年が自分にとって初めての相手で、そして唯一の相手に

えられない。 心境としては複雑もいい所であったが、 しかし、 もう背に腹はか

彼はもう自分の血族にして眷族。

ならばせめて、 立派な吸血鬼として育ててやるしかあるまい。

いないなら丁度いいでしょう。そう言うわけだから..... あんた、 恭也っていったっけ?両親

私が今日からあんたのママってことで」

· え、マ、ママって!?」

恭也は慌てて霧江の方へ振り向く。

君、僕と同い年だろう!?」

呼びなさい」 親元を『君』 よばわにするんじゃないわよ。 私のことは霧江様と

「わかりました霧江様.....ってあれ!?」

驚愕の表情を浮かべて口元を手で押さえる恭也。

に反応してそう呼んでしまったのだ。 目の前の少女をそんな風に呼ぶつもりはなかったのに、 体が勝手

その様子を見て、霧江はニヤリと笑う。

自分が『どう』 今のあんたは私の『子』であり『従僕』なの。 なったのか、 少しは理解できた? 私の言うことには

一切逆らえないからそのつもりで」

おいこら霧江。 いきなり自分の子を脅す奴があるか」

゙.....ったく。いちいちうっさいのよ兄貴は」

再び兄から視線を逸らす霧江。

うなるかくらいわかるだろうが」 うっさいじゃねぇよ。 親としての責任能力なしと判断されりゃど

「わーかってるわよ!要はこいつを立派な吸血鬼に育てりゃ ا ل

大丈夫だから任せてくれりゃいいの!」

「大丈夫に見えないから心配してるんだよ」

い覚悟してましたっての!」 「信用ないわね!何よ。こいつ助けるって決めたときからそんくら

それを見かねて、松居刑事は二人の間に割り込む。 恭也の困惑をよそに口論になる零次、 霧江兄妹。

しても君のサポートはさせてもらうから安心して.....」 まぁまぁまぁまぁ。二人ともここはおさえて。 ちょっと待ったアー!!」 とにかく、 志木クン。これからいろいろと大変だろうが、

誰かの大声と、 ドーンという部屋のドアが強引に開かれる音。

何だ?」

零次が声をあげ、 そこに立っていたのは 全員の視線が部屋の入口に集中する。

、よ、頼子!?」

霧江が驚愕の声を上げる。

た。 部屋の中に飛び込んできた頼子は霧江のもとへ一直線に走ってき

頼子は眼尻に涙を浮かべながら訴える。

こんな男に純潔を捧げてしまうなんて!!」 「どういうことですか霧江さん!私というものがありながらこんな、

「じゅ、純潔って.....」

「こんな男.....」

当惑する霧江と、がっくり項垂れる恭也。

おい頼子、ややこしくなるから出てくるんじゃない!」

しかしその手はすぐ振りほどかれた。と、松居刑事が頼子の腕を掴んで引きとめる。

もんですか!!」 お父様は黙っててください 霧江さんは私の生涯のパートナー !いいですかそこの殿方! なんです!あなたなんかに渡す

そういって、 恭也に人差し指を突き付けつつ声を張り上げる頼子。

ちょっと頼子、 おい霧江.....この娘は..... なんかパートナーの意味変わってない っていうかお前この娘とそういう関係 ?

だったのか.....」

比べる零次。 目を点にする霧江と、 眼を細めて霧江と頼子の顔をまじまじと見

だから違うって!頼子はただの友達で.....」

ただの!?.....そんな、 霧江さん.....私のことは遊びだったんで

霧江のとっさの弁解。

その言葉にショックを受け、頼子はその場にベタンと座り込んで

.....霧江ちゃん、すこし話を聞こうか」

神妙な顔で霧江の肩に手を置く松居刑事。

松居刑事まで!?だから誤解!誤解なんですよ!」

「霧江お前..... 最低だな.....」

切られ、 この島では数少ないまともな人だと思っていた松居刑事にまで裏 さらに狼狽する霧江。

零次は顔を右手で覆って天を仰いだ。

と思いますよ」 なんだかよくわかりませんが.....女の子を泣かせるのはよくない

とどめに、恭也からの追撃が入った。

だああああからッ !!違うってのにこのバカ共が!

たまらず、どなり声を上げる霧江。

その時だった。

すみません、うるさいですよ」

周囲を凍らせるかの如く冷たい気を帯びた声が部屋の中に響いた。

開けっぱなしの扉の前。

そこにはメガネをかけた、 スト ツ姿の壮年の女性。

この天井学園女子寮。 『鬼女』 と恐れられる、 寮監・柳原梅子だ

つ

「「「「ごめんなさい」」」」

 \neg

と声を合わせて頭を下げる霧江以下五名。

梅子寮監は零次、 松居刑事、恭也と順番に視線を送って、

男子禁制のはずなのですが」 「そこの御三方。 保護者と言えども特別な理由がない限りこの寮は

と背筋も凍りそうなトーンで告げる。

Γĺ いや……実は妹のことで重大な問題がですね……」

思わず、反論してしまう零次。しかし。

でしたら!他でやればよろしいでしょうッ!」

と一喝されてしまった。 その剣幕に再び、 三人は深々と頭を下げ

おっ しゃる通りです」

説得することになってしまったのだった。 部屋を追い出され、 こうして色々と有耶無耶のまま、 霧江は部屋でまだ泣き続けている頼子を一人で 零次、 松居刑事、 恭也の三人は

午後一時。

しなきゃならなくなったから.....」 そう言うわけで、 これからしばらく私はこいつのことを『教育』

そう言って、 霧江は恭也の肩をポンポンと叩く。

ンテラスの丸いテーブルに座っていた。 霧江、頼子、 恭也の三人は、女子寮の近くにある喫茶店のオープ

結局、頼子の説得にはかなりの時間を要してしまった。

っ た。 居住区にいられなくなった恭也は、零次の家に転がり込むことにな その間、 引っ越しは後日、 零次は恭也と今後の相談をし、妖魔化したことで人間用 日を改めて行うことになる。

待ち合わせさせたのだった。 だけでも、出来るだけ早急に『親』である霧江から習っておかなけ れば日常生活に支障をきたすという旨を伝え、 零時は恭也に吸血鬼としての能力を制御する方法を、まずは基本 この喫茶店で霧江と

であり、 余談だが、恭也もまた日光が致命的とならないデイ 霧江は自身の血統の優秀さに感心していた。 ウォ カー

そう、 だったのですか.うっ、 だったらどうして昨日私を連れ

て行ってくれなかったんですか!?回復魔術は得意だと言いました

そう言って、またもや涙ぐむ頼子。

に友達の頼子を傷つけられたくなかったし」 いや、 だって、 相手はかなり危ないやつなのよ!......そんなやつ

頼子はしっかりと聞き逃さずにいた。 後半部分は霧江にしては珍しくつぶやくような小さな声だったが、

振って、力強く言う。 彼女はその言葉に歓喜の表情を浮かべたが、直後、首をぶんぶん

ナーなんです。 「霧江さん お気持ちは嬉しいのですが、 私は霧江さんのパート

ですからそんな危険など恐ろしくありません!」

「 いや、そう言われても.....」

いませんし。わかりました。 確かに、 私は自分の実力を一度もお見せして

霧江さんが私を信用できないのも無理はありません

不安げな表情を浮かべる霧江に、 頼子はしかし一歩も譲らない。

では私がそこの殿方よりも強いことが証明できればどうです?」

シっと指した。 そう言いながら頼子は立ち上がり恭也の顔に向けて人差し指をビ

彼も吸血鬼。 生まれたてとはいえ、 それもデイ・ウォーカー なのでしょう? 強力な妖魔に変わりはないはず」

下手を打ってあなたを怪我させたりしたら まってよ頼子。 こいつはまだ自分の力の制御もきかない

りませんから」 その時は、 こんな殿方に傷を負わせられるようでは霧江さんの相棒など務ま わたしはあなたの相棒の座を諦めるだけです。

.....なんかさっきから酷い言われようだ.....」

恭也がつぶやくが、 頼子は彼の方を一切見ずに話を進めた。

上で無傷で勝って見せますし」 勿論、 霧江さんが彼のサポー トについても構いません。 私はその

志を感じる。 そう語る彼女の様子からは、 とてもハッタリとは思えない強い意

思った。 霧江は、 しかしその条件で恭也が負けることはまずないだろうと

たからだ。 る恭也がキズーつつけられずに敗北する姿など想像だにできなかっ 頼子はただの人間だ。 生まれたばかりとはいえ、 自身の血族であ

な いと霧江は考えた。 ともかく、それで彼女が諦めてくれるのならば、そう悪い話でも

が、 正直なことを言えば彼女にかすり傷一つつけたくもなかったのだ 背に腹は代えられない。

もっと危ない目に合うよりはマシだ。

トにつく。 わかった。 そこまで言うなら試してみるわ。 私が恭也のサポ

二度とやめてもらうからね」 それで、 あなたにかすり傷一 つでもついたらそんな危ない真似は

はい!」

Ļ 頼子は今日初めての満面の笑みを浮かべる。

ような気がするんですが」 なんか、 僕のあずかり知らぬところで結構大事なことが決まった

やれやれと肩をすくめた。 一方で、恭也は陰鬱な表情を浮かべている。それを見て、 霧江は

それから私のことは主と呼ぶこと」のなたの訓練にもなるわ。まずは腕力の制御から始めてもらう。

「ま、マスター.....ですか」

い。いいわね?」 様つけて呼ぶのは嫌なんでしょう?だったらそう呼びなさ

「は、はい」

と軽く撫でた。 その様子を見て、 恭也が答えると、 頼子の表情が凍りつく。 霧江は「よろしい」と言ってその頭をポンポン

:: 絶対に、

負けませんからね」

痛いほど突き刺さる視線

女によってさらにトンでもないことに巻き込まれたのだということ はしっかりと理解できたのだった。 まだ完全に把握できていない恭也だったが、とりあえず今、この少 今の自分が何に巻き込まれ、どういう状況に置かれているのかを

第十三話 かくしてトリオは結成される。

「やぁ。ひさしぶり」

あら、お兄さん」

女子寮の門の前。

頼子は零次が腕を組んで塀に背を預けているのを見つけた。

彼に向きあい、立ち止まる頼子。

ですね」 「その様子だと、 お兄さんはちゃんと私のこと覚えてくれていたん

「忘れるもんかよ。だって君は.....」

何かを言いかけて、ふう、と零次は軽く息を吐いて口をつぐむ。

んて思わなかった」 「......その君が、まさか生きていて、松居刑事の娘になっているな

「ここにいれば、 いつか再会できると思ってましたから」

ふふふ、と笑みを浮かべる頼子。

彼女は笑顔の効力を熟知しているのか、 ほんとうによく笑う。

しかしこんな妖艶さを含めた笑みは、 今まで誰にも見せたことは

なかった。

義父にも、家族にも、霧江にも。

零次は組んでいた腕を解き、一歩前へ出る。

あまり妹に妙なちょっ かいを出さないでくれるか?アレは今、

大事な時期なんだ」

「いやだ、と言ったら?」

. 力づくは嫌いなんだ」

それを聞いて、 頼子の笑みが嘲笑的なものに変わる。

なたの本性」 あなたが?冗談でしょう?知ってますよ、霧江さんの知らないあ

言外に、 それを妹にばらすぞ、と言っているようだった。

....

押し黙る零次。

頼子はクスリと笑って、女子寮の中に向かって歩き出す。

「待て。目的は何だ?」

頼子は立ち止り、 振り返って、彼女の背中に声をかける零次。 零次の方へは振り向かないまま、

そんなもの10年前からずっと一つしかありませんよ」

とつぶやいて、歩くのを再開し、 女子寮の中へと消えていった。

..... 虫が多いな、この島は」

つぶした。 零次は自分の周りを飛び回っていた小さな羽虫を右手だけで握り

すよね」 吸血鬼になった、 って言われても。 なんだか実感がわかない んで

のあんたが太陽の下で満足に力を発揮できるもんですか」 そりゃそうでしょう。 いくらデイ・ウォーカーでも、 生まれたて

つまり太陽が隠れたら、 もっと吸血鬼っぽくなると?」

その通り」

太極館学園女子寮の裏には公園がある。

の時期になると花見の客も多い。 そこまで規模は大きくないが、 桜の木が多く植えられており、こ

最も、霧江達の立っている公園の中心部には桜はなく噴水とベン

チがあるくらいで、ここだけは人もまばらだった。

お待たせしましたー」

かを持って駆けてくる。 そう言って、頼子が四角い学生カバンと、 布に包まれた細長い 何

戻ったのだった。 恭也との模擬戦が決まると、 準備がある、 と言って頼子だけ寮に

· ではさっそく」

頼子はカバンを開いた。 その中にはクリアファイルが幾つも入っ

ている。

を取り出した。 そのうちの一 つを抜き取り、 挟まれていた何枚ものルーズリーフ

「それは?」

'結界ですよ」

霧江がきくと、 頼子はルーズリーフをバサ、 と投げ捨てる。

宙を舞った紙が、空中で一瞬静止する。

取り囲んで地面に落ちた。 かと思うと今度はまっすぐに飛び、三人の周囲を円を描くように

る の紙で円を描くことで一つの魔法陣として完成するようになってい 見ると紙には一枚一枚曲線と何らかの呪文が描かれていて、

部外者を巻き込まないようにするためのものだろう。 外と中を物理的、 こうして、半径8メートルほどの円形の結界が完成し 魔術的に遮断するタイプのものだった。 た。

「こうしないと危ないですからね」

いた布を取り払う。 鞄を結界の端の方へ移動させると、 今度は細長い棒状のものを巻

中に入っていたのは、 60センチ足らずの小太刀だった。

・そ、それって.....!」

それを見た恭也が驚嘆の声を上げる。

あら、 もしかして君は、 よくご存じですわね」 三中の 『絶対防御』 じゃあ.....

布を右腕にくるくる巻きつつ、頼子は微笑む。

なによその厨二な二つ名」

霧江は眉をひそめて、ジト目で恭也を見た。

法武術大会!」 知らないんですかマスター!一昨年の第五スフィア市中学対抗魔

ることもなく、 相手の攻撃を一発も受けることなく、 知らないわよ。 私島に来てからまだ数日しか経ってないもの かつ相手に一発も食らわせ

ことで大会を勝ち進み、 相手のすべての魔法をその小太刀で捌いて魔力切れを起こさせる

へぇ......人は見かけによらないわね」 一度も苦戦することなく優勝し、ついたあだ名が 彼女の戦いぶりはこの島ではもう伝説級ですよ」 『絶対防御』

霧江は頼子の顔をまじまじと見る。

それに気付いた頼子は、 視線を合わせてにっこりとほほ笑んだ。

....L

頬を少し染め、ポリポリと頭をかく霧江。

「何照れてんです?」

.....うっさい。 さっさと始めるわよ。っと、その前に」

それが周囲を包みこむ。 のように薄暗くなった。 ずずず、 と、霧江の髪から何やら黒いもやのようなものが発生し、 すると、 あっという間に結界の内側だけ夜

「これで夜とほとんど同じ力が出せるようになったわ。 動いてみなさい」 ちょっと軽

「え?……こう、ですか?」

そう言って、 恭也は拳を突き出してみたり、 軽く跳んだりしてみ

゙おお、なんかかつてないほど体が軽い」

恭也は目を輝かせて自分の手のひらを見て、 次に体を見下ろした。

できないわ。 「月が出てればもっと違うんだけど……まぁ流石にそこまでは再現

さて、 悪いけど頼子、 このままやらせてもらうわよ」

「ええ。構いませんよ」

そう言って、頼子は小太刀を抜き、 鞘を捨てる。

左手一本で持った小太刀を下段に、 体の右側を見せないように横

向きになって構える。

さぁ、どこからでもどうぞ」

「よぉし.....」

この体なら、 あの絶対防御にも勝てるかもしれない。

恭也は胸を躍らせて、頼子に向き直った。

あまり長くやっても何だし、 制限時間をつけるわよ」

霧江は携帯を出し、 ストップウォッチのアプリを起動する。

受ければ恭也の勝ち。5分間逃げ切れば頼子の勝ちってことで」 「時間はきっかり5分、 たった5分なんて、 それまでに頼子が体に少しでもダメージを お優しいですわ霧江さん」

頼子は左手の構えは崩さず、 右手で自身の頬に触れる。

あんなこと言ってますよ」ふふ.....もう決まったようなものですわね」

ちらり、と霧江を振り返る恭也。

..... まぁ、 本当にできれば認めざるを得ないわね

いた。 正直に言うと、 この時点で霧江は完全に両者の実力差を見誤って

その意味を。 『絶対防御』松居頼子。 彼女が中学対抗魔法武芸大会で優勝した、

せいぜい普通よりちょっと強い魔術師程度、だと誤解していた。

いう人間たちなのか、知らなすぎたのだ。 何せ日が浅い。この島に来て、彼女はそこに住む人間たちがどう しかし、それに関して彼女は責められるべきではないだろう。

しかし、そこに気づけるだけの余地はあったといえばあった。

先日の爆破犯人が、 他のスフィアではなかなかいない『魔法陣高

速描画』というスキルの持ち主だったこと。

どこにでもいる普通の魔術師だった。しかし彼は特別有能だったわけではない。

少なくとも、この島では。

「言っとくけど、 頼子を力いっぱい殴ったりしたら3回くらい殺す

からね。

羽でなでるようにソフトにやるのよ。 ソフトに」

だからこそ、こんな言葉が出てくるのだろう。

.....霧江さん。 やさしいのはいいんですが、 そろそろプライドが

傷つきそうです」

んよ俺。どうなっても」 「...... まぁ、 マスター がそういうんならそうしますけど、 知りませ

ま視線をそらさない恭也。 少し困ったような笑みを見せる頼子と、そんな頼子を見据えたま

ようだった。 それはまるで、 少しでも目をそれせばやられるとでも言っている

..... まぁ、 いいわ。 とにかく、 はじめ!」

霧江。 腑に落ちないまま、 携帯のストップウォッチのスイッチを入れる

こうして、戦いの火ぶたは切って落とされた。

合図とともに、恭也は駆ける。

数メートルの距離はその脚力により一瞬で詰められ、 しかし彼は

正面からはうち合わない。

自身の軌道を右へ逸らす。

面白い体だ、彼は自身の肉体の変化について素直に感心する。

今なら普通の人間では絶対に出来ないような動きも簡単に出来る

はずだ。

そう思った。

頼子は恭也に体の左側面を見せる格好を取っている。

恭也が右に回ったということは、その背中を狙いに行ったという

ことを意味する。

彼は頼子の背中に向け、 言われたとおり軽く、 拳を突き出す。

恭也の動きが瞬速なら、 頼子の動きは神速だった。

突き出された拳に、 頼子は流れるような動作で小太刀の柄の先を

合わせる。

!

恭也はその場で左右の拳を交互に突き出し、 連 打。

頼子はそのすべてに左手一本で対応する。

さんざん刀の柄を殴らされた恭也は一歩下がり、 仕切り直すため

に距離をとる。

その一瞬。

ばさ、と頼子が先ほど右手に巻いていた布を、 恭也の顔に被せる

ように振るった。

そのままワンテンポも置かずに左手を真っ直ぐに突き出す。

恭也は慌てて背後に跳躍した。

..... なんてこった、 一昨年見た時と戦い方が違う!

着地した恭也。

すぐさまボクシングのように構えを取る。

その頬には、赤い血が一筋。

一方の頼子も、 布に刺さった刀を抜き、再び恭也に体の左側を向

ける構えを取る。

今度は、布を腕に巻かずに垂れ下げたままだ。

私が去年、 大会に出なかった理由、 わかりますか?」

·

恭也は静かに首を振る。

一昨年は完成した『守りの剣』 しかし去年の大会には、 この『 攻めの剣』 を試すために大会に出ました。 の完成が間に合わなか

ったのです。

中途半端な状態では対戦相手の方に失礼でしたので、 残念ですが

参加は見送りました。

......この技を試合で受けたのは、 あなたが初めてです」

そりゃ、光栄ですね」

これでもう守備一辺倒な『絶対防御』の二つ名は返上ですよ」

それは弱者に相対した、 頼子は恭也に向けて初めての笑みを、 絶対的強者の笑み。 力強い笑みを見せて言う。

までは俺の方が5分持ちません!」 !ッ、 マスター!さっきの命令を撤回してください!このま

「あ、うん.....撤回する」

霧江は面食らって呆然としていた。

いくら恭也が生まれたての力の弱い吸血鬼だったとしても、 それ

161

でも吸血鬼である。

しかも条件はほとんど夜と同じ。

その彼に対して、あんな華奢な頼子が圧倒するレベルの身体能力

を発揮するなどとは、 夢にも思わなかったからだ。

はあるだろう。 もちろん、自身の身体能力を魔術によって強化しているというの

しかしあの左腕の動きはいくらなんでも異常だった。

(頼子って、実は人間じゃないんじゃ.....?)

のだ。 そう霧江に思わせるほど、 尋常ではないスピードを発揮していた

具体的に言うなら、 霧江自身の拳速に匹敵するレベルの速さだっ

(これで本気は出せる..... それでも、 あれに対応できるかどうか..

:

恭也は先ほどの攻防を振り返る。 布で刃の軌道を隠し ての刺突攻

知る『絶対防御』の、誰も知らない恐るべき攻撃。 この島の学生なら 最近外部から来たもの以外は だれもが

果たして身体能力だけでどこまでカバーしきれるか

恭也はゴクリと息を飲む。

(よし、この手でいくか)

恭也は右足で、その地面を思いっきり抉り蹴った。

吸血鬼の脚力により、弾丸のような速度で砂つぶてが飛ぶ。

頼子は回転するような動作とともに右腕を振るった。

布がぶわりと広がり、頼子を覆い隠す。

おそらく布も何か魔術的なものが施されているのだろう。

先ほどよりも明らかに大きくなっており、そして砂のつぶての衝

撃をものともしない。

恭也はすでに、 再び距離を詰めるために駆けだしていた。

今なら、 向こうもこちらの動きは見えないはずだ。

右か左、どちらから攻めるか.....。

(いや、直進だ!)

布を掴んでいる位置からもわかるが、 頼子は一度も背を見せずに右手の布を前へ振った。 今は右側面を前にしている

はずだ。

つまり左に回れば、 しかし、 の絶対防御がこの姿勢で背中をガラ空きにするはずが それは彼女の背後を取ることになる。

ない。 かと言って、 右に言って正面に出るのは愚の骨頂の

突き出す。 恭也はそう判断し、 ここは直進し、 あの突きと刺し違える覚悟で一発当てるしかない。 布の正面から中心に向け真っ直ぐに左の拳を

しかし、横薙ぎの風がその思惑を切り裂いた。

(ッ、斬撃!?)

恭也の拳が真っ二つに斬り裂かれる。

攻撃は突きだけではなかった。

なびく布がこんなにもすんなり刃を通してくるとは恭也も思わな

かったのだ。

う。 瞬ひるんだ恭也の体に、 頼子はその布を叩きつけるように振る

「ぐ.....っ」

衝撃で完全に攻撃のリズムを乱された恭也は再び距離を取り。

左の拳と頬の傷を再生する。

頼子もまた距離を取り、構えを取り直した。

どうします?まだやりますか?」

そう言って、再び強者の笑みを浮かべる頼子。

「...... いや」

零次は構えを解いた。

どうやら今の俺じゃ、 あなたの足もとにも届きそうにありません」

たった二回の攻防。

制限時間五分の試合で、 まだ30秒も経っていない。

自分でも未知数の力を、 それでも、恭也が実力の差を自覚するのには十分だった。 全力で行使したにもかかわらず、 相手の、

その影すら掴める気がしなかったからだ。

「それで、いいですかマスター?」

「ああ.....まぁ、 頼子がめっちゃ強いのは解ったし、 べつに構わな

いんだけどさ.....」

霧江は頭をポリポリと掻いている。

7 簡単にあきらめすぎというか.....もうちょっと魔法とか使っても

いいんじゃない?」

2、なぜか恐る恐ると言った様子で問う霧江。

魔法ですか....」

恭也は首をぶんぶんと振って言う。

一昨年の彼女の大会を見た者なら、 彼女に魔法なんて使おうとは

思いませんよ」

「ん.....そう」

だからこそ、彼は直接攻撃で攻めたのだ。

使ったらどうなるか、 その結果を恭也は既に知っている。

そんな恭也の表情から、 霧江にも大体の見当はついたようで、 彼

女は納得していた。

頼子もすでに構えを解いていて、 地面に捨てた鞘を拾い上げてい

න

っけ?」 っていうか頼子、 あなた戦闘は得意じゃないとか言ってなかった

それは、 霧江さんには流石に勝てませんもの」

そう言って、 笑顔で小太刀を鞘におさめ、 布を巻く頼子。

霧江さん。 改めてよろしくお願いしますね」

その笑顔に、 にぱーっと、 霧江は気の抜けたような笑いで答える。 彼女は底抜けに明るい笑みを浮かべた。

悪くはないかも」 ま、 仕方ないか。 約束だしね。三人でヒーロー活動ってのも

「「え?」」

霧江の『三人』という言葉に、 同時に声を上げる頼子と恭也。

「霧江さん、もしかしてこの殿方も.....?」

子が問う。 冷や汗を浮かべつつ、 恭也の方を指差して、 固くなった笑顔で頼

つ からそのつもりだったんだけど.....」 そりや、 まぁ『教育』 するには実戦が一番手っ取り早いし、 最初

「.....ッ!」

頼子は眼尻に涙を浮かべつつ、 恭也へ向き直った。

そして右手の人差し指をまっすぐに突き出し、 声を張り上げる。

・私が二号ライダー ですからねッ!?」

ええっ!?.....いやそれより、 ヒーロー活動って.....?」

になんのことか解っておらず戸惑う恭也。 霧江のヒー ロー活動については聞かされていなかったので、 完全

呼びますッ うるさいですわ!三号ライダー !これからあなたのことは三号と

のはそういうヒーロー的な意味だったんですか?」 「 な、何すかそのあだ名!?.....もしかして、 パ ー トナー っていう

「他に何か!?」

うか百合っけというか」 「え?いや……だってなんか最初っから二人の間には……なんとい

「んなわけあるか!」

た。 霧江は叫んで、 恭也の頭めがけてその辺に転がっていた石を投げ

衝撃で倒れる恭也。

石は彼のこめかみにクリーンヒットし、

垂直に跳ね上がる。

かったが、 人間なら危ないが、 ツッコミにしては過剰な痛みが彼の頭に響いた。 吸血鬼なので命に別条とかそういう問題はな

かくして、 この街で一番奇妙なトリオが結成された。

日は高く、街の風は静か。

なかった。 しかし遠く の空に迫る暗雲に、 この時の彼らは、 まだ気がついて

第十三話 かくしてトリオは結成される。 (後書き)

ごめんなさい。 書き溜めが尽きたので、これから更新頻度落ちます。

第十四話(立ち込めるは暗雲。

ああ、 せっ かくの門出の日にこんな雨なんて.....」

「そうねー、嫌んなっちゃう」

`なんか先行き不安ですね」

だれかの家のリビングルーム。

テーブルを囲み、 窓の外を見ながら各々嘆きの甲を上げる、

霧江、恭也の三人。

名前の並びは発言の順である。

そう言えば吸血鬼って、どこまでの流水なら大丈夫なんですか?」

こ、頼子の素朴な疑問の声。

霧江はそれに答える。

「その辺は個人差よ。

私は海とか河を泳いだり渡れたりしないだけで基本平気だけど、

雨に打たれただけでアウトっていう吸血鬼もいたり。

流石に水流なんか全然平気なんてやつはいないけどね

「なるほど.....では三号は?」

気みたいだし」 私の血統だし、 耐性も同じくらいなんじゃ ないかな。 日の光も平

' なるほど。流石は霧江さんの血ですね」

頼子のいう三号、 とは先ほど頼子が恭也につけたばかりのあだ名

である。

ら出てきて主人公と協力するようになる新ヒー ローをシリー 日本のとある特撮番組シリーズのファンの間では、 物語の途中か ズ初代

のそれにあやかって『二号』 と呼んでいる。

を三号、 さらに複数のヒーローが登場する場合は、 四号とする場合があったり、 なかったりする。 その後に登場する味方

号』になりたいという願望が、霧江の眷族となった恭也の登場によ る り危うくなった為、 頼子がこんなあだ名をつけたのは、 恭也と自身との序列をはっきりさせるためであ 自身が霧江の相棒、 即ち『二

(そんなの気にしなくてもいいのにな)

と恭也は思う。

わされるのも自身の吸血鬼としての『教育』のためだという。 元々霧江のヒーロー活動のことなど知らなかったし、それを手伝

ないのだ。 つまりその『教育』が終わってしまえばもう自分が手伝う義理も

言ってみればそれまでの辛抱なのである。

だというのになぜ彼女は自分のことを毛嫌いするのか。

じゃないのか?) (マスターは否定してたけど、やっぱり頼子さんってそっち系の人

恭也は頼子の顔をまじまじと見る。

霧江と話している彼女の顔は何よりも輝いて見えた。

だし、 第五スフィア成立以来の天才と言われてる、 何かアヴノーマルな性癖があってもおかしくはないよな) あの『絶対防御』

ならそっとしておくのが一番だろう。

ゆけばいい。 妙な嫉妬をされないように、 二人から少し離れて後ろからつい て

霧江の『子』だ。 何せ出会ってからまだ一日も経っていないのだし、 だがそこから恋愛感情が生まれたかと言えばそうでもない。 確かに霧江に瀕死のところを助けてもらって感謝はしている。 しかも扱いは

ど芽生えるわけがない。 彼女が『親』だというのなら家族愛は生まれても男女間の愛情な

じやぁ (あれ、 でもじゃぁもしかして頼子さんが『子』 になりたかっ たん

まず性欲自体が希薄だ。 転化繁殖を取る吸血鬼にそもそも結婚云々という概念はない。

いが、10年も吸血鬼であった霧江なら言わずもがな。 人間になりたてなら結婚願望の名残なんてものもあるかもしれな

なればこそ、同性愛者には都合が良いのかもしれない。

がら『伴侶』であるとも言えないこともない。 転化は性を問わないのだし、考えてみれば眷族は『子』 でありな

考えすぎか) とか考えてたりするんじゃあないだろうな.....?いや、 (じゃあ、 もしかして僕を亡きものにして新しい『子』 そこまでは になろう、

「......どうしました、三号?」

びく、 いつの間にか頼子が不思議そうな顔で目を合わせてきていた。 と恭也の全身が一瞬痙攣する。

方ですわ」 もしかして私に対してなにかいかがわしい妄想を?いやらし

なー تع ا ですかねー。 !違いますよ、 ねえ、 ちょっと考え事をしていただけですっ 霧江さん。 殿方はみんな獣ですわよ」

だけだけどね」 吸血鬼になるとだんだん性欲とか希薄になってくから、 今のうち

· あら、そうなんですか!?」

頼子は驚いて口元を覆う。

向き直るように座りなおした。 そうして霧江に向けていた視線を恭也に戻し、今度は体ごと彼に

想だけですわよ」 そういうことなら今は我慢して差し上げましょう。ただし妄

そう言って、ジト目になる頼子。

だから!しませんて!してませんでしたって!」

あわてて反論する恭也。

あら、ではもう枯れているんですか?」

だーっ!そういうことでもねぇからっ!!」

その様子を見て、頼子はクスクス笑っていた。恭也は叫びながら、椅子から立ち上がる。

..... ふふ、冗談ですわよ。 三号ったら本気にしちゃって」

そう言ってほほ笑む頼子。

(.....なんだ、普通に笑ってくれるじゃないか)

頼子の笑みに、どこかほっとする恭也。

だとしたら彼女ともうまくやっていけるだろう、そう思った。 もしかしたらそれほど嫌われているわけでもないのかもしれない。

..... この時は。

「......楽しそうですな御三方」

出てきた。 零次が、 トレーの上に麦茶の入ったグラスを四つ乗せて台所から

゙で、何でわざわざ俺の家に.....?」

の住居である。 そう、ここは第三区のとあるマンションの一部屋、即ち鬼灯零次

そのリビングで彼女らは談笑していた。

「だって雨だし」

と、霧江が答える。

それにわたしたちの部屋じゃあ三号入れないじゃないですか」

が続く。 今朝零次達が寮監に追い出されたことを思い浮かべながら、 頼子

もよかったじゃない」 「そうそう。 つー かこんな立派な家あるんなら私別に寮入らなくて

と、ふたたび霧江。

゙......こっちにもいろいろ事情があるんだよ」

スを置く。 言いながら、 零次は三人の前になかば投げやりに麦茶入りのグラ

恭也は住ませるのに私を住ませられない事情で何よ」

志木君を住ませるのはあくまで当面の住居が決まるまで、 つかお前高校卒業したら彼と一緒に住んでもらうからな」

「ええつ!?」

真っ先に反応したのは霧江でも恭也でもなく頼子だった。

「どど、 んですか!?」 どうして霧江さんがこの三号と一緒に住まなきゃならない

半泣きで恭也を指さしながら声を荒げる頼子。

そりゃ親子だし.....つか三号?」

じゃ、じゃあ私も一緒に住みます!」

彼女の発言に、 飲んでいた麦茶を思わず噴き出しそうになる恭也。

「なんでそうなるんですか!」

お黙りなさい!三号だって女の子多いほうが嬉しいでしょうツ

?

いやそういう問題じゃなくて!」

私は別にかまわないけどねー」

ろ嬉しそうな霧江。 一人冷静な、 というより気にしていないふうな、 っていうかむし

すのですよ三号!」 ほら霧江さんだってこう言っていますし!3人で暮らせる家を探

「勘弁してくださいよ収入も無いのに」

· え、コンビニのバイトは?」

と、思い出したように霧江が言う。

流石にクビですよ。 第四区では妖魔の労働も規制されてますから」

る区とそうでない区に分けられ、 答える恭也。 実験都市らしく、 観察が行われているのだった。 人間のみの居住区でも妖魔を雇え

おれも手伝う」 バイトも合わせてしばらくはここに住みながら探すと良い。

言いながら、零次は自分の分のグラスをテーブルに置く。 いつの間にか中身は飲み干してしまったようだ。

ありがとうございます」

こっちへ来てくれるか」 ああ、そうだ志木君。きみに貸す部屋のことでちょっと話が..

席を立ち、 零次はそう言うと、 言われるがままついてゆく恭也。 リビングを離れ廊下へ向かった。

さて、テレビでも見ましょうか」

「この時間帯面白いのやってますか?」

と、頼子。

でついに死者って.....」 = スばっかねえ..... ってうわ、 何この連続通り魔事件

が狙われたっていう.....」 ああ、 『切り裂き魔』ですか。 確か長くて黒い髪の女の子ばかり

「うへぇ……街中で突然首が飛んだって何よ。 洒落になんない わね

霧江は苦々しげに麦茶をすすった。

からヒーローがいるんです」 警察が人間だけになってからは大体こんなもんですよこの街。 だ

「治安悪いんだなーやっぱし」

る部屋に入る。 彼女らの声を少し遠くに聞きつつ、 恭也は零次に連れられて、 あ

ಠ್ಠ れらは現在、それぞれ左の部屋が書斎、 廊下の一番手前には左右にそれぞれ六帖の洋間に続く扉があり、 零次の住むマンションの部屋の間取りは、まず玄関、 右の部屋が物置になってい 廊下があり、 そ

の和室、 があり、 その奥にいくと、 という構成になっている。 廊下の一番奥に10帖のリビング、 右には洗面所、 風呂とトイレ、 リビングの隣には8帖 左にはキッ チン

二人が入ったのは現在物置になっている部屋だ。

物置、 といってもきちんと整頓されていて、 恭也は何に使うのか

分からないものが多々あるのが気になったが、 ペースは、 というか恭也用の棺桶を置くスペー スが、 ひとー 十分にあった。 人が寝れるス

「ここなんだがね」

ど ああ、 いいじゃないですか。 なんか色々と変なものが見えますけ

「ま、 ここを貸すにあたって君に一つお願いがあるんだわ」

「なんです?」

「……松居頼子から眼を離すな」

-.....え?」

思わず聞き返す恭也。

振り返って、零次の顔を直視する。

冗談を言ったわけではないようで、 彼の顔は何処か思いつめたよ

うな、真剣そのものな表情をしていた。

一緒に居る間、 彼女の動向に気を配り、 何か妙な動きがあれば知

らせてほしい」

「妙なって.....?」

「例えば、誰かに危害を加えようとしたり.....」

そんなことを彼女が?」

恭也は、頼子の笑顔を思い出す。

少なくとも自分に対しては多少なりとも良くない感情を抱いてい

ることは確かだ。

しかし、あんな風に笑う少女が、 自ら誰かを傷つけるような行動

をするだろうか?

彼にはとても信じられなかった。

とにかく、 頼んだぞ。 一緒に居る間だけでいい

ビングへ戻って行ってしまった。 そう言って、零次は恭也の肩をポンポンと叩くと、 彼を残してリ

恭也はただ呆然とその場に立ち尽くす。

ではいかないようだ。 どうやら、彼女にしろ、 頼子ともうまくやっていけそうな気がした矢先のことだっ その依頼をしてきた零次にしる、 た。 一筋縄

翌日。

あ、これなんてどうです?劇場版なのでさっくり観れますよ」

、まて頼子。それならこっちにすべきだ」

ってますし最初に見るにしては難易度高いですよ」 確かにそちらも面白いですけど、テレビ版とばっちり繋がっちゃ

じゃあテレビ版一巻から借りよう。そうすべきだ」

「 えー。 だってせっかく劇場版はパラレル設定なのが多いんですか

ら、入門用にはまずそういうのから入るべきですって」

してだな」 「それも悪くないんだが、 やっぱり最初はひとつのシリー ズに集中

第三区、 大通りにあるレンタルビデオチェーン店。

手に話し合っている。 その店のキッズコーナーで、 『旧作・準新作半額キャンペーン中』 零次と頼子がそれぞれ映像ソフトを片 というのぼりが並べられた

にはもっと初心者向けをですね」 お兄さんがそのシリーズ好きなのはわかりますけども、 霧江さん

ょ 初心者だからこそ、 こうガツンと来るものがい んだ

「ガツンと来すぎですよそのシリーズは。 一番ですって」 やはり王道から入るのが

「確かにそうかもしれないけどさ.....」

歩下がって、気付かれないように階段を上がった。 江は微妙な恥ずかしさを覚えて、 恭也を引っ 張りつつこっそりと数 ビ番組について熱く語り合っているという異様な光景を前に、 い年こいた大人と女子高生が子供向けコーナー で、 子供向けテ

ラマ等の映像作品を展開している。 階に音楽ソフトや、アニメ等のキッズ向け作品。 この店は小さめのビルの中の一階と二階をそのスペースとし 二階で映画、 ド

言うからですよ」 マスターが突然『私もヒーローもの観ようかしら』 もう。 なにやってんのあの二人ってば なんてことを

「......私も言うんじゃなかったと思ってるよ」

零次と頼子には共通の趣味がある。

言うまでもなく、特撮ヒーローものだ。

がお互いにそうであると知ったのは、つい数時間前のことだった。 投合して『じゃあ早速何か借りて観よう』と零次が言い放ったのが 何の気なしに言い放った霧江のその言葉に、 霧江は頼子に初めて出会った時から気づいていたことだが、 二人が反応し、 意気

始めてしまった。 にして、 そのついでにここに立ち寄ったわけだが、 この後恭也の家から、 二人は霧江に最初に見せるのはどれからがい 彼の荷物を零次の家に運ぶ予定があるので いざキッズコーナーを前 いかで議論を

事の起こり。

内容が、 どれを見せるか』 すでに霧江の後悔の念を増大させていた。 ではなく『どれから始めるか』 という議論 の

最終的にはこの店にあるヒーローもの全部を見せられるに違いな

そう思って、霧江は小さくため息をついた。

「どうせ半額セール中だし、 なんか清涼剤代わりに映画でも借りよ

二階の映画、ドラマコーナー。

平日のためか、人はまばらだ。

んでいる年配の女性ぐらいだった。 ほかの客は霧江たちと同じくらいの女子高生や、 海外ドラマを選

けどなぁ」 アクション系かな。 マスター ってどういう映画が好きなんです?」 B 級 で、 頭空っぽにして見れるのがいい

下に繋がる階段を見て、 霧江はまた、 ため息をついた。

が好き?」 アクションだと食傷気味になりそうだわ。 あんたは、 どういうの

「え、僕ですか?映画はあんまり見ないんで... そっか。 じゃあ適当に見て回りましょうか」

回 当 然、 二人は洋画コーナー そう言って、二人はぶらぶらと店の中を歩き始めた。 て歩いたが、 と足を運んだ。 商品の陳列棚はジャンルごとに細かく分けられている。 いいものは見つからず、 から、 SF、ヒューマン、 次へ、 海外ドラマと見て また次へのコーナ

マスター、 ラブストーリーとかは興味ない んですか?」

ぎたのを見て、 霧江が洋画ラブストー リーのコー 恭也は声を上げた。 ナー の前を目もくれずに通り過

?恋愛ものはねえよくわかんないのよ」

そう言って、霧江は頭をぽりぽりと掻いた。

.. そのくらい希薄になるのよ。 なんていうか、 男を好きになる感覚がわっ 吸血鬼になっちゃうと」 かんないっ

なにが、 とは、 言わなかった。

なかったのかも知れない。 これからゆっくりと喪失してゆくであろう恭也を気遣って、 言え

過去にテレビで放映された恋愛ものの映画を見たことがあるが、

まるで感情移入できなかったのを覚えている。 というより、 恋愛そのものが理解できないのだ。

吸血鬼は生殖方法がそもそも人間と違う。

が重要で、特に小さな子供のころから 花する前に萎んでしまった感情だった。 目覚める前から 彼らにとっては、 男女間の愛よりも、 そういう種族だった彼女にとっては、 子や同胞に向ける愛のほう 二次性徴を迎え?性?に それは開

恭也は、 実はないんですよ。 誰か好きになったことある?」 それよりも家族のほうが大事でした」

はにかむ恭也に、 霧江は「そっか」 と小さく笑いかけた。

もしれない。 それなら彼が、 自身の恋愛感情の喪失に、 思い悩むことはないか

それを失ったことに対しどんな感想を抱くか、そんなことは想像 もっとも、 自分が当初から持ち得なかったものである。

がつかない。

そこが悩みどころだった。

心のあり方も、人間であったころから徐々に変化してゆく。 吸血鬼になるということは、能力や肉体が変わるだけではない。

問題なのは?徐々に?という点だ。

肉体のように一気に変容すれば何も心配する必要もないのだろう

が、そうではない。

肉体が変化し、その変化に心のほうが少しずつ追いつこうとする 心のあり方は、 きっと体のあり方に依存するのだ、と霧江は思う。

割であった。 その変化に対する戸惑いや苦悩、そのケアも、 親である霧江の役

「 え え。 人だけ、 「捨て子.....そっか.....ごめん」 「それより、家族って?確かあんたも親がいないんだったわよね」 捨て子だったので......昔は孤児院にいたんです。そこに一 家族と呼べる人がいました」

思わず、顔を伏せる霧江。

のでは、 両親がいないのは彼女も同じだったが、 残った傷は大違いなはずだ。 死なれたのと捨てられた

くないですよ、 いですよ。 捨て子なんてこの島では」 俺ももう、 いないものと思ってます。 それに、

·..... !そうなの?」

「ええ。 私もそうでしたから」

きていた。 Ļ 二人の後ろから、 その会話にいつの間にか頼子が割り込んで

児院がいくつもあるんですよ」 難しくてよく捨てられちゃうんです。 そういう子のために公共の孤 「この島では人間と妖魔のハーフが生まれるんですけど、 「うわ、と.....びっくりした。 頼子、どういうことよ」 育て方が

「そうなんだ.....っていうことは松井刑事は

「はい、義理のお父様です」

たからだ。 最初に会ったときから、二人の顔は似ても似つかないと思ってい その言葉に、霧江は驚きながら納得もしていた。

言う。 「まぁ でも?人間の捨て子?は珍しいんですけどね」と、 恭也が

仕方ありませんでしたよ。 「そうですね。 僕も.....そうですよ。 周りがハーフばかりで、孤児院にいたころは怖くて あの人がいなかったら今頃 自分が一番弱い立場でしたから」

昔を懐かしむような、 彼らの話に、 霧江は微かなシンパシーを覚える。 恭也と頼子。

恭也と頼子。 周りが人と妖魔のハーフで、その中で自分だけ純粋な人間だった

周りが純粋な人間で、 自分だけが妖魔だっ た霧江。

兄や家族に守られてきた霧江。

松井刑事にもらわれた頼子。

恭也も、 唯一家族と呼べる存在に救われたと言う。

`なんか、似てるわね。三人とも.....

そう言って、霧江は小さく笑った。

「そうですね....」

「傷でもなめあいますか」

彼らと出会ったは、決して偶然ではないはずだ。 答えるように笑みを浮かべる頼子と、 冗談めかして言う恭也。

霧江は、そう思った。

そういえば、頼子。決まったの?」

気づいて、霧江は声を上げる。

はずだが、 先ほどまで頼子は零次とどの映像ソフトを借りるか議論していた 決着は着いたのだろうか。

はい。 もうバッチリですよ。今お兄さんがお会計に並んでます」

るූ それがあまりにも嬉しそうだったので、 頼子はニコニコと子供のような笑みを浮かべながら答えた。 霧江もつられて笑顔にな

霧江さんは、 ううん、 何か見ようと思ったけど、 ほかに何か見たいものありました?」 やっぱりいいわ」

霧江は首をふって答えた。 友達と共通の話題で語り合えるようになるのは嬉しいことだ。

人間と吸血鬼でも、それは変わらなかった。

霧江は、 他の映画を借りるのはとりあえずやめにすることを決め

た。

に時間を使えるに違いない。 他の映画を見るよりも、彼女達との会話に費やしたほうが有意義 間に無駄な映画を挟むより一気に見てしまったほうがいいだろう。

ばならない。 恋愛が出来ないからこそ、友人と家族は何よりも大事にしなけれ

それに、と霧江は思った。

なれるかもしれないし.....) (それに、 同じ境遇を抱えた私達なら、 いつか本当の家族みたいに

彼女だけは心からそう思っていた。

彼女は、

彼女を取り巻く友人達の、本当の思惑も知らずに。

第十五話 決戦は空中で。

を歩いていた。 霧江、 頼子、 恭也、 零次の4人は第四区の住宅街に沿った大通り

場版がいくつかをまとめて借りたらしい。 零次の左手には映像ソフトが15本も入った袋が提げられている。 議論に決着はつかずに、特撮もの一シリーズ丸ごとと、 劇

いたことに気づいたらしく、とりあえずたくさん借りることで妥協 したようだ。 半額とあわせて十本以上で十泊レンタルのキャンペー ンもやって

昨日の雨は嘘のように晴れていた。どんな妥協だよ、と思いつつ霧江は歩く。

恭也が先導し、 その隣に霧江。 後から頼子と零次が後に続いてい

る

次の家に運び込むため、 恭也がアパートに残してきた荷物を、 3人ともついてきたのだった。 とりあえず必要な分だけ零

すが」って言っても、大したものはないんで一人でも大丈夫なんで

スも見ておきたいし」 「いいじゃない。 将来一緒に住むとなればあんたの部屋選びのセン

と霧江。

·って、ただの激安おんぼろアパートですよ?」

言いながら、 昨日零次に言われたことがどうしても気になり、 背後をちらりと見やる恭也。 二人の様子を確

認する。

ついてくる頼子。 別段何かを警戒しているふうでもない零次と、ニコニコしながら

店でのやりとりといい、 この二人の間にいったい何があるのか、 仲が悪いようには、 とても見えなかったからだ。 今の彼には想像もつかなかった。 先ほどのレンタルビデオ

「いいじゃない。それでも参考にゃなるわ」

「そうですか?」

答えながら、前を向きなおす恭也。

零次が頼子のそばに居る今、自分か彼女の動向に注意する必要は

ないはずだ。

談笑しながら歩いてゆく四人。

その彼らに、鋭い視線を向ける影があった。

長い.....黒髪の女.....

ぎらり、と銀色の刃は鈍く光る。

?

彼女は立ち止まり、背後を振り返る。真っ先に気づいたのは、頼子だった。

どうした?」

数歩遅れて零次も立ち止まり、 振り返って頼子の隣へ。

いえ、今何か.....」

「どうしたんです?」「なになに?」

次の瞬間。 続いて霧江、恭也もその足を止める。

「「危ない!」」」

同時に叫んだのは、霧江、頼子、零次の三人。

付かなかった恭也を道路側へ付き飛ばし、その反動を利用して自身 も反対側へ跳躍。 頼子と零次は道をあけるように左右へ跳び、霧江は一人それに気

その瞬間、 突風が四人の間を突き抜けるように吹いた。

「……ッ!」

歩道に、鮮血が飛び散る。

を舞っていた。 恭也を突き飛ばした霧江の左腕が、 肘のあたりから切断され、 宙

·マスター!?」

腕がゴトリと落ち、恭也が叫んだ。

「騒ぐな!」

血液がまるで鎖のようにつながり、 傷の断面を落ちた左腕に向ける霧江。 落ちた腕はロケットパンチを

引き戻すようにあるべき場所へ戻る。

あ、そっか大丈夫なのか」

ほっと胸をなでおろす恭也。

落ち着いてる場合でもないけどね.....もっかいくるわよ!伏せて

霧江は地面に根を張るようにどっしりと構える。 霧江の声に、 あわてて頭を両手で覆いながら、 地面に伏せる恭也。

再び突風。

同時、 霧江は何かを掴むようにその右腕を振るう。

轟、という音と、再び鮮血。

霧江の右腕に、 鋭い刃物を通したような真っ直ぐな傷がつく。

「くそっ!」

振り返る霧江。相手の影は、もはや遥か先だ。

なんです、今の!」

恭也が身を起こす。

多分、 『切り裂き魔』 よ!昨日のニュースに出てた」

霧江が、 自身の傷を再生させながら、 握っていた右手をぱ、 と開

その中には茶色い毛が三本ほど掴まれていた。

「これで、なんとか追えない?」

「任せてください!」

取り出す。 Ļ 頼子がカバンから例のルー ズリーフ入りのクリアファ イルを

取ると、髪を地面に置き、その上に茶色い毛を乗せた。 その中の一枚を取り出し、 頼子は霧江の手から毛の一本をつまみ

' 追跡術式、起動!」

体に変わった。 頼子がその上で手を翳すと、その毛が浮き上がり、 紙には時計の文字盤のようなものが大きく描かれている。 丸い小さな球

中へ移動を始めた。 球体は一度『 4 の数字の上に移動すると、 そのまま少しずつ真

・なるほど、 その時計はこの島ってわけか」

体が変化した毛の持ち主を表している。 その紙の上の図は、時計の文字盤がこの島全体を表し、 小さな球

頷くと、 頼子の説明を待たずに、いち早く気づいた零次は納得したように 霧江の方へ顔を向けた。

「霧江!」

「わかってる」

1 クロスのセッ 言われる前に、 トを済ませていた。 霧江はクロス・ガンを引き出し、 すでにブラッデ

Standby

変身!」

空中に向け、引き金を引く。

全身に纏わりつく赤い膜が、 霧江をヒーローに変える。

霧江に中継してくれ。 眷族ならテレパシーが使えるな..... 志木君!やつの位置を

頼子は術式の維持を頼む」

は、はい」

「了解しました!」

恭也は緊張気味に、 頼子は微笑みを浮かべながら答える。

でもどうやって追う?むちゃくちゃ速いわよ相手」

゙ああ。こいつを使え」

り出し、 そう言って、恭也は、 霧江に手渡す。 ポケッ トから小さな電卓のような装置を取

......?なにこれ」

一見横長の電卓のようだが、それにしては妙に分厚く、 裏にはべ

ルトに固定するためのクリップが。

rキーが付いている。 表には3×3列に並んだ数字キーと、 その右側になぜかEn t e

だ 「それは『アイテムボックス』... そいつで5、 0でエンター

「こう?」

全身に絡みつくように走る。 すると装置の側面から何筋もの黄色い光のラインが走り、 言われた通り、 数字を押し、 エンター。 霧江の

゙ おお、これって.....」

に包まれていた。 光はすぐに形を成し、 それが収まると、 霧江の体は真黒なコート

アレかよ!..... でもこれなら追いつけるわね」

ウマを植え付けた、 島に来た初日、 高速で逆さまに流れてゆく景色で霧江に軽いトラ あのアイテムである。

それと、9、6、3だ」

. ん

ように装着されていた。 光が消えると、 白い光のラインが、右の籠手に纏わりつく。 今度は9、6、 3でエンターを押す。 右籠手の甲の部分に、 白い十字架が埋め込まれる

「これは?」

拘束するためのモンだ。 殺人級の犯罪を犯した妖魔 おっ し ! 体力を削った後、 警察はヴィランと呼んでる そいつで思いっきり殴れ」 を

左側に、 丁度反対側になる位置だ。 霧江は『アイテムボックス』 クリップを挟んで固定する。 をコートの内、 クロス・ ガンのホルスターと 腰に巻いたベルトの

ガチリ、 コートの内部、 と霧江は両手のこぶしを打ち合わせる。 強い風が渦を巻いた。

飛行術式起動、 最高速度.....行くわよ切り裂き魔!」

び立った。 り数段出力アップした『空飛ぶコー 残った零次たちを吹き飛ばしかねないほどの轟風と共に、 <u></u> を纏った霧江は、 大空へ飛 以前よ

第四区上空、200メートル。

魔力を込めれば込めるほど早く飛べる『空飛ぶコート』 島の中央、スフィアタワーに向かって、霧江はまっすぐに飛ぶ。

に担がれて跳んだ時よりも数十倍のスピードを発揮していた。 容量が大きい霧江が全力で魔力を注ぎ込んでいるため、 以前のものより出力は上がっており、加えて吸血鬼であり魔力の 最初に零次

頼子の術式飛ばされたりしてない?」 ねぇ、 勢いで思いっきり吹っ飛んで来ちゃったけど、 さっきので

そのスピー ドの中、 全く噛まずにしゃべる霧江。

とりあえず、大丈夫みたいです』

霧江の脳内に直接恭也の声が響く。

けた『血族』 今回はその有効的な活用法といえるだろう。 彼らのように、 であれば、 親 吸血鬼同士は離れていても会話が可能だ。 子 の関係にはなくとも、 同じ血を分

そう。で、このまま真っ直ぐでいいの?」

『はい。高度もそのままで』

じ高さで浮きながらその中心まで移動していた。 頼子の追跡術式の図面上、 離れた位置にある黄色と赤の球が、 同

える。 赤いほうが少しだけ早く、どんどん距離を詰めてゆくのが良く見

彼女の追跡術式の強みは、三次元的に相手を追跡できることにあ

んですが」 「とりあえず道路の上で、 ってのはアレなので何処かに移動したい

地 上。

せるトレーのように両手で水平になるよう持ち、 口見回していた。 頼子はその術式が描かれているルーズリーフを、 周囲をキョ ロキョ まるで料理を乗

それならさっきテラス席のある喫茶店があったぞ」

と、もと来た道を指さす零次。

「こちらは今から喫茶店に移動します」

『楽しそうだなオイ』

報告する恭也、怒ったような声で答える霧江。

.....ま、いいんだけどね」

再び空中。

間もなく第零区との境界に突入する。

『しかし相手も相当早いですねコレ.....』

「問題ないわ。もう見えてる」

その距離はまだ一キロほど離れているが、 霧江の視界には既に相

手の姿が映っていた。

といっても、はっきりは見えない。

できた。 唯一つ、長く茶色い尾のようなものを引いていることだけは確認

1 :

「まだこっちには気づいてないわね。 このまま一気に捕まえてやる

そう言って猛禽のように狙いを定める霧江。

ಠ್ಠ

く、と丈の合っていないコートの袖の中で、

その右腕を握りしめ

そうやってじりじりと間を詰めてゆく。

相手との距離はあと200メー トルにまで迫っていた。

その時、

!気付かれ……え?」

 \neg

瞬

に折れ、 前方から視線を感じたかと思うと、 そのまま横にまっすぐ飛んで行った。 相手の影はそのまま直角に左

(曲がりやがった!)

逃がすまい、 しかし..... と霧江も急いでその方向を転換しようとする。

あ、あれ?ちょちょちょちょ.....!」

曲がれない。

霧江はそのまま無駄に数百メートル真っ直ぐ飛んでしまう。

ちょっと!曲がれないんだけどこれ!」

減速。 再開した。 霧江はコートに通した魔力を切り、強引に風の噴射を停止させて 急いで方向を変え、 相手が逃げた方へ向って再び風の噴射を

'.....《仕樣だ》だそうです』

テレパシーで兄の伝言を伝える恭也。

おーけー、死ねっつっといて」

追跡再開。

(速度はこっちが上だけど、 小回りは圧倒的にあっちじゃない!)

とさない急カーブに対応しきれず、 その繰り返しで、 霧江はすぐに追いつくことができたが、相手のスピードを全く落 相手との距離がだんだんと離れていくようだっ また離されてしまう。

やばいですよ』 『頼子さんの術式の持続可能時間はあと5分です。 逃げ切られると

恭也の声は焦りを帯びていた。

「わかってるわよ!」

声を荒げる霧江。

ともかく、5分以内に何とかするしかない。

こうなったら一か八か.....!」

今度は左に折れる。再び相手に接近する霧江。

うおおおおおおおおおおおおっ痛ってぇええええええええ!!」

曲げる。 常人なら体が真っ二つになりそうな勢いで、霧江は体を思い切り

そのまま強引に戻し、方向転換。

「つしやあ!」

ヘルメットのシールドの下で涙目になっている霧江。

「不死者でよかったって今ものすごい思う」『だ、大丈夫ですか?』

痛みはあっても肉体的ダメージはすぐに回復できるため、 実質無

傷

び霧江に送った。 急カーブに対応してきたことに焦ったのか、 相手はその視線を再

直後、急降下。

恭也の『あっ!』という声が頭に響く。

'問題ないわよ!」

影を追って、霧江も急降下する。

7 ちょ、 ちょっと!乗っちゃだめですよマスター

きい。 曲がれた、とはいえそのカーブはスムーズとはいえず、 膨れが大

デヴーは必至だ。 もし地上スレスレで急上昇なんてされた日には霧江と地面のラン

そして予想通り、 相手は地面すれすれで方向を変え、 急上昇。

'甘いんだよ!」

待ってました、 とばかりに、 衝突寸前、 風の噴射を切ると同時に

右の拳を地面に向けて打ち付ける霧江。

反動で浮き上がった霧江は、 轟音と衝撃が周囲を襲い、 地面に巨大なクレー 空中で強引に姿勢を変え、 ター ができる。 コートに

再び魔力を流し、追跡を再開する。

゚ひ、人がいたらどうするんですか.....』

恐怖と焦りと安堵の入り混じった声で恭也がつぶやくのが聞こえ

「そんときは別の手で行ったわよ」

答えながら、 しかし相手は予想外の動きに出る。 この分ならすぐに追いつける、 と思った霧江。

!!

 \neg

しかし上下左右そのどれでもない。相手は再び方向変換。

(向かってくる!)

相手は180度方向転換。

霧江に向けて、真っ直ぐに突っ込んできた。

(そっちがその気なら !)

応じるように、 右手の指をパキパキ鳴らしながら、直進する霧江。

『マスター!』

恭也が叫ぶ。その瞬間、交錯。

「..... つ!」

同時に、 相手は激突の寸前、その線をずらし、霧江の真横をすり抜ける。 真正面からのぶつかり合い、という霧江の思惑は外れた。 その長い尾で巻きつけるように霧江の全身を撫でた。

しかし、 切断される『空飛ぶコート』 やられっぱなしで終わる霧江ではない。

!!!

霧江はここで初めて相手の姿をはっきりと見る。

女だ。童顔で、茶色く、縮れた髪。

体は小さく、白いワンピースに身を包んでいる。

ここまでなら普通の人間と大差ない。

彼女の最大の特徴は、その長い尾だった。

茶色い毛におおわれ、 下向きの銀色の刃が一体化しているその尾

を、霧江はその右手でしっかりと掴んでいた。

せっかくだし、このまま地上までご一緒しようじゃない!」

ヘルメットの下に浮かぶ邪悪な笑み。

霧江は握る力を強くし、 背筋に寒気を走らせ対応が遅れた少女と

共に、自由落下した。

ちょっと休め」 よし、俺は落下地点に向かう。 志木君は警察へ通報。 頼子は

「わかりましたー」

に突っ伏す頼子。 追跡術式を切り、 だーっと、だらけた様子でテラス席のテーブル

るということは、 魔力も体力も似たようなもので、長い間魔法を使いっぱなしにす 長距離走と同じようにかなりの疲労感を与える。

じゃあ俺は、店の人に電話を借りてきます」

と、席を立つ恭也。

なんだ、 携帯持ってないのか君。 いいよ おれのを使え」

言って、 零次は自分の携帯をテー ブルに置いた。

あと、霧江にひとつ伝言を頼む」

伝言?」

「ああ、アイテムボックスに

って零次はその場から走り去った。 零次は伝言の内容を恭也に伝えると「 じや、 後は任せたぞ」と言

......マスター、大丈夫でしょうか」

言いながら、携帯を操作する恭也。

大丈夫ですよぉー、 私たちはできる限りやったんですから、 いんです」 なんたって霧江さんですし。 後は安心して待ってれば

頼子は顔をあげて、にっこりとほほ笑んだ。

衝擊音。

ている。 もともとは小さな噴水があった場所には、 ビジネス街中央の、 二人が落下したのは、 小さな公園だった。 第零区南東部。 今はクレー ター が出来

いた。 の中央に、 変身したままの霧江と相手の少女は倒れて

局二人ともまったく同時に地面に激突してしまったのである。 こうなると、 空中でどちらも相手を下敷きにしようともみ合っているうち、 先に立ち上がるのはその生命力、 回復力から必然的

...... はぁー、流石に、体中痛いわ」

に霧江ということになった。

霧江は立ち上がり、右肩をぐるぐる回しはじめた。

無事ですか?マスター』

 \Box

恭也の声。

心配してくれているらしい。

全く、不死身だと何度言えばわかるのか。

そう思いつつも、霧江の口元は緩んでしまう。

「ええ、とりあえずはね」

ムボックスに0、 『それなら良かった......それで、零次さんからの伝言で、 000? Ő 0と入力しろ》とのことです』 《アイテ

クスのキーをたたく。 言われた通り、霧江はベルトにつけたまま、左手でアイテムボッ

左下の方に、 すると、 ヘルメットのシールド内側、 『顔認識システムオン』と表示された。 視界の邪魔にならないよう

うです。 それで、 オフにしたいときはもう一度同じ番号を入力、 顔を見ただけで市役所にある登録データと照合できるよ だそうです』

へえ.....」

相手の少女を見下ろし、顔を確認する。

すると顔の周辺にカーソルが表示され、 左下の文字が『照合中...

:』に変わった。

ドの左半分に少女のものらしいデータが表示された。 そのまましばらくすると、 それが『検索終了』 に変化し、 ١ الا

平坂中学一年.....伊達マカ.....妖魔ランクC、 種族は『鎌鼬』::

だった。 他にもいろいろ表示されていたが、 種族さえ分かれば十分だ。 霧江には特に必要にないこと

ずいぶんハデなカマイタチだったわね.....」

気絶しているようで、ピクりとも動かない。 霧江は表示を消すと、 改めてその姿をまじまじと見る。 どうやら

..... 死んでないわよね?流石に.....」

そのまま身をかがめ、 右手でその少女の肩に触れようとして、

. !

ガガガ、と三発。

その右籠手に衝撃が走った。

衝に目を離した一瞬の隙に、 少女の姿は消えていた。

クソっ!」

思った以上に、 敵の体は頑丈だったらしい。

と霧江は苦虫を噛み潰す。

自身の長い尾をスプリングのようにぐるぐる巻きにし、 て衝撃を和らげていたのだった。 実は、霧江は知る由もないことだが、 地面に激突する瞬間少女は それを使っ

しかし、どうやら彼女は逃げたわけではないらしい。

カンカンカン、と、霧江の左籠手、 右脚甲、 ヘルメット後頭部に

る

数秒遅れて、 今度は装甲のない左太もも、 右肩、 背中に裂傷が走

アハハ」

まだ幼さの残る笑い声。

許さないから!」 「痛かった……すっごく痛かったわよ…… !もう許さない、 絶対に

鎌鼬の少女の声が、 霧江の周囲からこだまするように響いてくる。

殺してやる!黒髪の女..... ッ ! !殺してやる!

霧江の傷はすぐに再生するが、 再生したそばから再び切られてゆ

刻んでゆくのだ。 鎌鼬の少女は霧江の周囲を回るように飛び、 すれ違いざまに切り

それも、 ものすごいスピードで。

時たま装甲をかすめてゆくのは精度の悪さゆえか。

しかし次第に再生が間に合わなくなってゆく。

霧江はなんとか捕まえようと手を振るうが、 しかし掴めない。 知

覚が出来ていないわけではない。

動きが複雑すぎて追い切れないのだ。

飛びまわる蚊を素手で対処することを想像するとわかりやすいか

もしれない。

く違う場所を悠々と飛びまわっているアレと同じである。 もっとも、厄介さと危険度は蚊の数万倍だが。 掴んだ、と思って手を見てもそこに死骸はなく、 顔を上げると全

「ふ、くふ。遅い遅い遅い遅いおそーい」

(くそ、このままじゃジリ貧だ)

再生が間に合わなくなってきたといっても、まだまだ命の危険に

はほど遠い。

かく痛いのだ。 しかしこのまま好き放題切られてやるのも面白くなかった。 とに

何か捕まえてやる方法はないか、と考える。

先程表示されたデータを思い返してみると、 一つあることを思い

出した。

も簡単に乗るかも) (..... そういや、 まだガキだよなこいつ.....だったら、 安い挑発で

おい、伊達」

霧江が名前を呼ぶと、 ぴたり、 と攻撃の手が止む。

「..... なによ」

なんでそんなに黒髪が嫌いなわけ?」

.....

しばらくの沈黙の後、攻撃が再開される。

「 つ!」

じむ。 攻撃は先ほどよりも勢いを増し、 霧江の赤いスーツに赤い血がに

カみたい!大っきらい!」 嫌 い : レン、ちゃん?」 私の、私のレンちゃんをとったあの女!日本の女は黒髪って、 ...嫌い!キライ!キライ!キライ!

バ

ふたたび、攻撃の手が止まる。

「私のカレよ!」

ガクー、と、 霧江は思わずすっ転びそうになった。

(な、 そんな理由で通り魔殺人って!一昔前ののキレやすい若者か

れ果てる霧江。 なんつうガキだ、 と自身と3年しか違わない少女に対し内心あき

まぁ、いいわ

霧江はこのスキに、 とヘルメットをはずし、 投げ捨てる。

ふぁさ、と、彼女の黒く艶のある髪が広がる。

-!

ったらどうなのよ」 そんなに憎いならチマチマした攻撃せずに、 一気にスパーっとや

殺す ! コロスコロスコロスコロス!」

اح

その瞬間少女の気配が消える。

だが殺気は十分に残っていた。

(うわ、ホントにすげー簡単に乗った)

と、さらにあきれる霧江。

迫りくるは、鎌鼬の少女、その最大の一撃。

その速度に、音も衝撃も付いてこない。

全てはとどめの後に起きる現象。

何人たりと止めることのできない、超神速の斬撃。

それは、 あっと言う間も与えずにその長い黒髪ごと霧江の首を跳

ね飛ばす。

はず、だった。

残念。私の髪は特別製よ」

⁻ う..... そだッ!」

たとえ鋼鉄だろうが難なく切り裂くはずの彼女の斬撃。

しかし、それはいとも簡単に止められた。

切り裂く鎌へと形を変えた少女の両腕は、 今霧江の髪によって絡

め取られている。

霧江は彼女の最強の一撃を、 その髪で止めたのだ。

の反射神経をもってすれば捕まえられる。 くら早かろうと、どこから来るか見当が付いていれば、 吸血鬼

のラグもなく自由自在に動かせる髪なら尚のこと。 それが腕や足ではなく、 彼女の意のまま、 その思考の通り、 微塵

斬撃を止めれば、衝撃は力づくでどうにでもなるのだ。

ているのは最高の器用さだった。 吸血鬼にとって腕や足が発揮するのが最強のパワーなら、 髪が持

、ようやくあなたを捕まえられたわ」

みつく。 霧江の髪は少女の腕から肩へ、 胴へ、 鋼の硬度を持って全身に絡

· うらやましいでしょう?便利よこの髪」

「くうううううううう!!」

少女はギリギリギリギリと歯ぎしりする。

死ね!死ね!死ね!シネシネシネシネ!」

殺す。 から『死ね』 に変化したことを鼻で笑う霧江。

言葉の変化は心境の変化。

彼女はすでに敗北を、心の中で認めている。

その心はもう折れた。

あとは、片付けるだけだ。

ブン、と頭を頷くようにに降る。

に打ち上げられた。 少女はさらに長く伸びる霧江の髪に縛られたまま、 勢いよく空中

こぶしを突き上げ、 真上に来たところで、霧江は勢いよく髪を引き戻す。 少女の鳩尾に、 突き刺すように撃った。 同時に、 右

ぁ ぁ ああああああああああああああああ

あああああ!!!」

その瞬間、少女の体が変化する。

彼女は叫びながら、溶けるように、霧江の右籠手に埋め込まれた

白い十字架に吸い込まれていった。

白い十字架が真っ赤に染まると、少女の体は跡形もなく消滅し、

十字架がカランと音を立てて地面に落ちた。

第十六話 思いはそれぞれに。

「 また随分派手にやったなぁ 」

同時に、零次が呆れ顔を浮かべながら歩いてくる。 戦闘が終わるころを見計らっていたのか、 霧江が変身を解いたと

置いてきたのか、レンタル屋の袋はその手になかった。

彼の視線は公園の中心となっている小さな噴水があった場所に注

がれているが、被害はそれだけではない。

な。 きた霧江の目に飛び込んできたのは、 戦闘による緊張状態が解け、 改めて周囲を見回す余裕が生まれ 切断されたベンチや倒れた木 7

公園の、 ビジネス街の中心でオアシス的な役割を果たしてきたこの小さな 変わり果てた姿だった。

流石に表情を凍りつかせてしまう霧江。

いやいや、 私じゃないのよ?こいつ!ほとんどこいつのせい

たブラッディクロスと殆ど同じものだということが分かる。 その真っ赤な十字架を改めて見ると、霧江が自身の妖力を封印し 唯一の違いは、 と言って、地面に落ちていた十字架を拾い上げる。 赤色が若干くすんで見えるということくらい

ああ、 っていうか兄貴、これって本体ごと封印できたの?」 そいつは量産品だからな。 むしろ本体ごとでないと封印で

俺としては失敗作なんだが.....それでも使い道はあるもんだ

言いながら、 霧江から鎌鼬の少女のブラッディクロスを受け取る

.....?生きてんの?」

そりゃ、ただの封印だし、ちゃんと生きてるよ。

しかるべきツールに繋げば意思疎通もできる」

ああ、 何それすげぇ!..... もしかしてそのまま取り調べとかやんの?」 裁判もな」

だ。 思ったよりもこの兄は、島にとって重要な人間になっているよう ふえー、 と、霧江は関心半分呆れ半分といった声を上げる。

来ていた。 そうこうしているうちに、 公園の回りにパトカー が数台集まって

たという感じだ。 サイレンはなく、 現場に駆け付けたというよりは事後処理に現れ

びは彼と頼子に任せよう」 「さぁて、 今日はこのまま警察、だな。 志木君には悪いが、 荷物運

「えー、 私も警察行かなきゃダメ?」

だめ。

っと話ししてもらうだけだから」 悪党相手だって適当に暴れるだけなら犯罪者と変わんねー だってお前報告書書かないだろ? ち

その逆の手で、 零次は霧江に背を向け、 ほら行くぞ、 片手で十字架をポケットに仕舞い とでも言うように合図を出す。

.. 案外めんどくさいんだな!ヒーローってのも」

その後に、 渋々といった様子で霧江は続くのだった。

男は松居刑事の部下で、風森と名乗った。はなく上にパトライトを乗せた黒い車に乗せられる。 二人は警察署から迎えに来たという男に、 *】* マル のパトカーで

連続切り裂き魔事件の担当捜査官らしい。

ゃ ったもので、 いやー、 助かりました。 実はヒヤヒヤしていたんです」 捜査が進展せずについに死者まで出しち

ていないだけのボサボサな髪型をしていた。 彼は車を運転しながら後ろの席の霧江たちに話しかける。 頬がこけていて、黒のセミロング……というよりただ散髪に行っ 風森刑事は二十代後半.....零次と同じくらいの年齢で、 やせ形。

でもコレでとりあえずボクの首は飛ばすに済みそうです.....っと、

すみません。 今のはナシで」

たが、 被害者の首が跳ね飛ばされたことにかけた彼なりのジョー 流石に不謹慎すぎると気付いたのかあわてて取り消す。

例の改革で、 しっかし、 しかも原因がただの痴情のもつれっていうのは.....」 怖いですね。 妖魔の教員もいなくなりましたからね」 まだ13歳の女の子なんでしょう?

ふう、 と零次はため息をひとつつく。

あ るかもしれないですね。 なるほど。 人間じゃ妖魔の子を指導しきれなかった、 というのは

公職が人間だけじゃやっぱり限界が来る。

罪はいくらでも起っちまいます しし くらヒー ロー計画を立ち上げたところでこのままじゃこんな犯 って、 **क्** すみません」

Ĺ 話している相手がそのヒーロー本人と計画者だということに気づ 慌てる風森刑事。

俺たちがやってるのは街の延命措置でしかないんだ」 いや、 その通りですよ。 結局根本的なところをなんとかしないと、

彼の意見はこの計画に関わる人間誰もが抱いている感想だった。

間で何度も出 私としてはやることがなくなるのはつまらないけど、 流石にただ道を歩いてるだけで殺人級の凶悪犯罪に、 くわすって現状は勘弁してほしいわ」 こんな短期

たっけ」 「そう言えば、 この間の爆破事件の犯人を捕まえたのもあなたでし

霧江の嘆きに、風森刑事が答える。

に巻き込まれるのは珍しい.....災難でしたねぇ 確かに治安の悪い街ですけど、そんなに短い期間で何度も大事件

あれ?そうなの?」

霧江は目を丸くした。

あはは、 私はなんかコレがこの街のデフォなのかと思ってた」 流石にそんなわけありませんよ」

腐っても日本。笑い飛ばす風森刑事。

確かに治安が悪い街だが、そこまで無法地帯でもないのだ。

ローも行く先々で事件に巻き込まれるもんだ」 ヒーローだからな。 探偵が行くところ事件が起きるように、 ヒー

うげー、 超嫌なんですけど」

対して霧江はガクンと項垂れた。 うんうんと頷く零次。

:... ま、 三回目があれば注意した方がいいな」

え?」

零次のセリフに、 霧江は顔を上げる。

偶然が3回も続くことは滅多にない。 となれば、 どっかに必然性

があるかもしれないってことさ」 つまり.....どういうことよ?」

と霧江は首をかしげる。

「誰かがお前の回りで事件を起してる.....かもしれない」

貴なんだけど。だとしたら一番該当しそうなのはヒーロー計画の当事者の兄

たせる、 私に事件を解決させまくることでヒーロー 的な感じで」 の必要性に説得力を持

霧江は目を細めて零次に冷たい視線を送る。

ないだろ!?」 いやい やいや!そこまではやらんて!つーか、 まだ三回目起きて

起きなかったらむしろ兄貴の仕業説が濃厚になるわね そういうことなら、 今のセリフで起きても結局俺のせいフラグ立ったじゃねぇか」 逮捕は俺と松居刑事に任せてくださいよ」

と、風森刑事。

「おまっ!」

あっははは!ノリ良いわね風森刑事」

笑う風森と霧江。

憮然とした態度をとりながらも苦笑を浮かべてしまう零次。

三人を乗せた車は、 間もなく天壌所に辿りつく。

ょ マスター、 今日はこのまま報告やら何やらで警察だそうです

「あらら。仕方ありませんね」

一方そのころ恭也と頼子。

たレンタル屋の袋。 テーブルの上には零次が置いて行った、 頼子はもう回復したようで、姿勢を正してコーヒーを啜っている。 二人はまだ喫茶店のテラス席に座ったままだった。 中身がパンパンに詰まっ

ね 「このまま三号と二人っきりでいても仕方ありません。 私帰ります

と、さらりと言ってのける頼子。

「まぁ、俺はそれでもいいんですが」

どうせ運ぶ私物の量はたかが知れている。

のだ。 もともと四人で来る必要はどこにもなく、 自分一人いれば十分な

ために時間を潰さなくてはならないが。 ただし、 零次の家の合いカギをまだ持っていないので、 彼を待つ

心象を悪くするじゃないですか」 「...... 冗談ですよ、 三号一人をほったらかしにしてたら霧江さんの

ッコミを飲み込みつつ(実際悪くしている様子はないし)恭也は「 そうですか」とだけ答えた。 その嫌がらせのようなあだ名では心象悪くしないのかよというツ

....

恭也のその返しに、むっとする頼子。

一三号、 人きりで過ごせるんですから。 たとえ同期が不純であれ、 私のような容姿端麗な女子と二

しまってんですか?」 もう少し嬉しそうな顔をしたらどうなんです?本当にもう枯れて

はしませんけど」 「まだ枯れてませんて!.....自分で容姿のことを言いますか。 否定

ふう、 と一息ついて、 彼は先ほど注文した紅茶に口をつける。

どうせ自分のことを見てくれないんなら、 期待するだけ無駄

は 「そこまで霧江さんばかり見てるつもりもないんですけどね.....私

頼子はコーヒーカップをソーサーに置く。

とか宿命めいたものがあるんですよ」 「まあ何と言いますか、私と霧江さん の間には生まれながらの運命

「ヒーローの相棒として、 ですか?」

それもありますけどね」

と、頼子は笑みを浮かべる。

どこか、 自嘲じみた笑みだと恭也は思った。

呪い?」

どちらかといえば、

呪いに近いかもしれませんね.

呟くような頼子の声を、 恭也は聞き逃さなかった。

なんでもありませんよ」

言って、頼子は首をゆっくりと横に振る。

さて、 折角ですし、 ここでお昼も食べていきますか」

そう.....ですね」

もなりかねないとも思ったからだ。 たからであり、追求すればきっと、 それは今の頼子がかつてないほどの影を背負っていたように見え 恭也は頼子の今のセリフについて追及したかったが、 彼女の心を抉ってしまうことに やめた。

を傷つけにい 確かに何かしらの闇を抱えている様子は窺えるが、 くような人間ではない。そう思えたからだ。 自分から他人

る目だけは持っているつもりだった。 たない人間のように思われることもしばしばだが、 恭也は状況に流されやすい節があり、 周りからは自分の意見を持 しかし、 人を見

てくるが、それでもいいだろう。と彼は思っていた。 わけだし、可能な限りはそうするつもりだった。 ただ、 そこに警戒心や敵意が介在しなければ、その行為の意味も変わっ そんな彼らの肌に、 目を離すなというのは零次が部屋に住ませる条件でもある 冷たい風が吹きつけた。

· ちょっと肌寒いですね」

もう四月だというのに、 恭也がつぶやく。 春の温かみは感じられない。

昨日雨が降っ た後ですものね。 何か温かいものにしましょうか」

そう言って、頼子はメニューを開いた。

か?」 「それで、 例の吸血鬼事件の方はどうなってます?何か掴めました

「ぜーんぜん。昨日は影も形も見せなかったし」

刑事の問いに、霧江が答える。

う午後4時を回っている。 内にある休憩所に座りながら、 り裂き魔』 捕縛に関する報告を行っ 松居刑事と話をしていた。 た後、 霧江たちは警察署 時計はも

明日あたりまた来るかも、 一昨日は向こうから接触してきたような感じだったから..... と思ってんだけど」

んに接触した理由」 「ふゥむ……。しかし何なんでしょうね、 ヤツが向こうから霧江さ

ったみたいだし」 「単純に目障りな私を始末したかったからじゃない?殺す気満々だ

霧江は解釈していた。 その急所を狙ったということは、 吸血鬼であっても、 言って、 霧江は自身の左胸のあたりを撫でた。 心臓を射抜かれれば普通は死ぬ。 明確な殺意があったからだ、 لح

んでしょう」 ぁ 普通の方法では殺せないとわかった今、 ヤツはどうする

てるか。私を殺す方法を探ってるか、 後者だと厄介よね」 私の『眼』 を逃れる方法を探っ

警察の方では何か掴んでないんですか?」

こ零次。

分の首筋の傷に気付かない間抜けな被害者だったらわかりませんが」 恥ずかしながら全く。 三日前から被害も無いですし..... まぁ、 自

松居刑事は頭を掻きながら答えた。

ぶすってのもアリでしょう」 「まぁ、 まだ今日入れて五日もあるし、 最悪満月の日に直接叩きつ

と霧江が言った。

すがね」 事件を察知しつつ未然に防げなかった警察の評判はガタ落ちしま

ばそうするしかないだろう、 苦笑いを浮かべる松居刑事だが、このまま何の手がかりもなけれ とも考えていた。

ておかなければならないだろう、とも。 そうするなら警察として、霧江を支援する体制を早いうちに整え

では、 今日のところはこのくらいで。 お疲れ様でした」

言って、イスから立ち上がる松居刑事。

そうだ、 その背中を、 松居刑事。 零次が呼び止めた。 少し話したいことがあるんですが...

ここじゃあちょっと.....霧江、 ん?まぁ、 いいけど」 お前先に帰っててくれ」

何です?」

す。 不思議そうな顔をしつつも頷く霧江に、 零次は自分の家の鍵を渡

志木君に渡しておいてくれ。 ついでに荷物のこととかも謝っといてくれ」 家に入れなくて困ってる頃だろう。

了 解

答えて、霧江はカギを受け取る。

じゃ、またねー松居刑事ー」

と手を振り、霧江は一人でスタスタと歩いて行った。

· それで、話とは?」

よく知っているのだ。 しかし零次は黙ったままだった。 霧江が立ち去るのを見送ると、 松居刑事は零次に向き直る。 吸血鬼の聴覚、その鋭さを彼は

は話を始めた。 霧江が警察署を出てゆくのを、休憩所の窓から確認すると、

頼子の?」実は、 刑事の娘さんについての話なんですが」

と、すこし驚いたような表情を浮かべる松居刑事。 しかしもっと驚くことになるだろうな、と零次は思った。

「ええ。彼女は実は

?

深夜。

午前三時。

恭也は零次の家の物置で目を覚ました。

......なんか、ひどい夢を見たような......

上半身を起こす。

先程まで何か夢を見ていた気がするが、 はっきりとは思い出せな

かった。

の夢だったから。 たぶん、昔の夢だったと思う。自分にとっての悪夢は、

とができる。最もわかりやすいのが、 その視界に生じた変化。

夜になると、自分がもう人間ではないことをはっきり自覚するこ

真っ暗な闇の中なのに、昼間以上にはっきり物が見え、 色の違い

もよくわかる。

恭也は自身の体に視線を落とした。

寝巻きは、汗でびっしょり濡れている。

「.....ってうわ!なんだこれ!」

顔を拭うと、涙の交じった血で真っ赤に塗れていた。

急いで起き上がり、 洗面所へ向かい、顔を洗う。

そうしているうち、 彼は吸血鬼が棺桶で寝る理由を、 なんとなく

察した。

自ら入ることで、 不死者であり、 仮の死を得ることができるのだ。 死ぬことのない吸血鬼は、 棺桶という死の象徴に

魔されることのない安らかな時間を手に入れる。 故郷の土で育った棺桶の中で仮の死を得て、そうして何物にも邪

邪魔、というのは外から入ってくるものでは必ずしもない。

それは自分のうちからも現れる。

おのれを苛む過去、つらい記憶

いうものに敏感になり、弱くなる。 起きている間は無敵の強さを持っ た妖魔でも、 寝ている間はそう

だから、彼らは昼間に眠るのだ。

己が強くなれる時、 最大限強くあるために。 己が弱くなる時、 誰

にも邪魔されず安らかであるために。

ガチャリ

玄関から音。

鍵をあける音がする。

顔をタオルで拭き、 洗面所から顔だけ出して玄関を窺う。

ゆっくり開くドア。

泥棒か?という疑いは、 すぐにかき消された。

入ってきたのは、 この部屋の主だったからだ。

零次さん?なにしてたんです、こんな時間に」

確か彼は、 俯きながら入ってきた零次は、 自分が寝ようとした時は家にいたはずだった。 その声に驚き、 顔を上げる。

なんだ、 志木君こそこんな時間まで起きてたのか?」

「ちょっと、眠れなくて」

はい。どうも」 そうか。 棺桶はもうすぐ届く。 今のうちだから我慢してくれ」

ええ、風呂に入りたいんだ。 いいですよ。 どうぞ」 洗面所にもう用はないか?」

洗面所と廊下を仕切っているアコーディオンカーテンを閉める。 そこから出る恭也とすれ違うと、 零次は家の鍵を閉め、 靴を脱ぐと早足で洗面所へ向かった。 「じゃあ、 おやすみ」と言って、

(あれ.....?)

恭也は顔をしかめる。

零次とすれ違ったとき、 吸血鬼の嗅覚はそれを逃がさなかった。

(血の、におい.....?)

自分が死にかけた時、 彼はかすかに漂わせていた。 さんざん嗅いだあの鉄くさいにおい。

(零次さん、一体何を ?)

今となっては、

唯一の食事のにおい。

まさか、 兄貴黒幕説が信憑性を帯びてくるなんてね

翌朝。

が飛び出してきた。 恭也が昨日の出来事を霧江に話すと、 霧江の口からはそんな言葉

なんですかその説.....」

場所は、 霧江と恭也は噴水の周りにあるベンチに腰かけていた。 一昨日恭也と頼子が決闘を行った、 女子寮裏の

性を訴えるために、 私の周りで連続で事件が起きまくるから、 兄貴がヒーロー の必要

んと冗談を言ってたのよ」 わざと私に犯罪者をけし かけてるんじゃないかって、 昨日刑事さ

「でも、冗談なんでしょう?」

「万が一、ってことも有り得るじゃない。

夜中に血のにおい漂わせて帰ってきたなんて、 喧嘩し て帰っ

た不良少年じゃないんだから.....絶対何かあるわよ」

「飲み屋で絡まれて、ってセンなら中年でもあり得ますよ」

- 無いわね。兄貴酒飲めないもの」

いつになく真剣な顔だ。言って、霧江は恭也と視線を合わせた。

他に何か無い?兄貴の怪しい言動とか

「そんなの.....」

ない、と言おうとして、恭也の声が詰まる。

一つ、思い当たるフシがあったからだ。

それを言おうかどうか恭也は迷った。

何しろ、この人の親友のことだ。

彼女の親友と兄とが、 何らかのこじれた関係にある。

それを伝えていいかどうか。 迷って、 そして結局、 彼は言うこと

にした。

実は

恭也は霧江に話す。

張るよう伝えたことを。 零次が頼子に対して何らかの疑いを持っており、 自分に頼子を見

「......なんでそこで頼子なのよ」

そう言って、霧江は口を真一文字に結ぶ。

けど.....」 「俺にもわかりません。 私の知る限りでは、 前からの知り合いってんじゃなかったはずだ あの二人、何かあるんですか?」

考え込むように、霧江は頭を抱える。

しかし考えて答えの出るような問題ではなかった。

......それとなく聞いてみましょうか。兄貴に」

霧江は神妙な面持ちで顔を上げ、ベンチから立ち上がった。

「マスター?どこへ?」

「大学よ。兄貴の職場」

そう言って、彼女は空を見上げる。 晴れた空を見て、 嫌な天気だ、 と霧江はひとりごちた。

失礼しまー.....ってあれ?いねぇや」

国立天壌島魔導大学。

魔法工学部棟 5階。

鬼灯零次の研究室。

明かりがついているが、 霧江はドアをノックし、 開けて、 中には誰もいなかった。 顔だけで中を覗き込む。

じゃあ、中で待たせてもらいますか」

と、霧江は勝手に中に入って行った。

ちょ、 うわ、 ちょっと!いいんですか?勝手に入っちゃって」 なんかちっちゃいクモがい

「どうせすぐ戻ってくるでしょ」

中に入って、周囲を見回す。

中は書類やら何やらで散らかっていて、デスクと、 本棚が幾つも

置いてあった。

本棚には魔法工学の歴史について著された書物や、 何かの図面を

綴じたファイルが数多く並べられている。

.....?なんじゃこれ」

が細長いゴム紐だった。 霧江は、 掃除に使うハタキか何かかと思って紐に触れてみると、 短い取っ手の先に、50センチほどの長い紐が何本も付いている。 部屋の隅に無造作に転がっていた何かを拾い上げた。 一本一本

それ、ムチですよ多分」

「ムチ?これが?」

無数のゴム紐が、しなやかに撓る。霧江は軽くブン、と振るってみた。

れでは大したダメージを見込めそうにない。 はて、ムチといえばもっと長くて太いものだと思っていたが、 こ

ヒーロー用の新しいアイテムとか?.....それっ!」

恭也の肩に当たると、バチーンと良い音が鳴った。 今度は恭也に向けて軽く振るってみる霧江。

「ちょ いや、 何するんですか!?」 なんか手に馴染むなと思って。 ていっていっつー

バチーンバチーン

痛い地味に痛い!」

肩をかばって腕でガードするが、 腕の方がむしろ痛かった。

「ふっふっふー!ここがええのんかー?」「ちょ、霧江さんやめてくださいマジで!」

い続けた。 何か妙なスイッチが入ったらしく、 霧江はムチをブンブンと振る

その時.....。

失礼しまーす」

Ļ ノツ クの音と同時に、 部屋の扉が開けられた。

おらもっと叩いてやろうかァー マスター つ!ちょ、 ŧ 誰か!誰か来たから!」 !?

立っていた。 部屋の入り口で、 本当に気付いていなかったのか、 一人の少女が顔を真っ赤にして口元を押さえて はっとして、 振り返る霧江。

髪は赤く、 ふわふわロング。

る

明るい緑の瞳のその少女は童顔で、背が低く中学生くらいに見え

る耳が、人間のものではなく猫の耳だということ。 何よりも特徴的だったのが二つ、一つ目は髪の隙間から覗いてい

いることだった。 そして、前からでは見ただけでは分かりにくいが、 尻尾が生えて

ゎ わー....」

少女は二人の様子をまじまじと見ていた。

ぁ ち 違うのよこれは!」

何が違うというのか。 はっとして、 ムチを背中に隠す霧江。 ぶっちゃけもう遅すぎる行動である。

え、 あ、 そ、 あの。 そうだけど.....あなたは?」 もしかして教授の妹さん、 ですか?」

まして」 ゎ 私は鬼灯教授の生徒で、 羽月真琴っていいます、 はじめ

かったらしい。 見た目はどう見ても中学生くらいだが、どうやら実際の年齢は高 姿勢を正し、 しかし顔を赤くたまま少女は名乗る。

子供にヤバい所を見られたと思った霧江は少しだけほっとした。

也 は はじめまして。えっと、 私が妹の霧江で、こっちが眷族の恭

「どうも、はじめまして」

と恭也は軽く頭を下げる。

ぁ はい。 それで、えっと.....教授はどちらに?」

恐る恐るといった様子で、真琴が問う。

そう、ですか.....」

猫耳の先がちょっと垂れている。しゅん、と真琴は残念そうな顔を浮かべた。

待ってたら?」 いやでも、 鍵開いてたから、すぐに戻ってくると思うわよ。 中で

「え?でも.....」

いいからいいから。私たちもう帰るし」

そう言って、 そそくさと入口に向かって歩き出す霧江。

え?ちょっとマスター!」

恭也は慌ててその背を追う。

それじゃあね、羽月さん!」

そういって、 部屋から出てゆくと霧江は一目散に逃げ出した。

ちょ、何しに来たんですかマスター!」

恭也は慌ててその後を追いかけた。

け座り込んだ霧江は左手で頭を抱えた。 キャンパスからものすごい勢いで出て、 門を出た先、 塀に背を向

ああー恥ずかしかったー」

それから数秒遅れて、恭也が駆けてくる。

·.....どうします、マスター?」

立ち止まって、キャンパスを振り返る恭也。

今日は、やめよう.....」

そう言って、霧江ははーっとため息をついた。

つ た時ア あれだ、 実際聞いてみて違ったらアレだし、 しよう」 兄貴が実際に何かや

· どれですか」

テレパシー送ってよ。とりあえず今夜、兄貴がまた夜中にこっそり出かけたら私に 使い魔使って追いかけるからさ」

「わかりました.....って、マスター!」

なに?」

突然の恭也の大声に、 霧江は驚いて顔を上げる。

そ、それ、持ってきちゃってます」

と、恭也が指さしたその先。

ぁ

霧江の右手には、 まだ例のムチが握られていた。

深夜一時。

ていたその時、 帰って早々寝たふりをしていた恭也が、 玄関の扉をこっそりとあける音が聞こえてきた。 もう本当に寝そうになっ

...... !マスター!聞こえますか?)

『聞こえてるわ。どうしたの?』

てきた。 女子寮に居る霧江も、 まだ起きていたようで、 返事はすぐに帰っ

(今、出て行きました)

9 使い魔で追跡するわ。 あんたは待機してて』

(はい)

テレパシーを終えると、 恭也は起き上がり、 部屋を出てリビング

て待機することにした。 寝転がったままだと眠ってしまいそうなので、そこでイスに座っ

そうして、待つこと30分。

いいわ、出てきて。兄貴の大学の校門前で落ち合いましょう』

ないことには始まらない、 零次さんの大学?と、 恭也は疑問に思っ と部屋を出た。 たが、 とにかく行ってみ

来たわね」

恭也が辿りつくと、 すでに腕を組んで立っている霧江の姿があっ

た。

兄貴、自分の研究室に入ったわ」

え?じゃあ、 普通に仕事なんじゃないですか?」

いいえ」

霧江は横に首を振った。

今日の昼の会った子と一緒に入ってったのよ」

· え、それってあの猫耳の?」

す。 恭也は昼間に零次の研究室で出会ったあの赤い髪の少女を思い出

ほかの学生かもしれない、泥棒かもしれなかったのに一発で当て それにあの子。 こんな夜中に生徒と二人で学校なんて絶対に何かあるわ。 私を一目見ただけで妹と分かってたでしょ?

た。

つまり知ってたのよ私の顔を」

写真を見たとかいろいろあると思いますが.....」

えない.....直接乗り込むわよ」とにかく、 カーテンが閉められてて使い魔じゃ中の様子が見

そう意気込む霧江の手に、 例のムチが握られていた。

「マスター、それって.....?」

ああ。ついでに返しとこうと思って」

·

ホントに疑ってんのか?というツッコミを飲み込む恭也だった。

魔法工学部棟5階。

うなうめき声が聞こえてきた。 零次の部屋に近づくと、 何かを叩くような音と、女の子の苦しそ

まさか、兄貴、本当に

っぽくて」ッ!そういえば兄貴が好みそうな外見だったわね、 合法ロリ

口を閉じて眉を顰め、 一方恭也は引き攣ったような顔をしていた。 険しい表情を浮かべる霧江。

マスター、 俺なんかオチが見えちゃったんで帰っていいですか?」

「何いってんの」

霧江はクロス・ガンにブラッディクロスをセットしていた。

「私が突入する。バックアップよろしくね」

「行くわよ!」「あの……」

; ;

った。 Ļ 恭也の制止は間に合わず、霧江は零次の研究室のドアを蹴破

てこには.....

そんなこと言って、本当はここが気持ちいいんだろう?」 いやぁ~っ、先生痛い!お尻腫れちゃうぅ~

うう~やだやだ~先生の意地悪う~」

その尻に向かって例のムチと同じものを振りおろす零次の姿。 デスクの上であられもない恰好で四つん這いになっている真琴と、

流石にスパンキングプレイは予想外でした。 b y恭也

「はっ!?」

れる真琴と、慌ててムチを背中に隠す零次。 くしくも昼間の妹と同じ反応である。 凍りついた霧江と、ようやく侵入者に気付き、 デスクの後ろに隠

「お、おまえら何やってんだこんなところで!」

先生それこっちのセリフです。 一方の霧江は、 クロス・ガンの銃口を上に向け、 と心 の中で呟く恭也。 引き金を引いた。

「..... 変身」

「ちょ、マスター?」

..... 恭也、こいつらは敵だ!この私が倒す

言って、本気で臨戦態勢をとる霧江。

うわー!まて、まて霧江!」

慌てて右手を前に突き出す零次。

黙れっ!お前は兄貴じゃない!兄貴の皮をかぶった変態め!ぶっ

殺してやる!!」

わー!マスターストップストーップ!!!

慌てた恭也は背後から霧江を羽交い絞めにする。

うるさい!こんな変態ここで殺さないと駄目だああああああああ

のわあああああああああああああ

とのなかったその性癖をさらすことになってしまうある意味特別な 一夜となった。 こうして、この日の夜は、 零次がが今まで一度も霧江に見せたこ

たのであったとさ。 あらぶる霧江を何とかなだめるのに、 三人がかりで一時間も費や

それで、 あんたたちはいつからこんな関係を続けてるって?」

一時間後。

研究室の床に正座させられている零次と真琴 ちなみに、 ちゃ

んと服は着なおしている。

恭也はと言えば、 二人を見下ろすように霧江がその前に立ち、 部屋の入口の方で座って彼らを眺めていた。 腕を組んでいる。

「だいたい一年半..... この大学に転職して半年くらい経った頃から

霧江の尋問に答える恭也。

流石に敬語である。

「ははー h 読めたわよ。 つまり、兄貴ひとりでこの島に居た二年

間

やなく、 私にメールを殆どよこさなかったのは、 いせ 生徒との不純な淫行に耽っていたせいか!!」 決してそんなことはだな」 仕事が忙しかっ たからじ

勇気を振り絞って真琴が口を開く。 両手を前で大げさに振り、 否定の動作をとる零次。

あの、 私が大学を卒業したら結婚するつもりで、 決して不純な

ı

「ああん?」

ヒッ

彼女を庇う様に零次が言葉を引き継ぐ。 霧江のひと睨みに顔を真っ青にし、 押し 黙る真琴。

でして、 「ええとつまり、 はい 結婚を前提にお付き合いをさせていただいてる訳

「はぁ、 てもいいと」 結婚前提なら真夜中の大学で生徒と教師でSMプレイをし

`いや、そういう訳じゃないんですが.....」

琴の部屋にゆくわけにもいかず、かといってホテル代もなかったの 恭也を住ませることになったために出来なくなり、女子寮である真 で、恭也が零次の家に住むようになってからは毎晩ここに来ていた 要約すると、それまでは零次の自宅でゴニョゴニョしていたのが、

発情期のサルか!?」

憤る霧江と、苦笑を浮かべる恭也。

あれ、 ぁੑ それは.....」 あ昨日零次さんから血のにおいがしたのって..

俯いて、顔を真っ赤にする真琴。

「…………ドン引きだよ!!!!!」「私、昨日まで生理だったので……」

真夜中の静かなキャ ンパスに、 霧江の絶叫が響いた。

もう!本っ当に信じらんない!!二度と兄貴なんて呼ばん!

帰り道。

恭也。 後片付けをするという零次たちを残し、 二人で夜道を歩く霧江と

まぁ まぁまぁまぁ。 人の性癖はそれぞれですし」

まだ怒りの収まりきらない霧江と、 それをなだめる恭也。

性癖云々より!私が許せないのは彼女居るのを黙ってたことよ

紹介くらいしろよあのアホ兄が!」

んでしょう」 「大学生とは いえ教師と生徒ですし、 おおっぴらには出来なかった

かもしれないけど、私にくらい話てもいいじゃ

言って、 霧江は軽く溜息を吐きながら、つまらなそうに俯く。

吸血鬼になると恋愛感情は希薄になるが、その分血族や眷族への

家族愛は強まる。

霧江にとって零次は、 最も近い肉親であり、 その家族愛を一番に

向けている存在だった。

そのことに、 だからこそ、 恭也はしょうがないな、と苦笑を浮かべる。 彼女は彼の不器用さに誰よりも腹を立ててい るのだ。

少し時間がたてば、 ちゃんと仲直りできるだろう。

ああもう!ムカツク!こんなもんのどこがい いのよ!!

۲ 霧江は結局返すのを忘れたSM用ムチを恭也に振るっ

「痛ってぇ!」

背中にクリーンヒットするムチ。

「あのバカ!あのバカ!兄バカ!」

痛い痛い痛い!!」

三連発。

逃げるように霧江から離れる恭也。

「もう!何すんですかマスター!」

うるさい!」

追いかけて、もう一度ムチを振るう霧江。

(あれ.....?)

ムチに目を落とし、首をかしげる霧江。

「もう!酷いですよマスター

..... それっ」

再び振るわれるムチ。

「く、そう何度も!」

避ける恭也。

空を切るムチ。

霧江は恭也を真っ直ぐに見つめる。

ちょっ!!」 恭也、命令よ.....『避けるな』」

涙目になる恭也。何度も恭也をそのムチでしばく霧江。

(......あ、これ、楽しいかも)

そう感じられるのだ。 叩くことが、ではない。 叩いたことで恭也が見せるその反応が、とても面白い。

鬼灯霧江が新しい性癖に目覚めた瞬間だった。

第十八話 流れるは不穏の空気。

件のリミットまであと三日となった。 結局、 零次と頼子の関係を問いただすことは出来ずに、 吸血鬼事

鬼に関する何の情報も入ってこない。 きてしまったからだ。 鬼灯霧江は焦っていた。 恭也を眷族にしてからというもの、 その上、 ついに三回目まで起

私にお任せを」 あの程度の雑魚、 霧江さんが相手するまでも有りません。

特の構えをとった。 そう言って、 頼子は小太刀を抜き、あの左側面を相手に向ける独

頼子の関係を頼子に聞いてみることにした。 昨夜の一件から、零次と口を利きたくなくなった霧江は、 零次と

たくりの現場に遭遇したのだった。 そしてその道中、 その為に今朝、彼女を近所の商店街へ散歩に誘ったのだ。 聞こえてきた悲鳴。 二人が駆け付けると、 ひっ

事件に巻き込まれたのはそうだし、 一応軽犯罪だし、これが三回目とは.....でも歩いてるだけで ああもう!)

だった。 先日の零次の言葉は、 彼の予想以上に霧江の中で響いているよう

からだ、 それは霧江自身が、 というのを、 本能的に感じ取っていたからに他ならない。 何かと事件に巻き込まれるのは何か裏がある

子。 たくり犯を追いかけ、 裏路地の袋小路に追い込んだ霧江と頼

頼子は霧江よりも二、三歩ほど前に出て、 犯人と対峙してい

犯人は、またも少女だった。

既にスーツを装着変身していた霧江は、 アイテムボックスのキー

を叩き、顔認証システムを起動する。

小学生くらいに見える小さな体と顔立ち。

背丈と同じくらいの真っ白な長髪。

小さなケモノ耳が髪の隙間からちょこんと顔を出したその少女は、

真っ赤なワンピースに身を包んでいる。

第十二区、英稜高校二年、根津日子。

種族は火鼠の血を引いた半人半妖。

会った兄の生徒の顔を思い出す。思い出したくない光景まで思い出 見た目と年齢のつりあわない少女によく出会うなと、霧江は昨日

しそうで、ブンブンと首を横に振った。

頼子、 そいつは半妖.....火鼠よ。気をつけて!」

ありがとうございます、霧江さん!」

霧江の言葉に、頼子は笑みをたたえる。

対して火鼠の少女は歯を食いしばって二人を睨みつけていた。

なんなのよあんたら..... !燃えろッ!この

少女の白い髪が真っ赤に燃えあがる。

少女がそれに右手を翳すと、その手が燃え上がり、 燃え移っ

か、バスケットボール大の火球に形を変えた。

少女は頼子に向け、その火球を放つ。

その一瞬、霧江は目を丸くした。

た....!」

少女の表情も驚愕に変わる。

それは一瞬だった。

えていた。 ざん、 少女はそれを知覚できなかっただろうが、 という音と共に、 火球は頼子の左後方へ逸れた。 霧江にははっきりと見

(これが、『絶対防御』の戦い方.....)

恭也との戦いでは見せなかった、『守りの剣』

その一瞬、 飛来する火球に、頼子はその小太刀で斬りつける。

いたのだ。 すると、火球がまるで引きつけられるかのように小太刀に吸いつ

球は刀を振った先、 そのまま刀を振るうと、 後方へ薙ぎ払われる。 その刃に押しのけられるかのように、

「くつ!」

火鼠の少女、その二撃目。

それは頼子を丸ごと包み込んでしまえるような、 先ほどとは段違

いの大きさの火炎。

しかし、頼子はまったく同じ動作で振り払う。

れる。 火炎は、 刀に吸いつく過程でその規模を縮小され、 また後方へ流

彼女の持つ小太刀。

退魔刀『月影』

る力場を発生させるその小太刀。 ひとたび刃を抜けば、 その刀身の周囲に、 魔力や妖力を吸いつけ

火

つ手に負う必要のなかった傷を作ってしまいかねない災厄を呼ぶ刀。 その真価は、 通常ならば、 彼女の技と合わさることで初めて発揮される。 相手の魔法を無意味に引き寄せてしまい、 それを持

三撃見。

ソフトボール大の火球、その数十五。

それぞれが複雑な軌道で放たれ、 頼子の周囲、 全方位から襲いか

かる

しかし、彼女の剣技はそれをも意に介さない。

神速の太刀筋。

捌かれる全ての火球。

その体捌き、そして何よりも、 神の如きスピードを発揮するのは

その左腕。

今ならとても良く理解できた。 霧江は、彼女に対し恭也が魔法を一切使おうとしなかった意味が、

全ての攻撃が無意味に終わり、 唖然とする少女。

頼子はその隙を見逃さない。

右腕に巻いていた布が宙を舞い、少女に覆いかぶさる。

同時、 _ 閃 すれ違いざま、 布の上から横なぎに振るわれる刃。

布がかぶさったまま、 火鼠の少女は崩れ落ちる。

我流退魔剣奥義・退炎ノ太刀」

頼子は呟いて、血を払う様に刀を振るう。

をとったのは、 そう、 不思議なことに血液は一滴も付いていない。 この小太刀の本来の用途は、 斬撃の瞬間、 刀が吸いつけた相手の妖力を払うため。 こうして斬った相手の魔力、 それなのにこの動作

妖力を吸いつけて奪うことにあるのだ。

『月影』は攻撃のために作られた剣。

それが彼女の手に渡ることによって、 絶対防御の盾ともなる。

終わりましたよ」

そう言って、頼子はにこやかに霧江を振り返った。

その後は、例によって警察で報告。

軽犯罪であったためか、昼過ぎには二人とも解放された。

折角だから食事をして帰ろう、と。

松居刑事と最初に会った日に行きそびれた、 例のラーメン屋へ。

二人がけの席に向かい合って座り、 霧江は塩、 頼子は醤油をそれ

ぞれ注文した。

お父様の行きつけの店、 一度行ってみたかったんですよね」

そう言って、頼子は醤油ラーメンを美味しそうにすする。

なんとも、満足げな表情だった。

霧江は箸を止め、ぼうっとして頼子の顔を見ていた。

で今日は出てきたのに、その幸せそうな笑顔を消したくないと、そ 兄と頼子の間にどういう因縁があるのか、その質問をするつもり

゙.....?霧江さん、どうかしましたか?」

う思ってしまって、

なかなか切り出せない。

頼子は霧江を見て、 ちょこん、 と首をかしげた。

あ、その.....」

仕向けたみたいで、自分が情けなくなった。 まるで、自分から聞くのが怖いから頼子に道を作ってもらうよう なんだろう、 霧江は少し気恥ずかしくなった。

だから、ここで意を決さなくては、さらに恥をかくことになるだ

そう思って、口を開いた。

.....頼子ってさ、 お兄さんのこと、 ですか?」 兄貴のことどう思ってる?」

アンスで伝わってしまう。 しかし、ためらいの感情がまだ残っていたため、 言葉は別のニュ

は起きませんが」 かっこいいと思いますよ。 私には少し年上すぎるのでそういう気

慌てて、霧江は首を振る。そう言って、はにかむ頼子。

違うの、そういうことじゃあなくてね.....」

あるいは、ここが分水嶺だったのかもしれない。

兄貴がさ..... 恭也に頼子のこと見張れっていったみたいで..... それで、頼子は兄貴と何かトラブルとか昔あったのかなって...

言って、 頼子の顔から、 霧江はすぐに後悔した。 その笑顔がどんどん消えていったからだ。

ぁ ごめんやっぱり今のナシ!冗談だから、 忘れ ᆫ

「霧江さんは」

た。 慌てて、 取り消そうとする霧江の言葉を、 頼子はゆっくりと遮っ

を浮かべていた。 その顔は、霧江が今まで見たことのないような、 自嘲じみた笑み

うします?」 「霧江さんと私が、 実は10年前にもう会ってるって言ったら、 تع

え?」

その瞬間、霧江の思考が停止する。

10年前。

吸血鬼になる前。

それはどう回想してもあの日の、 あの忌まわしい記憶に繋がる、

思い出したくない思い出。

店の中を、 開けたくない扉のノブを、 彼女は、 彼女にとっては、 小さな羽虫が飛んでいる。 ずっと封印していた日々のこと。 自分の意思に反して、その手が掴んだ。

あったこと、あるの?」

その言葉に、 扉を開けようとするのを、 数秒の間を置き、霧江がようやく言葉を絞り出した。 頼子が頷くか頷かないかの、 必死に抵抗している自分がいる。 その瞬間

ピリリリリリリリリリ!

!

着信が鳴る。

霧江の携帯だった。

「ご、ごめん!」

こんな時に、と霧江は電話をとる。

着信は、零次からのものだ。

一番かかってきてほしくないタイミングで、 今最もしゃべりたく

ない人間からの電話。

霧江の指は自然に電源ボタンへ伸びていた。

「ごめんね頼子。それで」

ピリリリリリリリリリ

再び着信。

勿論同じ相手からである。

'......もう!何よ!」

乱暴に通話ボタンを押し、 耳に押し当てる霧江。

『霧江、大変だ!』

零次の声。

切羽詰まっている様子だ。

一度切ったことを咎めもしなかった。

Ļ 非常時らしいので、とりあえずこのタイミングでかけてきたこと 昨夜のことを一時的に水に流す霧江。

なに、 どうかした?」

実はな.....驚くなよ?例の通り魔が捕まった』

..... はぁ?」

『だから?切り裂き魔?だよ。 そいつが捕まったんだ』

何いってんの。 切り裂き魔なら私が捕まえたんじゃない。 鎌鼬の

女の子でしょ?」

『だから、そうじゃないんだよ。

切り裂き魔の正体は亡霊剣士だっ

た。

鎌鼬じゃない。 そいつの剣と、 被害者の傷の切り口が一致した』

11 霧江は首をかしげた。零次の言っていることが、全く理解できな

ぐだぞ!!』 『つまり、 ああ、 とにかくすぐ警察署へ戻ってこい!いいか、

その言葉を最後に、 電話は一方的に切られた。

..... 事件ですか?」

なんなのよ、もう..

頼子が問う。

「どうもそうみたいだけど.....」

でしたら、 速く行ってください。 ここの支払いは私がしておきま

すから」

でも.....」

霧江さん」

名前を呼んで、 頼子は優しく微笑んだ。

「ごめん。ありがとう」

霧江は頷いて、 入口の前で一度だけ頼子を振り返り、 店を出た。

つ たり、公園を壊した時は、 だから!私は通り魔なんかじゃないんだって!おねぇちゃ んを襲

自分でも何やってんのか本当にわけわかんなくなってて.....

- そのことは謝るから!

お願いだからここから出してよーっ!』

天壌署内、取調室。

捕された、あの少女の声だ。 スピーカーから聞こえてくるのは、 台座には、 その机の上に、スピーカーに繋がれた四角い台座が置いてあった。 赤い十字架 ブラッディクロスがはめ込まれている。 通り魔事件の容疑者として逮

その証言を聞いていたのは、 霧江、 零次、 風森刑事の三人。

゙..... つまり、どういうこと?」

番前で聴いていた霧江が、零次に向かって振り返る。

誤認逮捕という訳じゃあないですがね」 といっても、 ようするに、 この子は切り裂き魔じゃなかったってことさ」 霧江さんを襲ったり公園を破壊したのは事実なので、

零次が答え、風森刑事が引き継ぐ。

じゃあ、問題ないんじゃないの?」

と首をかしげる霧江。

バカ、 大アリだ。 なんでお前がこの子に襲われたと思う?」

零次が台座のブラッディクロスに目をやりながら言う。

なんで、って.....」

すが.....。 実はこの娘、 さっきになってようやく落ち着いて会話できるようになったんで 捕まえてから今日までずっと錯乱状態だったんです。

あったらしいんです」 精神鑑定の結果、 どうやら幻覚系の魔術による一種の催眠状態に

風森刑事は調査書を片手に語った。

・!それって.....」

は偶然じゃない、ってことだ。 ああ。 少なくともお前が、この切り裂き魔事件に巻き込まれたの

な 彼女はお前に差し向けられたんだよ。 お前の命を狙ってる誰かに

「 | 体誰が.....?」

零次の言葉に、思考を巡らせる霧江。

島に来たばかりの霧江が狙われる理由。

考えられるとすれば、 ヒーロー に恨みを持った人間、 つまり彼女

そして、あの夜素顔を見られた、あの吸血鬼。が解決した事件の関係者。

洗いなおす。悪いが、今日は帰れないと思え」 「それは今から調査する。 お前が今日までかかわった事件について

零次の言葉に、 ラーメン屋に残してきた頼子のことが気がかりだった。 霧江は「そんなぁ」と俯いた。

霧江はあの後、 頼子に今日は帰れないからお金は今度返す、 とメ

ールを送った。

なかった。 で関わってきた事件の再調査を行ったが、 最初の爆破事件から、今日のひったくり事件まで、霧江がこれま 結局、その進展は得られ

回っていた。 にもかかわらず、 霧江が女子寮に戻れた頃には、もう朝の四時を

...... はぁ、ねむ」

棺桶に入り、 ようやく解放された霧江は、 ふたを閉めて泥のように眠った。 部屋に戻ると着替えもせずにすぐに

吸血鬼事件、 解決のタイムリミットまで、 あと二月。

第十九話 闇は牙をむく。 (前書き)

ば始めから読んでほしいです。 ここを先に読んじゃうと多分面白くなくなると思うので、出来れ

第十九話 闇は牙をむく。

たいしたもんだわ」

女子寮裏の公園。

頼子が張った結界の中で、 霧江はぽそりと感想を漏らした。

なにがです?」

声に、 恭也が首だけで振り返る。

その前では、 頼子が小太刀を鞘に納めているところだった。

あった。 しでも戦力を補強したかった霧江だが、 ヒーロー認定試験の期限も近く、 例の人形師との戦いに向けて少 恭也の実力に若干の不安が

をしてもらっていたのだ。 そのため頼子に頼んで、 トリオを結成した日と同じように模擬戦

頼子を読んだのは、 その後で例の話の続きをするつもりもあった

からだ。

には、模擬戦は中々有効な手段だ。 吸血鬼の能力 特に筋力や妖術など攻撃にかかわる面を鍛える

だが。 るか、 正確には、 つまり自分に何が出来るかを自覚してゆく、 鍛えるというより人間から変化した肉体に ということなの いかに慣れ

鬼の力にかなり適応できてるわ」 最初に頼子と試合したときから思ってたけど、 なんていうか、 もともと才能みたいなものがあったんでしょうね。 なりたての癖に吸血

これでもいっぱいいっぱいなんですけどね.. ... 相変わらず頼子さ

んには勝てる気がしないし」

ってとこかしら」 たけど、あんたも十二分に化け物染みてる。 「そうでもないわ。 最初の時は頼子の強さばかりに眼が行っちゃ ま、 さすが私の血統、

フフン、と霧江はうれしそうに鼻を鳴らした。

だんだんと攻撃を読まれ始めてますし、 本くらい取られてしまいそうです」 「確かに、生まれたての吸血鬼にしては異常な強さですね三号は。 うかうかしてるとすぐに一

ながらそう言った。 私も鍛えなおさないといけませんね、 と頼子は小太刀を布で包み

頼子は二年前の中学対抗武術大会の優勝者だ。

とを考えれば、だいたいその強さの想像は出来るだろうか。 しまうと凄みも何もないが、この島の学生には妖魔や半妖もいるこ かつてこの島の中学生の中では一番強かった、そんな風に言って

べて、戦闘能力が非常に高い。 もともとこの島の魔法使いは誰も彼も、 他のスフィ アのそれと比

競争相手に妖魔の存在があるためだ。

合っているこの島の魔法使いでは、その?力?に対する認識が根本 的に違う。 いる外の魔法使いたちと、隣人としての妖魔に対し、一対一で向き 脅威としての妖魔に対し、 集団的に行動し自分たちの身を守って

自分たちの身を守るためのもの、 いう意味合いが強い。 外の世界、 他のスフィアならば、 外敵を駆逐するためのもの、 攻撃の手段としての魔法には、 そう

の軍隊、 その ため、 対妖魔部隊が存在する。 餅は餅屋として、各スフィアには外敵に対処するため

ているのだ。 戦いに参加するものと、 しないものとの立場が、 明確に区別され

対し、彼らを隣人として共存するため、 いる領域にまで出来るだけ近づくための手段だ。 しかしここでの魔法は、 人間と比較して強大な力を持った妖魔に 自分たちを、 強引に相手の

妖魔は強く、人間は弱い。

いままではいられない。 しかしこの島に、妖魔と人間がともに暮らしている限り、 ただ弱

自分も持たざるを得なくなる。 持たねば安心して眠れないだろう。 金がなく、安物で粗悪な銃しか買ないとしても、 例えば、銃が合法的な国で近所に住む人々が皆銃を持っていたら、 だ。

それが人間というもの。

それと同じだ。

ここで枕を高くして眠りたければ、 より強い力を持っていなけれ

ばならない。

ここは、そういう場所なのだ。

霧江にも、だんだんとそれが解って来たところだった。

語弊を生じるかもしれないが、先ほどの例えで言うなら、 そして頼子は、 その中でもさらに研ぎ澄まされた刃を持っている。 隣人た

ちがしょぼくれた拳銃しか買えなかった中で、 立派な散弾銃を買う

ことが出来たようなものだ。

その散弾銃に、恭也は追いつき始めている。

最初からよい銃を持っていたが、それをどんどんグレードアップ

させているような感じだ。

性質を現す表現としては適切だろうか。 と言うより、その銃を使いこなしていると言った方が、 彼の力の

彼はより強力なバズーカ砲を最初から所持していた。

初めての戦闘では使いこなせなかったそれの扱い に 徐々に慣 れ

そうね」 とにかく......この分なら今夜、 一緒に連れてっても問題なさ

· 今夜、何かあるんですか?」

と、頼子は首をかしげた。

ちょっとね。とにかく空けといて」

パラパラと弱い雨の降る夜。

雨雲が、空の丸い月を覆い隠していた。

明日の夜になれば、 まだ真円ではなく、 完全な満月までは、 例の吸血鬼は何か行動を起こすはずだ。 あと一日猶予がある。

のチャンスかもしれないのか.....」 「満月は明日.....その吸血鬼が、何か行動を起こす前に止める最後

でおきたいですね」 「となれば、何としても今夜中に、 せめて犯人の正体だけでも掴ん

恭也と頼子はやる気満々のようだ。場所は女子寮の屋上

だし、 たは一回殺されてんだからね」 二人とも、絶対に私のそばから離れちゃだめよ?特に恭也、 少なくともあいつが、 今出歩けば、 何かのアクションがあるかもしれないわ。 私の命を狙っていることは確かみたい あん

「あの時とは違いますよ。 今日会ったら殺された恨み、 晴らしてや

そう言って、胸を叩く恭也。

もう一回殺されるフラグですわね、 わかります」

と、頼子はクスクスと笑った。

かまして黙らせ、 「何を一」と、 反論しかけた恭也の顔面に軽くアイアンクロー を 霧江は言葉を紡ぐ。

と。いいわね」 「とにかく、 相手はこれまでで一番危険な奴よ。 十分に警戒するこ

「 ふ い い

び出していった。 手を離し、霧江はホルスターからクロス・ガンを引き抜く。 いつも通りの手順で変身を完了させると、 頼子と恭也がほぼ同時に答えるのを確認すると、恭也の顔面から 三つの影は夜の街へ飛

先生、調整が終わりましたよ」

扉を叩いた。 そう言って、 大きめのPDA持った羽月真琴は、 零次の研究室の

おう、マコ、ご苦労さん」

マコ とは零次が真琴からとった愛称である。 彼は扉を開け、

彼女との始まりは一年半前。

昼間の学部ではそれなりに人気の集まった零次の授業だったが、 大学の後期で、夜間学部も受け持つことになった時のことだった。

妖魔が主な生徒である夜間は性質が違うのかほとんど人気が出ず、

受講しにきた学生は一人、また一人と消えていった。

その時、最後まで残っていたのが羽月真琴だった。

彼女はいつも零次の授業を、 一番前の席で目を輝かせながら聞い

ていた。

後ろの席にもう誰もいないことにも気付かないほど、 自分の授業

に夢中になってくれていた彼女。

その姿に、ひどく感激したのが最初だったと思う。

ひとり嬉し泣きの涙を流していた零次と、どうして彼が泣い てい

るのか分からず狼狽していた彼女。

その後も彼女は零次の授業に一番前の席で陣取って、 気づけば、

一緒にすごすようになっていた。

だから、彼女はまだ生徒だった。 恋人であると同時に、 彼にとっ

てかけがえのない生徒だった。

それじゃ、早速試してみるか」

はい

と、真琴はPDAを零次に差し出す。

正確にはただのPDAではなく、 彼女の開発した『魔力逆探知シ

ステム』が組み込まれた代物だった。

まだ実験段階のものなので、 自分は信用しているが、 確実な信憑

性があるわけでもない。

零次はデスクから小さな金庫を取り出し、 なので零次は警察には話さずに独自に調査を行うつもりでい 開ける。 た。

· それは.....?」

中にはビニール袋が入っていた。 その側にぴったりと寄って、金庫の中をのぞく真琴。

江が鎌鼬と戦った公園に落ちていたものだよ」 「警察から預かった、 今朝発見されたばかりの証拠品だ。 例の、 霧

る徹底的な再調査が行われた。 吸血鬼事件に関連した事件として、霧江のかかわった事件に関す

これは、その際に新たに発見されたものだった。

「そのビニール袋が、ですか。中に何が?」

よーく目を凝らすと見えるよ。ほら」

そう言って、零次はビニールを真琴の顔に近づける。

「.....糸、ですか?」

そう。 糸だ。 ・それって」 それも、 人形を操るために使われるものだそうだ」

· そう。よくわかったな、えらいぞ」

と、零次は真琴の頭を撫でてやる。

ってことだ。 つまり、こいつはこの街を騒がす吸血鬼に繋がる可能性がある、 ユ 君がやってみろ」

「は、はい。わかりました」

事の重大性を感じたのか、 真琴は緊張した面持ちで、 零次から証

第四区。

霧江が二回、あの吸血鬼との戦いを行った場所。

あのマンションの屋上。

三人はビルの屋上を飛び次いで、ここまでたどり着いた。

パラパラと降っていた雨は、もう止んでいた。

といっても、頼子はそんな八艘飛び連発なんていう芸当など出来

ないので、彼女の体は恭也が抱えていた。

霧江でなく恭也なのは、 万一のために霧江をフリー

要があったからだ。

それは理解しているが、 頼子は不満そうだっ

マンションの屋上で、恭也は頼子を下した。

のを奪われた気分ですわ」 全く、 生まれて初めてのお姫様だっこが三号なんて..... 大事なも

飛ぶコートでも借りたらいじゃ 「文句があるんなら自分で飛んでくださいよ。 ないですか」 ほら、 霧江さんに空

「あ、あれは.....ちょっと」

と、顔を伏せる頼子。

らいなものだ。 当然だろう、 それに、 あんなものを好き好んで使うのは兄貴とその生徒く

「アレ、まだ修理中なのよ」

「そうなんですか.....」

いない。 鎌鼬の空中戦で切り裂かれたあのコートは、 まだ修理が終わって

いていた。 開発者の瀬川君が泣きながら徹夜で頑張っている、 と零次から聞

霧江の言葉に、ほっとする頼子。

た。 結局、 あの後霧江は頼子と二人きりで話をする機会を作れなかっ

てきたためだ。 恭也が珍しく、 たまには三人でアイスでも食いませんか、 と誘っ

う考えていた。 るわけにもいかず、 この後、何もなければ、 蹴ってもよかったが、先に頼子が賛同してしまったため、そうす 昨日の昼間の話は、有耶無耶になったままだ。 恭也を帰した後で話をしよう。 霧江はそ

その時、恭也が「あっ」と声を上げた。

「ほら、アレ!見てくださいよ!!」「どうしたの、恭也」

そう言って、 恭也は下の街、 大通りに面した向こう側を指さす。

「?どれです?」

首をかしげる頼子。

当然ながら、 人間の視界しか持たない彼女には見えていない。

だから、アレアレ!」

必死に指さす恭也。

その先に霧江は視線を向けた。

大通りの向こう側は、 一軒家も多い住宅街。 そこの、 裏路地。

なっ!」

声を上げる霧江。

いる妖魔の姿だった。 彼女の目に飛び込んできたのは、 小さな女の子を糸で絡め取って

攻で片付けてくるわ!」 「ヴィランだ!こんな時に……二人とも、ここで待ってるのよ!速

そう言って、霧江は一直線で飛びだした。

を、 霧江の出す最高速度には、 それは、緊急時の判断といては間違っていないはずだった。 しかし、霧江は後に、ここに恭也と頼子、 後悔することになる。 二人ともついてこれないからだ。 二人を残してきたこと

霧江は飛び降り、 一気に駆けた。

聴覚は、 現場まで、 確かにその声を聞いた あと数十メートルと迫った時。 研ぎ澄まされた霧江の

..... T

弱弱しい声だった。

ಠ್ಠ それでも必死に、 その少女は生きようと、 最後の抵抗を続けてい

たす: . けて.....」

わかった、今助ける」

た少女。 目の前には、 雲に隠れていた月が顔を出し、 だから、 辿り 白い繭のようなものを抱えている、 ついたとき、 自然とそう答えていた。 裏路地を照らす。 八つの目をもっ

ては最高の機会となりうる。 最悪と最高は紙一重。 偶然の神様は、 最高のタイミングをも心得ているのだ。 誰かにとっては最悪でも、 他の誰かにとっ

顔を照合し、 ブラッ ディ 000كـ ゆっくりしている時間はない。速攻で片付けなくては。 霧江は、アイテムボックスを片手で叩く。 9 6 3 ° クロス・ブランク、 個人データヘアクセスがなされる。 照合システム、 オン。 オン。

名往中学二年、 鬼雲絵里華だな。 現行犯だ、 あんたを封印する」

に抱える。 化け蜘蛛の少女、 そう言って、 霧江は一気に駆けだした。 鬼雲は突然のことに戸惑いながらも獲物を左腕

...... 封印?なんなのよ、お前は!」

を薙ぎ払う。 鬱陶しい、 そう言って、 と霧江はスピードを緩めないまま左手で飛んでくる糸 右手を前に突き出し蜘蛛の糸を飛ばしてくる。

抜けた先、 相手は左手に繭を抱えたまま、 道路を挟んだ向かいにある背の低いマンションに向けて 人差し指を立て、 背後、 裏路地を

別の糸を飛ばす。

「何って?」

霧江は走りながら右こぶしに力をこめた。

「この街の」

ようとする鬼雲。 マンションの壁面にくっつけた糸を、 勢いよく戻し、 飛んで逃げ

な右フックを叩き込んだ。 逃がすか、と霧江は跳躍し、 瞬時に追いすがり、その顔面に強烈

「正義のヒーローよ」

リと地面に落ちた。 鬼蜘蛛の少女は肉体ごと封印され、 そう言い切って、繭を 糸に巻かれた少女を抱え、 そのブラッディクロスがカチ 着地。

霧江が飛び出していった、その直後のことであった。

三号!」

頼子が叫ぶ。

霧江の背中を見守っていた恭也が、 顔を上げた。

な!」

恭也には、 黒いフードを被った影が、 暗闇でもその顔がはっきりと見えた。 空高くから二人の影を見下ろしていた。

顔立ち。 金髪で、 碧眼。 ぱっと見ただけではどちらかわからない中世的な

た。 ただし、 作り物のように動きのない顔で、 瞳はガラスのようだっ

人形だ!」

恭也が叫んだと同時に、 周囲に隠れ潜んでいたのか、 二人を取り囲む。 その影は数を増やす。 同じ大きさの人形、 合計8体。

こりゃ、まずいかもですね.....」

額に汗を浮かべ、じりじりと下がる恭也。

せますよ」 やるしか、 ないでしょう。 せめて霧江さんが戻ってくるまで持た

対して頼子は、既に臨戦態勢を整えていた。

三号、背中は預けますよ」

そういって、背中あわせになる二人。

「......しかたない、やるしかないですもんね」

寄る人形たち。 周囲に円を描くように並び、 その円を縮めるように同時ににじり

霧江たちとは離れた場所、学生寮の多い地域だ。 零次と真琴もまた、 第四区を歩いていた。

本当にこっちなのか?」

一度言ったことのある喫茶店を横目に、 零次は真琴に問う。

はい、 そのはず.....です」

さすがに怖いのか、 声が震えている。 彼女は置いてくるべきだったかも

しれない。

失敗したな、

と零次は思った。

していた。 彼女の持つPDAに表示された地図は、 この先の小さな建物を示

霧江は鬼蜘蛛の少女を倒した後、 襲われた少女を絡め取っていた

糸を剥がし始めた。

糸は予想以上に頑丈で、 霧江は悪戦苦闘する。

こんの....

速く二人のところへ戻らなくては。 そんな焦りが、 あまり時間をかけていられない。 しかし逆にその手を遅らせる。

簡単には剥がれてくれないようだ。

その、 やっ とのことで、 矢先のことだった。 少女の頭に巻かれていた糸を剥がし終える。

「マ、スター.....」

「恭也!?」

恭也は裏路地の入口に、数歩入ったところで倒れた。 水溜りから血と雨水とが混ざったしぶきが飛ぶ。 その裏路地に、 全身傷だらけの恭也が歩いてきたのだ。

ちょっと、どうしたの?」

霧江は少女を地面に横たえると、 恭也のもとへ駆けつけた。

恭也-何があったの!?誰にやられたの?恭也!!恭也ってば!

子を見る。 名前を呼びながら、 霧江は変身を解き、 片膝をついて彼の体の様

彼の腹には、 うつ伏せになっている彼を、 大きな刀傷があった。 ゆっ り動かして仰向けに。

これって.....ねぇ、回復は?再生できない」

「う.....く.....」

声をかけてみても、 魔力を失っているのか、 恭也はうめき声を上げるだけだった。 傷は再生しない。

· くそっ!しっかり!」

霧江は自身の右手、 親指の腹を噛み切ると、 恭也の口に押し当て

とにかく、傷を再生させなければ。

「飲んで!速く!」

た。 恭也は霧江の指を軽く咥え、その血液を舐めとるように吸い始め まずは自身の血液を与え、 魔力の回復を促す。

なかったか.....。 その様子に一息つき、 刀傷に加えて、 魔力の喪失。 改めて恭也の体の傷に目を落とす。 この症状、 以前何処かで見たことは

そうだ、三号」

也の背中を打った。 背中あわせになった二人、 戦闘が始まる直前、 頼子は右の肘で恭

突き飛ばされる恭也。

恭也は驚愕の表情を浮かべながら、 彼が驚愕と共に振り返ると、その白刃は、 崩れ落ちる。 彼に向けて振るわれた。

..... まさか」

その傷を作れる人物に思い当たり、 しかし信じられずに首を振る

確かに彼女は、恭也のことを好いてはいない。そんなはずはない。

だが、嫌ってもいなかったはずだ。

それに、彼女は私の友達だ。

友達で、 相棒で、そんな彼女がこんなことをするわけがない。

彼女は、 だが、思い出せ。 十年前に霧江と会っていた、そう言った。 と自分の中で別の自分が叫ぶ。

それは、いつだった?

あのときでは、無かったか。

あの悪夢の日。

二度と思い出したくない光景。

封印した記憶の扉を、開こうとして

はっと、気付く。

..... 恭也?ちょっと飲みすぎじゃない、 ねえ?」

彼の傷は、もう治っているようだった。

|霧江さん.....|

恭也は、まだ苦しそうに声を上げた。

犯人が、 吸血鬼事件の犯人が分かりました.

かすれるような声で、恭也は口を開く。

まさか、こんなことが.....」

魔力逆探知システムは、 彼が最も愛している生徒の作った最高傑

作だ。

その出来を疑いたくはなかった。

しかし、彼は目の前の光景を信じることもできなかった。

辿りついた先には、ボロボロのアパート。

システムが示しているのは、その一室。

その部屋の表札に書かれた名前は

· つ!」

しかし、本当にそうなら、全ての辻褄が合う。

あの日以来、吸血鬼が現れなかったことも、 あの日、 霧江が鎌鼬

に襲われたことも。

一本の筋で通る。

零次はカギを壊し、強引に室内に押し入る。

一緒に入った真琴が、その光景に悲鳴を上げた。

部屋中に、所狭しと並べられた、 大小様々な人形。

女が大半だが、男の姿もある。

どちらの性かわからないものもある。

文字通り、部屋を埋め尽くしていた。

真っ暗な室内で、 それは何よりもおぞましい光景だった。

マコ、警察に連絡を.....

零次は一度呼吸を挟む。

首を振り、 意を決したように、 もう一度口を開き、言葉を紡ぐ。

「吸血鬼事件の、犯人は

光の槍を受け、 頼子が振るった白刃は、 流す。 真横から恭也に向けて放たれていた白い

驚いて、腰を抜かし尻もちをつく恭也。

真横にも気をつけませんとね」

笑って、頼子は恭也が立ち上がるのを確認すると再び背を向けた。

いせ、 やっぱり後ろにも気をつけないと駄目だな」

「 え?」

その言葉に、振り向いた瞬間。

頼子は悟った。

(まさか、犯人は

犯人が、 吸血鬼事件の犯人が分かりました.. ... 犯人は

かすれるような声で、恭也は口を開く。

待って、よく聞こえないわ」

霧江は恭也の口に耳を近づける。

いいですか.....?犯人は

「..... え?」

首筋に、鋭い痛みが走った。

るූ そのままがば、 と、抱きしめられるように、その体は抑え込まれ

.....あ

とこうして さいに しょうじょう なったの 全てを悟った時には、もう遅かった。

彼女の血は抜かれ、世界は反転した。

「犯人は

月が、満月に少し足りない月が、霧江を見下ろしていた。

「僕ですよ」

それは、 暗い闇の底から響いてくるような、声だった。

第十九話 闇は牙をむく。 (後書き)

さーて、これからどうなるのかなー? どうしてもここまで書きたかったので一気に更新しちゃいました。

お気に入り登録、ちょっとずつですが、してくれてる方が増えてる

ようで嬉しい限り。

拙い作品ですが楽しんでいただけたのなら幸いです。 ありがとう!

そして、ありがとう!

第二十話 不死者は王の力を求める。

『おかけになった電話は、電波の届か』

流れたのは同様のメッセージ。零次は一度切り、かけなおす。

「くそっ」

がした。 霧江と連絡が取れないことに、 零次の胸が騒ぐ。 とても嫌な予感

彼は携帯をポケットに押し込むと、 真琴に向き直る。

警察が来るまでここを動くんじゃ ないぞ」

えっ、ここじゃなきゃ駄目ですか.....?」

そう言って、ちょっと涙目になる真琴。

流石に、こんなにも人形がうじゃうじゃしている薄気味悪い部屋 その猫耳がしなっ、と垂れている。

に女の子一人置いておくのは可哀想かもしれないが、そうも言って

いられない。

じゃない。 別に外でもい いし ね? ίį 寒くないならね。 とにかく誰か来るまで動くん

「は、はい……」

「いい子だ」

取り出した。 そう言って、 零次は持っていた鞄から、 あの『空飛ぶコー

を

と言って、 零次は真琴の頭をやさしく撫でたあと、 出てくる直前、 外へと飛び出していった。 瀬川が修理が終わったと言って持っ 「それじゃ行ってくる」 てきたものだ。

は ! ! は..... はは..... はははははははははははは あっはっははっははははっははははははははははははははははは

ハハアッハアアアアア!!!!!」 ははははっ ははうァ アアアアアアアアアッ ハハハハハハハハハハ

り返って仰ぎ、狂笑する、 欠けた月が見下ろす天を、 志木、恭也。 ひとりの吸血鬼。 両腕を広げ、 背骨が折れそうなほど反

れで、 「うまくいった!うまくいったうまくいったうまくいった! 全てが手に入る!!俺がほしいものは、 全部!

全ては、この瞬間のためだった。

志木恭也は確信する。 だが自分の運命は此処に、 あの時はこうなるとはまるで思っていなかっただろう。 いや、最初の目的自体は、違っていた。 今のこの瞬間のためにあったのだと、

目的がある。 最初は、 恭也には、 ただ、 その生涯をかけてでも成し遂げたいと思っていたある 素材がほしかっただけだった。

それを叶えるための過程として行おうとした実験に、 どうしても

人間の血が必要だった。

なかった。 だが、 ただの人間だっ た彼に、 血液を合法的に手に入れる手段は

くなる。 最初は自分の血液だけを使っていたが、 そんなものすぐに足りな

他人の血が、どうしても必要だった。

装することにしたのだ。 そこで、少しでも警察の目を欺くため、 吸血鬼がやったように偽

用意した人形は二体。

の人形。 く装った人形と、実際に家に侵入して、 等身大で、中身は張りぼてに近いが格好だけは立派に、 血液を回収するための小型 それらし

小型の人形を操作し、 換気扇や郵便受けから室内に侵入させて吸

目を覚まされても、すぐに眠りに落とせるようにしておく。 人形の体にはあらかじめ催眠魔術の魔法陣を描いておき、

勿論、牙の痕を残しておくことは忘れない。

の空を適当に飛ばしておく。 その間、大きいほうの人形はスケープゴートとして犯行現場の近

という状況を、 こうすることで、あたかも謎の吸血鬼が血を吸ってまわってい 彼は演出したのだ。 る

そうして、 本物の吸血鬼が、 順調に血液を集めているうち、 彼の前に姿を現したのだ。 ある転機が訪れた。

間前。 それは、 霧江が最初に人形と戦った夜のことではなく、 その数時

姿を見た。 て逃げた男を、 それを見たのは、 華麗に、 本当に偶然だった。 かつ鮮やかに、 圧倒的な力で打ち倒すその 料理屋を爆破し、 金を奪っ

それを可能にするほどの魔力に、彼は心惹かれた。 何よりも、 どんな傷を受けても瞬時に治ってしまうその回復力と

そしてその日の夜、一度目の接触。

あることがバレてしまい、焦って、あわてて彼女を撃った。 これは、実は予想外だった。 犯行現場を徘徊している のが人形で

陣を体に書いておいた人形が役に立った。 あらかじめ、 何かあった時のために仕込んでおいた、 攻擊用魔法

と思った。 あることがバレたことで、 幸いにも奇襲は成功し、 警察につきとめられるのは時間の問題だ 人形は逃がせたものの、 犯人が人形師で

だからこそ、 その次の日、 新たな計画を実行した。

もう一体、スケープゴートとしての人形を作り、 それに真犯人ら

しい演技をさせる。

そうした上で、自分を襲うことにしたのだ。

この島では見たこともない種類の蝶が一匹飛んでいた。 その場面で霧江をどう呼び出すか悩んだが、 悩んでいる彼の前を、

彼は直感で、 その蝶を人形に叩きつぶさせた。 勘は、 見事に

臓を貫いてしまった時は本当に焦った。 だが霧江を、屋上に設置していた魔法陣の光の槍で撃った時、 心

焦って、うっかり人形を接近させすぎてしまう。

かったようだ。 しかし、どうやら霧江は死なず、 人形だということにも気付かな

彼女の生存を確認し、 チェイスの末、 計画を実行した。

ブラフは、 それに命をかけてこそ、 相手を騙せるもの。

恭也は、本気で自分を殺しにかかった。

勿論、生き残る算段はしていた。

死しないように狙い を調整し、 彼女の眼の前で撃った。

なく、恭也は霧江に助けられた。 本当に苦しかったし、本気で死にそうだったから、 疑われること

ここで、

またひとつ幸運。

彼女は彼を助けるために、 霧江は、回復魔法を使えなかったのだ。 彼を転化させるしかなかった。

偶然にも心惹かれた吸血鬼の力を手に入れることが出

来た。

人間よりも強大な力と、強大な魔力。

しかし、まだ彼の望みを叶えるには、 力が足りなかった。

もっと強大な魔力が必要だった。

その為に、彼はまた新たに計画した。

霧江の不意を打ち、 血液を奪い、 さらに強大な力を得るための計

まずやったのは、 情報の収集と、手駒の確保。

彼は霧江の真似をし、数多くの昆虫を使い魔として使役した。

霧江は見た目にこだわってか、もともと島にはいなかったような

種類の黒い蝶ばかりを選んで使い魔にしていたのに対し、 恭也は何

でも使った。

かしいとは思われない虫を。 ゴキブリ、蜘蛛、 人家に容易に侵入でき、 かつ、そこにいてもお

そうして、あらゆる情報を収集した。

彼が特に使えると注目していたのは、 下記の五つ。

一つ目、 最近長い黒髪の少女に幼馴染の彼氏を取られたという鎌

の少女がいたこと。

一つ貝、 人間の味に興味を持っていた鬼蜘蛛の少女がいたこと。

三つ目、 お金に困っていた火鼠と人間のハーフがいたこと。

四つ目、 通り魔の正体をつかんだこと。

五つ目、 零次が毎晩女子生徒と淫行に耽っていたこと。

霧江は決して使わなかったものだが、 恭也はまず、三人の少女たちに接触し、 吸血鬼の目には、 暗示をかけた。 異性を惑

わす力が宿っている。

それを駆使し、 二体の妖魔と一体の半妖という強力な手駒を確保

た。 ところが最初の一体は、予想よりも早く使うことになってしまっ

恭也の荷物を運ぶのを、 みんなで手伝うと言ってきたからだ。

あの家を、誰かに見られる訳にはいかなかった。

わせた。 家にたどり着く直前、 鎌鼬の少女を通り魔に見立てて、 霧江を襲

これがうまくいって、 結局三人に家の中を見られることはなくな

Ų 貴重な手駒を一つ減らした恭也は、 霧江に心理的な隙を作らせる計画を立てる。 今度は残り二つの情報を活用

でもいいから崩せないかと思案した。 零次と頼子の関係に着目し、そこから霧江と頼子の関係を、 瞬

ここでも、恭也はうまくやった。

による『頼子を見張れ』という依頼は撤回されていたのだ。 実は、 零次が松居刑事に頼子の正体について話した日の夜、 零次

演じなければならなくなった。 それを霧江に気取らせないため、 恭也はさらに危うい立ち回りを

が訪れる直前に、 霧江が零次に頼子との関係を問いただそうとした日の昼間、 大学の事務員に暗示をかけ、 零次を呼びださせて 霧江

い た。

て、霧江が零次に対し幻滅するよう仕向けていた。 ここで、 小さな人形をこっそり操ってSM用のムチを床に転がし

見事に淫行の現場を目撃。 めて、夜中に零次が何をやっているかを押さえることにし、 る前に真琴が現れ、部屋を出ざるを得なくなったお陰で、霧江は改 予想外なことに彼女はそれの用途を知らなかったのだが、 ものの 説明す

関係を聞く決心をつける。 零次に幻滅し、話を聞く気も失せた彼女は、 零次ではなく頼子に

Iţ その次の日に、 通り魔の正体に関する匿名のタレコミを行った。 鎌鼬の少女にかけた暗示を解き、同時に警察に向

か再捜査される。 いう事実により、 霧江を襲った通り魔は偽物で、何物かに仕組まれたものだっ 彼女が関わった他の事件にも関連性があるかどう

どころではなくなるだろう。 霧江はその間警察の捜査に協力させられ、 頼子や零次に話を窺う

解消できない霧江の心の中に靄を作っておくことにあった。本来の目的は、二人きりで話をするタイミングをなくし、 疑問を

也はヒヤリとした。 イミングで通報したのだが、 二人が出掛けた直後に警察に呼び出されるように、かなり早い 警察が動くのは思ったよりも遅く、 タ

にもう一つの手駒を投入。 その間彼らがいつ話をし始めるかわからなかったので、 時間稼ぎ

火鼠の半妖を操り事件を起こさせる。

呼び出しを受け、 作ることに成功したのだった。 かなり際どかったが、 靄どころか、 どうにかうまいタイミングで霧江は 彼女と頼子の間にほんの少し の溝を

電話やメールのことは警戒していなかった。

ばならない状況になるほど追いつめたわけでもないからだ。 そんな大事な話を簡単に済ませるような性格でも、 そうしなけれ

あとは簡単だった。

って最後の手駒、 そしてこの夜、 その後も霧江と頼子が二人きりにならないように動いた。 鬼蜘蛛の少女を動かし、霧江がひとりで退治に行 吸血鬼退治のため三人で出掛け、頃合いを見計ら

忍ばせていた人と共に彼女を襲った。

くよう仕向けた後は、頼子と二人っきりになったところで、

周囲に

なぜならその傷は、頼子の退魔刀にしか作れない傷であり、 反撃を受け、傷を受けることも想定のうちだった。

になるからだ。 が頼子に対して一瞬でも疑いを持つよう仕向けることが出来る材料

隙を生む。 先に作っておいた溝が疑いを強め、 それを否定する思考が、 心に

とは、 その間に、 力づくで奪えばよかった。 彼女の血を出来るだけ多く啜り、 それで力をつけたあ

真の吸血鬼となった。 こうして、様々な偶然に助けられたものの、 計画は完遂し、 彼は

目的達成まで、あと一歩。

恭也は、仰向けに倒れている霧江を見下ろす。

だらりと開いた口、開ききった瞳孔。

しかしまだ死んではいなかった。

は嫌いじゃなかったし」 本当は、 生かしておくつもりだったんですけどね。 あなたのこと

霧江

そう言って、霧江の前で片膝をつく。

江と鬼蜘蛛の少女のブラッディクロスを抜き取る。 ホルスターからクロス・ガンを引き出し、 ポケッ トから二つ、 霧

出来ないようだ。 霧江はわずかに手を動かしたように見えたが、それ以上の抵抗は

すね、 でも、 あなたは。 やっぱり駄目だ。思ったより、 面白い存在だったんで

たんだ」 この血が全身を巡った時わかりましたよ、 ただの吸血鬼じゃなか

取った彼女のブラッディクロスを翳す。 言って、 恭也は笑みを浮かべて、霧江に見せつけるように、 奪い

「 不死者の王 ^{イラィフキング}

のできる王者の血......こんな風に封印しておくなんて勿体無い」 あなたに流れていたのは、 全ての不死なる存在を統べること

霧江の体を抱き起こし、 その首筋をあらわにする恭也。

僕がなってあげます。 「要らないなら、 僕がもらいましょう。 あなたがならないのなら、

だから、残しておいた血も貰いますよ」

そして、 恭也は再び彼女の首に噛みつこうとして

やめとけ。そいつはお前には荷が重い」

ガチリ、 Ļ 彼の歯は正面から一直線に飛んできた銀のナイ

フの刃を噛んだ。

「.....速いですね」

霧江を下し、 噛んだナイフを吐き捨てるように放る恭也。

シスコンなんでな。妹のピンチには駆け付けずにいられないんだ」

裏路地の出口から響く、乾いた靴の音。

てきていた。 真黒なコー トを身に纏い、 鬼灯零次は、 落ち着いた足取りで歩い

彼女もいるのにですか?贅沢な人だなあんた」

これだから童貞は。 向ける愛の性質の違いくらい理解しろ」

「 童貞は関係ねー だろ」

す、と零次の足が止まる。

対峙する両者。

《standby》という不吉な電子音声が、 零次の顔をしかめ

させた。

貴様!」

ますか?この僕を」 零次さん、 いくら強かろうと、 あんたはただの人間だ。 止められ

そう言って、クロス・ガンの銃口を真上に向ける恭也。 そこにはすでに霧江のブラッディクロスが装填されている。

...... 変身」

引き金を引く恭也。

スーツを装着する。 打ち上げられた赤い膜が下り、零次が霧江のために用意したその

この感覚」 ああ、 悪くないですね。さっきよりも力がみなぎってくる、

恭也は自分の姿を見回し、酷薄な笑みを浮かべる。 そうして、改めて零次を見た。

・そいつは霧江のもんだ。 返してもらうぞ」

もう少し慌てる様を見たかった恭也は残念に思った。 その顔からは、不思議と感情が読めない。

今の僕は、不死者の王に最も近い存在だ。 もう一度言いますけど、 ただの人間のあんたに何が出来るんです

その言葉に、 絶望的なはずの状況に、 零次はむしろ強く笑った。

確かに、今の俺じゃあ無理だろうな。 だが.....」

デザインの、 その下.....腰に巻かれていたのは、霧江がつけているものと同じ そう言って、零次は空飛ぶコートを脱ぎ棄てた。 そこには、 ホルスター 付きのベルト。 もう一丁のクロス・ガンがあった。

これなら、どうだ?」

ていたそのブラッディクロスを装填した。 言って、零次はその銃口に、いつの間にか指にはさむように持っ

Standby Dragon form

「……それは、まさか!」

零次はクロス・ガンを空に向け、引き金を引いた。 ヘルメットの下で目を見開く恭也。

変.....身ッ!」

第二十話 不死者は王の力を求める。 (後書き)

8 / 6 少しはましになっただろうか.....。 苦しかった種明かしの一部を修正。

イメー ジは悪魔

せる白色で、デザインも外骨格のように無骨。 ベースとなるスーツは黒く、手足を覆う脚甲、 籠手は骨を連想さ

ザイン。 胸部のアーマーも同様に、 鋭い肋骨が外から覆っているようなデ

胸の中心には、真っ赤な球体が嵌め込まれている。

め上に向け真っ直ぐ生えている。 を模したような意匠が凝らされ、 その兜は、霧江のそれのようにヘルメットではなく、 側頭部からは二本の角が、 竜の頭蓋骨 後方斜

たのか」驚きましたよ、 ヒーロー用のスーツは、 これだけじゃなかっ

恭也。

振る。 対して零次は、 チッチッチ、 と舌を鳴らしながら右手人差し指を

ただのヒーローじゃないさ。 ローを守るためのヒーロー。 この街の切り札だ」 こいつは?スカイドラゴン?.....ヒ

た。 通常の指さしではなく、 言って、その人差し指を恭也に真っ直ぐ向ける。 腕をひねってその手は上下逆になってい

恭也。 悪いが地獄に落ちてもらうぜ」

ば

よう? 決めポーズに決め台詞まであるんですか?特撮ものの見すぎでし

な。 だから言ったじゃねぇか。 どうしてあなたじゃ なく霧江さんが街のヒーロー 俺は『ヒーローを守るヒーロー』って やってんです?」

やこしい。 それにこいつを装着するのには制限やら条件があっていろいろや

犯罪者ごときにホイホイ使えるような代物じゃあねぇンだ」

「なるほど、特別製ってわけですか。

とでも思ってる訳じゃあないでしょうね?」 だけど、いくらなんでもそんなスーツーつで僕との差が縮まった

「何なら試してやろうか、今すぐにでも」

そう言って、右手の指をパチンと鳴らす零次。

直後、 恭也の浮かべる表情が冷笑から驚愕に変わる。

「な、んだって」

それは?日?だった。

吸血鬼の恭也の視界が、 眩むほどのまばゆい日の光

夜の闇に包まれていたはずの裏路地は、 昼間の大通りよりも明る

くなった。

彼らを照らしていた月も、もう見えない。

これで戦力半減だなノー 始めようか」 ライフキング。 準備も整ったところで

今度は零次が酷薄な笑みを浮かべる番だった。

最初の一撃。

轟音と共に、恭也の体は雷の槍に貫かれる。

゙゙゙゙゙゙ぐあああああああああああっ!!?」

だが彼は瞬時に傷を再生させ、 零次との距離を一気に詰め、その右拳を叩きこむ。 零次の攻撃のモーションを、まるで知覚できなかっ 彼の顔から驚愕の表情が張り付いたまま消えない。 体勢を立て直す。 たのだ。

! ?

直後、零次の体は霞のように消え去る。彼の拳は、何の抵抗もなく体を通り抜けた。

幻影!?

こっちだ」

背後からの声。

振り返った瞬間。

「く、ぐおおおおおおおおおも!!!」

今度は、 灼熱の業火が、 回復する隙も体勢を立て直す隙も与えず、 彼の全身を焼く。 零次は次の一

手をうつ。

激しく熱された体を襲ったのは、 容赦のない絶対零度の凍結。

!

もはや、悲鳴を上げることもできなかった

発とも耐えたかい」 流石だな不死者の王。 普通なら最初の一撃で死んでるんだが、三

零次は体を凍結され、 身動きの取れない恭也にゆっくりと近づく。

な、なんなんだ、あんた.....!」

 \neg

頭部を必死に再生させ、 かろうじて声を出す恭也。

何度も言ってるだろう?」

零次はその右手で、恭也の顔面を掴む。

ヒーローを守る、ヒーローさ」

そう言った彼の右手の平が輝く。

それは、日光と同じ性質の光。

不死者を滅ぼす、生命の根源、太陽の力。

灼熱の炎も、 蜃気楼による幻影も、 この力の副産物でしかない。

ああああ うわああああああああああああああああああああああ

叫ぶ恭也。

構わず、 零次はその頭を潰さんばかりの力を込めて握る。

をあっという間に白く染め上げた。 掌から発せられる光は、 その輝きをどんどんと増してゆき、 世界

ぱ、と零次がその手を離す。

彼の全身は灰になり、 恭也はもはや原形をとどめていなかった。 文字通り粉々に崩れ落ちた。

ちる。 同時に、 霧江のブラッディクロスがカランと音を立てて地面に落

零次は身をかがめ、それを拾い上げた。

この力は龍族の王、天候を操る天龍の力。

べる支配者に敵うものか」 同じ?王?の力であろうが、 地を這う浅ましき不死者が、 天を統

つけにする。 フン、 と零次は鼻を鳴らしながら地面に散らばった灰の塊を踏み

「死んだフリなら無駄だぜ。

は死ねないことは、 さっさと体を再構成しろ。 よく知ってる」 お前が..... 不死者の王がこんな程度で

不死者の王、 ノーライフキング、 その力の最たるものが、 その不

死性。 既に再生が始まってしまうほど、 例えば、 その体は分子単位で微塵に砕かれようが、 生命力と言う言葉では形容しきれ その瞬間から

以外には、 殺すには、次代のノーライフキングが血液を吸い、 ない。 力を継承する ない異常な回復力を持つ。

個を殺すことが出来ても、 不死王の血を、 その存在自体を完全に

はは、は」

数秒待って、乾いた笑い声。

散らばった灰が一点に集まり、 骨格、 循環系、 筋組織、 表皮と、

順番に、ゆっくりした手順で再構成される。

壁にもたれかかるように座り込む恭也。 表皮の後、 服をも再生させ、しかしダメージは響いているのか、

なんだよ、そのチート.....反則、ですよ.....そんなの」

文句を言うな。 貴様の生命力も十二分にチートだ。

お前が霧江の血を全て吸ってしまっていたら、 あるいはこうはな

らなかったかも知れんが」

探るように、目を細める恭也。

飲んでいない。 「王の血はその最後の一滴に最も強い力が残るもの。 お前はそれを

てはな」 要するに中途半端なんだよ。 お前の力は、 ライフキングとし

なる.....ほど.....それは」

がっくり、と恭也は項垂れる。

いいことを聞いた」

零次が反応するが、もう遅い。ば、と、狂笑と同時に顔を上げる恭也。

......動かないでくださいね」

恭也の言葉と共に、 ふわり、 とその影は、 上から降りてきた。

ッ!

その喉元に彼女自身の小太刀の刃を押し当てている、 降りてきた影は、 息をのむ零時。 それは彼にとっては、 全身に傷を負い、虫の息になっている頼子と、 全く想定外の事態だった。 恭也の人形だ

背中を預けたはずの相手からの、想定外の攻撃。

それは松居頼子の心に大きな動揺を生んだ。

れからしっかりとした信頼関係を築いてゆこうと思った、 のことだった。 まだ出会って間もないが、 長い付き合いになりそうだからと、 その矢先

(三号.....どうして.....)

だからだろうか。

その裏切りは、とても酷く彼女の心に響いた。

彼女の意識はもはや風前の灯火だった。

辛うじて残るのは、恭也に対する失望と、 疑念。

意識を保っておくため、 本能がそうさせているのか、 同じ疑問が

何度も脳内を駆け巡る。

その中で、 自分の体が動かされてゆくのを感じた。

何かに掴まれ、持ち上げられる。

そのたびに走る痛みが、 彼女の意識を刺激する。

「.....動かないでくださいね」

ッ!

恭也の声。

そして、誰かが息をのむ音。

寒気が、した。

(だめ.....だめ.....起きろ、 頼子!はやく、 でないと.....取り返し

のつかない.....大事な)

視力を振り絞り、頼子は薄目を開ける。

夜のはずなのに、 飛び込んできたのは白い光だった。

まぶしさに眩む、場合ではない。

光の中に見えたのは、仰向けに倒れている、 もはや生きているの

か死んでいるのかも定かではない、 最愛の友の姿。

その現実が、彼女の意識を強力に引き付けた。

きりえ、さん.....霧江さん!!!」

頭は痛み、体は軋む。

だが寝てなどいられなかった。

その危機を前にして、体の異常など些事だ。

から。 自分の存在する意義が消滅するかどうか、 その瀬戸際だったのだ

おっと。すごいな、まだ意識があったのか」

恭也は頼子を見上げ、 素直に感心したような声を漏らす。

だがまぁ、 意識があったところで何もできはしませんがね」

た。 その言葉に、 頼子は必死に身をよじらせようとするが、 駄目だっ

動かない。

その体は細い糸で何重にも縛られていた。

彼女の体からさらなる出血がおこるが、そんなものは気にならなか それでも、 ڔ 頼子は必死に身じろぎ、抵抗する。 傷が広がり、

やめろ、 頼子!」

 \neg

それを静止したのは、 恭也ではなく、 零次の声。

やめてくれ、 頼むから」

俯く零次。その姿に、 頼子は戸惑い、 おもわず体の動きを止める。

何を、 言ってるんですか!!」

だからじっとしてろ」

生きてるからって!あんな状態で置いておけません霧江は生きてる。 !!零次さん

対して、 出血が止まらず、 その様子を見て、 零次は俯いたままだ。 恭也は笑う。 自身の血にまみれながら頼子は叫ぶ。

やはり、 出来ませんか。 いせ、 わかりますよ零次さん。

なんてできない。 あなたは僕と同じ『創る』 そうですよね」 人間だ。 自分の最高傑作を、 壊すこと

-

やはり俯いたまま、零次は押し黙る。

を失ったら私、 なぜ.....どうして!!!?霧江さんが!霧江さんは あなたが、あなたがくれた、私の存在意義じゃないですか!それ 私は! ツ!?」

糸による拘束が強まり、 その胸と、首が、 強く圧迫される。 思わず声を詰まらせる頼子。

しょうか」 やはり効果覿面のようだ。さて、まずは、 変身を解いてもらいま

「 れいじ、さ」

き抜いた。 零次は彼女を一瞥し、 締め上げられる中、 必死に声を上げようとする頼子。 自嘲するように笑い、 クロス・ガンを。 引

よくもまぁ、そこまで見抜いたものだ」

あなたと松居刑事の話を聞いたんですよ。

た一匹の蠅にも気付かなかったんだ」 あなたは霧江さんに聞かれまいと警戒しすぎて、 そこに潜んでい

人のミスを突くのがうまいんだな、 君は」

ガンをこめかみに押し当てて、引鉄を引いた。 皮肉と共に、 零次はまるで拳銃自殺でもするかのように、 クロス・

た後、 それを聞いた松居刑事は、 あの日、 松居刑事に、 頼子の正体を話した。 最初は驚いていたが、 話をすべて終え

『なんだ。もう知ってますよ』

そう言って、笑った。

間であると教えてくれた。 彼女がもう、自分や霧江なしでも、 その笑顔は、 零次が頼子に抱いていた疑念を吹き飛ばすとともに、 一人でも生きていける立派な人

だからこそ、零時には出来なかった。

彼女を壊してでも、霧江を助ける。

そんなことは、出来なかった。

恭也を倒し、霧江の血を取り戻す。

彼女のためにも、松居刑事のためにも。

れ投げ捨てる。 零次はブラッディ 変身が解けると、 クロスを後ろへ、 裏路地はその夜の暗さを取り戻した。 クロス・ガンを前へ、 それぞ

これでいいか?」

恭也は目を細めてながらその様子をしばらく眺めていた。 そう言って、両手を軽く上げる。

そうですね.....あとは」

そう言って、ちらりと倒れている霧江を見やる。 しかし、 視線を戻して首を横にゆっくりと振った。

たはまだ隠し玉を持っていそうだ」 「まア、 ここまでにしておきましょう。 引き際は肝心ですし、 あな

別の人形が現れ、 そう言って口の端を釣りあげながら、 その手を掴む。 彼はその手を上へ向けた。

言わなくてもわかると思いますが、もし追ってきた場合は..

子の姿があった。 彼が一瞥した先には、 ふわり、と手をひかれながら浮き上がった恭也。 同じように人形に抱えられながら浮かぶ頼

持ってきてもらいます』ってね」 「それでは。霧江さんに、 よろしく言っておいてください。 \Box 後で

らす夜空へと消えていった。 言い終わると、二人と人形二体の体は一気に上昇し、 再び月の照

「クソっ!」

れた。 こうして裏路地には、 殴った手に血がにじんだ。 右手で、壁を殴る零次。 零次と、 気を失った二人の少女だけが残さ

フランケンシュタインが作ったのは怪物だったか。

指を深く切りつけた。 零次は最初に投げた銀のナイフを拾い上げ、 それで右手の人差し

右手の人差し指を差し込む。 ナイフを仕舞い、霧江の側に寄り、 左手で抱き起こし、 その口に

霧江はゆっくり舐めとるように、零次の血を啜り始めた。

「.....霧江、起きてるか?」

「に、き」

蚊の鳴くような声。

かろうじて意識は保てているようだが、 零次が思ったより多く血

液を吸われてしまっているようだ。

その顔はすっかり青ざめ、 体はひどく冷たかった。

ſΪ 魔力も切れているようで、首筋の咬み傷でさえも回復できていな

れでは零次の血を全て吸わせても回復は見込めないだろう。 恭也が最初から全部吸うつもりでなかったのは幸運だったが、 もっと、大量の血が必要だった。

とにかく病院に.....そこの女の子も.....」

態だった。 いだろう。 彼女の体は蜘蛛の糸にくるまれ、 零次は倒れているもう一人の少女に目を向ける。 死んではいないようだが、 かろうじて顔だけが出ている状 このまま放置するのは良くな

(さっき頼子を縛っていたのとは違う性質の糸だな.. 蜘蛛の糸

蜘蛛の妖魔にでも襲われたか。 なら毒をもらっている可能性

がある。

どちらにせよ、早く病院へ.....)

わただしい足音が、 その時、 音が裏路地のすぐ外で止まったかと思うと、 慌ただしいサイレンの音が聞こえてきた。 零次の耳に飛び込んでくる。 パタパタパタ、 とあ

「せ、せんせぇ~!!」

ら裏路地の中へ駆けてくる。 大きな段ボール箱を抱えた真琴が、 聞きなれた声に、 零次は思わず笑みをこぼした。 水溜りの水を跳ね飛ばしなが

· マコ.....どうしてここが?」

魔力逆探知システム、警察の人に話したら褒められちゃいました」

重かっただろう、 そういって、真琴は段ボールを地面に置きながらにっこり笑った。 置いた瞬間ズシリと音がする。

離せず「良かったな」と、 零次は彼女の頭を撫でてやりたかったが、 満面の笑みでこたえる。 霧江を抱えていて手が

せんせ、これ。妹さんに」

中には、 真琴は段ボールの箱を開けた。 大量の血液パックが詰め込まれていた。

ろうって」 警察の人に霧江ちゃ んが危ないかもっていったら、 これ、 必要だ

感激に、零次の瞳が涙でうるんだ。

マコ、お前つ......大好き!」

がば、と思わず真琴の体を抱きしめる零次。

゙えへへ.....って先生っ!」

る霧江。 零次が手を離したことで、支えを失いそのまま地面に頭をぶつけ

· あーにーきぃー」

恨めしげな声を上げる霧江。

うおおごめん!すぐ飲ませる!!」

江を抱き起こしてその口元へ運ぶ。 われ空になるパック。 言って、零次はパックを一つ取り、 じゅるるるるる、と、 ストローを刺すともう一度霧 一気に吸

を指した新しいパックを手渡してきた。 零次がもう箱から一つ取ろうとすると、 その手に真琴がストロー

思わずまた真琴を抱きしめてしまう零次。

ゴーンと地面に頭をぶつける霧江。

ごめんと謝る零次。

と声を上げた。 こんな調子でパックを三、 四個空にすると、 霧江は「もういい」

「いいのか?……っておい」

パックーつ一つに突き刺して、 詰め込まれた段ボールに頭を突っ込み、 の髪から吸い上げた。 零次 の声を聞きつつ、霧江はのそりと体を動かし、 一気に全ての血液パックの中身をそ そのまま髪の毛を動かし、 血液パックが

っは一、生き返った」

えている。 完全回復、 全ての血液パックを空にして、 とまではいかないが、 霧江は大きく息を吐いた。 顔色がある程度戻り首の傷も消

...... つか、兄貴」

顔を上げ、 ジト目になって零次に視線を向ける霧江。

られたってどういうことよこのボケー 「圧倒してたくせに油断して情報しゃ げふっ!」 べって人質まで取られて逃げ

がらも安心する零次であった。 復活早々ながら元気な右スト ┗を顔面に受け、 痛みを感じな

零次は霧江を病院に連れて行きたがったが、 零次たちは裏路地の外で待機していたパトカーに乗り、 鬼蜘蛛に襲われた女の子は病院へ搬送された。 あの後、 すぐに救急車が到着。 霧江は「血さえあれ 天壌署へ。

ば大丈夫」と、救急車から半ば強引に輸血パックを二つほど譲り受 一緒に警察署へ向かった。

そして、天壌所内、小会議室。

霧江、零次、真琴。

そして松居刑事の姿がそこにはあった。

中心に大きめの机があり、席は六つ。

వ్య 真琴が一番窓側にある席につき、霧江はその前で机に腰掛けてい

の間に立っていた。 松居刑事は窓際で壁に背を預けながら煙草を吸い、 零次は机と窓

......正直、まいったな」

松居刑事が口を開く。

すみません、俺がいながら.....」

零次は彼に向って頭を不覚下げた。

「いや、 れるなんてなぁ。 あんたが悪いんじゃないよ。 帰ってきたら母さんに鍛えなおしてもらわんと」 頼子の奴、 簡単に人質に取ら

そう言って目を閉じ、煙草の煙を吐く松居刑事。

本当は誰よりも心配しているはずなのだが、 気を使わせてしまっ

たようだ。

強い男だ。 零次はそう思って、余計に申し訳なくなった。

つ ていなかった。 本当のことを言うと、 零次はあの場で恭也を倒す手段を、 実は持

量産型のブラッディクロスではAランク以上の妖魔を封印できな

ſΪ

フキングの力のために殺すことも出来なかった。 今や恭也はA以上の危険な妖魔となってしまい、 その上ノー ライ

意思で霧江に返させることだけ。 零次に出来たのは、圧倒的な力で彼を屈服させ、 その血液を彼の

その為に、零次は実は相当な無茶をしていた。

いたのである。 圧倒的な力を見せるために、魔力消費量の激しい攻撃を連発して

っただろう。 のまま戦って 言うなれば必殺技を無理やり何回も撃っていたようなもので、 いても、 同様の攻撃はせいぜいあと1、 2発が限度だ

「..... ねぇ、兄貴」

机の上に座りながら俯いていた霧江が、 その顔を上げた。

いく前に、 「あんたに聞きたいことはいっ 一つだけ聞かせて」 ぱいあるんだけど..... 頼子を助けに

霧江はその真っ直ぐな視線を零次に向け、 問う。

私と頼子 0年前に会ったことあるの?」

.....

横に振ると、 零次は一度、 顔を上げた。 霧江の視線から逃げるように俯いたが、 頭を小さく

つ たじゃ お前、 ないか。 ほんとに忘れちまってんだな.. お前たちは」 昔からあんなに中が良か

え....?」

零次の言葉に、霧江は目を丸くした。

「あの、私、出てましょうか.....?」

声を上げた。 なんとなく自分が場違いな話が始まる気がして、 真琴は恐る恐る

「……いや、マコも聞いていてくれ」

そう言って、零次は軽く深呼吸をする。

これは、俺の.....?罪?の話だ」

10年と、少し前。

霧江たち兄妹が暮らしていた星影村は、 当時はまだ多かったスフ

ィア外の魔術師の集落だった。

村は閉鎖的で、 外との関わりがほとんどない代わりに、 静かで平

和だった。

ところがある時、 村では疫病がはやり、 子供たちが大勢死んだ。

霧江が仲良くしていた友達も、 大勢死んでしまった。

疫、病?」

 \neg

怪訝な顔をする霧江。

「 ホントに忘れてんだな... まぁ、 それだけショックだったんだろ

う

目がその流行り病.....」 あの村を滅ぼしたのは立て続けに起きた二度の災害なのさ。 一度

心から思った。 零次は友達の死に悲しんでいる妹を見て、 何とかしてあげたいと

10歳も年が離れているのだ。

当時高校生だった零次にとって、霧江は妹であり娘のようでもあ

てきたのだ。 そんな時、 零次たちの父、 鬼灯震理が、 零次にある話を持ちかけ

俺と親父は同じことを考えていた。

究心もあったのだろうな.....」 まぁオヤジの場合、 やってみたいという好奇心と言うか、 探

零次の言葉に、真琴が返す。

|体、何を....?」

作る.....って」 オヤジはこう言ったよ..... 『霧江のために友達を作ろう』ってな」

霧江は何かを察し口元を手で覆った。

りおぞましいことをやった。 そう... ..だがお前が今想像したのとは少し違う.....俺と親父はよ

えてるか....?」 あの村、 風習で遺体は焼かずに棺桶に入れて土葬していたのを覚

江。 目を見開いたまま、 ふるふる、 と黙ってゆっくり首を横に振る霧

「俺と親父はな……死体を材料にしたんだよ」

零次は、むしろ笑みを浮かべていた。

繋ぎ合わせた。 「夜中にこっそり村の子供たちの墓を暴き、 健康な部分を切断し、

込み、最後に落雷と同等の電流を流した。 様々な魔法薬を投薬して肉体の整合性を取り、 体中に電極を埋め

は生まれた」 すると、動いた。 動いたんだ。 俺と親父の実験は成功し、 その命

零次の顔は、今や狂気じみていた。

己への嘲笑、侮蔑を込め、その顔は醜く歪む。

「?フランケンシュタインの怪物?しかし、 物語のように醜くはな

の娘に、名前を付けた。 むしろ誰よりも美しく 霧江、お前が『頼れる子』 そうなるように作ったからな。 になるように 俺はそ

『頼子』と」

言い終わる頃には、 今は年をとり疲れ果てた男のように、 零次の顔からは狂気が抜けていた。 影が差している。

最高だったよ、その完成度は。

は完ぺきなバランスを誇り、 と成長もするんだ。 別々の人間のパー ツをつなぎ合わせたにもかかわらず、 知力、 体力にも優れ、 おまけにちゃん その肉体

唯一つの欠点は、 肉体に繋ぎ目が、 僅かに残ってしまったくらい

あの娘が俺に最初に向けた感情は、 殺意だった」

彼女に流す電流のスイッチを入れたのは、 初めて動かした時のこと。 零次だった。

少女は、 実験の成功に、喜ぶ震理と零次。 零次に向かって飛びかかり、 しかし、 両手でその首を絞めたのだ。 生まれたばかりのその

「その眼が言ってたよ。 『どうしてこんな化け物に産んだんだ』 っ

う配慮のつもりでもあったんだ.....。 あったが、本人が自分のことを化け物だと思わないように、 見た目にこだわったのは、霧江の友達にするため、 っていうの そうい も

かった。 俺はどうやら見事に勘違いをしていたらしい。 化け物に生まれた彼女は、 生みの親である俺を呪った」 姿は関係な

再調整。を行った。 震理は一度頼子に流した電流を狂わせ、 停止させ、 脳組織への『

の強い愛情』を刷り込みたかった。 オヤジには最初反対されていたんだが、 俺は頼子の脳に、 9 霧江

なりやすいと思っていたからだ。 今思えば自分勝手な考えだが、 そうすることでより霧江と仲良く

ヤジはそうはしなかった。 しかし、あくまで脳の状態は自然に保つことにこだわっていたオ

何よりも、 それも『再調整』 彼女が霧江を襲わないようにするためだった。 の際に実行された。

かり仲良しになった。 そうして、 『再調整』 された頼子は霧江に紹介され、 二人はすっ

るようになった。 まだ弱かった霧江を、 頼子はよく守り、 助けた。 霧江も頼子を頼

零次が込めた名前の、 彼の願いの通りになった。

に気付いた。 しかし、零次は、 頼子が時折あの眼で零次をじっと見ていること

...だから、俺は逃げたんだ。あの子の前から」 いつか殺される。 俺はそう思った..... 怖かっ た。 あの子の眼が...

びたいと言い出すようになり、やがて、それは現実のものとなった。 校に通う様になった。 彼は第三スフィア市にあった叔父の家に預けられ、 零次は急に、村の学校ではなくスフィアのちゃんとした学校で学 そこにある高

子も一緒に死んでしまったものと思い込んでいた」 例の吸血鬼事件があっ たのは、 そのすぐ後だ..... 俺はその時、 頼

あ

 \neg

その言葉に、霧江はようやく一つ思い出した。

それは、つい最近見た夢の光景。

れる『友達』 友達』と遊んでいた霧江は、かくれんぼの途中、 の姿を見ていたのだ。 吸血鬼に襲わ

だから、あの日、あの時の夢を見たんだ.....」

だった。 その夢を見たのは、 頼子と、 この島で初めて会った日の夜のこと

が引き取った」 だが、 頼子は生きていて、 事件の後、 身元不明の孤児として、 私

零次に変わり、 言葉を紡いだのは松居刑事だった。

の名前を呼びながらよく一人で泣いていた。 「最初は手を焼きましたよ。 『キリエさんキリエさん』って、 友達

なかった。 いていました」 おまけに力がやたら強いもんだから、暴れられると手がつけられ 彼女が普通の人間ではないってことも、その時から感づ

言って、昔を懐かしむように松居刑事は笑う。

開いてくれるようになりました。 の体を鍛えました。 本当の娘のように接しているうち、彼女はだんだんと心を 私は彼女に勉強を教え、妻は彼女

そうやってるうちに、 古武術の達人なんですよ、うちの妻。妻は頼子に剣を教えました。 人を傷つけるためのものではない、 いつの間にか本物の家族のようになっていま 自分の身を守るための剣を。

也に彼女を見張るよう依頼した。 を覚えた。 「だが、 そんな経緯も知らなかった俺は、 『またあの眼で見られるんじゃないか』そう思って、 彼女と再会した時、 恐怖

の怪物?が、 怖かったんだ...... 自分自身が作り出した?フランケンシュタイン 自分に復讐しに来るんじゃないかって.....」

松居刑事に続き、再び零次。

「 ま、それも杞憂に終わったがね。

た。 彼女は松居刑事の元、 俺が怖がってるような?怪物?は、 れっきとしたー 人の人間として生活してい もうどこにもいなかった」

しばらくの沈黙。

霧江も、 真琴も、 松居刑事も、 皆一様に押し黙っていた。

「……だから、あの子……」

霧江は俯いた。

私の相棒になりたい。 なんて言ったのね.....それなのに、 私

_

俯いて、その両手で頭を掴むように抱える。

だけど......あの子を.....あの子は、 なかったのに」 「疑っちゃった... ... あの子のこと、 ずっと、 恭也の刀傷を見て..... 私に好意しか向けてい 一瞬だけ

つ た。 緒にたくさん遊んで、 霧江の脳裏にフラッシュバックする、幼き日の光景。 『ヨリコ』、 『キリエさん』そう呼び合って、短い間だったけど、 二人は間違いなく友達で、 親友で、 相棒だ

腕で顔が隠れ、 零時には、 霧江の表情はわからない。

「助けないと」

決意と共に、霧江は顔を上げる。

·全く、本当に素晴らしい出来だよ」

恭也は、 その肢体を前にしてため息を漏らした。

第十二学区。

そこには、人工的に植えられた森がある。

その森の奥、 打ち捨てられた場所に、その孤児院はあった。

り壊されていない廃屋はかびた臭いを漂わせている。

『ひまわり園』と書かれたその孤児院は、廃業して長く、

未だ取

かつて、ここでたくさんの子供たちが笑っていたその面影はない。

ここは、志木恭也の故郷だった。

その中の一室、遊技場の

広い部屋で、ここだけは掃除がしっかりなされていた。

その中で、頼子は下着だけというあられもない恰好で、 部屋の最

奥に立てられた十字架に磔にされていた。

吸血鬼ほどじゃあないが」 あれだけの傷がもう治っ たか。 生命力も強化されているんだね。

....._

その目にありったけの侮蔑をこめ、 頼子は恭也を睨みつけた。

はは、 そんなに怖い顔をしてくれるなよ。 褒めてるんじゃないか」

美しい体だ。

それが彼の素直な感想だった。

首、両手両足、それから胴体の中心に、それじれ継ぎ目が残って よくもまあ死体の合成でこれだけのものを作れたものだ。

いるのは残念だが、それを置いてもいい出来だった。

その素晴

らしさが際立つのかもしれない。 いや、むしろ継ぎ接ぎの体でこれだけ美しいからこそ、

例の事件で切り落とされでもしたか。 ものだ」ただ、 左腕だけは、 最初につなげられたものじゃあないね。 ここだけ、 よく見ると人工の

恭也の目が彼女の左腕に注目する。

そこだけ継ぎ目が微妙に新しく、皮膚の質感が若干違った。

普通なら絶対に気付かないような違いだが、 恭也の目はそれを見

抜いていた。

目線に立つと、 恭也の体が地面から少しだけ、 その左手に触れた。 ふわ、 と浮き上がり、 頼子と同じ

これだけの義手..... だれが作っ たんだい」

頼子は答えず、 顔をそらす。

みは思ったより、 まぁ、 いか。 僕の目的に役立ちそうだ」 自分で材質や製法を調べてやるとしよう。 き

目的

怪訝な顔をし、再び恭也の方を向く頼子。

ああ、 君には教えてもいいかもしれないね.....見せてあげるよ」

た。 恭也は頼子から離れ、 床に着地すると、大げさに右手を振りあげ

がら、 くらいの大きさしかない人形が七体、 すると、恭也の背後、遊技場の大きな出入口が開き、 ゆっくりと室内へ運んできた。 棺のようなものを持ち上げな 人間の半分

恭也は人形たちに道を譲り、 棺は頼子の足元に置かれた。

. 紹介しよう」

棺が、ひとりでに開く。

中に入っていたのは美しい女性だった。

金髪でウエーブがかった髪。 肌は透き通るように白く、 純白のド

レスに身を包んでいる。

彼女の周りには、 色とりどりの花が敷き詰められていた。

僕の、母さんだ」

第二十二話 フランケンシュタインが作ったのは怪物だったか。 (後書き)

狼男はそのうち出るかもしれません。吸血鬼とフランケンシュタイン揃い踏み。

第二十三話 約束は満月の日に。

「……じゃぁ、始めます」

る 真琴は席に着いたまま、テーブルの上にPDAを乗せ操作を始め

は『探索中』の文字が点滅している。 零次たちは、 その周りに立って視線を画面に集中させた。 画面に

魔力逆探知システムには二つの機能がある。

跡する』機能である。 もう一つは零次を探すのに使った『その魔法を使用した人物を追 一つ目は最初に使った『その魔法が使用された場所を示す』 機能

直接恭也を探らないのは、 真琴は今、後者の機能を使い頼子の位置を探りだそうとしていた。 彼による何らかの妨害行為があること

を懸念してのことだ。

の画面が乱れる。 しかし、その行為をあざ笑うかのように、 四人が注視しているそ

何だ?」

と、零次。

後には真っ暗になった。 画面はそのまま砂嵐のようになり、 5秒ほどその画面が続き、 最

壊れたのか?」

室内。 Ļ 画面に表示されたのは映像だった。 そして襟を立てた長いマントを着こんだ恭也の姿。 松居刑事が言った、 次の瞬間。 映ったのは、何処かの薄暗い 画面は明るさを取り戻す。

<u>!</u>

真琴は息をのんだ。

魔力逆探知システムはその位置を地図上に示すもので、 こんな映

像を映し出す機能はない。

となれば、この画面が意味するものは一つ。

何らかの魔法を用いたハッキング。

このシステムは、 既に相手に乗っ取られてしまっている。

やあ、皆さんお揃いで』

画面の中、恭也が嗤う。

どうやら、 向こうからもこちらが見えているらしい。

......お前、なんだその格好....

と、呆れたように零次。

9 吸血鬼って言ったら、 襟のバカでかいマントでしょう?まず

は形からと思いまして』

似あってねーよ。 それより、頼子は無事なんだろうな?」

零次の声に、 画面の中の恭也はククク、と笑い声を上げる。

零次さんに聞きたいことがあったんです』 そんなに心配しなくても.....ちゃんと無事ですよ。 そうだ、 丁 度

..... なんだ?」

『いやぁ、彼女の左腕のことなんですけどね』

言葉と共に、 画面が切り替わった。

が、 新たに映し出されたのは、 十字架に架けられている姿だった。 白い一対の下着だけを身に付けた頼子

身を乗り出すようにして、声を張り上げる松居刑事。

りものでも此処まで美味な女はなかなかいない』 何って?ああ、美味しく頂かせていただきましたよ松居刑事。貴様.....うちの娘に何をッ!」 作

なんだと、貴様っ貴樣!!」

歯を食いしばり、 画面を睨みつける松居刑事。

大声で笑った。 その顔色は烈火のごとく赤く染まってゆく。 それを見て、 恭也は

補充させてもらっただけです。 ハハハハハハ!今のは吸血的な意味で、ですよ。ちょっと魔力を

たのは彼女の構造。 そもそも僕は女性の体にはそんなに興味はありません。 興味があ

こんな恰好をさせてい というだけです』 るのも、 ちょっと観察しやすくしたかった

画面には頼子が映し出されたまま、 恭也の声は響く。

それで、 零次さん。 これなんですがね』

画面が頼子の全身から上半身、 左腕と段階的にズームしてゆく。

『この左腕、あなたが作ったんですか?』

それを見て、零次は眉を顰めた。

換装されていたのか」 なんだ、 これは せ、 俺じゃあない。そうか、 左手は義手に

たんだと思いますが』 『あなたも知らないんですか?多分、 例の星影村事件の時に千切れ

「俺は知らない。 しかいない」 だが、 それを頼子に付けられるような人間は一人

『誰です?』

「 俺のオヤジだ」

兄貴!?」

霧江は画面から視線を外し、 目を見開きながら零次の顔を見た。

どういうこと!?父さんはあの時死んだんじゃ

ああ、そのはず.....なんだが」

零次も戸惑っているようだ。

せた義手が作れるのはこの世でオヤジー人だ」 俺が知る限りでは、 そんな精巧な、 しかも頼子の体に合わ

能性がある、 『つまり、 あなた達の父親が生きていて、 ということですか?』 この子に義手をつけた可

「.....ああ、その可能性は、ある」

恭也の問いに、零次は肯定を返す。

出される。 画面が切り替わり、 何かを考えるようなポーズをとる恭也が映し

しばらくの沈黙ののち、 恭也は呟くように口を開いた。

となると、 もうこんな島にこだわる必要もない、 か

恭也は納得したように頷くと、 画面に向き直った。

『霧江さん、聞いてますか?』

「...... なによ」

画面に視線を戻し、霧江は答える。

9 僕と決闘しません?頼子と、あなたの血をかけて』

「なんですって?」

突然の申し出に、霧江は眉を顰めた。

かし負ければ、 『だから、何をたくらんでいるの」 決闘ですよ。あなたが勝てば頼子は返してあげます。 その血をもらいます。 悪くない条件でしょう?』 L

ら捨るような行為だ。 悪くないどころか、 人質を取っているというアドバンテー ジを自

こちらにかなり優位に働くと言ってもいい。

恭也はこれまでさんざん手を尽くして霧江の血液を奪い取っ た相

手だ。

何か裏がある。そう感じずにはいられなかった。

人質を取るってやり方が好きじゃあないだけですよ』

「......どの口が言うんだよ」

と、零次が呟くように言う。

げざるを得なかったですし』 やだな、 さっきのはあなたが強すぎたのが悪いんですよ。 僕も逃

画面の中の恭也は、大げさに手を振った。

完全なノーライフキングにはなれないわよ」 私の血を吸ったところで、ブラッディ クロスの封印がある。

ましたよ、資料』 よ零次さん、 『ならばそのブラッディクロスを破壊すれば済む話だ。 アレは封印対象が死ねば効力を失うんですよね。 知ってます 読み

.....!

零次は唇を噛んだ。

してあるが、 その時に使い魔にでも覗かれたらしい。 ブラッディクロス開発に関する資料は研究室の金庫に厳重に保管 何度か金庫を開け、資料を確認したことがあった。

の作り方を教えてもらいますよ。 『僕は島を出て、 あなた達の父親を探します。 そして頼子の左手

この島を海の底に沈めてしまいましょうか』 その前に、 色々と遺恨もあることですし、 用済みになった

しれっと言ってのけた恭也に、 真っ先に反応したのは松居刑事だ。

何だと!?君、 ユルサレル?ははは!誰が僕に裁きを下せると言うんです.. そんなことをして許されると思っているのか

 \Box

あ、 あげますよ。 零次さんがいましたか。 じゃあその前に零次さんとも決闘して

の意味で王なった僕が本当にかなわないか確かめておきたいですし』 嘗めるなよ小僧」 いくら龍の王の力とはいえ王の力を着ているだけ のあなたに、 真

腹の底から吐き出すような声で、 零次。

たとえ不死であってもだ」 「もし貴様が霧江を殺したら、俺は心中してでもお前を殺しつくす。

との決闘の結果次第。どうです?受けますか霧江さん』 『ははは。それはそれで面白そうだ。 いずれにせよ全ては霧江さん

..... わかった。 場所を指定しなさい」

霧江!」

考え直せ、と言わんばかりに零次は霧江の肩を掴む。

だが霧江はブンブンと首を真横に振った。

はよっぽどいい 「このほうがいいわ、 兄 貴。 人質を盾にされて好き放題されるより

上は従うしかない。 結局のところ、 裏があろうが無かろうが、 人質を取られてい る以

霧江はそう判断した。

『それじゃ*、* 霧江さん。 流石に今日は疲れてるでしょう?日時は明

日にしましょう。 明旦、 夜の11 . 時

嫌なんで。 場所は..... 直前に教えますよ。 決闘前に踏み込まれたりするのは

ちなみにその間、 警察も捜しに来ないようにお願い しますよ。 使

い魔をばら撒くのですぐわかります。 わかりますね?』 もしそんな動きがあれば

「……わかった」

霧江はゆっくりと頷く。

る 『それじゃ、 なんちって』 また連絡しますね.....尚、 この通信は自動的に爆発す

その言葉を最後に、画面が切り替わる。

に表示されたのは『爆発マデアト5秒』 元の画面、ではなかった。 オドロオドロしい雰囲気の壁紙を背景 の文字。

伏せろ!」

零次は叫びながら、真琴の体を椅子ごと抱くようにして引き倒す。

松居刑事も頭を抱えて床へ。

そして5秒後、 霧江だけは、減ってゆくカウントをただじっと見守っていた。 パンという乾いた破裂音と共に、 PDAの液晶が

砕け散った。

なかった。 爆発は小規模で、 目の前で見ていた霧江にもかすり傷一つ負わせ

あ.....私の卒研.....」

た真琴はがっくりと項垂れた。 しかし被害は大きかったようで、 体を起こし、 その惨状を目にし

面白くなって来た。 そう思わないかい?」

通信を終え、 恭也は踵を返し、 背後の頼子に向き直った。

·.....どういうつもりです、急に決闘なんて」

頼子は疑いの眼差しで恭也を見る。

て大げさに首を振った。 対して恭也はひじを曲げたまま両手を肩の横、 同じ高さまで上げ

「別に深い意味はないよ。

江さんかを天秤に架けることになれば当然霧江さんを選ぶんだ。 て強行してくる、 こっちが無理な要求して、向こうがあなたを助けるのをあきらめ あの時の零次さんはあなたを守ろうとしたけど、結局あなたか霧 なんてことになったら厄介だろう?」

その見込みのないものは、すでに死んでいるもの同然。 人質は助かる余地が残されていてこそ成立する。 んだ人質には何の価値もない。

るのは難しいだろう。 その価値も、要求するものと等価なものでないと取引を成立させ

場合、 まい。 例えば頼子を解放する代わりに霧江の血を吸わせろ、 霧江は応じるかもしれないが、 零次は黙って見ていてはくれ と要求した

うな気がしていたからね。 僕自身、 むしろ今まで良くしてもらったと思ってるよ。 友達だとか仲間だとか、 僕は別にあなたたちが嫌いだとか憎い訳じゃあない。 そういう存在を初めて持てたよ

時 満足させてもらった。 すごく嬉しかったんだ」 実はあなたが平気で背中をまかせてくれた

言って、恭也はほほ笑む。

るような笑顔だった。 それは今までの笑いとは質の違う、 純粋で、 心の底から喜んでい

「だったら、何故・?」

まで。 「天秤にかけたんだよ。 母さんか君たちか。 それで母さんを取った

..... 本当はね..... 怖かったんだ」

恭也は視線を落とす。

僕にとっては、 君たちのことを、僕はだんだん好きになり始めてたんだ。 そして......一瞬だけ思ってしまったんだ」 目的を果たすための駒にすぎなかった君たちを。

恭也は口をつぐみ、目を閉じた。

このまま、何もなかったことにして、君たちと一緒にいられたら

.....母さんのことを忘れて.....。

覚した時、 僕は知らず知らずのうち、蔑にしてしまおうとしていた。 それが、 怖かった。 僕は僕を許せなくなっ 母さんは僕にとって世界のすべてだ。 た それを自 なのに、

....._

頼子は、何も言えなかった。

自分が、 彼に対するくだらない嫉妬心を持たずに、 仲間として、

なかったのだろうか。 友として、 もっと、 仲よくしていれば、 あるいは今のこの状況は、

胸に抱く後悔の念。

な背中を晒した。 彼女だって、恭也のことを仲間だと思っていたから、 彼に無防備

いう疑問の念だった。 彼の裏切りに最初に抱いたものも、 怒りではなく『どうして』 ع

..... 今なら、 まだ間に合います」

必死に、 絞り出すような声で頼子は言葉を紡ぐ。

には、霧江さんも、 「全てを、 なかったことにしませんか。 私も、 一緒に謝ります。 貴方が迷惑をかけた人たち だから、三人でもう一

度、 やり直しませんか」

それでも、 恭也は首を振った。

彼にだって葛藤はあった。

計画をやめるタイミングはいくらでもあった。

それでも、彼は突き進んでしまったから。

それほどにまで、 彼の母に対する思いは巨大だったから。

霧江を騙し打ちし、その血液を奪いとった時の高揚感は、 もはや

欠片も残されてはいなかった。

君は、 勿体無いよ」 もう、 優しい 決断したことだ。 んだな頼子。 僕なんかの仲間には、 僕は、こう見えて意地っ張りでね 友達にするには、

目を開ける。

恭也は、真っ直ぐに見据えた。

その先には、棺桶の中の美しい女性。

彼女は、既に亡くなっている。

ここにあるのはその死体 いや正確には、 死体ですらない。

ここにあるのはその皮だけだ。

魔術的な防腐処理の施された人の皮が、 人形にかぶせてある。

用が効かないからね」 脳は別の場所に保管してある。 それだけは、 どうしたって代

恭也は彼女の枕元に両膝をつき、 顔をそっと撫でた。

:. その人を、 生き返らせるつもりですか?」

ら問うた。 十字架に磔にされたまま、 頼子は恭也とその人形を見下ろしなが

ね のが作りたかった」 「そうだよ。 君の左腕、 血を集めていたのも、 ちょうどそんな感じの、 生体部品を動かす実験のためで 人体に限りなく近いも

恭也は頼子を見上げ、 改めてその左腕を注視する。

体能力を、さらに上回る速さ、強さ、 るはずだ。 それを応用すれば、 フランケンシュタインの怪物である彼女が持っていた驚異的な身 人間の体のほとんどを代用させることが出来 精密さを持っているその義手。

ほうがいいか それ ても良かったが、 から、 脳を覚醒させる技術も欲しいな。 やっぱり彼らの父親を探し出して一緒に聞いた これは零次さんに聞

その子の記憶は全くありません」 私の脳にはあの村の子供のものが使われていますが....

る その人を母親としてよみがえらせるのは無理だ。 そう頼子は告げ

の愛情があれば十分だ」 ?感情が刷り込めるなら記憶も刷り込める..... 出来なくとも、 問題ないよ。 君は霧江さんへの愛情を刷り込まれているんだろう 僕へ

ですか!」 「でも、それじゃあ、 自分に都合のいい人形を作るだけじゃあない

· そうだよ」

をあっさりと肯定した。 恭也は母の顔から手を離し、 嗤いながら立ち上がり、 頼子の言葉

は知ってる。 「だって僕は、 人形師だからね。完全な死者蘇生なんてできないの

僕は僕で、 僕のやり方で母さんを取り戻す。 それだけだ」

「そんなモノのために!!」

頼子は絶叫する。

に!?志木恭也!私は.....私は.....ッ!」 私たちを裏切るんですか!貴方の自己満足にすぎないもののため

「悪いね。僕はこういうヤツなんだ。

純な構造だったんだよ。 恨みなよ頼子、 僕は悪党さ。 始めっからね」 僕が悪で君らが正義で。 そういう単

涙ぐむ頼子と、 自嘲気味に笑みを浮かべる恭也。

二人は、それ以上言葉を紡ぐことはなく。

窓からは、 棺桶の蓋が、 人形たちはそのまま、それをいずこかへ運び去った。 月の光がいつまでも射し込んでいた。 恭也の操る人形によって閉じられる。

とりあえず、 今日のところは帰って寝ろ、霧江」

言った。 零次はショックで机に突っ伏している真琴の頭を撫でながら

俺はマコを寮に送ったあと、 警察の会議に参加する」

「会議?」

と、霧江は目を細める。

な.....お前がもし負けそうになった場合、どう対処するか決める」 「負けそうに.....ですって?」 「まさか、決闘の邪魔する気じゃあないでしょうね?」 その辺は心配するな。人質取られている以上は下手に動けんから

怪訝なまなざしを強める霧江。

が本気なら、 みすみす奴をノーライフキングにするわけにはいかん。 この島全体が危機に陥る」 奴の言葉

島を沈める。

恭也の言葉が本気なら、 たとえ不完全とはいえ、 ライフキン

グの力をもってすれば、 それはたやすく実行されるだろう。

゙......ようするに、勝てばいい訳ね」

ああ、その通りだ。.....それからな、霧江」

た。 零次は真琴の頭を撫で続ける手を止め、 霧江をまっすぐに見据え

「 何 よ」

「躊躇うな」

.....!

零次の言葉に、霧江は目を見開く。

奴は危険だ。不死王の力を残しておくな」

そして理解する。

その言葉の意味。

街の住民ではない妖魔を、 そうだ。 恭也を、殺せっていうの?」 Sランク以上になると妖魔は市民権を喪失する。 殺しても罪には問われん」 もはや

で 霧江の血を吸った恭也が霧江のブラッディクロスを装着した時点 その妖力ランクはS相等へ跳ね上がった。

活動を条件にランクの偽装を認められていたわけではない。 彼は霧江のヒーロー活動に協力していたが、 もはや街の住民としての権利は、 彼には存在しない。 霧江のようにヒー

が殺到するだろう。 奴を吸いつくせ。 そうなれば奴に残ったノーライフキングの血に、 もっと厄介なことが起きる」 生かしておいたところで、 島外追放は免れん。 世界中の吸血鬼

.....

「霧江、いいな」

.....

肯定は、出来なかった。

なぜなら恭也は霧江にとって始めての血族であり、 島に居る限り

認められている唯一の眷族だった。

その事実と、今したばかりの頼子を助けるという決意が衝突し、

揺らぐ。

...... わかった」

霧江は俯いて、そう答えた。

恭也か頼子か、 どちらかを選べと言われれば、 その答えは一つし

か出ようがない。

しかし彼女のその様子は、 零次の心に僅かな不安を残していた。

警察署の窓からも、 月は同じように見えていた。

第二十四話 ヒーローは決意する。

琴はパトカーではない車に乗っていた。 松居刑事の部下が車を出してくれると言うので、霧江、 零次、 真

琴が残される。 霧江が自分の女子寮で降り、 車内には運転手の警官と、 零次と真

゙.....あの、せんせ?」

真琴は零次に向け、そのまなざしを向ける。

なんだい?」

零次は視線を合わせないまま答えた。

私 知ってますから......先生がちゃんとやさしい人だって」

言って、真琴は零次の手を取る。

「うまく、言えないですけど.....今日の話を聞いても、 私の気持ち

は変わりません」

「.....ありがとう。マコ」

真琴の手を握り返すには、 それだけで十分だった。

そういう前提で、 それで、 その. 聞かせてほしいんですけど」 ...私は先生が何を話しても絶対についていきます。

ようは本音で答えてくれ、 と言っているのか。 零次は真琴と眼を

合わせた。

吸血鬼にとって、 そうだな」 それを殺せって言うのは、 眷族は自分の子供のようなものだと聞きました。 少し酷すぎるんじゃないか、 って」

零次はゆっくりと頷く。

「だが、 フキングの力は特別で 誰かが言わなきゃならなかったことだ。それほどノー 危険なんだ」

零次は埋まりそうなほどに座席にもたれかかった。

ってことでもある」 ま、ぶっちゃけるとそれさえ自覚してくれてさえいればいい、

「..... え?」

零次は少しだけ笑って、首を振った。

あいつなら、うまくやるだろう」

そこには、 身寄りもなく、 引き取り手もない子供たちがたくさん

いた。

多かったのは、妖魔と人間のハーフ。

この街が生んだ、一つの闇。

価値観の違いを受け入れられず、 この街で出会い、 結婚し、 子供を作ったはいいが、結局お互いの 離婚してしまうというケースは、

今でも多い。

殆どの場合、 二つの種族、 その際、子供はどちらかの親に引き取られることになるのだが、 その中間の性質を持った子供たちを親は育てきれず、 捨てられてしまう。

実は多い。 そういった子供を譲り受けるための公的な孤児院が、 この島には

だがその予想よりも、捨てられる子供たちの数は遥かに多かった。 そういった弊害が起こるのは当初から予想されている。 もともと人間と妖魔の調和を図るための実験都市。

き取るのを有料化するという政策が打ち出されたのだ。 子ども一人捨てるのに、親は市から10万円要求された。 増える一方の捨て子をなんとかしようと。 0年前、 市長がまだ今の市長ではなかった頃のこと。 市営孤児院で子供を引

それ以上の制裁を受けてしかるべきだと思う。 子供の値段にしては安いくらいだし、自分の子を捨てるような親

政策以降違反者は続出し、 数年後、市長はリコールされ、今の市長が立って、 子供を市の施設に預けずに捨てることは条例違反となるが、 しかし、それでうまく回るわけもなかった。 街に捨て子があふれた。 孤児院の有料 その

児院で育てられた。 化は廃止された。 その間に捨てられた子供たちは、 この『ひまわり園』もその一つだ。 有志により建てられ た私営の

志木恭也は、その中で最下層の存在だった。

他の子供たちによるいじめの標的にされた。 彼は、 なんの妖魔の血も引いていない、 彼だけが、 その孤児院で唯一ただの人間だった。 弱い人間でしかなかっ た彼は

子供は時に残酷で、力加減を知らない。

院に拾われたその日から、苦しい日々が続いた。 妖魔の血を引いているともなれば、 身体能力の差も大きい。 孤児

この孤児院の、 それから救ってくれたのが、彼が『母』と呼ぶ美しい女性。 管理人だった。

た。 人形師だった彼女は、 恭也に人形作りと、 それを操る方法を教え

やがてほかの子供たちの前で人形劇を披露するまでになっていった。 彼の劇は人気を博し、 もともと手先が器用だった恭也は、 気付けばいじめは無くなっていた。 あっという間にそれを覚え、

そうして月日は流れ、 新しい市長に変わって政策が変化し、 市の

孤児院が再び無償化。

ひまわり園の子供たちも、 親に拾われ、 一人また一人とここを去って行った。 ほかの孤児院へ 移ったり、 あるい は新

僕、お母さんの本当の子供になりたい」

口にした。 その孤児院で、 最後まで残っていた恭也は、 ある時こんなことを

の中でも一番彼女を慕っていた。 いじめから救ってもらった恩もあってか、 彼は孤児院の子供たち

ふふ、ありがとう。恭也」

その笑顔を、 彼女にとっても、 そう言って、 恭也は今まで忘れたことはない。 彼女はにっこり笑って、 恭也は誰よりも手間をかけて育て、 抱きしめてくれた。 自分の技術

まで伝授した、本当の子供のようだった。

うとしていた。 みんながいなくなった孤児院で、二人だけの新しい生活が始まろ

その、矢先。

二人が本当の親子になった、その翌日。

「...... お母さん?」

かった。 彼女はもう二度と笑うことも、恭也を抱きしめてくれることもな 駆け寄って、呼びかけても、母は二度と返事をくれなかった。 恭也は、台所で倒れている母を見つけた

死因は、過労だった。

たのだ。 局彼女の魔力であり、その負担はすべて彼女のもとへ帰ってきてい 自分の人形を操って家事の手伝い等をさせていたが、 彼女は日々増える子供たちを、たった一人で育てていた。 操るのは結

そのことが、 慌ただしい生活が終わりを迎え、最愛の子と新たな生活を迎える。 頑張って、 それでも、彼女は最後まで頑張った。 去ってゆく子供たち一人一人の背中を見送った。 彼女の緊張の糸を切ったのだろう。

なっ 彼女は、 た。 最後の一人をそのそばに置いたまま、 永久に帰らぬ人と

ああああ!! うわああああああああああああああああああああああああああ

恭也にとって彼女は、自身の唯一の支え。最も大切な人の死。

支えを失い、 彼は絶望の底へ、 一気に落ちていった。

落ちて、その衝撃で、壊れてしまった。

·..... おかあ、さん」

彼はそれを使って彼女の服をやさしく切り裂き、うつ伏せに転が 仰向けの母の死体を前に、志木恭也はナイフを持って立っていた。

....ッ!

き動かした。 でも、もう一度、 そのきれいな体に、 彼女に抱きしめられたいという欲望が、 刃を入れることは、 躊躇われた。 彼を突

どうしてその方法を取ったのか、 彼にもわからない。

としたのかもしれない。 母はいくつか動物のはく製を持っていたので、 その真似をしよう

に刃をつきたてた。 恭也は、 歯を食いしばり、 必死に悲鳴を噛み殺しながら、 その体

·....ッ!

遊技場の中に持ち込んだベッドの上で、 恭也は目を覚ました。

つ たな」 そうか、 どうせなら、 棺桶の一つくらい、 要求しておくんだ

それはノーライフキングに近づいても同じだった。 棺桶の中でないと、吸血鬼は安らかに眠れない。 上体を起こし、 手の平で顔を拭くと、 血涙で真っ赤に染まっ た。

最初の領地も最後の領地もない王。 自分はそれすら持たずに、こんなところに来てしまったのか。 『棺桶は最後の領地』だと、霧江がそう言っていたのを思い出す。

なんとも滑稽で、彼は思わず笑みをこぼした。

おまけに王の力そのものも中途半端ときている。

......ずいぶん余裕ですね」

まだ起きていたらしい。頼子の声。

おとなしく寝ていればいいのに。

彼女だって、疲れているだろう。

恭也はそう思って、 彼女を張り付けた十字架を見る。

だって、 寝ている間に私が逃げたら、 逃げられないもの。 君は」 なんて考えもしないんですね」

そう言って、 恭也は流した血を皮膚から再吸収する。

はその数倍なんだ」 最初に君を縛ったものより随分軽いだろう?でも頑丈さ

切れるのではないかと必死に身をよじらせたが、 その糸は彼女を最初に縛ったものよりも細く、 頼子は十字架に、 糸で腕や足を縛られて磔にされていた。 頼子はこれなら千 無駄な結果に終わ

たかな」 「ああ、 もしかしてこれなら切れると思って無駄な努力させちゃっ

....!

図星をつかれ、頼子は押し黙る。

「ハハ、まぁ無理もないかな.....それはね、 僕が手に入れた新しい

力なんだ」

「新しい力.....?」

そうとも。さて、君も観念して寝たらどうだい?」

そう言って、恭也は改めて体を横たえる。

疲れてるだろう?それとも、その状態じゃあ寝にくいかな?」

「縦向きで寝る趣味はありませんわ」

そっか。 おやすみ」 じゃあ、 おとなしくして体力を消耗させないことだね。

言って、恭也は軽く手を振り、瞼を閉じた。

午 翌 日。

鬼灯霧江は不機嫌だった。

本当なら今すぐにでも頼子を助けに行きたいのに、 できない。

そんな状況に、苛立っていた。

人質をとられている以上、警察も下手には動けない。

最も、この島の警察は、犯人に『探すな』と言われておとなしく

待っているほどやわな組織ではない。

犯罪率の増加に悩まされながらも、それでも幾つもの妖魔犯罪を

解決に導いてきた組織だ。

その上、不死者の王がかかわっている事件でもある。

妖魔の王達.....SSSランクに指定される彼らは、災害に等し ίĺ

いや、それ以上の脅威とみなされている。

彼らがその気になれば、 人質や、霧江の都合など無視した強行作

戦が取られるだろう。

そうならないのは、おそらく零次のお陰だ。

彼は今頃走り回って、警察側の行動を必死に足止めしているに違

いない。

それは零次自身のためだけではない。

頼子のため、松井刑事のため、そして何より、霧江のために。

霧江の親友を、死なせないために。

霧江が、 そんな彼に報いるには、結果を出すしかなかった。

恭也を、 自分の眷属を、 殺してでも止めると言う、 結果を。

.....

恭也が指定した時間まで、 まだ十時間以上ある。

それまでは待機している、 と零次に言われていたが、 おとなしく

待ってなどいられるわけがなかった。

霧江は棺桶の蓋の上に座り、 いらいらと右足を貧乏ゆすりしてい

た。

ふと、 テー ブルの上に大きな袋が置いてある事に気づく。

レンタルビデオショップの袋だった。

あのカマイタチ事件のあった日に借りたものだ。

事件の後、 頼子が持ってきてくれたはいいが、結局一本も見てい

なかった。

ふと、霧江の足が、止まる。

あの日。

霧江たち三人は、 お互いが似た境遇で育ってきたことを知っ

から思っていた。 霧江はこの二人と、本当に、家族のように仲良くなれたらと、 心

友達なんて、これまで一人も出来なかった彼女がはじめて得た仲

E

その絆さえ、偽りだったのか。

志木恭也は、 本気で自分を殺し、 頼子をも殺すのか。

本気で島を沈めよう、と考えているのか。

だとしたら私に出来ることは、なんだ。

している。 こんなときにこんなものを見ている場合ではないのは、 その答えがそこにあるような気がして、霧江は手を伸ばした。 十分承知

それでも霧江は立ち上がった。

立って、その袋をつかみあげた。

午後九時。

.....何よ、随分早いじゃない」

約束の時間の二時間前。 霧江は携帯を耳に押し当てた。

指定の時間通りだと邪魔が入りそうだったので。 問題あります?』

電話の先からは、恭也の声。

どうやら零次の考えも見透かされていたようだ。

だが霧江としても、この決闘で邪魔が入るのは好ましくなかった。

「無いわ。それで、どこに行けばいい?」

『第十二区......人工森林の中に孤児院の廃屋があります。そこまで

来てください』

「わかった、首洗って待ってなさい」

言って、霧江は携帯を切った。

零次に連絡は 必要ないだろう。

そう判断した。

自分と兄とでは、考え方が違う。

霧江は、自分の助けたいものを助ける。

そう、改めて決意する。

ることが出来た。 に作られた劇場版が多くあり、霧江は様々なヒーローの生き様を見 十五本もある映像ソフトは、まだその半分も見れていなかった。 しかしその内訳は、 様々なヒーローシリーズの、そのシリーズ毎

けた。 そして、それぞれ違った正義を掲げる彼らに、 ある共通点を見つ

それは皆、 誰かを守るために戦っている、 ということ。

『悪が許せない』

霧江は、そう考えて、これまで戦ってきた。

頼子は彼女を『ダークヒーローみたい』と評したが、 もともとそ

んなことにこだわっていたわけではない。

こだわりも、何もないまま。

ただ状況に流されるがままに、彼女は戦ってきた。

しかし。

誰かを守るため、救うため、 ここにきてようやく、 鬼灯霧江は初めて、 その為に力を振るうことを決意した。 悪を討つためでなく、

窓を開け、夜空へ飛び出す。

空には、真円を描く月。

ヒーローの背を、押すように輝く。

きたか」

 \neg

第十二区。

人工森林の奥、 廃孤児院『ひまわり園』 遊技場。

最奥に、 十字架に架けられたままの少女、 松居頼子。

その前に、待ち構える吸血鬼、志木恭也。

を現す。 両開きの扉を両手で押し開け、 もう一人の吸血鬼、 鬼灯霧江が姿

霧江さん!」

囚われの少女は、彼女の名を呼ぶ。

「 頼子……助けに来たわよ」

笑んだ。 入って数歩進み、 立ち止まった霧江は、 頼子に向かって強くほほ

「霧江さん」

恭也は、 その様子を見て、相変わらず例の似あわない襟立てマントを着た ニヤリと笑って、彼女の名を呼ぶ。

恭也.....一つだけ、聞いていい?」

一転、真剣なまなざしで恭也を見据える霧江。

「何です?」

顔に笑みを張りつかせたまま、恭也は促す。

..... これまでのこと、なかったことにして、 帰ってくる気、 ない

それを聞いて、 驚いたように目を丸くする恭也。

それは、 でないと、 物騒ですね」 私はあんたを殺さなきゃならない」

恭也の顔が、再び笑みに戻った。

ためなら何だってします。 でも駄目です。 僕は僕の望みをかなえる。 僕自身の手で.... その

あなたを殺すことも、殺されることも厭いません」

そう.....わかった」

昨日のうちに兄から借り受けたものだ。 霧江は腰のホルスターから、 クロス・ガンを引き抜く。

だったら力づくで、 頼子も、 私の血も全部返してもらう」

. どうぞ。出来るものなら」

り出した。 恭也もマントの内側から、 昨日霧江から奪ったクロス・ガンを取

お互いに、ブラッディクロスをセットし、 銃口を真上に向ける。

Standby

Standby Vampire form

「『変身!』」

最後の戦い、その幕が切って落とされた。二人の声が重なり、同時に引き金も引かれる。

合し、装着時に具現化されるものだ。 殊弾が十字架状態のブラッディクロスを打ち抜く過程でスー ツと融 要所を覆う装甲はクロス・ガンに装填されている魔装弾という特 ブラッディクロスのベースとなるのはあくまでそのスーツである。

たが、 霧江のクロス・ガンは昨日のうちに零次から借り受けたものだっ 魔装弾は零次が使っていたものとは別のものが使われていた。

霧江用魔装弾バージョン2。

霧江がこれまで使ってきた装甲の、その発展型。

のまま。 ベースとなるスーツは当然ながら、 ヘルメットのデザインも以前

封印用の白いブラッディクロスが装着済み。 籠手、 脚甲のカラーは赤から黒へ変更され、 右籠手には最初から

そうな十字架型の窪みがあった。 左籠手の同じ位置にはもうひとつブラッディクロスをセッ

一番の変更点は胸部アーマー。

打ち出された金属製の胸当てに変更されている。 グの女性用チェストプロテクターのような、 以前は弓道部の胸当てのようなデザインだったものが、 乳房の形に合わせて フェ ンシ

ザインそのまま。 対して恭也のスーツ、 その装甲は霧江用魔装弾バージョン1 のデ

その代わり、 こちらはスーツの色が全く違い、 鬼蜘蛛のような黒

が封印されたそれをそのまま使用していた。 彼のスーツ、その元になったブラッディクロスは、 鬼蜘蛛の少女

外は装甲の代わりに魔装弾に収納されるようになっているが、 ちなみにブラッディクロスを装着すると、 元着ていた服は、下着

ぜか恭也のマントはそのままである。

¬ :.

ヘルメットの下、交錯する両者の視線。

二人は、一歩ずつゆっくりと前へ。

彼らの距離は18メートル。

ころで、二人は同時に駆けだした。 じわじわとそれが詰まってゆき、 あと7、 8 メ ー トルとなったと

「はあああああああああああああああり!!」

でやああああああああああああああり!

その距離が詰まる。

同時に突き出される拳。

霧江と恭也、 両者の右拳が互いの胸に突き刺さる。

っっ ! ッ

衝撃で互いに数メートル後ずさり、 二人はすぐに、 ほぼ同時に起き上がり、 仰向けに倒れる。 今度は左の拳を振るう。

「オオッ!」

· らあツ!」

先手を取ったのは恭也だった。

衝撃に後退し、 片膝をついた霧江。

しかしすぐさま立ち上がり、追撃に来た恭也の胸に左足でミドル

キックを食らわせる。

しかし踏み込みが足りず、恭也に踏みとどまられてしまう。

互いに、 握った拳をその顔面めがけて叩きこむ。

衝撃で、 ヘルメットのシールドが砕けた。

再び倒れる両者。霧江は立ちあがりながらヘルメットを脱ぎ棄て

る

それを見て、自らもヘルメットを捨てる恭也。

互いに素顔を晒し、相手の顔面に容赦なく拳を叩きこむ。

鼻や口から血を噴きながら仰け反る二人。

霧江が先んじ、左手で恭也の肩を掴み、右拳を顔面へ連続で叩き

こむ。

恭也は仰け反りながらも、霧江の顎に向けて、下から突き上げる

かのように、左拳でアッパーカット。

霧江の左手は恭也の肩から離れるが、 右手はそれと同時に彼の顔

面へ叩きこまれ、 二人はまた床へ倒れ込む。

は

フ_、 ぶ 八 ぶ 八 ぶ 八 … …

笑う恭也に、 霧江もつられて笑う。

霧江から力を奪い、鬼蜘蛛の力を上乗せしている恭也。

恭也に力を奪われたものの、 あらかじめ封印していた力を取り戻

した霧江。

両者の力は、 完全に拮抗していた。

立ちあがった瞬間には、 二人とも顔の傷は治っている。

再び、殴りあう両者。

酬に、だが二人とも防御は考えない。 常人が受ければ、当たった部分が粉々に砕けかねないパンチの応

に 己の再生力に任せ、相手の再生力を与えたダメージが上回るよう ただ攻撃あるのみ。

それが吸血鬼の、吸血鬼同士の戦いだった。

げてゆく。 二人の噴き出す鮮血が、 流れる血は、 もはやどれがどちらのものであるかなどわからない。 泥のように交じり合い周囲の床を染めあ

っ、血を流しすぎたか)

少しずつ、自分の体が重くなってゆくのを感じる霧江。

僅かに、ほんの僅かにだが、その動きが鈍る。

完全に互角で行われている拳の応酬、 恭也も同じ条件のはずだが、

その隙を、彼は見逃さなかった。

先手を取り、 その胸に強烈なブローを叩きこむ。

「ぐ.....っ!」

衝撃で飛ばされ、床を転がる霧江。

床を染めていた血は浮き上がり、 恭也はすかさず、床に流れた血を回収する。 脚甲を逆に流れるようにして彼

のスーツへ、そしてその下の皮膚へ沁み込み、 吸収される。

恭也は、そう宣言する。「勝負ありましたよ、霧江さん」

この段階で言うの、 負けフラグじゃないの」

つ残りを回収して終わりです!」 今吸った血で、 そういって、 立ち上がる霧江に、 僕はあなたの妖力を上回りました。 しかし恭也は首を振る。 あとは少しず

恭也はマントを翻し、右腕を振りあげる。

第二幕が始まった。

闇が渦を巻く。 霧江がそこに来るのを待っていたかのように、 彼女の周囲六ヶ所。

渦が消え、中から現れたのは6体の人形。

どれも女性型で、等身大。

は、こんなもんで私が倒せるとでも?」

霧江の強気の言葉に、恭也はニヤリと笑みを返す。

「気づきませんか?自分の体の異常」

「なに....?」

霧江が立ち上がる前に、正面に立っていた人形が、その顔面めが

けてローキック。

ところで、霧江は初めて自分の体の異常に気付く。 人形の、恭也よりも遅いはずのそれを受け、 仰向けに倒れ込んだ

「こ、これは.....!」

みついている。 それは、糸だった。 眼に見えぬほどの細い糸が、霧江の全身に絡

は自身の動きが制限されるほどになるまで気付けなかった。 を隠すための偽装魔術をあらかじめ使っていたこともあって、 たその糸は、 本来ならば、吸血鬼の感覚をもってすればすぐに気付けた筈だっ しかし極度の興奮状態の殴り合いのさなか、 恭也が糸 霧江

らにブラッディクロスが持っていた鬼蜘蛛の能力を発揮し、 即ち、 霧江との互角の殴り合いの中でも、 恭也は魔法を使い、 霧江の さ

体を少しずつ絡め取っていたのだ。

いた。 今や、 部屋中は三次元的に糸が張り巡らされた蜘蛛の巣となって

霧江さん! 頼子が叫ぶ。

光の槍が突きたてられる。 大丈夫よ.....こんなの、 立ちあがりながら、しかし言い終わる前に、 すぐに引きちぎ 霧江の腹に真っ白な

った。 皮肉にも、背後から、最初に奇襲を受けた時と、全く同じ個所だ

よろめく霧江の体を、 人形三体が、 その足で蹴り上げる。

宙を舞う霧江。 その腹の傷へ向け、 六体の人形は同時に足を振り

あげた。

が、 は!!

٦ ک その血は糸を伝い、 傷口から、 大量の血を吐き出す霧江。 恭也に吸収される。

力なく、 沈み込むように倒れる霧江。

そんな.....」

頼子の顔は、 すっかり青ざめていた。

いた方が楽ですよ」 だから言ったじゃあないですか、 僕の勝ちだと。 おとなしくして

恭也は霧江を見下ろしながらそう言った。

だが、 霧江は両腕をつき、 必死に起き上がろうとする。

「.....やれやれ」

恭也は呆れたように首を振り、左手を振るった。

それに合わせて、 霧江の手の近くに立っていた人形が、 足払いで

腕を払う。

きこんだ。 正面の人形が、霧江の首の後ろを掴んで持ち上げ、 顔面に拳を叩

仰向けに倒れるのも、もう、 何度目かわからない。

霧江の視界に、遊技場の薄汚い天井が映る。

「.....ねえ、恭也」

霧江は、観念したように、 ゆっくりと上体を起こした。

「.....何です?」

「本当に、戻ってくる気、ないのね.....?」

俯いている霧江。彼女の眼に涙は見えない。

それでいて、泣いているような声だった。

「くどいですよ」

冷静に、突き放すように、恭也。

僕は、 僕の目的を果たす。早く楽になってください、霧江さん。

あなたのことを嫌ってる訳じゃあない。 なるべくならあなたをそ

れ以上苦しめたくはない」

......はは、は」

霧江からこぼれる、乾いた笑み。

私も、あんたのこと嫌いじゃない。 ホント、 なんのために戦

ってるのかしらね、私たち」

顔を上げる。

それは本当に、 今にも泣き出しそうな笑顔だった。

られていた。 彼女の右手には、 いつの間にかもう一つのブラッディクロスが握

二段、変身.....ッ!」

「それは……!」

籠手の窪みにセットした。 恭也がそれに気付き、 行動を起こすよりも早く、 霧江はそれを左

Ĉ 0 m e t e c h а n g e W e a s e 1 f 0

m

ねえ、 出られないの?私の無実、 晴れたんじゃないの?』

天壌署内、取調室。

ロス。 スピーカーに繋がれた四角い台座に、 セットされたブラッディ ク

そこから聞こえるのは今にも泣き出しそうな少女の声。

無実が晴れたら有罪だよ。正確には容疑が晴れる、だ」

次だった。 冷静に訂正するのは、 刑事ではなく、 同席している霧江の兄、

ても、 洗脳してたやつを捕まえて、その証言を聞いてからだ。 もし解放し 「君の容疑は、完全に晴れたわけじゃあない。解放するのは、 まだ洗脳が完全に溶けていなかったら厄介だろう?」 君を

もこんな中に居るなんてぇ!!』 『だったら!さっさと捕まえてよぉ!いやだよ私こんな、 しし

少女の声は、もう泣き叫ぶ声へと変わっていた。

まぁ、 落ちつきなよ。実は、君にいい話を持ってきた」

Ļ 零次は子供をあやすような声で、 少女に言う。

え....?

ば、より早くそこから出られるようになるだろう」 「今すぐに、 とはいかないけれど、君があることを手伝ってくれれ

と、零次はくるりと踵を返しながら言った。

『..... なにをすればいいの?』

「簡単さ」

零次は振り返り、十字架に顔を近づける。

君をそんな風にした原因。 手伝ってくれ」 きみに暗示をかけた奴をぶっ飛ばすの

つけられている。 バージョン2の左籠手には、 『クロスドライバー』という名称が

本来ならば、ブラッディクロスを着ることで上乗せできる能力は その名の通り、 ブラッディクロスの力を引き出すため のものだ。

重ね着をしても意味はない。つが限度。

間や妖魔でもブラッディクロスで二つ以上の能力を上乗せすること それは着る側の、 能力のキャパシティに問題があって、 どんな人

は出来ない。

しかし、 ツはおろかその肉体自体が崩壊することになるだろう。 キャパシティの限界を超えて無理に二つの力を着ようと思えばス 例外に当たるのが霧江と、そのブラッディクロスだった。

自分のブラッディクロスで自分の力を取り戻しているにすぎない

霧江には、 あと一つ上乗せする余裕が残っているのだ。

「最終幕よ、恭也!」

長く、 頭と装甲を残し、 霧江の、その赤いスーツが、 下向きに鋭い刃のついた尻尾だった。 体中に獣の毛が生えた霧江。 茶色い毛におおわれてゆく。 最後に現れたのは、

うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

咆 哮。

彼女からあふれる力の奔流に、 絡めていた蜘蛛の糸が断ち切れる。

「な.....そんなバカな!!」

驚愕の表情を浮かべながら、 両手を指揮者のように振るい、 人形

を操作する恭也。

しかし、無意味に終わる。

宙を滑るように、霧江は飛んだ。

斬撃、斬撃、斬撃。

断ち切られる恭也の糸、人形たち。

鎌鼬の力を得た霧江のスピードは、 恭也の、 吸血鬼の視覚をもつ

てしても、捕え切れない。

彼の人形全てと、 部屋中の糸を粉々になるまで断ち切っ

彼女はそのまま、 頼子を磔にしていた糸も断ち、 切る。

「霧江さん!」

解放され、床に落ちながらも、 満面の笑みを浮かべる頼子。

「そのまま伏せてなさい!」

「はいっ!」

霧江の声に従って、 彼女は伏せたまま自分の頭を押さえる。

バカな..... バカなバカなバカなバカな!!

恭也は反撃の機会を窺おうとするも、 しかしそのスピー ドに対応

できない。

繰り返される斬撃、 そのたびに飛ぶ血液は、 そのまま霧江に回収

される。

しだいに逆転する妖力。

逆転する形成。

もはや、勝負は決した。

いや、 あるいは最初から決していたのかもしれない。

霧江が鎌鼬の少女のブラッディクロスを使うのを、 躊躇っていな

ければ。

満たない可能性を、 彼女は、 恭也が自分から戻ってくる、 信じたかったのかもしれない。 僅 か 0 セントにも

霧江は一瞬のうちに、 背後から恭也の体をその尻尾で巻き取り、

急上昇。

天井を突き破り、満月輝く空へ。

うらあああああああああああああああああああああああり!

!!!!!!

畜生..... ちくし ょおおおおおおおおおおおおおおオオオオオオ

!!!!!!

た空間に大きなクレーターを作る。 恭也の体は再び天井を貫き、その床を砕き、 霧江は尻尾を振るい、恭也の体を、真下へとたたき落とした。 さらにその下にあっ

空間が広がっていた。 床に出来た穴に入ると、 すぐさま急降下し、 追いかける霧江。 遊技場の下には、 そこよりももっと広い

·.....なに、ここ.....?」

周囲を見回す。

真っ暗で、何もない部屋だった。

也の、 霧江は、 全身から流れ出す血でできた、 もはや変身も解け、クレー ター その血だまりを踏む。 の真ん中で倒れて

脚甲を伝い、スーツにしみ込む血。

に気付いた。 そうしているうちに、 部屋の中心に大きなシリンダーがあること

青い液体で満たされたその中には、 人間の脳が浮かんでいる。

「あれは.....?」

のせいか、大きなひびが入っていた。 霧江が目を細め、 それに注視すると、 シリンダー には先程の衝撃

「.....あ、あ.....!」

いつの間にか、恭也は目を覚ましていた。

しかし彼は血を回収している霧江には目もくれず、 倒れたままシ

リンダー に向け必死に手を伸ばす。

. だ、駄目.....駄目だ.....!」

その声は震えていた。

シリンダーのヒビはどんどん大きくなり、 やがて中の水が漏れだ

したかと思うと、それは音を立てて砕けた。

あ.....あ.....あ.....

歪む、恭也の顔。

かぁさんかあさん!母さん!! うわあああああああああ

あああああああ

ああああああああああああああああああああああああああああああ

あああああああ

あああああああ ああああああああああああああああああああああああああああああ

闇の奔流。

ちつけ、 恭也の全身から放たれたその真黒な衝撃は、 彼女を弾き飛ばした。 霧江の全身を強く打

その衝撃で、 左腕のクロスドライバー から鎌鼬のブラッディ

スが外れる。

恭也は倒れた霧江に馬乗りになり、 その顔を殴りつけた。

「よくも!よくも!!お前のせいだ!!お前のせいで、 母さんがっ

母さんがあああああああああああああああああああああ

!

泣きながら、 必死になって、 恭也は何度も霧江の顔を殴りつける。

(そうか.....それがあんたの目的か.....)

彼の顔を見て、霧江は全てを悟った。

顔じゅうから血を流しながら、 彼女はもはや抵抗しなかった。

(だったら、言ってよ.....何か、 力になれたかも、 しれないのに...

そう思った霧江の目からも、 血と一緒に、 涙がこぼれていた。

左手で、恭也は霧江の首を掴んで押さえつけ、 右手を思いっきり

振りあげる。

「これでとどめだ!死

代わりに振り下ろされたのは、 しかし、 その腕が、 振り下ろされることはなかった。 白き刃。

恭也は血を吐きながら、 霧江の上に覆いかぶさるように、 倒れる。

「.....恭也、さん」

た 霧江の視線の先には、 頼子の姿。 振るえる左手で退魔小太刀『月影』 を握っ

「......本当に、馬鹿な奴」

そう言って、 霧江は恭也の体を力いっぱい抱きしめた。

-:: : : : : : :

退魔刀によってその妖力を奪われ、 もはや傷を再生させることも

出来なくなった恭也。

近,,、その意識も薄れていった。

薄れてゆく、その中で。

(..... あったかい、な)

彼は全身に、そのぬくもりを感じていた。

『 でも、 ですか!』 それじゃあ、 自分に都合のいい人形を作るだけじゃあない

り方で母さんを取り戻す。 『完全な死者蘇生なんてできないのは知っ それだけだ』 てる。 僕は僕で、 僕のや

(..... そうか)

その中で、彼は真実を見つけた。走馬灯のように流れる言葉。

(別に、 人形でも、 何でもよくて、 僕はただ、 母さんにもう一度だ

けでいいから、抱きしめてほしくて.....)

で いないなら丁度いいでしょう。 私が今日からあんたのママってこと 『.....そう言うわけだから..... あんた、 恭也っていったっけ?両親

皮女がくれた言葉。初めて、彼女と話した日。

彼女がくれた言葉。

(この人も、?母さん?だったんだ.....)

放 し た。

最後に、

彼は心の底からの安堵の笑みを浮かべて、その意識を手

エピローグ

午前零時。

第零区、天壌島魔導大学医学部付属病院、 手術室のランプは赤く灯り、中には二人の人間がいた。 第五手術室。

その前に立ち、手術着を着ている男、 ツをかけられ、 手術台の上に寝ている少女、 鬼灯零次。 松居頼子。

はい、 じゃあ、 残念ながら」 君も親父のことについては知らないのか」

ない。 物』である彼女の検査や治療は、 あの後、 頼子は病院に運ばれたが、 その制作者である零次にしか出来 『フランケンシュタインの怪

彼女の身を引き受けたのだ。 彼はそれを理由に、 知り合いの教授のコネを使って手術室を借り、

療は必要ない。 しかし、 もともとある程度の再生力を持っている彼女に検査や治

そもそも運び込まれた時点で、すでに怪我は治っていた。

その一つが、 にも拘らず、 彼らの父親の所在について、彼女に確認するためだ 零次が彼女を引き受けた理由は二つある。

でこの島の孤児院に居たのだと言う。 しかし、 頼子は、 気付いた時にはその義手を取りつけられた状態

彼らの父親の所在については、 結局わからなかった。

ならしかたない、 ゕ゚ もう一つの方を手早く始めてしまおう」

零次は手術用の手袋をはめ、 頼子に掛けられていたシー ツを剥が

その下には一糸纏わぬ彼女の裸体があった。

られているとはいえ、その体は、やはり作りものだ。 彼女は、 0年も放ったらかしではあちこちにガタがくる。 本物の人間のように成長する。 それほどにまで精巧に作

あなたはいつもお父さんの手伝いばかりでしたけどね」 こうして君のメンテナンスをするのも10年ぶりか

言って、頼子はくすくすと笑う。

るんだぜ」 なんだ、 覚えてないのか?一度だけ、 俺が一人でやったこともあ

「あら、そうでしたか?」

そうさ..... 俺も、 つい最近思い出したんだがね」

メンテナンスを要した。 彼女を作った当初は、 その性能にもいろいろ問題も多く、 頻繁な

퉈 そして、 零次はそのたびに父を手伝い、その手順を覚えていった。 彼が第三スフィアの叔父の家に行くことになった日の前

だ。 最後のメンテナンスを、 彼は一人でやるよう父親から言われ たの

任せてくれて、 なんで忘れてたんだろうな。 少し安心したんだ」 あのときは、 君がちゃ んと俺に身を

思った日はなかったですよ」 私は……今の私になってからは、 あなたのことを殺そう、 なんて

だろう」 「

そうなんだろうな。

きっと、 俺が無意味に怖がっていただけなん

道具の準備を進めた。 言いながら、 零次は麻酔用の注射やメスなど、メンテナンス用の

たを霧江さんに近づけておくのが危険だと思っていたからです」 私があ んな目をしたのは、 ドSでシスコンでロリコン野郎のあな

,

痛烈なカミングアウトに、 零次は思わずメスを取り落とした。

お前、なぁ!」

「ふ、ふふ……」

その様子に、頼子は声をあげて笑った。

でも普段は全然余裕で押さえてんだぞ」 ... ロリコンでシスコンはともかく、 Sなのをいつ知った。 これ

の引き出しの中身」 言ってあげましょうか?昔のあなたの部屋の、 机の上から三段目

「見たのかこいつ!.....なんてこったい」

と、零次は頭を抱えた。

でも結局、 それも焼けてしまったんですよね」

頼子の顔からフッ、と笑みが消える。

......そうだな」

に決めた。 にこっそり置いてある、 零次は神妙な顔をしつつ、 ということは絶対に言わないでおこうと心 実はあの本は未だ健在で自分の研究室

に、最高の状態に仕上げてやる」 「あの頃よりは、 期待してますよ.....もう一人の、 だいぶ腕を上げたよ。 お父様」 明日の入学式に間に合う様

頼子は穏やかに笑って、その目を閉じた。

笠朝、午前九時。

第三区、 グリーンフォレストマンション、 803号室。

『ちわー、 お荷物でーす。 判子おねがいしまー す』

インターホンの向こうからの声を聞き、 零次は判子を手に玄関へ。

゙ はいはいー.....ってうわ」

届いたのは恭也のために用意された大きな木製の棺桶だった。 ドアを開けてそれを見、 口をあんぐりと開けてしまった。

まいったな、彼はもう.....」

突き返すわけにもいかず、 受け取って、 とりあえずリビングに置

く零次。

聞こえてきた。 どう処分したものかと思案する彼に、 また玄関のチャ イムの音が

「霧江か、どうしたんだ?」

いやー、そろそろ来てる頃かと思ってね」

ャッとジャージ姿の霧江が入ってきた。 玄関を開けると、 今日入学式にもかかわらず、またいつものTシ

「お前、入学式の準備ちゃんとしてんだろうな」

昼からでしょ?余裕余裕」

言いながら、 霧江は彼の部屋のリビングまで上がり込んでくる。

おお、来てる来てる」

軽くヒョイっと持ち上げた。 霧江は零次のリビングに置いてあった棺桶を見つけると、 それを

どうするんだ?それ」

零次は怪訝な顔で尋ねた。

貰ってくわよ。?思い出の品?としてね」

言って、 霧江はベランダに通じるサッシを開けた。

当たり前でしょ。 お前、ちゃんと彼は始末したんだろうな」 だから思い出がいるんじゃない」

れっと言ってのける霧江に、 零次はため息をついた。

゙.....まァ、うまくやんなさいよ」

ちゃんと羽月さん連れてきてよ?」 なんのこと?じゃ、もう帰るから. ぁੑ そうそう。 入学式には

なに?」

と、零次は眉を顰めた。

「だって、私のお姉さんになる人でしょ?」

お前.....俺らがどういう関係かわかって

「じゃ、絶対連れてきてよー」

流し、霧江はベランダから棺桶を抱えて飛び降り、8階の高さにも かかわらず猫のように華麗に着地して、走り去っていった。 生徒との関係を公にしたくないという零次の反論をあっさり聞き

「.....ったく」

その背を見送って、 零次は軽く、 もう一度ため息をつくのだった。

午前九時五分。

第三区、天壤魔導学院高校女子寮。 301号室。

霧江は持ってきた棺桶を、 自分の棺桶の隣に置いた。

げていた。 彼女の足元には、 一匹の黒ネコがいて、 彼女を不思議そうに見上

· はー い、これがあなたのおうちよー 」

入れた。 霧江は棺桶の蓋を開け、 ネコの体をやさしく持ち上げ、 その中に

.....

きょろきょろ、と周囲を見回すネコ。

ん?やっぱでっかいか。 仕方ない。 こんど作りなおしてあげるわ」

そう言って、霧江は猫の頭をやさしくなでた。

...... いや、そういうことではなくて」

と、黒猫は声をあげた。

僕を殺すんじゃ なかったんですか?マスター」

「なーにバカ言ってんのよ」

で叩いた。 ぺちん、 と霧江はネコの頭を、 殆どその右手を乗せるような軽さ

私は言っ たわよ。 あんたを立派な吸血鬼に育てる、 ってね」

言いながら、 彼女はそのままの手でネコの頭をふわふわと撫でた。

とか、 私があんたのママだ、 あんたが誘拐犯で島外追放ものの犯罪者だとか、 とも言った。 兄貴がその力を危険視してる

うが」 らい間違ったことしたからって簡単に殺したりするわけないでしょ そういうのは関係ない တွ あんたは私の大事な『子』 で、 一回く

が、 その言葉にネコは、 少しだけ、 笑った。 恭也は、 もし猫にそういう表情があるならだ

「たーだーし」

がち、と霧江はネコの頭を掴んだ。

悪いことしたんだから罰は受けないとねー」

ネコ恭也はじたばたと抵抗する。

と二百年くらいその姿でいてもらうから」 「とりあえずあんたは『眷族』からただの に にひゃ」 J 使い魔』 に格下げ。 あ

抵抗を強めるネコ恭也に、 霧江も掴む力を強める。

は 私の親友に傷付けたんだから当然でしょ。 あと鎌鼬の女の子とか、 いろんな人に迷惑掛けまくったんだから反省しなさい」 はい いたたたたた!わかりましたって」 鬼蜘蛛の女の子とか。 火鼠のハー

パ、と霧江は手を離し、彼を解放してやった。

闁 「よろしい。 あんたの性根を叩きなおしてやるからね」 どうせ吸血鬼なんだから、 二百年くらいすぐよ。 その

言って、霧江は腕を組み、恭也を見下ろした。

恭也は背骨を丸め、 項垂れる。

るのは夕方くらいになると思うけど、 「それじゃ、 私は頼子とご飯食べてそのまま入学式に行くから。 おとなしくしてなさいよ 帰

言って、 霧江はネコの目の前で、学校の制服姿へと着替え始めた。

······

恭也はその様子を、ただじっとつめ見ていた。

別に劣情を催したわけでもない。

彼が女の体に興味がないのは、今でも変わっていない。

彼女は正義の味方だ。

正義の味方で、悪を許さないヒーローだった。

それでも、彼女は自分を警察には突き出さず、殺しもせず、 自分

で罰を与えるという。

は激しく叱る、 まるで、子供が外でやった悪戯を他人からかばいつつも、 母親のように。 自分で

(なんだ。

結局、僕がずっと欲しがっていたものは、もうとっ

ことは出来ないだろう。 この姿では、以前のように満足に人形を作ったり動かしたりする

でも、それでもいいと彼は思った。

彼は、母を取り戻したのだ。

それだけで、十分だった。

じゃ、行ってくるわね」

玄関に立ち、霧江は恭也を振り返った。

「.....いってらっしゃい、母さん」

た。 呟くような声に、霧江は満足したように笑って、部屋を出て行っ

「霧江さん」

部屋の外にはもう、 同じ制服に身を包んだ頼子が待っていた。

おはよう頼子。じゃ、いこっか」

「はい」

頼子はにこやかに笑って、二人は並んで歩きだした。

あ、そういえば霧江さん」

女子寮を出たところで、頼子が立ち止まる。

「どしたの、頼子」

霧江は振り返って、 不思議そうに首をかしげた。

私 助けてもらったお礼をしたいんですが」

お礼?」

霧江は眉を八の字に曲げて、

要らないでしょ。 そんなの。 相棒なんだから」

さらりと言ってのけた。

その言葉に、頼子は顔を輝かせたが、 Ιţ と何かに気付いた後ぶ

んぶん首を横に振った。

「今回の私は、全然相棒っぽくなかったというか、 むしろヒロイン

みたいな立ち位置だったので。 ケジメとして、何でもいいので何か一つ言ってください」

ケジメねぇ.....」

なんだかんだでこの子も変な子だ、と苦笑する霧江。

しばらく考え込んで、あ、 と手を打った。

名前?」

名前!名前考えてなかった!」

頼子は首をかしげる。

「そうよ、 ヒー ローの名前。 ずっと保留にしてたからさ。 ねえ、 頼

子考えてよ」

むむむ.....そうですね.....」

口元に手を当て、真剣な表情で悩む頼子。

しばらく考え込んで、 それじゃあ、 と口を開いた。

ブラッドガール』というのはどうでしょう」 では、 少々安直ですが、 吸血鬼の少女のヒーローと言うことで『

「よし、じゃあそれで」

パン、ともう一度手を打つ霧江。

「 え、 ちょ、そんなにすんなり決めちゃうんですか?」

あっさり決定したことに、少し慌ててしまう頼子。

はできないじゃない」 「だって、 相棒のあなたが悩んで決めてくれたものだもの。 無碍に

そう言った霧江の顔は満面の笑みを浮かべていた。

て、でも.....」

いいからいいから。ほら行こ、頼子」

霧江は頼子の手をとり、桜並木の道を走りだした。

今日は入学式だ。

まってゆく。 これから、 学園生活が始まり、 彼女のヒーロー生活も本格的に始

波乱の日々が幕を開けることになるだろう。

これまで出会ってきたすべてと、これから出会うすべて。

妖魔と人間の、その間に立つ者として。

〔第零章 完〕

第一章完結

今までありがとうございました!

S H I T 001 (前書き)

本編ではありません。

ります。 ここから先は本編の世界観、読後の余韻を破壊しつくす危険があ

嫌な方はブラウザバックで御戻りください。

楽屋。

霧江「 はい、 じゃあブラッディクロス、 第零章反省会はじめますよ

l

零次「えつ、なにこれ」

霧江「『スー パーヒーロー意味ねぇタイム』.....略してS Ĥ i

T ;

零次「Oh リか?」 shit! !……ってスーパー タイムのパク

の最後、 霧江「日朝の7時半から8時半までの時間がそうなんだけど、それ てたじゃない」 フ イズとかカ トとかでおまけのコントみたいなことし

零次「ああ、 それっぽいことをやろうというのか」

がちな、 霧江「実際は厨ニラノベとか中高生あたりが書くネッ キャラがしゃべる謎のおまけだけどね」

殴られたりするんだ」 零次「読 りするアレだな。 んでると背中がかゆくなったり顔から火が出そうになった 作者がキャラと会話して、 キャラをおちょくって

霧江「そうそう。 うかと」 私らもそれやって読者様の背中をかゆくしてやろ

零次「ほほう。で、作者は?」

霧江「恥ずかしがって出てこないわ」

零次「なんだそれ。 っていうか意味あんのこれ」

えず新着に乗せてご新規さんを獲得しようとする悪あがきとして」 霧江「あるわよ。 第一章を書きはじめるまでの繋ぎとして、 とりあ

零次「醜いな」

霧江「まだプロットすら出来てないからね。 仕方ないわ」

零次「え?うそだろ」

霧江「マジよ。 行き当たりばっ ロットだけを簡単につくってたわ」 たり。 作者は最後にどうなるかしか決めてないの。 全部で何章とかも決めてない。 ただ零章のプ

零次「モノ書きとしてどうよ」

霧江「終わってるわよね。 ツだし」 プロットあってもその通りにいかないヤ

零次「?」

霧江「頼子ってもともとプロットに居なかったのよ」

零次「え、うそ重要キャラじゃねーの?」

子は。 霧江「 最初は全然。 フランケン設定も途中で思いついた完全なる思いつき」 女の子を増やそうとした結果生まれたのよあの

零次「 ...普通プロットを変更してから書きなおすんじゃないか?」

霧江「しなかったわね。ぜんぜん」

零次「矛盾だらけになるぞおい」

霧江「 も作ってなかったし」 作者があほだから仕方ない。 もともとしっかりしたプロット

零次「おいおい」

霧江「例えば恭也が裏切るのは確定してたんだけど、 う行動してたかとかは半分くらい後付け」 その過程でど

零次「ああ、 確かに無理やりすぎだよなアレ。 1 9 話

霧江「あいつが裏切る瞬間だけに全力を注いでたからね」

零次「え?全力であれ?」

霧江「イエス」

零次「終わってんな」

霧江「だから人気でないのよ」

零次「なるほど」

霧江「と、 ころで、そろそろ千文字です」 キャラにさんざん出来に関する言い訳をしゃべらせたと

零次「予防線張りまくり。そんなに批判が怖いか」

霧江「マゾっけあるけど打たれ弱いからね。 精一杯の防衛策」

零次「恥ずかしい奴」

霧江「というわけで第二回に続きます」

零次「まだやんの?」

霧江「一章のプロットができるまでね。 わけだから」 ああ、 そうそう。 そういう

零次「?」

霧江「プロットすら出来てないから、 する新フォームを募集します」 のよ。というわけで、これから出てくる敵の妖怪や、私がチェンジ いろんなものを後付けできる

零次「なんと」

うご要望あればメッセー ジかツイッター 霧江「『こんな敵を出せ』 『このフォームにチェンジしろ』そうい の@utumimumaま

零次「ハイパーバトル デオみたいだ」

霧江「ゴおーぼお待ちしてまーす」

零次「絶対に誰も応募してこないに100万!」

S H I T 002 (前書き)

本編ではありません。

ります。 ここから先は本編の世界観、読後の余韻を破壊しつくす危険があ

嫌な方は御戻りください。

恭也「というわけで二回目です」

頼子「Oh!shit!!異議あり!!」

楽屋その二。

恭也「.....なんです?」

頼子「どうして私と三号なんですか!?どうして私と霧江さんじゃ ないんですか!?こんなの絶対おかしいです!!」

恭也「知りませんよそんなもん!」

頼子「そしてここで作者を罵倒する!定番の流れですね!」

恭也「そうですね」

頼子「 適当に答えてるんじゃありませんこの三号ライダ

恭也「今回の僕は怪人じゃないですか」

ジョンジャーックしてる隣で一人フロート(笑)で浮いていればい 頼子「黙りなさい!あなたなんか最終決戦で私と霧江さんがフュー んですよこのレ ゲル!」

恭也「 をルラギル役じゃないですか!!あと劇場版だろ!!」 ムッ ı に謝れよ!それだとあんた序盤でいきなり霧江さん

でもい 頼子「うるさいですよ三号!ミッシン いんです!作者はパラダイス ストのほうが好きですけどね エースが名作だとかはどう

恭也「 味あるんですか?」 もっとどうでもいいですよ!っていうかこの茶番、 本当に意

めだと!相変わらずお気に入りも評価も増えませんけどね!!」 頼子「だから昨日言ってたじゃあないですか。 アクセス数稼ぎのた

恭也「こんなことしてるからですよ。 てくれてる読者様に迷惑じゃないですかこんなの」 っていうかお気に入り登録し

確かに、 更新入ってもぬか喜びさせるだけですものね」

恭也「そうですよ。 新章楽しみにしてる人がいるかもしれない のに

.....ところでパラダイス ストといえば」

恭也「強引に切り替えやがったこいつ」

頼子「霧江さんとあなたの最終決戦はファ ズVSオ ガですよね」

恭也「殴り合いの後新フォ も作者的には殴り合いはク ガのダ ムで圧倒して決着付けるあたりは。 バ戦を意識していたとか」 で

さに、 頼子「 ああ、 ですね」 顔じゅうから血を噴き出しながら殴り合うシー ンはま

恭也「 んで、 作者は最近やっとエタ ナルを見たそうなんですが」

頼子「 あれも面白いですよね。 Vシネマにしておくなんて勿体無い」

恭也「 よかったって」 エター ルのマントで拳の軌道を隠しながら殴るのがカッコ

頼子「 あなた、 確かマント装備してましたね、 変身後も」

恭也「ええ、だからそれやっておけばよかったって」

頼子「なるほど。 !みたいにこじつけもできますし」 書きなおしますか?丁度私の戦い方を見て学んだ

消したくないそうなんですよね」 恭也「でも作者的にはかなり気合を入れて書いていたので、 アレを

頼子「ふむぅ、 確かに。 作者的には勿体無いですよねえ」

ダーの戦い方をパクr..... オマージュやリスペクトを入れていきま 恭也「まぁ、 すのでお楽しみに」 エター ナルに限らず、 これからどんどんいろんなライ

けどね。 頼子「そのまんま過ぎてもアレなので勿論アレンジ入れまくります 一応能力バトルものですし」

恭也「え?そうだったんですか!?」

頼子「 殴り合いだけなら妖怪一杯出す意味ないじゃないですか」

恭也「そうですけど、基本殴り合いですよね霧江さん

頼子「主人公の能力は出来る限り単純にするのがい いらしいので」

恭也「 まぁ単純な力こそ一番強力と言えるのかも.....

頼子「さて、そろそろお時間ですね」

恭也「第三回もお楽しみに」

頼子「マジで誰得ですよねこれ」

恭也「アクセス数稼ぎだから作者得」

頼子「思いっきり恥かいてるのでプラマイゼロどころかマイナスで すよね」

恭也「そうですね」

プロローグ この世で最も面白きもの。

ふわふわふわ。

飛んでいる。 一匹の真つ白な蛾が、 静寂に包まれた月の夜空を、浮かぶように

ふわふわふわ、ふわふわふわ。

かにおちた。 蛾は赤い屋根の建物にたどり着くと、力尽きたように、そこへ静

何故、我がこのような手段を用いなければならぬのか。

それは彼女、あるいは彼にとって、屈辱以外の何物でもなかった。

羅生門の赤き屋根に降り立ったもの。

それは、 一人の老婆だった。 白い着物に身を包んだ、長い髪の老

婆

しかしてその形相は、まるで鬼のようであった。

老婆は息を吐き、無造作に座り込む。

そして、その左腕に抱いたもの 今し方取り返した自身の右腕

をしげしげと眺めた。

切断面を見やる。

それは、まだ生きているようだった。 かの名刀、 髭切の切れ味、

その凄まじいことを思い知る。

ええい、忌々しい。

老女はかぶりを振った。

否 あの男の腕あればこそであった。 これは髭切りの太刀のみの力によってなせる業ではない。

確認すると、 老女は右腕を持ち上げるように動かし、 切り口はたちまちに結びついて、老女の腕は元の通りとなる。 老女は右腕を、 それで顔面を隠す。 あるべき場所へと戻す。 しっかりと繋がったのを

消え失せ、その顔はもはや皺もなく、 若く美しいものへと変わっていた。 しばらくしてその手が退くと、その下からは鬼の形相がすっ 男とも女ともとれるような、

なぜ、思いどおりにゆかぬのだ

皆殺しにするつもりで、 首領であった酒呑童子、 唯一生き残った鬼は、 かの源頼光と、その四天王共、 この鬼にとって全ての凶事は、 そして山の同胞達を打ち取ったあの夜から。 この京に舞い戻ったのである。 復讐を遂げんがため、 卑怯にも酒に毒を盛り、鬼たちの あの山の、 宴の席で始まった。 頼光とその四天王を

その結果が、このざまであった。

我のすることではないと、 腕を奪われ、 それを取り返すために人間に化けるなど、 鬼は自身の行いを恥じた。 鬼神たる

何故だ」

鬼は、その憤りに震えながら声を発した。

何故、 我等が人間などに後れを取らねばならぬのか!」

鬼の中に浮かぶのは、 怒りと、 そして疑問だった。

我等は鬼神。 人間など、 取るに足らぬ存在のはず。

決して侮りではない。

鬼と人間の間にある力の差。

どうして覆ることがあろうか。

思い通りに行かぬ事などないはずであった。 神をも恐れぬ力を振るう鬼。この世、 あの世においても敵はなし。

しかし、それでも、 鬼は勝てなかったのである。

鬼は敗北し、腕を斬られ、それを取り返す為に人間の女に化けね

ばならなかった。

圧倒的な存在であるはずの鬼が、 なぜ人間に負けねばならぬのか。

かつて同胞と共にあったあの山へ籠り、彼は問うた。 何度も考えを巡らせた。

しかし、 答えは得られなかった。

そうして一年唸って、鬼は、 一つのことに気付いた。

にならぬ、 総てを我がものに出来るこの世にあって、 ただ一つのもの。 其れは我が手の自由

それに気付いた時、鬼の口は歪んだ。

鬼と比して、 圧倒的に劣っているはずの人間共。

しかし、 何度戦おうと鬼は、最後には破れてしまった。

それはこの世でただ一つ、 思い通りにならない存在。

人 これほど面白きものがあろうか」

そうして、何処かへと去って行った。鬼は山を降りた。

:

「.....それで?」

鬼灯霧江は眉を顰めながら、男とも女とも取れる顔をした、 その

匹の鬼へ問う。

つまり

鬼は答えた。

我は気付いたのだよ、娘。これはあの頃から変わらぬ我の人

間への評価なのだ」

鬼は笑った。それを悟った、あの時と同じように。

「其は、この世で最も面白きもの」

その、午前十時。日曜日で、学校は休みだ。吸血鬼事件、解決から三日後。

「ええ、構いません」「.....本当にいいのね」

の衝撃で、 打ち捨てられた場所に、 天壌島第五スフィア市。 痛み切っていた廃屋は、 今や倒壊寸前となっていた。 先日あった、 かつての孤児院『ひまわり園』 第十二区、人工森林『子の森』 ヒーローと人形師との戦闘 がある。 の奥深く。

ために野外活動用の施設が建設される予定だ。 建屋は、 取り壊しが決定されている。その跡地には、子供たちの

あった。 ひまわり園の庭、決して広くはないそこに、二人と一匹の人影が

鬼灯霧江、松居頼子。

匹の黒い猫。 そして、かつて志木恭也だったモノ、 今はキョウと呼ばれている、

全くなされておらず、雑草が伸び放題だった。 い柵に囲まれたその小さな庭は、孤児院が潰れて以来手入れが

く揺れて、キイキイと泣くような声をあげている。 端には、 錆ついた小さなブランコがあった。 ブランコは風に小さ

そして庭の中心、二人と一匹の目の前には、 棺桶が一つ置かれている。 雑草を踏み潰しなが

...._

霧江は棺桶に向かって手を翳した。

その中には、 キョウの、 志木恭也の母 を、 模して造られた人

形が、入っている。

、発火・強化・対象指定」 ※紫葉を焼きつくせ

霧江、呟くように詠唱。

炎は瞬時に棺桶を包み込んだ。

棺が、その中の人形が、ごうごうと音を立てて燃えてゆく。

霧江はキョウの、黒猫の横顔を見た。

猫に表情はない。 あったとしても、それは猫にしか分からないだ

ろう。

るのか、霧江にはわからない。 彼は今どんな顔をしているのか、 どんな思いでそれを見つめてい

かな時間で、棺とその中身を灰へと変えた。 火葬は、長くはかからなかった。 憂いを断ち切るように、 炎は僅

残った灰も、風に吹かれてぱらぱらと散って行った。

お陰で森林火災の心配はないが、 何も残ってはいない。 対象指定の補助魔術のおかげで、雑草に炎は燃えうつらなかった。 焼け跡もなく、 その後には本当に、

全ての憂いを、 無理やりに断ち切ったようだった。

「...... さぁ_

黙って見届けていた三人だったが、 やがてキョウが声をあげた。

帰りましょうか」

彼はそう言った。

人間の姿ならきっと、 泣きながら笑っているだろうと霧江は思っ

た。

そうですね」

揃って、新しい一歩を踏み出すように。 頼子が静かに応じ、二人と一匹は庭に背を向け、 歩き始めた。

不意に、 電子音が鳴り響いた。

終わるのを待っていてくれたかのようなタイミングに、 霧江は苦

笑する。

ポケットから取り出した携帯を耳に押し当てる。

それは『ヒーローコール』

正式なヒーローと認められた彼女に、市や警察が出動を要請する

ためのものだった。

何度か言葉を交わし、 霧江は携帯から耳を離して、 一人と一匹を

振り返った。

事件よ、 行きましょうか」

午前十時二十分。

犯人は魔術師一人に火車一台、 ループラインを第九区に向かって

 \neg

爆走中』

「検問は?」

五分前に突破 というより粉砕されました』

「..... あらら」

るベルト。両手両足は黒い籠手、 ストプロテクター とクロス・ガンの収まっ たホルスター を吊ってい 蝙蝠羽の飾りのついたヘルメット、 脚甲に覆われている。 全身を包む赤 いスーツ、 チェ

ヒーロー、 ブラッドガール。鬼灯霧江は住宅街を駆けていた。

第十二区は日本風の一軒家が多く、 田舎の町のような印象が強い

場所だ。

や屋根の上を飛び継いで、 ヘルメットに備え付けられた通信機で警官と会話しながら、 現場へと向かう。 電柱

と思われます』 S 「なるほど、火車が船にでも取り憑いたら厄介ね、 犯人はおそらく第九地区の港から島外への逃走を企てているもの 私じゃ 追えなく

事件の概要はこうだ。

なる」

で逃走。 輸送車を襲撃。 30分前、 妖魔火車と、 警備会社の妖魔数名を殺傷し、 魔術師一人が共謀して、 そのまま現金輸送車 第三区にて現金

『ループライン』に強行侵入し、 火車は現金輸送車に憑依し、島の外周に建設されている高速道路 港へ向けて逃走中。 それが30分

警察は、 島外逃走を企てているものと予想している。

 \neg 現 在、 間に合わない、 天壌署CMAT か が酉ノ港へ急行中. ᆸ

そ三分三十秒、 でもそれじゃ、 犯人の速度が速すぎるのです。 部隊を展開完了するまではとても間に合いません』 私だって間に合わないわよ」 酉の港へ到着するまでおよ

『心配するな、霧江』

通信機に、別の声が割り込んだ。

彼女の兄、鬼灯零次の声だ。

9 アイテムボックスに新しいのを追加しておいた。 キー は819:

:

「え?なに、バイク?」

゚.....む、よくわかったな』

意外そうな声で、零次。

819でバイクでしょ、 パスが安直すぎんのよ!」

アイテムボックスに8、1、 言いながら、ベルトに取り付けられた、 9とキーを入力、 小さな電卓のような箱 霧江は赤い屋根の

上で踏み込んで、一気に跳躍。

空中でエンターキーを押す。

閃 光。

アイテムボックスから何本もの赤い光のラインが飛びだし、 霧江

の飛び降りる先へ向かう。

赤いラインが立体的なイラストを描くように迸り、 像をかたどる。

それに合わせて形が現れた。

設置したような形のバーニアが二基、 真っ赤なカウルに覆われた、 しかし本来あるべき場所にはタイヤではなく、 シャープなデザインのバイク。 後部には大きな推進用スラス タイヤを横向きに

が一基取り付けられていた。

法は単純にしてある。右グリップを引きながらから魔力を通せ』 『いいものだろう、 名前は『アクセラレイター』 だ。 起動と操作方

了解

言われた通り右グリップを手前に引き、手から魔力を伝えるイメ 着地と同時に飛び乗った霧江は、ハンドルを握りしめる。

バーニア内に描かれていた術式が起動。 備に入る。 左右のグリップに設置されたミスリル製魔力回路から魔力が通じ、 スラスター の術式が起動準

バーニアが火を噴き、車体が浮き上がった。

うお.....っと」

急に浮き上がったため、バランスを崩し落ちそうになる霧江。 しかしなんとか体勢を立て直し、グリップを握りなおした。

よりトップスピードは劣るが、 起動している。お前の意思で自在に調整できる筈だ。空飛ぶコート 『スラスターとバーニアは風と炎の複合魔法をベースにした術式で 小回りは効くようになってる』

「了解.....ところで兄貴」

『なんだ?』

「私、バイクの免許ないんだけど」

大丈夫だ。 現代法では空を飛ぶ機械をバイクとは呼ばん。

.....そういうもんなの?ま、 いいか。 行くわよ!!」

疑問を残しつつ、 霧江は魔力を全力で注ぎ込み、 空へ駆けあがっ

た。

..... 事件が事件ですし、 うるさいですわよ三号」 今回は役に立ちそうにないですね」

るため、 霧江の後を追っているつもりだが、とっくに見失ってしまってい 頼子は肩にキョウを乗せて走っていた。 本当に追えているのかすら定かではなかった。

辿りついたころには終わってますよ」 「今回は待ってればいいじゃないですか。 無理に追ったところで、

.....

むしろその速度を速めていた頼子は、答えない。

「頼子?」むしろその速度を速めていた。

け残ってればい そう言って、頼子はキョウの首をひっつかんで文字通り放り投げ 終わってれば事後処理のお手伝いをするだけです。嫌なら貴方だ いじゃないですか!」

うわ.....っと!」

た。

のまま駆け出し、 キョウは猫の身軽さでもって空中でくるりと回転。 頼子に並走した。 着地するとそ

「貴方にわかるもんですか!」「頼子、どうしたんだい?君らしくない」

頼子はキョウを一顧だにせず走り続けた。

ていたキョウの背中がちらついていた。 彼女の脳裏には、 燃えてゆく棺と人形、そしてそれをじっと眺め

黙っていられますか。あんなものを見せられて)

頼子は、何かを振りきるように、さらに足を速めた。

のおおおおわっはああああああああああああああああ

江は悲鳴に近い声を上げる。 まるで限界の壁を何度も突破したようなありえない疾走感に、 霧

体で風を切るどころではなかった。

を超高速の世界へと誘ってゆく。 『アクセラレイター』は、 『加速装置』 の意味そのままに、 霧江

離を一直線で飛んでいた。 ルほどの高さを保ちつつ、第十二区から第九区に向かって、 彼女は一般市民への影響を極力避けるため、 地上から三十メート 最短距

7 霧江、 話しかけないでよ舌噛みそう! 右グリップ内側にあるボタンを押してみろ』 なに、 これおすの?」

ポチ、 っと霧江は何のためらいもなくスイッチを押す。

てうおわああっはあああああああああああああああ

アクセラレイター、 さらに加速。

られた、魔力増幅装置が起動。スイッチにより、バイクで言えばエンジンに当たる部分に備え付

けられた、

併せて後部、 スラスター内部の魔法陣に増幅魔術が接続され、 ょ

り爆発的な推進力を得たのである。

衝撃波で、 下にあった住宅街の窓がカタカタと揺れた。

速力が上がったのはほんの数秒だったが、 霧江は目的地までのそ

の距離を一気に詰めていた。

彼女は視界の端に第九区を通るループラインをとらえる。

な なにがトップスピー ドはコートのに劣る、 ŕ くそ兄貴.

.....

ず早さは相当なものだが 少しずつスピードがゆるんだのを感じて 霧江は息を吐いた。 といっても相変わら

ボタンはなー』 『三回までしか使えないんだけどな。 ちなみに左のグリップ内側の

「もうっ!聞きたくないわよ!!」

あった。 子供のようにはしゃぎながら解説をする兄にうんざりする霧江で

れている片側三車線の高速道路だ。 高速道路『ループライン』は文字通り島を一周するように建設さ

が、構造上それほど利便性が高いとはいえないため、 ほど多くはない。 条例によってスピード制限がなく、 無料で走行することが出来る 利用者はそれ

いる。 その外回り、 第二車線上を、ごうごうと燃え上がる車が爆走して

その炎はまるで大きめのレーシングカーのような形状を為している。 元は現金輸送車だが、 その運転席内部に、 一人の男が平然と乗って運転していた。 火車の憑依の影響でその形は大きく変化

うまくいったな火車の兄貴!」

であろう部分から、 男が声を上げると、 雑音混じりの声が聞こえてくる。 運転席内部、 燃えているが、 ラジオがあった

この程度楽勝だ。 俺たちにとってはな。 なぁ金山』

「そうだな。 警察の連中もまるで相手にならなかったもんな!島の

外に出たら奪った金で遊びまくろうぜ」

『俺には..... ポルシェを買ってくれればいい

「勿論だぜ兄貴!10台くらいでいいか?」

上等だ.....!外でも走り回ってやろうぜ』

それに呼応するかのように、車を覆う炎の勢いが一層強まる。 静かだが、 内の秘めきれない欲望がにじみ出ているかのような声。

映り込んでくるのに気づいた。 その時、金山はバックミラーに一台のバイク、 のようなもの、 が

お ちょっとは骨のありそうな奴が追いかけてきたか」

金山はバックミラーを注視する。

いて、道路すれすれを滑るように飛んでいた。 真っ赤なそのバイクには、 タイヤのようなものが横向きについて

霧江の乗る、

アクセラレイターだった。

こうでなくては面白くない..... いくぞ、 全速だ..

霧江は少しずつ離されてゆく。 さらに加速する火車。

遊んでるわね連中」

霧江は右グリップ内側のボタンに指をかけた。

......付き合ってやろうじゃない!」

魔力増幅器が、 補助呪文器が唸り、 背部スラスターが吠える。

アクセラレイター、加速。

アクセラレーターはあっという間に火車に追いつき、&二台の放つ衝撃波に、高速道路のフェンスが振動する。

外側に回り

並走する。

『ふ..... やるな!』

火車は楽しそうな声をあげた。

そして車体を右側に寄せ、 側面から衝突を図る。

 \neg つ

霧江はバーニアを吹かせ、急上昇。 衝突を回避するが、 速度が落

ちる。

降りたところで加速時間が終わり、 距離が一気に開いてゆく。

やっ べ.....」

しかし、 焦ったような声を上げたのは霧江ではなく金山の方だっ

た。

『どうした』

下り口通り過ぎちまった」

下り坂をうっかり通り過ぎてしまっていたのだ。 今の一瞬の攻防に夢中になりすぎて、 第九地区の一 般道路へ至る

『なら戻ればいい』

へへ、それもそうだ」

いよく回す。 金山はにやりと笑みを浮かべ、ブレーキを踏みつつハンドルを勢

のアクセラレー 火車は横転しかけるが、 タに対し、 真正面から向かってきた。 片輪で一気にUターン。 元に戻り、 霧江

「 !!

霧江は一瞬息をのむが、 次の瞬間その口元には強気な笑みを浮か

べた。

(上等じゃない!)

そして左グリップの内側のスイッチに指をかけた。 普通の人間にとってはお互いに狂喜の沙汰だろう。 対する火車も、 その状況で、 互いの距離は200メートルもない。 霧江は最後の加速スイッチを入れる。 全速力で突っ込んでくる。

9 うおおおおおおおおおおおおおおおおおお あああああああああああああああっつ!!

炎の勢いを増し、 衝突の直前、 コンマ以下、 金山は、 超神速の世界での対峙。 真っ直ぐに突っ込んでくる火車。 勝利を確信する。

相手のバイクが傾き、操縦者が飛び上がるのが見えていた。 自信の命も危険な状況。 活性化した脳、 研ぎ澄まされた感覚が、

勝った。 そう確信した、 後は逃げるだけだ。 次の瞬間

違っ

セイっ

相手は逃げたわけではない。

違った。 車体から飛び降りるなら、 出来るだけ外側へ向かうのが普通だが、

倒したバイクを蹴って前へ跳んだのだ。 相手は 正確には斜め前方、 鬼灯霧江は、 火車とすれ違うようにして。 左グリップのボタンを押した後、 斜めに

ああああ!!! ヤあああああああああああああああああああああああああああ

すれ違いざまに、 霧江の右フックが、 車体に叩きこまれた。

 \Box うおおおおおおおおおおおおっ だとおおおおおおおおおおお ??

車体は消滅。 火車は爆散、 封印される。 はしなかった。 霧江の右籠手に装着されていた、 ブラッディクロス

その十字架は衝撃で高速道路の路面を削りながら滑って行った。

に爆縮、

現金入りのバッグが慣性で吹き飛ぶ。 車体がなくなったことで、 中に乗っていた金山と、 積まれていた

ずっとスローモーション状態が続いていた金山は、 このまま道路

かフェンスに激突し、死ぬことを確信した。

しかし、そうはならなかった。

彼は見た。 霧江が乗り捨てたバイク、 それが、 形を変え始めたの

だ。

アクセラレータ、 変形。

後部スラスターが外れる。

ハンドル部分を含めた前部が、それそれ左右非対称の脚部に変形。 車体の上半分が真ん中から前後に割れ、 伸びる。 シート部分と、

下半分、魔力増幅器部分が90度回転。 増幅器内部から腕が展開

体の側面へ。

のみで跳躍。 両手はそのまま地面に手を突き、バーニア部分を残したまま腕力

める。 空中で回転して脚部を下へ。同時に、 放りだされた金山を受け止

そしてバーニアの上に両足を、 着地と同時に接続。

とき、 ボディからモノアイの頭部が出てきて、 金山は失神した。 彼の顔を覗き込んできた

いやし、 兄貴もたまにはいいもの作るじゃない」

登って、 小太刀を高速道路の柱をやフェンスに突き刺しつつ、 松居頼子がようやく現場にたどり着いた時、 聞こえてきた 必死によじ

のは鬼灯霧江の、楽しそうな声だった。

いた。 霧江は、見たこともない人型のロボットとハイタッチを交わして 頼子はフェンスの内番上に体を預けるようにして、 彼女を見る。

男は手足を縄で縛られた上で道路の上に寝転がされている。 事件はもう終わり、 警察の到着を待っているようで、 犯人らしき

「いいねいいね。こういうの大好きだわ私」

霧江の言葉に、 人型のロボは照れたように頭を掻いた。

なによーなによー照れてんの?はは、 こいつう~

それはとても楽しそうでコツンコツンとロボの頭部を小突く霧江。

__

かった。 と合流したが、 その後警察が到着し、 頼子は名状しがたい、 頼子の中に生まれた複雑な感情は、 事後処理が進められ、 複雑な感情を胸に抱いた。 頼子とキョウは霧江 消えることはな

「零次さん!!!」

た時だった。 の夜。零次が夜学部の授業を終えてさっさと帰ろうと支度をしてい 松居頼子が鬼灯零時の研究室の扉を勢いよく開いたのは、 その日

「おや、 したのか」 頼子か。 珍しいなこんなところに、 しかも一人で。 どうか

「どうかしたのかじゃありませんよ!」

頼子は語気を荒げつつ、零次のデスクにのしのしと近づいてくる。

- | 体何なんですかあの機械は!」

「どの機械だ?」

アレですよ!あの変なバイクみたいな!」

゙ああ、あれな」

零次は鞄から手を離し、椅子に腰を落ち着けて、 笑みを浮かべた。

いまでも、 「良いだろうアレ。 最近作った中では大傑作だ。 俺の魔法工学の粋を集めた最高.....とはい かな

丈に。 フレームに浮遊金属オリハルコンを使用して極限まで軽くかつ頑

完全魔法力制御が効く上に燃料も不要。 魔導率の高いミスリル銀の回路で使用者から直接動力を得るから

ジン等余分な機械も排除。 バーニア、 スラスター に直接術式を刻んで起動させることでエン

エンジンの代わりに魔力増幅器とスラスター 用の増幅呪文盤搭載

能 人型モードへの変形機能も有し、.でさらに爆発的な加速力も得られる。 人工精霊搭載で自律行動まで可

ありだな。 でかい奴しか使えないし、 いで人型を維持できるのも10分しかない、 ただ搭乗者の魔力を馬鹿食いするから霧江みたいに魔力の容量が 余計な魔力を貯蔵する場所がなかっ というのは改善の余地 たせ

ゆくゆくは量産して警察にも

そういうことではなく!」

熱く語りだした零次を遮り、 頼子が大声をあげた。

どういうことなんだよ」

か! だからですね!あんなもの作ったら私いらなくなるじゃないです

「そんなことないだろう?君はバイクじゃ ですからそういうことではなくて!!」 な いじゃ ないんだから」

バシーン、 Ļ 頼子は零次のデスクを叩いた。

私はもっと霧江さんの役に立ちたい んです!」

それとこれとは関係ないだろう」

大アリですよ!バイクはともかく人型に変形する機能要らないじ

ないですか!!」

ロマンだからな」

つ これだから殿方は!なんでもかんでもロマンロマンロマンロマン

男はロマンを求める生き物だからな

じゃ あ私に霧江さんへの愛情を植え付けたのもロマンですか」

「おま.....それはいいっこなしだろうよ」

痛いところを突かれ、 零次は苦い顔をして視線を僅かに下げた。

· そのおかげで私は今苦しんでます!」

してみるから 悪かったと思ってるよ。 今からでも刷り込みを消せるか実験

るんですかこのノータリン!」 だからそういうことじゃなくて!っていうかなんでそんな話にな

σ. σ. τ.

流石にショックだったのか、 引き攣った顔で唖然とする零次。

のじゃないだの何だの言う気はありません! いいですか!私は元々継ぎ接ぎな体ですし、 今更感情が自分のも

緒です! 私が霧江さんを好きじゃなくなったらそんなの世界が終わるのと

んです!もう一人のお父様として!!」

ですけど、

せめて私をこんな風に作っ

た責任を取るべきだと思う

「責任....ね」

零次は椅子をクルリと回転させ、 頼子に背を向けた。

に頼られたいんですよ私は!」 私を『頼子』と名付けたのはどこのどいつです?もっと霧江さん しかしなんでまた。 お前は霧江の友達として十分に

「.....そんな。名前に縛られなくても」

「貴方が言いますか!とにかくですね!

霧江さんが正式にヒーローになって以来サポートはだいたい警察 人がやってしまいますし、 直接戦闘に参加するにしても霧江さん

が強すぎて足手まとい必至。

張って言えないです!それに 私は何も役に立ってないんですよ!こんなんじゃ相棒なんて胸を _

しなければならないことなのだ。 志木恭也がキョウとして生きている、 それに、 Ļ 続きを言いかけた頼子は押し黙って俯いた。 というのは零次には秘密に

を捨ててまで得ようとしたもの。 (......あれは、キョウが、志木恭也が、 一時は自分たちとの関係性

どれほどの未練があったか。 それを、過去の清算のため、 跡形もなく焼きつくす事を望んだ。

そんな覚悟を見せられて、黙っていられますか.....!) かつては近い境遇にいた私には、痛いほどわかるんですよ。

直ぐ見据えた。 頼子は顔を挙げて、椅子にもたれかかっている零次の背中を真っ

覚悟は出来ています」とにかくお願いしますお父様!私をヒーヒーローか。 簡単にはいかないぞ」 ローにして下さい」

再び回転させた。 零次は暫く考えるように目を閉じたが、 やがて座ったまま椅子を

わかった... 娘のために何か与えてやるのも、 生みの親の義務だ

そう言って、頼子に向き直った。

..... なんですかこれ」

何って、 召喚陣だよ」

が描かれた魔法陣が刺しゅうされていた。 裏には、六芒星を内側に描いた円を基にした、 鬼灯零次は研究室に敷かれているカーペッ トを裏返す。 内部に様々な記号

召喚?どうしてまた」

お前にはコレと同じことをしてもらう」

言っ 零次は胸ポケットから一つのブラッディクロスを取り出

のだが、 んで、借りた力だ」 「これは俺が変身に使うブラッディクロスだ。 別に天龍を倒して封印したわけじゃあない。 天龍の力を封じたも 使役契約を結

借りた.....?」

もらわなければならん」 まあそっちは重要じゃないな。 で災害級の魔物から街を守るためだけにしか使えないわけだが. 「そう。ちなみに強すぎて天龍から使用制限をかけられてる。 とにかく、 何か召喚して、 契約して お陰

フォ 「それはわかりましたが.....なんでまたそんな面倒な。 ルムチェンジするみたいに犯罪者のを使えばいいじゃないです 霧江さんが

霧江の着ているスーツには、 クロスを使用して、その妖魔の能力を得るという機能がある。 犯罪を犯した妖魔を封印したブラッ デ

本的には警察、 した妖魔のそれを持ちだして使用するようになっている。 現場で確保したものをそのまま使う場合もありうるだろうが、 検察と司法取引によって刑期を軽くするために登録

せん、か」 はり臨機応変に対応できるよう、いつでも持ち歩けるものでないと」 霧江のアイテムボックスに転送するんだが、変身に使うとなるとや 「なるほど......一応犯罪者ですし、 ところがどっこい、そうもいかない。 手続きにも時間がかかってな.....いつもは俺が書類を書いて 個人で管理するわけにはいきま あれは持ちだすのに制限

ただし、対象は選ぶな」 の中心へ垂らせ。その後の術式起動は呪文でもなんでも好きにしろ。 「そういうわけだ。 ţ わかったらお前の血を供物として一

「選ぶなって.....どうしてまた?」

かのように、 首をかしげる頼子に、 解説を加える。 零次は教師らしく、 教え子に講義でもする

になる。 一時的な使役ではなく長期的な契約となると、 なるほど..... 術に任せて喚んだ方が相性いいのが出てくる公算が高い」 わかりました」 相性が重要な要素

親指の腹を噛んだ。 頼子はそれを見たあと、 零次は部屋の端に下がり、 術式を真っ直ぐ見据えて、 壁に背を預けた。 自分の右手の

指の皮が噛み切れ、血が一筋流れ出す。

頼子は右手を前に突き出し、 言われた通り一 滳 陣の中心に落と

開け三界六道の門。 我が魔力を持って鍵と成す」

いた魔法陣は白金色の光を帯び始める。 落ちた血液の雫に呼応するかのように、 白い糸で刺しゅうされて

が意に従うものあらば我の呼びかけに応え、 我は友の剣と成ることを望む者也。 我が力を持って対価と成す我 我が元へ来たれ

白金の輝きが増し、閃光。

頼子、零次とも、まぶしさに目を閉じる。

数秒後。

召喚の成否を確認しようと、頼子はゆっくりと目を開いた。

光を失った召喚陣、その中心には.....。

くあー

一匹のカラスが立っていた。

え....

しかし。頼子は何かの間違いだと思って、目をこする。

· くあー 」

それはまごう事なきカラスだった。どう見ても、何度見返しても。

これは.....」

た。 零次は口をポカンと開きながら頼子とカラスを見比べ、 声をあげ

「信じられんな」

「な、何ですかその言い草!」

の前に平手を突き出して制止する。 零次の態度に怒り、 つっかかる頼子だが、 零次はそんな彼女の目

、よく見ろ。足が三本ある」

「.....え?」

そのカラスには、 カラスに向き直り、 足が三本ある。 もう一度よく見直すと、 間違いなかった。

いがヤタガラスだよ、それ」 いや驚いた、 まさか幻獣通り越して神獣を呼ぶとは。 まだ若

ヤタガラス。

える結果だった。 無論力は強大で、 八咫烏と書き、 日本古来より伝わる、 頼子にとっては願ってもない、 太陽の化身ともされる神獣。 大当たりともい

す、すぐに契約を・し

慌ててヤタガラスのもとへ駆け寄ろうとする頼子。 しかし烏は翼を広げ、 身をかわす。

わっ.....!」

勢い余って、 頼子はカーペットの上に突っ伏した。

「くあー!」

倒れた頼子の背中の上に降り立ち、 ヤタガラスはひと声上げる。

「..... なになに」

と、零次は身をかがめ、烏へ顔を近づけた

くあーくあー!」

来てはやったが」

「くあー!」

「俺は」

「くぁー!くあー」

「弱い奴に」

「くあーっ!」

従う気はない」

零次は姿勢をただし、頼子の方を向く。

「.....だってさ」

「なんですかそれ」

とする頼子。 うつ伏せになったまま首だけを動かし、 何とか背中の上を見よう

ヤタガラスは再び羽ばたき、今度は零次の頭の上に飛び乗った。

タガラスの声を聞き、 何故その言葉がわかるのか、頼子には定かではないが、 頼子に伝える。 零次はヤ

とりあえず俺を捕まえてみろ.....だそうだ」

捕まえればいいんですね」

ようにして、 くりと立ちあがる 頼子はカーペットに手を突き、腕立て伏せのように伸ばしてゆっ 一気に零次の頭の上に向けて左手を伸ばす。 振りをして、足をばねのように曲げ、 跳ねる

(捕えた

次の顔面だった。 頼子は確信したが、 しかし次の瞬間気付いてみれば捕えたのは零

なっ おい 痛いんだが」

! ?

つ ていた。 ヤタガラスはいつのまにやら零次のデスクの上にちょこんと止ま 頼子は手を離し、 背後を振りむく。

さらに、 頼子はズルリ、 という嫌な音を自分の体の上に聞く。

..... え?」

せていた。 の上のあたりで真一文字に避けて、 目を落とすと、 自分が来ている制服 なかから白いブラが顔をのぞか ブレザーとシャツが、

キラリ、 とヤタガラスの三本目の足の爪が怪しく光る。

「なぁっ!」

慌てて両腕で胸を隠す頼子。

「くあっくあっ」

意外に良い胸だ」

何翻訳してんですか!」

「ぐふっ」

背後の零次に向け、頼子は肘鉄をくらわせた。

ええい、もう一度!」

また勢い余った頼子は零次のデスクに頭を強くぶつけてしまった。 頼子はもう一度床を強く蹴って、ヤタガラスに飛びかかる。 しかし彼女の神速を誇るはずの左義手は、その体を捕え切れず、

..... うう..... もう」

ふと、 ぶつけた部分を撫でながら、 胸に寒いような違和感。 頼子は起き上がる。

ツ!!?」

 \neg

頼子は見た。

頼子の肘鉄にうずくまっていた零次の頭に再び乗っ た鳥

その嘴には、見慣れた白いブラ。

当然、頼子から奪い取ったもので、 彼女の 胸 服の裂け目からは

形のよい大きな乳房が二つ垣間見えていた。

た日はなかったという。 頼子は、この日ほど、 フロントホックにしたことを激しく後悔し

「な、なんなんですかこのエロカラス!」

「くあっくあっく」

うむ、思った通りの良い胸だ」

「零次さん!」

また余計な翻訳をする零次に語気を荒げながら、 頼子は再び胸を、

両腕で覆い隠す。

そう隠すこともないだろう。 相手は神獣とはいえ烏だし」

| 貴方もいるじゃないですか.....]

俺?お前のおっぱ いなんかもう飽きるほど見たし今更..

「飽きるほど、なんですか」

-! ?___

部屋の入り口から唐突に割り込んできた第三者の声に、 零次と頼

子は驚いて顔をそちらへ向けた。

顔をして、 そこには猫耳の生えた赤い髪の少女が、髪と同じくらい真っ赤な 零次を睨みつけながら立っていた。

最悪だ、と零次は思った。

そこにいたのは零次の教え子であり、 教師と生徒でありながら恋

愛関係にある少女。

羽月真琴だった。

何してるのかと思ったら 一緒に帰ろうと思って ...待ってたのになかなか出てこないから、

「ま、待てマコ!誤解だ!彼女は

命中する。 言いきる前に、 真琴から投げつけられてきた鞄が、 零次の顔面に

鞄が当たる前に、 ヤタガラスは部屋の棚の上に移動していた。

先生のバカ!信じてたのに!!」

真琴はは泣きながら走り去る。

ええええ」 「うわあああああああああああまってくれえええええええええええ

るも、 飛んでしまっていた。 ヮ゙ 零次は真琴の鞄を持って、涙目になりながら慌ててその後を追う。 ちょっと!このまま置いてく気ですか!」と頼子が声を上げ 零次の頭の中からもう頼子のこともヤタガラスのことも吹っ

された頼子。 正確にはブラを加えたままのヤタガラスと共に部屋に残

その頭の上に烏が飛び乗って、 彼女はため息をついて、がっくりと項垂れた。 くあー、 と一声鳴いた。

まさか神獣を喚んじゃうなんてねぇ

大極館学園、 女子寮から学校への通学路

鬼灯霧江と松井頼子の二人は、それぞれ学生鞄を提げながら肩を

並べて歩いていた。

ラスが止まっている。 ウがてくてくと歩いていて、さらに頼子の左肩の上には三本足のカ 霧江のすぐ右側、 即ち頼子のいる反対側には、 一匹の黒猫、 キョ

通ったものが召喚される。 対象を選ばない召喚魔法は、 召喚者と相性が良いもの、 性質が似

使役するだけの力、資格があるということになる。 り、神獣を呼び出すことができたということは、召喚者にはそれを 当然、召喚者の手に余るようなものが呼ばれることはない。 ま

霧江は首を傾げるようにして、頼子の左肩に止まっているヤタガ

ラスを見た。

と変わりない大きさであるところを見るとまだ若い 八咫烏の『八咫』には『大きい』という意味があるが、 のだろう。 普通の烏

まり異形特有の違和感をまるで感じさせない。 ラリと綺麗に並んだ三本の足は、三本もあることによる異質さ、 全身は艶のある黒い羽毛で覆われ、嘴は鋭く、堂々とした眼。 ス つ

伺える。 姿勢よく止まっているところを見ても、 なんというか、 羨ましくなるくらい、 なかなか品があることが 11 l1 使い魔だ。

呼べたってことはそのうち出来るってことよ。 まだ契約すらまともにできてはいないんですが ふべ 楽しみね、

頼子と一緒にヒーロー できるようになるなんて」

霧江さん」

た。 霧江の言葉に感激したように目を輝かせ、 頼子は霧江の手を取っ

「私、頑張ります!!」

まる。 サバサと羽音をたてながら霧江の頼子に取られて上がった右腕に止 二人がそれで立ち止まった拍子に、 カラスが頼子の肩を離れ、

「わ、と。なあに?」

急に来られて驚きはしたものの神獣になつかれるのも悪くないと

思った霧江はカラスに笑いかける。

るූ ラスと呼ばれるような鳥とは思えないような愛くるしさを秘めてい カラスはまん丸な目で霧江を見つめ返した。 その表情はとてもカ

あっ、 気をつけてください霧江さん!そいつは」

手を突っ込んだ。 頼子は霧江の手をぱっと離すと、 即座に一歩下がり、 鞄の中に右

「なによ頼子。可愛いじゃないこの子」「そいつ、そう見えて結構--」

その直後。 頼子の言葉を聞き流しつつ、 腕を持ち上げ、 顔を近づける霧江。

もにゆ。

なる。 という音とともに、 霧江の頭は思いがけない不意打ちで真っ白に

みしだいた。 ヤタガラス、 その一番右側の足が、 霧江の胸を掴んで二、三度揉

「くっ!やはりこいつエロスの塊!!

せいか硬直している霧江の頭の上に乗った。 頼子は鞄の中に忍ばせていた短刀をカラスの背に向けて振るう。 しかしそれをあざ笑いながら、 カラスは飛び上がってショックの

のうちに叩き斬っておくべきでしたね.....!」 このエロカラス!私だけでなく霧江さんの乳まで汚すとは! くあっ くあつくあっくあいい乳だった 昨日

御重視の彼女独特の構えを取る。 頼子は短刀を左手に持ち変え、 カラスに対し、 体を横向きに。 防

的な戦闘態勢だった。 の持ち込みが禁止されているために全力とはいかないまでも、 残念ながら彼女の主装備である小太刀『月影』 Ιţ 校則で刀剣類 本格

かつ、くあーつ!」

かかれる体制に入る。 対するカラスも、 威嚇する猛禽のように翼を広げ、 いつでも飛び

ちがひそひそと話をしながら避けるように脇を通り過ぎてゆくが、 通学路のど真ん中なので、 いや一人と一匹の眼や耳には入ってこない。 この異様な光景に同じ制服着た学生た

両者を包む一瞬の静寂。そして。

面に落ちた。 不意に、 カラスの立っていた位置がストンと下がり、 そのまま地

「 | | え?」

張りつめた空気が歪んだ方向にほどけ、 妙な声を上げる一人と一

匹。

を見た。 なにが起こったのか、 頼子は見下ろし、 カラスは見上げて、 彼女

...... n

なんてことはない。 しかし、彼女は両手で顔を覆い、 ただ霧江がそのばに屈み込んだだけである。 小さな声を漏らしていた。

「ふえ.....えん」

しかもその声は嗚咽だった。

ええええええええっ!?ちょ、 霧江さん!?」

揉まれたくらいで。 鬼灯霧江がまるで普通の少女のように泣いているのだ。 普段は街を飛び回って悪党を退治して回るあのブラッドガール、 それは普段の彼女からすればおおよそ考えつかない事だった。 しかも胸を

「く.....くあうくあう」 う やりすぎたか

申し訳なさそうにしている。 さすがのエロカラスも女の子を泣かせるつもりはなかったらしい。

「かつ!かーかーかーあー!! ^{何っ 勘弁してくれっ} すね!?」 ましょう......どうすればいいの!?カラス殺せばいいですか殺しま 「き、霧江さん大丈夫ですか!?どこか痛いですか!?ど、どうし くわっくわっくわ!」
悪気はなかったんだ

ラス。 泣き続ける霧江と、それを前におたおたと狼狽する頼子とヤタガ

ひそ話をしながらその周りで立ち止まっていた。 登校中の同じ学校の生徒たちが、何人かが野次馬のように、 ひそ

やれやれ.....」

そこから少し離れた場所で、 黒猫のキョウはため息をついた。

「何やってんだか」

..... 霧江さんって」

教 室。

落ち着いた霧江に、 頼子が恐る恐る話しかける。

徒からかなりの注目を浴びてしまっていたためクラスメイトたちの 早めに出ていたため遅刻するなどという事はなかったが、 他の生

うち、 干だが存在する。 彼女らをちらりと見て何かコソコソ喋っているグルー

「その、胸に何かトラウマでも?」

Ļ 頼子は他に聞こえないような小さな声でそう問いかけた。

「.....さあね、自分でも、よくわかんないわ」

本当は.....。

と、霧江は頼子から目を逸らしつつ、 心のなかで呟く。

(本当はあの時のアレを思い出しそうになったからなんだろうけど

:...)

ないモノに造り替えられた幼い頃の自分。 あの時不意にフラッシュバックした記憶。 炎の中で、 人間では

その時、 ?あの男?が、 幼い自分に対し何をしようとしたか 0

霧江は首をぶんぶんと振った。

意味のないことだ。結果的にそれは失敗し、 あの男は死んだ。

頼子が不思議そうに顔を覗き込んでくる。

ふぅ、と霧江は視線を逸したまま、頼子がそれがそうだと判別で

きるかできないか程度に小さく、ため息をついた。

させるような出来事が多くなって困る。 この島に来てからというもの、 ?あの出来事?に関して思い起こ

筈だった。 それはとうに完結していて、 今更もう思い出す必要もない事件の

じようにあの村の生き残りである頼子と再開したことで、 少なくとも、外で暮らしていたときはそう思っていたのだが、 止まって 同

いた時間が動き出したようだ。

いうのではない。 もちろん、それで頼子と友人になったことを後悔しているだとか

ただちょっとした不安があるのだ。

のではないかという、 もしかしたらあの事件はどこかで続いていて、 漠然とした不安が。 自分を待っている

「.....霧江さん」

頼子は意を決したように口を開いた。

い!理由など要りません!霧江さんのおっぱいは私が守ります! 「なにか、 話せないような理由があるようですが..... 安心して下さ

を始めた。 とに言ってから気づいたのか、彼女はハッとして、あわてて「違う ないクラスメイトが聞けばそれはとんでもない発言だった。 そのこ んです!違うんです!!」とおたおたしながら周囲に向かって弁解 あのカラスに触れさせないという意味だろうが、事の顛末を知ら 高らかに宣言し、 クラス内から白い視線を向けられる頼子。

んでいた自分が馬鹿らしく思えてきて、 霧江はそんな彼女に頭を抱え 抱えながら、 ふっ、 と笑をこぼした。 つまらない事に悩

がある。 太極館学園の校舎の裏には、 ちょっとした自然公園のような施設

ため、 と呼ばれるそこに自分たちの使い魔を遊ばせているのだ。 校舎内への使い魔立ち入りが特定の場合を除いて禁止されている 使い魔を持っている学生たちは授業中、 『使い魔預かり所』

過ごせるように環境を整えるといった努力が見受けられた。 原果ては砂を盛った砂丘まであり、 公園内には監視所である小さな小屋を中心に、周囲に森、 なるべく多くの生き物が快適に

スがいた。 その草原エリアと森エリアの境界に、 一匹の黒猫と三本足のカラ

で俗に言う箱座りをしている。 カラスは草原エリアに面した木の上の枝に止まり、 黒猫はその下

無論、キョウと、 頼子の召喚したヤタガラスである。

· あの娘……

不意に、ヤタガラスは声を上げた。

つ たかし 胸に触れられることに関して何か過去に忌まわしい出来事でもあ

うな声。 以外にも、 女の声だった。 しかもかなり若い。 というか、 幼いよ

`.....っていうか喋れたんだ」

キョウは木の上を見上げ、 若干呆れたように言った。

 \neg てやったのだ」 喋れ た』とは無礼だな小僧。 言語レベルを貴様らと同格に落と

言語レベル、ね」

たが、言わないでおく。 かー言うのが高度な言語なのか、 とキョウは馬鹿馬鹿しくな

魔 要らぬ発言で怒らせることもない。 もとは吸血鬼とはいえ、今は猫の形に押し込められたただの使い 一方相手は神獣で、数段格上だ。 媚びることはないとは思うが、

だから、という回答が返ってきた。 ちなみに霧江に対して何故猫なのか、 と聞いてみたところ、 好き

生徒を思い出す。 兄妹で猫好きらしい。 とキョウは彼女の兄が手を付けた猫耳の女

カラスはカラスで、勝手に話を続け始めた。

しかし勿体無い。 こいつ本当に神獣なのかよ」 あれほどの良い乳房、 もう触れられぬか

思考を中断し、 思わずツッコミを入れてしまうキョウ。

......何か言ったか?」

. 別に

首をおろす。 思わず口が滑ったが、 キョウは知らぬふりをして、見上げていた

ヤタガラスはしかし気にした様子もなく、 再び嘴を開いた。

い乳であったしやはりこの人間界に来て正解であった..... だがいきなりあんな良い乳に巡り合えるとは。 召喚者も素晴らし

「おっぱいのために来たのかよあんた」

の娘の使い魔..... むしろ他に此処に来る理由があるのかと聞きたい。 いや眷族だな」 ときにお主、

· それが何か?」

主の胸を見たくないか」

アホだろお前

言ってから、 キョウはしまったと前足で口をふさぐ。

アホとはなんだ。 俺はおっぱい求道者である」

アホだろお前」

二回目の言葉に躊躇いはなかった。

るが、彼は心の底からその存在があほらしく思えてきたのだ。 アホと言われたくらいで怒る性格ではないと感じたというのもあ

に深く同情する。 こんなものを召喚した頼子は災難だったろう。と、キョウは彼女

良い。 「 ふ む:: 一人で行くとしよう」 ... こういうのは連れ合いがいてこそだと思うのだが。 まあ

そう言って、カラスは木の枝から地面へ飛び降りた。

「行くって ええつ!?」

そこに立っていたのは、 彼女はキョウに向かって振り返り、 降りてきた背中を見て、 先程までの三本足の鳥ではない。 キョウは素の頓狂な声を上げる。 笑った。

それは女の子だった。

髪の毛には黒い羽で飾られた簪を刺している。黒い着流しを着こなす、くりくりとした目のおかっぱ頭の少女。 黒い着流しを着こなす、

な女の子だった。 どこからどう見ても人間に、 五 六歳の子供しか見えない、 小さ

を見たんだ。それによると今日の二時限目は体育だという。早く行 かねば、着替えに間に合わんぞ。本当に一緒に行かぬか?」 「キョウといったなお主。俺は昨日召喚者の家で時間割というヤツ

で話していたヤタガラスと同一だと知った。 そしてその発言から、キョウは間違いなく、その女の子が先程ま

した建物二つを向い合せにして建てられている。 外から見れば円柱状、 太極館学園の校舎は、 六階建てのその校舎は、 おおよそ学校とは思えない形をしてい 東と西、 半月形を

るとエレベーターと階段のある場所はそれぞれ陰中の陽、 れば、学校の名の通り太極図に見えなくもなく、太極図に当てはめ 側、西館の南側にそれぞれ設置されている。 の位置にあたる部分になる。 エレベーターと階段は東館西館それぞれ一つずつあり、 この校舎を上空から見 陽中の陰 東館 の

った。しかしこれは予算の都合で断念される。 を二つ向い合せに建て、上空から見れば完全な太極図になるはずだ 余談だが、当初の予定では半月形ではなく勾玉のような形の建物

り廊下でつながっていて、三階建て。 校舎の南側に運動場と体育館がある。 校舎以外の施設は、校舎の北側に使い魔預り所を兼ねた自然公園 校舎と体育館は屋根つきの渡

所だ。 る。一階のメインアリーナは緊急時の避難所にも指定されてい ブアリーナが二つ。 の大きさで、それぞれクラブや体育の授業の科目別で使用され 一階には講堂も兼ねている広いメインアリーナ、二階はその 三階は武道場、屋上にはプールが設置され る場 るサ てい

変化 た。 北の自然公園から東館校舎へ向かって真っ直ぐに、 そして霧江と頼子のクラスは一年B組。 した少女が、 それにつき添うように、 黒猫、 東館の一階にある。 キョウが歩い ヤタガラスが てい

一つ聞いていいかい?

「なんじゃい」

「何故そんなにおっぱいにこだわるんだ」

「.....ぶん

ように体を反らした。 少女は立ち止り、 踵を返して今日に向かい合い、 そして胸を張る

るで当てはまらない貧しさを」 見ろ俺 のこの断崖絶壁。 胸 おっぱい、 バスト、 全ての言葉がま

「 それはでも君がまだ子供だからだろ?」

間より成長スピードが激しく遅い.....少なくとも俺は、 年はこのちっぱいのままなのだ。 百年だぞ百年!どうして耐えるこ 別と年齢に左右される。女に生まれたのはいいが、ヤタガラスは人 とが出来ようか!」 そう、俺は子供だ。この『人間化の術』で化けられる姿は元の性 あと1 0

「僕は後二百年は猫のままだって主に言われたんだけど」

だ!その為にとにかく揉む。 く堪能する!」 知るかんなもん。 とにかく今すぐにでも俺はおっぱいが欲 覗 く。 人間共の持つ素晴らしい乳を悉

「なんでそんな.....」

きくなるんだ!」 貴様人間界の住人のくせに知らんのか。 おっぱいはな!揉めば大

' それ自分のじゃね」

な気がする!」 当然自分のも揉む!しかし他人の乳に触れた手ならばさらに有効

「気がするだけかよっ!」

まぁ そんなこと関係なしにおっぱい好きなんだけどね俺」

. しらねぇよもう」

そして歩きながら、 ヤタガラスの少女は再び前を向き、 キョウははぁっ、 とため息をついて項垂れた。 相変わらずついてくるキョウに問いかけた。 歩を進める。

様の主のおっぱいを!」 貴様こそ、 ついてきたということは期待しておるのであろう?貴

「いや別に.....一緒に風呂入った時見たしなぁ

「なん....だと」

愕然とした表情を浮かべながら、 ヤタガラスは振り返った。

や昨日『洗ってない猫臭い!』 って言われて無理やり一緒に

通りで石鹸の良い匂いする猫だと思った!この畜生!!」 昨日だと!?昨日だと!?何だ貴様ふざけて んのかこの助平猫

ヤタガラスは憤然としながら、 荒い歩調で再び歩を進めはじめる。

畜生には間違い ないけど、 別に興味ないし、 僕猫だし

何が『僕猫だし』 だ!ふざけんなお前だけい い思いしやがって!

今度俺も呼べよ!」

・絶対に断る。 男湯にでも入ってろよ淫獣.

召喚者にこびへつらって風呂入れてもらうか」 神獣だっ!くそうこんな奴誘うんじゃ なかっ た..... ああもう俺も

「その前に密告っときますね」

だな さては狙いは貴様の主ではなく俺の召喚者だな!なるほど巨乳好き やめろ!っていうか、じゃあなんでついてきたんだお前 !主のじゃ小さくて満足できなかったんだろう!」

そっちも下着越しだけど前見たし.....

「な、ん、だ、と!?」

縛りあげてひん剥いて おっぱいというか全身だけど、 ジョブ的に興味があったからこう、

変態だった!こいつの方が断然変態だった!」

ような淫靡な気持ちは持ち合わせてない」 なんだよ。僕は芸術品を見るような気持ちで見てたんだ。 お前 の

ると思ってんのか!貴様の主に通報してやる!」 おっぱいは全部芸術だバーカ!っていうかそんな言い訳が通用す

「いや知ってるし」

からちょっとその優遇されすぎな環境を分けてください!!」 か貴様が何なの!?どれだけ恵まれたら気が済むの!?お願いです 知った上で一緒に風呂入ったの!?なんなの貴様 の主!って いう

- 神獣としてのプライドとかないのかよ」

々なおっぱい情報を掴んでおっぱいを掴むつもりだったのに.. うるせぇやっ!.....くそう。 使い魔おっぱ しし の会とか結成し

ヤタガラスの少女は大きく溜息をつく。

しかし、 かぶりを振って、気合を入れなおした。

たからだ。 喋りながら歩いているうちに、 目的の場所はすぐそこに迫ってい

場所を察知できる。 太極館学園校舎、 東館。 此処まで近づけば召喚者の気配で正確な

彼女は空を見上げ、 の化身たるヤタガラスだからこその芸当。 太陽を視認。 その位置から正確な時刻を知る。

ま真っ直ぐ行け 丁度い ば い時間だ。 召喚者の気配は あちらだな。 このま

「そうそう」

校舎の外側を屈みながら歩き、 こっそり窓の下を、 中から見えな

が声をかける。 いように、 まるでスパイか泥棒のように進むヤタガラスに、 キョウ

そういえばなんで人に化けたまま来たんだい?」

ば誰も犯人を追えなくなるであろうが」 簡単な話だ。 見つかった後逃げる際、 物陰に隠れてカラスに戻れ

「なるほど」

という話を聞いたことがある。 一昔前に、 逃げる最中に変装して逮捕を免れた銀行強盗がいた、

途中で姿を変える、というのは逃走手段として相当有効だ。

かんだ此処まで来たからには同罪だ。 貴様の主も召喚者もこの姿は知らないからな。 チクるんじゃないぞ」 貴樣、 なんだ

「まぁ、チクリはしないけどさ」

ラスとキョウ。 そうこうしているうち、 目的の教室の窓のもとに辿りつくヤタガ

同時に、チャイムの音が校舎中に響く。

「ここだな。よし、都合よく一時限目も終わったようだ.....もう少 し待てば着替え始めるぞ.....

「そうそう、一つ言っておくことがあってさ」

「.....なんだ、貴様あまり声を立てるでない」

いせ、 僕が一緒に来た目的の話なんだけど、 僕は主と感覚を共有

できるんだよ」

子が分かるという訳か!よし、 そして絶好の覗きタイミングを!!」 なんだ、また自慢か!?..... いせ、 ならば教えろ!俺に!中の様子を! その能力で覗かずとも中の様

そういうんじゃなくて.....つまり、 僕が見てる光景は主に

瞬間、ヤタガラスの顔が引きつる。

「.....なんだと?」

話も聞こえるし、 臭いも。 その気になれば五感すべてを共有でき

ら

「……ま、まさか」

は ヤタガラスの少女の顔が真っ青に染まるのと、 殆ど同時だった。 頭上の窓が開くの

、こういうことよ」

窓を開けたのは、鬼灯霧江だった。

その右手には、 ドが追加された クロス・ガン 握られていた。 バージョンアップされ、 攻撃モ

くつ.....キョウ!貴様裏切ったな!?」

裏切るも何も、 僕は最初から母さんの命令を実行してたんだよ。

『あんたを見張れって』」

!!!

真っ青を通り越して真っ白になったヤタガラスの少女、 その頭に、

窓の上から銃口が突き付けられる。

た。 見上げると、 冷たい眼差しを向けてくる霧江の姿が目に入ってき

既に着替え終わっていたようで、 白い体操服に身を包んでいる。

最期に言い残すことは?」

「......体操着越しでも、良いおっぱいだ」

バチン!

と、魔力式ショックガンの引鉄を引く音が響き渡った。

第六話 万能のパズル。

なんで僕がこんなことしなくちゃならない

冉び、使い魔預り所。

打ちこんだらしい。 か、本気で怒っていたせいか、あの至近距離からかなりの高出力で でしまったヤタガラスの頭に、キョウが濡れたタオルを乗せる。 ショックガンのダメージで変化の術も解け、 あの銃は魔力によって威力を調節できるのだが、神獣相手だから 元の姿のまま寝込ん

る限度いっぱいまで使用して撃ちこまれたのだからなおさらだ。 ない。まして、霧江の持つ馬鹿みたいにい巨大な魔力を銃が耐えう のであるため殺傷能力はないが、まともに食らえばしばらくは動け それでもブラッディクロスに封印されなかっただけましだろう。 犯罪者逮捕用の銃で、体内の魔力の流れを乱し、 動きを封じるも

うう.....おっぱい」

キョウはそんな彼女を見て大きく溜息をついた。 まるで懲りて いないのか、 そんなうわごとを呟くヤタガラス。

れている木の葉は彼がせっせと運んできたものである。 今カラスが寝ているのは木の葉を集めてできたベッドだが、 使わ

いうか、 どうやら学校のある日、平日の昼間はこいつの相手をする.....と 面倒をみることになりそうだ。

ため息を突くのであった。 残念すぎる神獣を前に、 キョウはもう本日何度目かもわからない

三時限目は魔法学の授業だった。

かない。そして今日が、その最初の授業の日であった。 意外にも、 魔法関連の授業はこれだけで、 時間割も週に三回分し

る 中学で学ぶ基礎中の基礎の発展のみで、専門的な分野を学ぶのは早 くても高三から。 というのも、高校一年生の段階で学ぶのは魔法の基礎的な要素、 本格的には大学で学ぶのが現代の主流となってい

る中学と高校の合わせて六年間は自分がどういう分野の魔術に向い あり、それが完成度にも大きく関わってくるため。 魔法を教え始め ているか見極めるための期間なのである。 というのも魔法の組み立てには応用先の分野ごとに向き不向きが

からと言って甘く見るなよ、 「さて、 初回なので魔法に関する基本事項についてさらう。 よく聞いておくように」 基礎だ

言う。 魔法学教師、 秋月良平が教壇に立ち、生徒たちをも見渡しながら

ず見た目に似合わない堂々とした口調で話を進める。 ıΣ かにもひ弱そうな体格の男だが、どうにも厳格な雰囲気が漂ってお 年はまだ若く30前後。 半数は妖魔かその血をひく生徒たちを前に、彼は一切物怖じせ 眼鏡をかけて、ヒョロっと背の高い、 L١

法と呼ばれる」 た具合だ。 換するのが魔法だ。 自分の体の中にある魔力を、 例えば火の魔法は火をつける。 こういう、 しかし基本的には、ごく単純なことしかできな 単純に魔力を消費して発動するものは基礎魔 自然、 風 あるいは超自然的な現象に の魔法は風を起こす。 といっ

ボッ、 Ļ 秋月の持ちあげた右手、 人差し指の先に火が灯っ

ことだ。 「そして /『魔術』 例えばこの炎の魔法に風を組み合わせれば とは、 そうした単純な魔法を組み合わせる技術の

人差し指の炎がごう、っと燃え上がった。

魔法という。 ではない。基礎魔法そのものに作用する補助魔法というものもある」 酸素を送り込み、 複合魔法を作れるのは基礎魔法同士の組み合わせだけ 火を強くすることが出来る。 これを、 複合

さくなり、 れていった。 そう言った秋月の人差し指の上で、 やがてそれは微小の太陽のような小さな炎の塊に集約さ 燃え上がっていた炎が急に 小

は二つに限らない。 を重ねがけすれば 「これが炎の魔法と、 この魔法に、 集中の魔法による複合魔法。 方向指定、 推進、 加速の補助魔法 勿論組み合わせ

うわぁっ

弾丸と化した炎は、霧江の斜め前の席、 ビュン、 その衝撃に、 と風を切る音と共に、 机に突っ伏して寝ていた少年は思わず飛び上がる。 炎の塊が打ち出される。 その机の端を掠めた。

から居眠りとはいい度胸だ」 黒田、 ちゃ んと話聞いてたか?基礎中の基礎で退屈だろうが初日

「す、すみません.....」

声が響く。 黒田と呼ばれた少年は真っ赤にした顔を伏せた。 クラス内に笑い

きる。 てはならない。 くる場合だってある」 さて、 しかし、 続けるぞ。 望み通りの現象を起こすには考えて組み合わせなく 一つでも余計な魔法を混ぜれば全く違うものが出て つまり魔法は組み合わせ次第でどんなこともで

秋月は右手を下した。

るから、 論それを組み合わせる複合魔法は、使われた基礎魔法や補助魔法の 魔力の消費量も増大する。 魔力は体力と同じく生命力に直結してい 分だけ消費することになる。 り、限界もある。 魔法は万能ではあるが、 過剰に消費しすぎると命に関わる場合もあり得る。 更に、当然ながら持っている魔力を消費する、 しかし全能ではない。 つまり魔法が大げさであればある程、 才能に左右された

..... 最も、 このクラスの約半数は命の心配をする必要はないかな」

る。 よって、 妖魔の魔力保有量は人間とは段違いだ。 冗談めいた口調で、 命の心配などせずに人間以上の大魔法を扱うことが出来 秋月は言った。

解な現象を引き起こす力、妖力とはその源だ。 妖術とは、 を用いて魔法を扱うのに対して、 「さて、 ついでだから妖術についても解説しておこう。 妖魔が先天的に有している特殊能力、 妖魔は妖力を用いて妖術を使う。 魔法と同様、 人間が魔力

れてきた。 から仮説があった」 妖術と魔法も、 というのが、大昔の説だな。この二つは別物であると考えら これは妖魔が魔法を使える、 だが近年、 この島での妖魔研究で、 ほとんど同じものであるということがわかっ という事実が発見された当初 妖力と魔力が同一で

秋月は言ったん言葉を区切り、反応を窺う。

生徒たちがしっかり聞きいっていることに満足すると、 彼はまた

口を開いた。

から魔法を学べる、というのがこの島で妖魔が暮らす一つのメリッ んど同じものである、 トになったわけだな。そして、『妖魔は妖力と魔力の両方を持って いるのか?』という疑問が生まれ、妖力と魔力、妖術と魔法はほと 「妖魔が魔法を使うようになったのはこの島が出来てからだ。 という証明が15年ほど前になされた」

秋月はまた言葉を区切り、教室中を見渡す。

そして、ある一人の生徒を見て、 持っていた短い指し棒を向けた。

法の最大の違いはなんだろう」 「さて、 ではそこのキミ。 『ほとんど同じ』といったが、 妖術と魔

驚いて、目をぱちくりとさせる。指されたのは霧江だった。

· え!?え.....っと」

霧江は答えに窮する。

のはこれが初めてだった。 小学校、 中学校と学校に行けなかった彼女が、 授業で当てられた

(落ち着け私!

落ち着いて、 こういうシー とりあえず、 ンは学校モノのアニメや漫画で研究していた。 聞かれて、 何か思ったことを回答すれ

何か。 ばいいのだ、 何でもいいから。 確か黙ってるのが一番ダメなはずだ。 とにかく何か。

での は はやしゃっ 速さが違うと思います。 術が発動するま

消え入るような声を出した後、 今日はなんだか自分とキャラが違うことが起きる。 赤面して顔を伏せる霧江。

(うう....、噛んだ)

た。 方の秋月教諭は彼女の答えに満足したようで、うんうんと頷い

たらしい。 霧江にとって幸いなことに、生徒をいじるような人種ではなかっ

そう、 確かに速さが違うな。では妖術の起動は何故早いと思う?」

秋月の視線は霧江を向いたままだ。

頭は、 これは想定外だった。 その不意打ちに真っ白になる。 一度答えれば終わりだと思っていた彼女の

え..... えっ.....と」

答えが浮かばない。まずい.....まずい。

周囲の視線が自信に集中してくるのを霧江は感じる。

とにかく、何か。何か答えないと。

えっと

フムン。 例えば君、 吸血鬼だね?再生能力は妖術だが、 それを使

うときはどうやってる?いちいち術式を組み立てたりするだろうか」

たりする場面だが、 くように質問を変えた。 教師の性格によっては怒られたり回答者を他の生徒に変えられ 秋月は優しげな笑みを浮かべながら、 答えを導

のと同じように」 「ええと、 しない、 です。 なんというか能力として.....手を動かす

゙そう、それが最大の違いだ」

秋月は強く頷いた。

を学び、 きる。 対し、 組み必要があるわけだ。 を発揮する魔法を作り出すことはできるが、 人間が魔法を使用するのに、 妖魔は先天的にもっているそれを、一つの能力として使用で もちろん、魔法が万能のパズルである限り、妖術と同じ効果 習得した上で、呪文の詠唱や魔法陣を描く必要があるのに あらかじめ基礎魔法や魔法構築理論 いちいち複雑な術式を

法のような単純な工程で扱うことができるのだ」 のが妖魔なわけだな。言うなれば、 つまり?ある一定の魔法を先天的な能力として扱うことが出来る 決まった複合魔法を、 基礎魔

授業終了後に聞こう」と言って、 秋月はいったん話を区切る。 そして「その他気になる点があれば 本来の話に戻った。

説してゆく。 是非見極めてもらいたい」 魔法構築に必要な理論と、 「さて、 これからの授業では呪文短縮や魔力を節約する方法、 君らには三年までに自分がどの分野の魔法が得意か、 比較的ポピュラー な複合魔法を紹介、

第七話 それぞれのピンチ。

「一体全体何をやっているんです貴方は!!」

同日夕方。

天壌魔導学院女子寮、301号室。

鬼灯霧江の部屋から、 松居頼子の悲鳴に近い叫びが響いてくる。

「何って、洗濯ですけど」

洗濯ですって.....! 貴方のような文字通り獣が霧江さんの

神聖な衣に触れるなど!」

・触れたのは人形の手ですよ」

突っかかってくる頼子に、 キョウは呆れたような声で答えた。

手に洗わせるなど!!」 なお悪いですわ!霧江さんの聖なる服を貴方の悪趣味なお人形の

「洗ったのは洗濯機ですが」

おパンティを洗濯するなどあってはならないことです!!」 「屁理屈コネない!貴方のような変態人形フェチ野郎が霧江さんの

「なんだよおパンティって.....」

スキルで霧江の部屋における家事全般を任されていた。 した女性型のその手が、 乾燥機で乾燥させた衣服を今、彼の操る等身大の人形、 キョウは使い魔に格落ちしてから、 丁寧に畳んでいる。 その僅かに残された人形操作 黒い髪を

も何とも思わないよ」 知っての通り僕は人形フェチだ。 今更母さんのパンツくらい見て

対神秘な聖なるおパンティなのですよ!!」 うな下々の者など近づくことすらおこがましい!超絶神聖にして絶 何ともですって..... !?霧江さんのおパンティは私たちのよ

がわかった気がする」 君は、 なんていうかアレだな、 あいつを召喚しちゃった理由

ſΪ キョ そういえば、 ウの言うあいつ、 とキョウは部屋中を見回すが、 とは例の残念なヤタガラスのことだ。 今はその姿は見えな

「そういえばあのヤタガラスは?」

めておきました」 「放っておくと何しでかすかわからないので部屋の風呂場に閉じ込

「風呂場に?」

ました」 ホイホイ入って行ったのでそのままドアを魔法で鉄の壁にしておき 「ええ、 『一緒に入りましょう先に入っててください』 と言っ たら

.....

れているのが、キョウには簡単に想像できた。 今頃風呂場で幼女かカラスの姿で『騙された!』 と喚きながら暴

る。 別段同情する気はないが、 なんというかつくづく残念な神獣であ

を見据える。 頼子はそれでカラスの話は終わりだ、 とばかりに、 改めてキョウ

今すぐそのおパンティ と言う訳で霧江さんの下着はこれから私が洗います!っていうか を私に畳ませなさい!」

なかったのかよ!君には絶対に任せてはいけないって僕の中の何か 「下着限定!? いや、 駄目だ!っていうか近づいちゃ駄目なんじゃ

が言ってる!」

私を誰だと思っているのです!?」 なんですってこのアホ猫!ええい !いいから私にやらせなさい

意味が分かんないですよ!とにかく駄目!だめ!

必死に霧江の下着に手を伸ばす頼子。

人形を操り、 先方から遮るようにしてその手を抑えるキョウ。

「ぐぬぬ.....いいから寄越しなさい!!」

「おい結局触ることが目的なんじゃねぇか!!」

その言葉に頼子の目つきが変わる。

それは何か、 一つ大きな覚悟を決めた女の目だった。

うと、 障害になるというのなら.....たとえ霧江さんの大事な使い魔であろ 「いいでしょうアホ猫、貴方が私と霧江さんとの間に立ちはだかる 何が障害だよ!下着に手を出して何する気なんだよこの変態!」 いいから寄越せってんだよおおおおおおおおおおお!! 私は全力で貴方を叩きつぶします!!」

さらに必死に霧江のパンツに手を伸ばす頼子。

やめろこの馬鹿ああああああああああああああり!

に遠ざけた。 一方恭也は、 もう一体別の、 小型の人形を操ってその手からさら

あああああっ !なんて卑劣な!!それでも誇り高き吸血鬼ですか

「吸血鬼ってだいたい卑劣じゃん」

なんですか!人形フェチのド変態のくせに!

ド変態だと!?君に僕の高尚な趣味がわかってたまるか

ないみたいだな.....!」 っていうか変態は君だ!!やっぱり君とは決着をつけなければなら

の力のない貴方などに後れを取るものですか」 んの方が何千倍も愛らしいというのに!!もはやノーライフキング あんな人形のなにが高尚なものですか!!そんなものより霧江さ

と頼子と人形は、それぞれ後方に跳躍し、 構えをとる。

バチリバチリ、 と交錯する視線と、 飛び散る火花。

息を飲む二人。

その呼吸が、重なる一瞬。

すみませい、、「勝負!!」」

すみません、いいかげんにしてくれませんか」

激突の瞬間。

バーン、と霧江の部屋の扉が開く。

女子寮寮監、 柳原梅子が真っ赤な顔をしながら部屋に上がり込ん

できた。

す、すみません寮監様.....

硬直し、真っ青な顔をして頼子。

にや、にやーん」

恭也は泣き声をあげながら寮監に背を向けて去ろうとする。 ただの猫のふりをしてやり過ごすつもりだ。

あ、ひ、卑怯ですよこの.....!

頼子が手を伸ばす、 前に、 寮監の手がその首筋をむんずと掴んだ。

「しや、しゃー・」ど、動物虐待反対!

プ、ざまあみろですわ」

Ļ 笑う頼子の肩にも、 寮監はポンと手を置いた。

- あっ.....」

真っ青を通り越して真っ白になる頼子の顔色。

- - あー!!!]」

トアウトさせられるのであった。 寮監にドナドナと引きずられながら、 二人は霧江の部屋からゲッ

一方その頃。

霧江は兄、零次の住む同区、グリーンフォレストマンション、 8

03号室を訪れていた。

彼の勤める大学から連絡が入ったのだ。 彼は今日授業があるはずなのに学校に来ていない、と、

あり警察とも協力している、この街の中では結構な重要人物である。 れたかもしれない、 それが今朝から行方不明と聞いて、もしかしたら事件に巻き込ま 零次は大学内では准教授にすぎないが、ヒーロー計画の発案者で とこうして慌ててやってきたのだ。

霧江は部屋の前で、 インター ホンを一度押し、 暫く待つが、 出な

「..... まさか、ね」

霧江は何度もインター ホンを鳴らすが、 反応なし。

「兄貴?おーい!」

帰ってこなかった。 強めに扉をドンドンと叩いて、 呼びかけてみるも、 やはり反応は

単に留守にしているだけならいいが、 あの兄が大学にも連絡を入

れずに何処かへ行くだろうか。

まして自分が何度も電話やメールをしているのに一切出ず、 返事

もないのはおかしい。

吸血鬼であり、 恋愛感情の希薄な彼女にとって、家族の、 兄の存

在は大きい。

吸血鬼は恋人よりも眷族、 血縁を大切にする種族だ。

それを抜きにしても、彼女は零次が心配だった。

唇を噛みながら、 管理人に合いカギでも借りてくるべきかと思案

する霧江。

考えながら、 彼女はそのドアノブに手をかける。

!?

すると、ドアは驚くほど簡単に開いた。

鍵が、あいている。

兄貴つ!」

どう考えたってこの状況はおかしい。

こんだ。 最悪の状況が脳裏をよぎり、彼女は間髪いれずに部屋の中へ駆け

部屋に入った瞬間、アルコー ルのような異臭が鼻につく。

廊下が、異様に長く感じた。

霧江はそのまま、 臭いのもととなっているリビングへ、文字取り

飛び込む。

そこには

0

...... なにこれ」

するめいかやカルパス等、 転がる酒の瓶、 瓶 瓶 そしてビールの空き缶。 散乱するつまみの袋。

こぼれている水。割れたコップ。

そしてその中心に

毛布にくるまって唸っている兄の姿があった。

ぐへらっ!」 わ.....私の心配を返せェエエエエエエエエエエー

霧江は叫びながら、 その頭にかかと落としを食らわせた。

.....で、どうしたのよ」

れて、相変わらず毛布にもぐりこんだまま出てこない兄の背中に向 かって話しかける。 数分後、ゴミだらけの部屋で、 霧江は毛布にくるまって飲んだく

「兄貴?」

零次は毛布の中で、 やはりじっとしたまま動かない。

霧江は小さくため息を突く。

だから、ちょっとくらい反応くれたって.....」 心配したんだから大目に見てよ。 あのさ、 ごめん」 いきなり蹴りいれたのは謝るから.....っていうか本当に 何度もメールやら電話やらしたん

なような、 いてくれたことに少しだけ安心したような、 毛布の中から、 複雑な感情を抱いた。 消え入りそうな声が聞こえてきて、 それでもやっぱり心配 霧江は口をき

`.....それで、何があったの?」

「.....れた」

「何って?聞こえないわよ」

またも消え入りそうな声。

霧江は近づいて、

屈む。

毛布の中、 兄の頭があるであろう部分に耳を寄せる。

「マコにきらわれた.....」

「...... オオゥ......」

帰ってきた言葉に、霧江は息を漏らす。

たので、 どのバカップルっぷりを発揮していたかは間近である程度は見てい しがたい感情だったが、しかし兄と真琴の関係、 女に振られた程度でここまで落ち込む、 何となく同情は出来た。 というのは霧江には理解 というか、 どれほ

「それは.....でもどうしてまた」

「実は昨日.....」

零次はゆっくりと昨日の出来事について話し始める。

るのを手伝ったが、その際呼び出されたエロカラスが頼子の服を切 話は単純なもので、零次は昨日、頼子があのエロカラスを召喚す

り裂いた。

えなくもないだろう。 二人っきり、という状況だけを見れば零次が頼子を襲ったように見 確かにあのカラスを知らず、狭い部屋でおっぱい丸出しの少女と そしてその場面を真琴に見られ、誤解を受けたのだという。

を落とす。 それにしても、と霧江は相変わらず毛布の中の零次の背中に視線

くっていたらしい。 確か零次の方がSだったはずだが、 精神的には彼の方が依存し

霧江はため息をついて、兄の背をポンと軽く叩く。 身内ながら情けない姿だと思うが、 さすがに可哀想になってきた。

わかった。 私から羽月さんに話をしてみるから」

「.....すまん」

いいのよ

るのだ。哲笑して、

彼女には零次と真琴にはうまくいってほしい理由があ 彼女は立ち上がった。

第八話 不穏の影。

た.....物凄いですね此処の寮監」 「まったく、 使い魔でも人語が分かるとなれば容赦なくお説教とき

入学早々ドナられるなんて思ってもみませんでした.....」

労感たっぷりに、 と歩いている。 小一時間にわたる説教からようやく解放され、 半ベソをかきながら女子寮三階の廊下をトボトボ キョウと頼子は疲

「なんですかドナられるって」

かの歌の子牛に被るので、そう呼ばれているのだそうで」 なさるんだとか。それで寮監室まで引きずられてゆく生徒の姿が、 「あの方、寮則違反者は必ず一階の寮監室に連れ込んでからお説教

けて、ドナられるという意味だということらしい。 キョウはくだらないなと思いつつ、ふとした疑問を口にする。 つまりは攫われてゆく様子と、その後の説教で怒鳴られるのをか

ねこの女子寮」 っていうか上下の防音は完ぺきなのに左右はそうでもないんです

せん。 まずいでしょうし」 「そうですねぇ……防音が完璧すぎても逆に問題あるのかもしれま 例えば何か事件で悲鳴が上がっても誰も気づかない状況では

「ううん……そういうものなのかな」

話しているうちに霧江の部屋にたどり着く。 キョウが首を振りあげ、 頼子を見上げた。

まだ日が落ちてから間もないのに自分の部屋で何するっていうん 私は一秒でも長く霧江さんと一緒にいたいんですよ」 っていうか、 君は自分の部屋に帰らないのかい?」

そう言って、ドアノブを回す頼子。

学生だろ。 当然のごとく霧江さんと一緒にやるつもりですが何か」 宿題とか予習とかあるだろうに」

ドアを開け、部屋の中に入る一人と一匹。

い? ? なんだそれ.....まったく、君はどこまで彼女のことが好きなんだ

好き?そんな無粋な言葉で表現してほしくなどないですわね」

彼女はドアと鍵をゆっくり閉めると、キョウに向き直る。

りません」 ちなみに霧江さんよりもかなり下の方に私の家族がいます。 それ だの陳腐な言葉で表すことのできない絶対的な存在なのです。 も同じ位置にいますね。 らさらにズズズと下がって零次さんが。ああ、 のが霧江さんです。私にとって霧江さんは『好き』だの『愛してる』 「いいですか、この世の何よりも誰よりも貴い場所に君臨してい それ以外は私にとってただのゴミでしかあ 零次さんの彼女さん

えてくれやがってこのクソアマ」 色々と突っ込みたいけど、 とりあえずナチュラルにゴミに加

た人形フェチのド変態はゴミよりもさらに下です」 いけません、忘れてました。 人の裸見てニヤニヤしてくれ

:... ま、 根に持たれても仕方ないことしたとは思ってるよ」

央ヘトコトコと歩いて行った。 キョウはふう、 とため息をつくと、 尻尾を垂らしながら部屋の中

その様子に、 「……ふん」と、 そっぽを向く頼子。

部屋の中央まで歩いてゆき、キョウはくるくると周囲を見回す。

......なんだ、まだ帰ってきてないのか」

ょうか」 零次さんの様子を見に行くと言ってましたが..... 何かあったんで

その時、 玄関で靴を脱いだ頼子が、 ピリリリリ、 と頼子の携帯が着信した。 少し遅れて入ってくる。

ここよね.....」

そこには『 霧江は門の前に備え付けられているプレートを確認する。 国立天壌島魔導大学女子寮』と書かれていた。

単なる寮、 というよりはちょっとした高級マンションといっ た趣

だ。 霧江は郵便受けから羽月真琴の部屋番号を確認し、 インター ホン

の番号を押す。

霧江はカメラ付きのインターホンであると気づいて、 で前髪をいじる。 彼女の部屋は405号室のようだ。 0.....と押したところで、 あわてて手櫛

ている。 兄との仲を取り持ちにきたのだ。 そのまま会うのは若干の抵抗があった。 走ってきたお陰で髪は少し乱れ

番号を押す。 ある程度整えた後、 あらためてカメラの方をしっ かり向き、 部屋

チャイムが鳴る。 霧江はそのまま待つが、 出ない。

__

のだから。はいはい、 当然の反応だろう。 と気軽に出れはしまい。 恋人と喧嘩した次の日にその妹が訪ねてきた

ろう。 女は零次のの情けなさに怒ってこのまま居留守を決め込むつもりだ 考えてみれば妹に仲を取り持ってもらうなんて情けない話だ。

かのどちらかだ。 でなければどうしたものか迷っているか、 あるいは本当に居ない

が本番。街で遊んでいる可能性も十分にある。 ので早く帰ってきているはず、とのことだったが、 零次によれば、 彼女は今日は授業は一限だけ、バイトもない日な 妖魔の世界は夜

ボタンを押しこんだ。 これで出なければ出直そう、と霧江はもう一度、 呼び鈴をならす

しかし数秒して、受話器を取る音が聞こえた。

。 …… はい

そして返事があったのは、 そのさらに数秒後のことだった。

『あがって』 「えーっと、羽月さん?私です。霧江ーー」

霧江は若干の緊張を感じ、 声の感じがいつもと違って、 遮るような言葉とともに、 玄関の自動ドアが開く。 すこし深呼吸して、 暗い。 というか、

おじゃまします」

と正面玄関のドアをくぐった。

エレベーター で四階へ登り、部屋を見つける。

チャイムを鳴らすと、今度はすぐに扉が開いた。

霧江は真琴に中のリビングまで案内され、 勧められるままにソフ

アへ。

そのまま真琴は「お茶を入れてくるから」と台所へ。

彼女は終始顔を伏せていたため、どんな表情をしていたのかはわ

からなかった。

部屋は霧江のそれと同じワンルームの個室ながら、霧江のそれよ

りも広い。

というか台所なんて設備も彼女の女子寮にはなかったものだ。

いわゆる1LDKというやつか。 と霧江は室内を見回す。

室内はぬいぐるみや小物がきれいに並べられている棚があって、

その隣の机の上で教科書などの様々な書物や書類が幾つも乱雑に積

まれていた。

そして乱雑な書類や本のタワーの中から、ちょこんとモニタが顔

真琴の部屋だった。 を出し、そこにパソコンがあることがかろうじてわかる。 女の子らしさと学生の忙しさが同居する奇妙な空間。 それが羽月

しばらくすると、 真琴はトレー に花柄の可愛いデザインの急須と、

氷の入った涼しげなグラスを二つ乗せて持ってきた。

たグラスに回しながら入れる。 それをソファ前のテーブルに置き、急須を持ちあげて、 氷の入っ

が少しずつ溶け、 グラスの中が春の森のような綺麗なグリーンで満たさてゆき、 カラン、と小気味よい音を立てた。

氷

「どうぞ」

と、真琴はグラスを一つ、霧江の前に置く。

、へえ。冷茶ね」

霧江は両手でグラスを持ちあげ、一口。

冷たいながら、 温かい緑茶と変わらないまろやかで、 深みのある

味わい。

「……おいしい」

「そう、よかった」

霧江はその時ようやく少女の顔を見る。

穏やかな笑みを浮かべていたが、 どこが影が差しているような、

そんな印象。

ともっと美味しくできるんだけど」 るんだって。最初から水で淹れて、 お湯で淹れて、氷とかで急に冷やすと、甘みの成分が壊れずに残 冷たいまま長い時間置いておく

「お茶、詳しいんですね」

霧江はもう一口飲んで、笑みを浮かべた。

方法教わって.....」 「ううん、 私猫舌だから.....冷たくておいしいお茶、 先生に淹れる

そう言って、俯く真琴。

決したように、それでもおずおずとしながら、 そのまま暫く、 思いつめるように唇を噛んでいたが、 口を開いた。 やがて意を

「あの、霧江、ちゃん?」

「...... はい?」

先生のことで、きたんだよね?」

霧江は口では答えず、ゆっくりと頷く。

彼女は恐る恐る、 といった様子で顔を上げ、 霧江に視線を向ける。

「.....あの、先生。どんな感じだった」

「どんな感じ、って?」

彼女の問いに、霧江は首をかしげる。

うようだった。 っとこう、 兄から聞いていた話から想像したのと少し状況が違うようだ。 彼女が浮気に怒っているのを想像していたが、どうも違 も

「怒る?どうして」「私のこと、怒ってなかったかな、って」

霧江は目を瞬く。

ない ちゃって... 「だって、 なにか誤解があったはずなのに.....、 その、 : 私 何があっても先生をについていくって誓ったのに 冷静になって考えたら先生がそんなことするはず 先生に酷いこと言っ

.....あんなことで誤解しちゃって.....」

情も暗くなってゆく真琴。 下がってゆく後悔の言葉と共に、その背中もどんどん曲がって、 話しているうちに昨夜の出来事を思い出しているのか、 表

たような笑みを浮かべた。 対して霧江は、そんな彼女を見て安心したような、少し気の抜け

、なんだ。来るまでもなかったか」

「え....?」

霧江の言葉に、真琴は眉を顰めた。

兄貴なら、あなたを傷つけたこと、 今死ぬほど後悔してるわよ」

子抜けしたように言った。 もう少し厄介なことになるかもしれないと思っていた霧江は、 拍

間に元通りだ。 ならばズレたぶんを押し込んでやればいい。それで、 結局のところ、歯車がほんの少しだけずれただけのことのようだ。 あっという

早めに来てよかった、と霧江は思う。

「それって」

飯でも行きましょうこれから」 だし、兄貴は貴方にフラれたと思って飲んだくれてボロ雑巾みたい になってる。誤解が解けたら一瞬で元通りよ。 大丈夫。問題の女の子は前に話してた兄貴と父さん作の人造人間です。 そうね 三人でご

霧江の言葉を聞いて、 真琴はその顔をぱあっと輝かせた。

「ありがとう、霧江ちゃん」

いいのよ。 私自信、兄貴と貴方には上手くいってほしいから」

霧江は恥ずかしそうに頬を人差し指で掻きながら笑って言う。

幸せになってほしいわけですよ」 なんてできたの貴方が初めてだから。 「兄貴さ、ずっと私にばっか構って、 今まで迷惑かけた分、 あとは研究研究でさ.....彼女 まぁ、

霧江は頬を赤らめながら、真琴の手を取った。

だからさ、貴方さえよければ

言葉を遮るように、真琴は霧江の手を握り返した。

はは.....なんだかこっ恥ずかしいわ。 わかった。 霧江ちゃん。 私が先生を幸せにする Ą お姉ちゃ

霧江は満足して、 相変わらず赤面したまま笑った。

その男は、 女子寮から二人の少女が出てくる。 じいっと二人の姿を、 茂みの陰から窺っていた。

ホホウ.....あれが、のう」

男は顎に手を当て、満足したように頷いた。

明がいかに無力で 取るに足らぬま「鬼灯のガキめ......今に見ておれよ。 思い知らせてやる。貴様の発

取るに足らぬものか」

PDF小説ネット発足にあたって

ビ対応 行し、 公開できるように 小説家になろうの子サイ 部を除きイ 最近では横書きの F小説ネッ の縦書き小説 の縦書き小説 います。 ・ンター そん をイ を思う存分、 たのがこ な中、 ネッ 書籍も誕生しており、 タテ書き小説ネッ ト関連= 誰もが簡単にPDF形式 ネッ て誕生しました。 ト上で配布す 小説ネッ 横書きという考えが定着しよ てください。 トです。 既 存書籍 は 2 0 タ いう目的の 07年、 の電子出版 小説を作成 小説が流 ンター

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。 http://ncode.syosetu.com/n6592u/

装着変身ブラッディクロス!

2011年10月26日13時00分発行